魔法科高校の劣等生④
九校戦編<下>

九校戦中盤の目玉、『新人戦』。

一年生のみで繰り広げられるこの競技は、第一高校の主席生徒・司波深雪の可憐かつ優雅な勝利を披露するステージでもあった。

兄である達也も、参加選手たちが使用するCAD（術式補助演算機）の技師としてチームに参加、妹の活躍する姿に頬を緩ませていた。

劣等生であるはずの達也が調整したCADによって、第一高校生徒の華麗なる圧勝劇が演じられる中、とあるアクシデントによって彼自身も九校戦の選手として参加する羽目になる。

魔法による直接戦闘競技『モノリス・コード』に出場することになった達也。対戦相手は、『クリムゾン・プリンス』と呼ばれる第三高校一年生のエース・一条将輝だった。



さ-14-4

魔法科高校の劣等生④
九校戦編〈下〉
佐島勤

電撃文庫
¥670

9784048709996
1920193006704
ISBN978-4-04-870999-6
C0193 ¥670E
ASCII MEDIA WORKS
発行● アスキー・メディアワークス
定価：本体 670 円
※消費税が別に加算されます





佐島 勤

西暦19XX年、日本の片田舎に生まれる。和洋のスペースオペラを糧に少年時代を過ごす。青年時代、ファンタジーと伝奇小説に転向。卒業後、企業戦士（ただし雑兵）として現実世界に魂を売り渡すも、西暦2011年、遅れてきたジュブナイル作家として空想世界に帰還を果たす。（本プロフィールには虚偽と誇張表現が含まれています）

【電撃文庫作品】

魔法科高校の劣等生① 入学編<上>
魔法科高校の劣等生② 入学編<下>
魔法科高校の劣等生③ 九校戦編<上>
魔法科高校の劣等生④ 九校戦編<下>

イラスト：石田可奈

西暦19XX年生まれ。挿絵は初仕事。本業はアニメーター。過去作としては、『コードギアス』（作画監督）、『俺の妹』（総作画監督）など。次回作は『アクエリオンEVOL』。Special Thanks：ジミーストーンさん。天水康子さん。金子悪美さん。坂上康治さん。川神一子さん。光陵瑞華さん。

カバー／加藤製版印刷



豪華賞品が総額で当たる、レーベル横断プレゼントキャンペーン!
対象商品のオビについている応募券を6枚集めて、ぜひご応募ください!

特賞　30名様　電撃文庫／ファンタジア文庫／スニーカー文庫／ファミ通文庫の人気作家様1名の直筆サイン色紙(4枚セット)

抽選で人気作品が当たる!!
豪華賞品が盛りだくさん!!
冬コレ
応募券
03-12

ITナンス 3000名様

【締切】 2012年1月10日～2012年2月10日(応募券は3月31日到着分)

〒102－8177　東京都千代田区富士見2-13-3
冬コレ応募係

【発表】 発表は、賞品の発送をもって代えさせていただきます。

※プレゼントは応募券1枚につき1口の応募となります。
※プレゼントの詳細は、http://www.kadokawa.co.jp/fujimi/news/fuyukore/をご覧ください。
※プレゼントの応募は、http://www.kadokawa.co.jp/fujimi/news/fuyukore/からも受け付けております。



第二高校生活の日常的が深じられる『九校戦』中盤、否応なく波乱に参加することになった達也。

対戦相手は、『クリムゾン・プリンス』

累計5500万PVの**一条将輝!**

電撃文庫で登場!

コミック化二誌で決定!

詳細は裏面へ!



電撃文庫
670





©佐島勤・石田可奈／アスキー・メディアワークス／電撃文庫MAGAZINE編集部
©佐島勤・森夕／アスキー・メディアワークス／電撃文庫MAGAZINE編集部
©佐島勤・さたうめつな／スクウェア・エニックス

魔法科高校の劣等生

The irregular at magic high school

九校戦編〈下〉

4



佐島勤
Tsutomu Sato

Illustration／石田可奈
Kana Ishida

Illustrator assistant／ジミー・ストーン、末永康子

design／BEE-PEE



司波深雪

しば・みゆき

司波兄妹の妹。一年A組所属。魔法科高校に主席で入学したエリート。『花冠（ブルーム）』と呼ばれる一科生徒で、得意分野は『冷却魔法』。唯一の愛すべき欠点は『重度のブラコン』。



北山雫

1年A組。深雪のクラスメイト。大出力の振動・加速系魔法を得意とする。一見表面上はクールな面持ちで、のかとは性格が対照的



千葉エリカ
ちば・えりか

達也のクラスメイト。明るい性格で、周囲も巻き込むトラブルメーカー。実家は剣技と魔法の複合戦闘術である『剣術』の大家である。

光井ほのか
みつい・ほのか

1年A組。深雪のクラスメイト。光を操る光波振動系魔法を得意とする。思い込みがやや激しいタイプ。

柴田美月
しばた・みつき

達也のクラスメイト。原作では主人公の同級生。地味見が、「癒し系妹キャラ」として一部の上級生に熱い人気を誇る。霊子放射光過敏症のため、この時代では珍しく眼鏡をかけている。

吉田幹比古
よしだ・みきひこ

達也のクラスメイト。古式魔法の名家。過去に起きたとあるアクシデントによって『二科生（ウィード）』に甘んじているが、その魔法技術に関しては『一科生（ブルーム）』にもひけを取らない力を持つ。

「わくわくするー！」

「いよいよ雫の出番ね」

「吉田くん、どうかしたんですか？」

「いや別になんでもないよ」


「逃げるな、司波。
例え補欠であろうとも、
選ばれた以上、その務めを果たせ」
十文字克人
じゅうもんじ・かつと
第一高校の三年生。「九校戦」選手団中心メンバー。全クラブ活動の統括組織である部活連の会頭でもある。真由美、摩利と並んで第一高校三巨頭に数えられる実力者。


「複数デバイスの同時操作、その狙いを見せてもらおうか」
「ウォオオリャアア！」
西城レオンハルト
さいじょう・れおんはると
通称「レオ」。達也と同じく一年E組所属。父親がハーフ、母親がクォーター。『硬化魔法』を得意とする。
「達也、君の言葉を証明させてもらうよ！」
「本来の戦い方をされると手も足も出なかったが、俺を過剰に意識している今なら、あるいは」
司波達也
しば・たつや
司波兄妹の兄。国立魔法大学付属第一高校の新入生。一年E組所属。『雑草（ウィード）』と揶揄される二科生徒。得意分野は魔法術式補助演算機（CAD）の設計など技術系。
一条将輝
いちじょう・まさき
第三高校の一年生。『九校戦』出場メンバーにして、一年生のエース。高度な魔法も自在に操り、『クリムゾン・プリンス』の異名を持つ。十師族・一条家の次期当主。
「将輝！」
吉祥寺真紅郎
きちじょうじ・しんくろう
第三高校の一年生。『九校戦』出場メンバーで、将輝の親友で参謀役。弱冠十二歳で魔法式の「基本コード（カーディナル・コード）」の一つを初めて発見した天才少年。それにちなんで、「カーディナル・ジョージ」と呼ばれる。

●氷炎地獄〔インフェルノ〕

[illegible]ー、運動[illegible]ルギー[illegible]ー[illegible]ー[illegible]

ある欠陥を抱える劣等生の兄。
全てが完全無欠な優等生の妹。
二人の兄妹が魔法科高校に入学した時から、
波乱の日々の幕が開いた――。

魔法科高校の劣等生 4

The irregular at magic high school

九校戦編〈下〉

佐島勤
Tsutomu Sato
illustration
石田可奈
Kana Ishida

Character
キャラクター紹介



吉田幹比古
よしだ・みきひこ
1年E組。達也のクラスメイト。
古式魔法の名家。エリカとは
幼少時からの顔見知り。

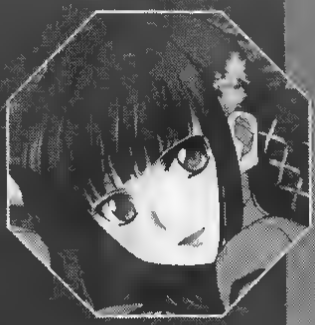
司波達也
しば・たつや
1年E組。『雑草』と
揶揄される二科生(劣等生)。
全てに達観している。





光井ほのか
みつい・ほのか
1年A組。深雪のクラスメイト。
光波振動系魔法が得意。
思い込むとやや直情的。

司波深雪
しば・みゆき
1年A組。達也の妹。
主席入学した優等生。
冷却魔法が得意。兄を溺愛する。





北山 雫
きたやま・しずく
1年A組。深雪のクラスメイト。
振動・加速系魔法が得意。
感情の起伏をあまり表に出さない。

西城レオンハルト
さいじょう・れおんはると
1年E組。達也のクラスメイト。
硬化魔法が得意。明るい性格。



千葉エリカ
ちば・えりか
1年E組。達也のクラスメイト。
剣術が得意。チャーミングな
トラブルメーカー



柴田美月
しばた・みづき
1年E組。達也のクラスメイト。
霊子放射光過敏症。
少し天然が入った真面目な少女。



里美スバル
さとみ・すばる
1年A組。美少年と間違われる少女。
明るくノリのよい性格。

森崎 駿
もりさき・しゅん
1年A組。深雪のクラスメイト。
CAD工学を専攻。
一科生としてプライドが高い。

明智英美
あけち・えいみ
1年生。クォーターで、フルネームは
アメリア＝英美＝明智＝ゴールディ。

七草真由美
さえぐさ・まゆみ
三年生。生徒会会長。
魔法科生徒の中でも
その能力は歴代最高クラス。





中条あずさ
なかじょう・あずさ
二年生。生徒会書記。
オドオドした性格で
引っ込み思案。

市原鈴音
いちはら・すずね
三年生。生徒会会計。
冷静沈着な頭脳派。
真由美の右腕。





服部刑部少丞範蔵
はっとり・ぎょうぶしょうじょう・はんぞう
二年生。生徒会副会長。
生真面目で優秀。

渡辺摩利
わたなべ・まり
三年生。風紀委員会委員長。
真由美の親友で、
物事全般にやや好戦的。



辰巳鋼太郎
たつみ・こうたろう
三年生。風紀委員。
豪快な性格の持ち主。

沢木 碧
さわき・みどり
二年生。風紀委員。
女性的な名前がコンプレックス。

五十里 啓
いそり・けい
二年生。魔法理論の成績は
学年トップ。千代田花音とは
許嫁同士。

千代田花音
ちよだ・かのん
二年生。活発な印象の少女。
五十里啓とは許嫁同士。

十文字克人
じゅうもんじ・かつと
三年生。全クラブ活動の
統括組織である
部活連の会頭。



風間玄信
かざま・はるのぶ
陸軍101旅団・独立魔装大隊・隊長。
階級は少佐。

真田繁留
さなだ・しげる
陸軍101旅団・独立魔装大隊・幹部。
階級は大尉。

柳 連
やなぎ・むらじ
陸軍101旅団・独立魔装大隊・幹部。
階級は大尉。

山中幸典
やまなか・こうすけ
陸軍101旅団・独立魔装大隊・幹部。
軍医少佐。一級の治癒魔法師。

藤林響子
ふじばやし・きょうこ
風間の副官を務める女性士官。
階級は少尉。

桐原武明
きりはら・たけあき
二年生。剣術部所属。
関東剣術大会中等部のチャンピオン。

壬生紗耶香
みぶ・さやか
二年生。剣道部所属。
中等部剣道大会女子部の全国二位。

九重八雲
ここのえ・やくも
古式魔法「忍術」の使い手。
達也の体術の師匠。

小野 遥
おの・はるか
1年E組の総合カウンセラー。
いじられ気質だが、裏の顔も持つ。



一条将輝
いちじょう・まさき
第三高校の一年生。
九校戦に出場。
十師族・一条家の次期当主。



吉祥寺真紅郎
きちじょうじ・しんくろう
第三高校の一年生。九校戦に出場。
「カーディナル・ジョージ」の
異名で知られている。

九島 烈
くどう・れつ
世界最強の魔法[illegible]の一人と[illegible]されていた人物。
敬意を以て「[illegible]師」と呼ばれる。

Glossary
用語解説

魔法科高校
国立魔法大学付属高校の通称。全国に九校設置されている。
この内、第一から第三までが一学年定員二百名で一科・二科制度を採っている。

ブルーム、ウィード
第一高校における一科生、二科生の格差を表す隠語。
一科生の制服の左胸には八枚花弁のエンブレムが刺繍されているが、
二科生の制服にはこれが無い。



一科生のエンブレム

CAD〔シー・エー・ディー〕
魔法発動を簡略化させるデバイス。内部には魔法のプログラムが
記録されている。特化型、汎用型などタイプ・形状は様々。



フォア・リーブス・テクノロジー〔FLT〕
国内CADメーカーの一つ。元々完成品よりも魔法工学部品で有名だったが、
シルバー・モデルの開発により一躍CADメーカーとしての知名度が増した。

トーラス・シルバー
僅か一年の間に特化型CADのソフトウェアを十年は進歩させたと称えられる天才技術者。

エイドス〔個別情報体〕
元々はギリシア哲学用語。現代魔法学においてエイドスとは、事象に付随する情報体のことで、
「世界」にその「事象」が存在することの記録で、「事象」が「世界」に記す足跡とも言える。
現代魔法学における「魔法」の定義は、エイドスを改変することによって、
その本体である「事象」を改変する技術とされている。

イデア〔情報体次元〕
元々はギリシア哲学用語。現代魔法学においてイデアとは、エイドスが記録される
プラットフォームのこと。魔法の一次的形態は、このイデアというプラットフォームに
魔法式を出力して、そこに記録されているエイドスを書き換える技術である。

起動式
魔法の設計図であり、魔法を構築するためのプログラム。
CADには起動式のデータが圧縮保存されており、
魔法師から流し込まれたサイオン波を展開したデータに従って信号化し、魔法師に返す。

サイオン（想子）
心霊現象の次元に属する非物質粒子で、認識や思考結果を記録する情報素子のこと。
現代魔法の理論的基盤であるエイドス、現代魔法の根幹を支える技術である起動式や魔法式は
サイオンで構築された情報体である。

プシオン（霊子）
心霊現象の次元に属する非物質粒子で、その存在は確認されているがその正体、
その機能については未だ解明されていない。
一般的な魔法師は、活性化したプシオンを「感じる」ことができるにとどまる。

九校戦

正式名称「全国魔法科高校親善魔法競技大会」。
その名の通り、第一高校～第九高校までの魔法科高校生たちが全国から集い、
競技を通じて魔法技術を競い合う一大体育祭である。

種目は、『スピード・シューティング』、『クラウド・ボール』、『バトル・ボード』、『アイス・ピラーズ・ブレイク』、『ミラージ・バット』、『モノリス・コード』の六つ。
※『モノリス・コード』は男子のみ、『ミラージ・バット』は女子のみの競技。

各校から一つの競技にエントリーできる人数は三名で、一人の選手が出場できる競技は二種目までと決められている。

大会の開催期間は十日間で、一年生のみが出場する競技『新人戦』も設けられている（本戦は学年制限無し）。『新人戦』は四日目から八日目にかけて行われる。

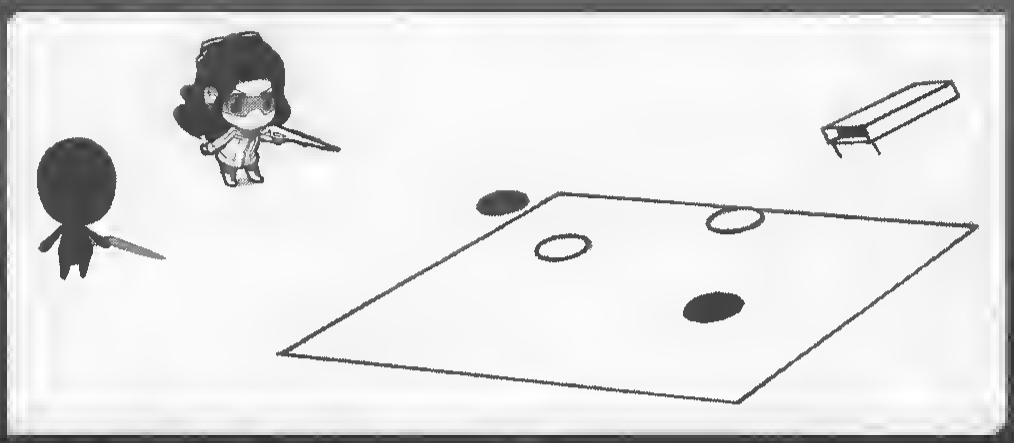
九校戦の勝敗／順位は各競技のポイントの合計で決まる。一位が五十ポイント、二位が三十ポイント、三位が二十ポイントという配分である。スピード・シューティング、バトル・ボード、ミラージ・バットは四位が十ポイント、クラウド・ボールとアイス・ピラーズ・ブレイクは四位から六位までの順位が決まらないので三回戦敗退三チームに各五ポイントが与えられる。九校戦の花形競技、モノリス・コードは一位チームに百ポイント、二位チームに六十ポイント、三位チームに四十ポイントが与えられ、ポイント上で最も比重の大きな競技になっている（『新人戦』のポイントは二分の一にして総合順位点に加算される）。

日程	分類	種目
一日目 8月 3日(水)	本戦 (全学年参加)	『スピード・シューティング』男女予選～決勝トーナメント 『バトル・ボード』男女予選
二日目 8月 4日(木)	本戦 (全学年参加)	『クラウド・ボール』男女予選～決勝 『アイス・ピラーズ・ブレイク』男女予選
三日目 8月 5日(金)	本戦 (全学年参加)	『バトル・ボード』男女準決勝～決勝 『アイス・ピラーズ・ブレイク』男女予選～決勝リーグ
四日目 8月 6日(土)	新人戦 (一年生のみ)	『スピード・シューティング』男女予選～決勝 『バトル・ボード』男女予選
五日目 8月 7日(日)	新人戦 (一年生のみ)	『クラウド・ボール』男女予選～決勝 『アイス・ピラーズ・ブレイク』男女予選
六日目 8月 8日(月)	新人戦 (一年生のみ)	『バトル・ボード』男女準決勝～決勝 『アイス・ピラーズ・ブレイク』男女予選～決勝リーグ
七日目 8月 9日(火)	新人戦 (一年生のみ)	『ミラージ・バット』女子予選～決勝 『モノリス・コード』男子予選リーグ
八日目 8月10日(水)	新人戦 (一年生のみ)	『モノリス・コード』男子決勝トーナメント
九日目 8月11日(木)	本戦 (全学年参加)	『ミラージ・バット』女子予選～決勝 『モノリス・コード』男子予選リーグ
十日目 8月12日(金)	本戦 (全学年参加)	『モノリス・コード』男子決勝トーナメント

スピード・シューティング

選手たちからは「早撃ち」と略される競技。

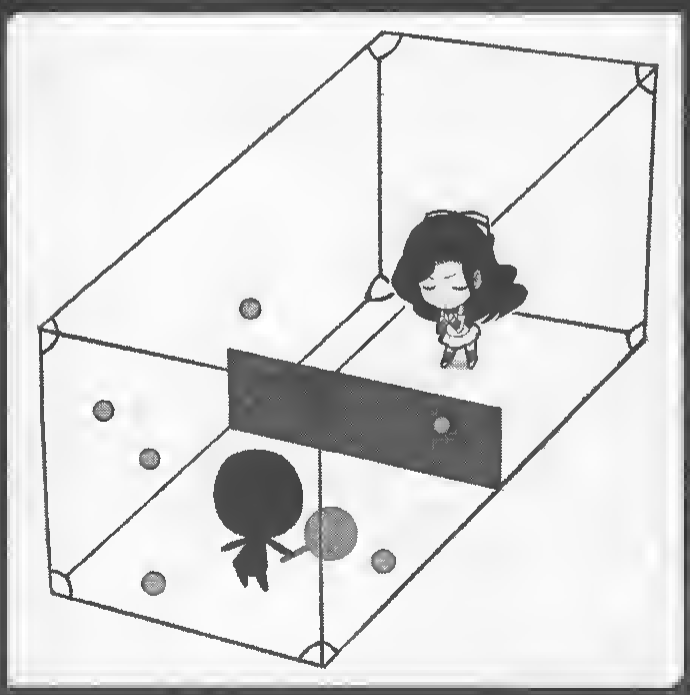
クレー射撃のように空間に射出された標的を魔法で破壊する。[illegible]が発生され、[illegible]標的を破壊した数を競う。予選は五分の制限時間内に破壊した標的の数を競う、一対一のスコア型。準々決勝以降は対戦型。



クラウド・ボール

選手たちからは「クラウド」と略される競技。

圧縮空気を用いたシューターから射出された直径6センチの低反発ボールを、ラケットまたは魔法を使って制限時間内に相手コートへ落とした回数を競う競技。1セット3分の試合時間で、透明な箱にすっぽり覆われたコートの中へ20秒ごとにボールが追加射出され、最終的には9個のボールを選手は休みなく追いかける。女子は3セットマッチ、男子は5セットマッチで行われる。



Event
競技種目

バトル・ボード

選手たちからは「波乗り」と略される競技。

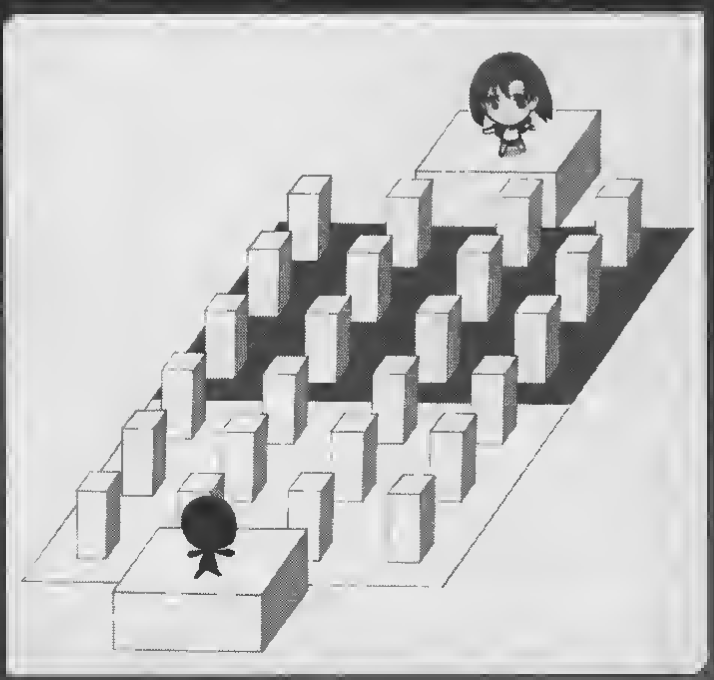
元々海軍の魔法師訓練用に考案されたもので、選手はサーフィンのような一枚のボードに乗り、加速魔法などを駆使して全長三キロの人工水路を三周し、勝者を競うレース。バトル・ボードのルールとして、他の選手に魔法で干渉することは禁じられている。予選を一レース四人で六レース、準決勝を一レース三人で二レース、三位決定戦を四人で、決勝レースを一対一で競う。



アイス・ピラーズ・ブレイク

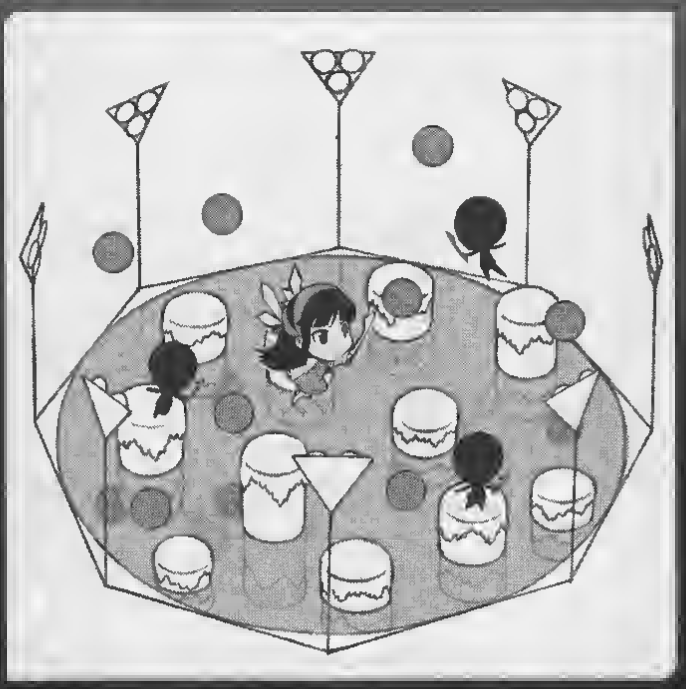
選手たちからは「棒倒し」と略される競技。

選手は、自陣奥に設置された高さ四メートルの櫓の上に立ち、十二メートル四方の自陣に配置された氷柱十二本を守りながら、十二メートル四方の敵陣の氷柱十二本を先に倒す、あるいは破壊するという競技。選手は純粋に遠隔魔法のみで競い、肉体を使う必要は無い。そのため、この競技に参加する選手のユニフォームは自由で、規制は唯一つ「公序良俗に反しないこと」。結果、昨今では女子のアイス・ピラーズ・ブレイクは九校戦のファッション・ショーとも[illegible]る。



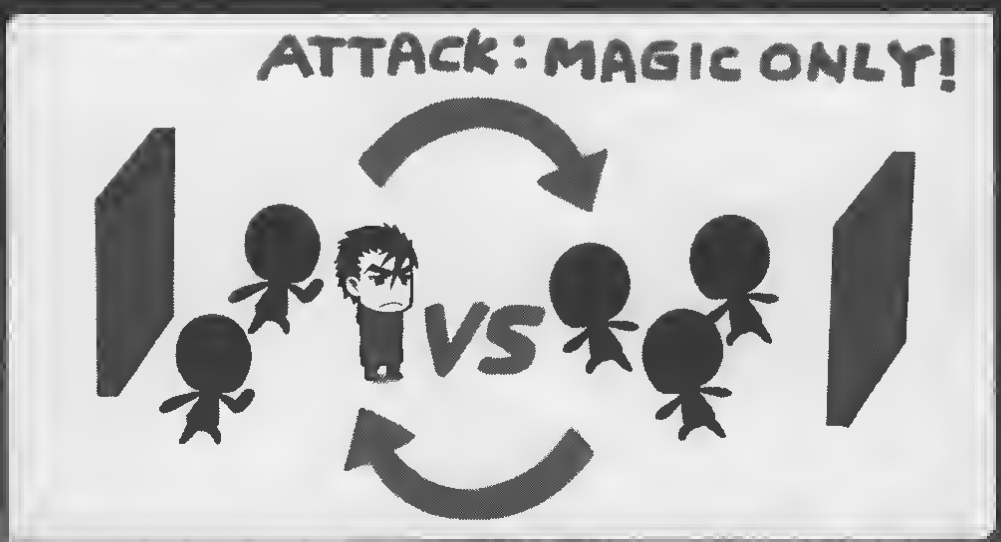
ミラージ・バット

選手たちからは「ミラージ」と略される、女子のみの競技。
空中に投影したホログラム球体目掛け、魔法を使って飛び上がりスティックで打つ競技。九校戦で試合数が最も少ない競技だが、試合時間は最長である。試合中、選手は絶え間なく空中に飛び上がり魔法を発動し続けるため、選手に掛かる負担はフルマラソンに匹敵するとも言われている。
九校戦のミラージ・バットは女子のみの種目で、凝った衣装を身にまとった女子選手が飛び回る姿は妖精のようだと評される。



モノリス・コード

選手たちからは「モノリス」と略される、男子のみの競技。
「ステージ」と呼ばれる試合会場で、敵味方各々三名の選手によって「モノリス」を巡り魔法で争う。相手チームを戦闘続行不能にするか、敵陣にあるモノリスを二つに割り隠されたコードを送信することで勝敗が決まる。相手チームへは、魔法攻撃以外の直接戦闘行為は禁止されている。モノリスを割りコードを読み取るためには、無系統の専用魔法式をモノリスに撃ち込まなければならない。その種目内容から、九校戦でもっとも人気があり、白熱する競技である。



［8］

大会四日目。

本戦は一旦休みとなり、今日から五日間、一年生のみで勝敗を争う新人戦が行われる。

ここまでの成績は一位が第一高校で三百二十ポイント、二位が第三高校で二百二十五ポイント、三位以下は団子状態の混戦模様。一位と二位の差が九十五ポイントとここまでは一高が大量リードを奪っている。しかし、新人戦の成績如何ではまだまだ逆転もあり得る点差だ。新人戦で大差をつけて優勝すれば三高にも逆転優勝の芽が出て来るし、逆に新人戦で優勝できなくてもポイントで大差をつけられなければ一高は総合優勝に大きく近づくことになる。

各校の第一目標は総合優勝だが、この様に新人戦のポイントも二分の一とはいえ総合順位ポイントに加算されるし、出場する一年生にとっては新人戦優勝こそが自分達の栄誉になる。気合の入り方は本戦に劣るものではなかった。

競技の順番は本戦と同じだ。

本日の種目はスピード・シューティング（予選・決勝）とバトル・ボード（予選）。

ただし本戦とは違い、スピード・シューティングは午前が女子、午後が男子で、一気に決勝まで行うというスケジュールになっている。（これは本戦スピード・シューティングが開会式に引き続いて行われる為、午前中だけで決勝までを終わらせることができないという理由によ

るもの）

スピード・シューティングに限らず、試合中にＣＡＤを調整することはできないが、選手の希望を聞いて試合と試合の合間に細かな調整を行うのは、エンジニアの重要な仕事だ。

だからエンジニアは基本的に、試合時間中、担当する選手の傍（そば）についている。

可能な限り、同一競技で同じ学校の選手が同時に試合をすることが無いように、大会委員会でタイムテーブルの調整はされている。

だがクラウド・ボールの様に一日の試合数が多い競技では、どうしても時間が重なることもあり、エンジニアもメインとサブの二人がつく。

同じ競技でもこのようなことが起こるのだから、一人のエンジニアが同じ時間帯に行われる別の競技を同時に担当することはできない。

試合順の関係で、結果的に試合時間が重ならなかったとしても。

◇　◇　◇

「ほのかは最終レースか……」

「ハイ！　午後のレースですので、女子のスピード・シューティングとは重なりません！」

ニコニコと笑いながらプレッシャーを掛（か）けて来る光井（みつい）ほのかを、達也（たつや）は先程から持て余し気

味だった。

達也が担当する競技は女子スピード・シューティング、女子ピラーズ・ブレイク、ミラージ・バットの三種目。

女子の競技ばかりなのは、彼が女誑しだから、ではもちろんなく、一年生男子選手の方で達也に対する反発が強かったからだ。

――無論それだけではなく、一年生女子選手の一部から強い要望もあったのだが。

例えば、深雪とか、ほのかとか、深雪とか、ほのかとか、深雪とか。

……つまりは、この二人が熱心にアピールしたということだ。

しかしここで一つ、問題が生じた。

深雪の魔法力に最も向いている競技はピラーズ・ブレイク。

彼女が振動減速系統を得意としていることは、生徒会役員もクラスメイトも知っている。何と言っても、無意識に冷却魔法を発動させる程なのだ。

深雪はピラーズ・ブレイクと、花形競技であり各校とも女子のエースをエントリーしてくるミラージ・バットに出場させるとして、問題は、ほのかを何に出すか、ということだった。

第一高校一年生の一学期実技試験の結果は、一位・司波深雪、二位・北山雫、三位・森崎駿、四位・光井ほのか。このように、一年生女子の中では深雪、雫に次ぐ実技優秀者のほのかだが、彼女の魔法技能は、実はあまりスポーツ系魔法競技向きではない。全ての系統をそつなくこな

し、複雑な工程の魔法式も然程苦労することなく組み上げる。どちらかと言えば、ほのかは研究者タイプなのである。

得意魔法をあえて挙げるとすれば光波振動系統の幻影魔法だが、同じ振動系統でも大出力の振動・加速系を得意とする雫の方がピラーズ・ブレイクには向いている。

達也が深雪を担当するのは、最初から決定事項。この事に異議を唱える蛮勇の持ち主は上級生にもいなかった。

従って、達也に担当してもらうことを望むなら、深雪と同じ競技にエントリーするのが一番確実なのだが、ナンバーワン、ナンバーツー、ナンバースリーの選手を同一競技に出場させるのは、作戦上得策ではない。と、言うか……無理だ。

ではピラーズ・ブレイクと試合が重ならない競技に、ということになるのだが、残念ながらスピード・シューティングも雫の方に適性がある。元々競技日程は、選手が得意分野にエントリーできるように、と考慮されて決められているのだから、最初から仕方のないことなのだ、とも言える。

作戦上の要因も重なり、結局ほのかの出場種目はバトル・ボードとミラージ・バットに決まった。（作戦スタッフはバトル・ボードとクラウド・ボールの組合せを第一案としたのだが、本人の希望と彼女の意を酌んだ友人たちの口添えで、一種目は深雪と同じ競技になった）

……このような事情があったので、「試合時間が重ならない」ことを盛んにアピールするほ

のかが、本当は何を言いたいのかは、達也にも察しがついた。

だが例え時間的に可能でも、チーム事情として今更エンジニアの担当替えは無理なのである。それに、今日は大丈夫でも六日目――新人戦としては三日目――のピラーズ・ブレイクとバトル・ボードの試合が重ならないという保証はどこにもない。

この程度のことは、ほのかにも分かっているはずなのだが……。

今日に限って深雪は何故か助け船を出そうとしない。ほのかに対するものと妹に対するものと二重の意味を持つため息をつきながら、達也は二股男の言い訳のようなセリフを口にした。

「……本当はCADも診てやりたいんだが、それは無理だから、せめてレースは傍で観ていることにするよ」

「本当ですかっ？　約束ですよ！」

誰かがクスリと笑った。達也には誰の声だか分かっていたが、彼の意識はそれを分からなかったフリをすることを選択した。

端から見れば、彼は紛うことなく「女誑し」である……のかも、しれなかった。

◇　◇　◇

当事者にとっては決して「些細な」では片付けられない幕間劇であっても、メインストーリ

ーからすれば所詮、サイドエピソード。
幕が上がれば、意識をそこに集中しなければならない。
最終チェックを終えた、スピード・シューティング専用の細長い小銃形態ＣＡＤを手渡して、達也は雫にコンディションを確認するよう指示した。
ＣＡＤは魔法師から想子を吸収し、想子情報体である起動式を送信する。この交信機能にトラブルが生じると、他の部分をどれほど巧みに仕上げていても役に立たない。
ハード的な交信障害があれば予備機に交換しなければならないし、ソフト的なバグがあれば大急ぎで手直しする必要がある。
「んっ……万全。自分のより快適」
顔にも声にも表情が乏しいので、雫とコンビを組んだ当初は、どの程度本気か嘘か戸惑うこともあったが、今では達也もだいぶ慣れてきた。
彼女は基本的に嘘は言わない。
都合の悪いことは黙秘するだけだ。
「達也さん、やっぱり雇われない？」
ただ、未だにこういう、本気か冗談か判断がつきにくいことを言い出す点には慣れることができない。
「……この試合直前に冗談を言う余裕があれば大丈夫だな」

「冗談じゃ無いよ」

「……」

ちなみに彼女が何を言っているかというと、「自分と正式にＣＡＤメンテナンス契約を結ばないか」という意味である。

雫が「雇われないか」と達也に訊くのは、既に十回を超えている。彼女の性格からして同じ冗談を繰り返したりはしないだろう、と達也も思うのだが、どうにも本気とも思えないのだ。

「専属じゃなくていいから」

競技用ＣＡＤのアレンジの参考にする為、一度見せてもらった彼女のＣＡＤは、達也にも手を加える余地が無いくらい巧みに調整されていた。

それもそのはず、雫のＣＡＤをメンテナンスしているのは、現在この国で五指に入ると言われている有名魔工師だった。

雫の、と言うより、北山家の、と言った方が、より正確ではあるが。

最初に聞いたときは達也も意外感を禁じ得なかったのだが、雫の家は、いわゆる「大富豪」なのである。

もっとも北山家は、十師族や百家のような、魔法師の名門というわけではない。

一流の魔法師である母親が大富豪の跡取り息子に見初められて、すったもんだの末にゴールインした、という事情で、父方の家系に魔法師はいないし、年の離れた弟も実用レベルと言え

る程の魔法の素質は持ち合わせていないそうだ。
その所為なのかどうなのか、父親の雫に対する――雫の魔法の才能に対する入れ込みようは、常軌を逸しているらしい。
雫がモノリス・コードにすっかりはまってしまったのも、父親が財力にものを言わせた魔法競技観戦ツアーを毎年組んでいた結果なのだそうだ。
「……何度も言っていると思うが、その件は俺がライセンスを取ってからな？」
達也が何の返事もしないうちから雫が提示した契約金と作業料は、トーラス・シルバーとして巨額と言える収入を得ている達也から見ても、破格のものだった。
彼がただの脛かじり学生だったら、目が眩んでいたに違いない程に。
だがこうして学校行事の一環として無報酬で調整を行うのと、報酬を受け取って本物の仕事として調整を行うのとではわけが違う。ライセンスが無くとも違法ではないが、世間的に「モグリ」であることに間違いはないのだから。
「分かった」
いつものように、雫は聞き分け良く頷いて見せた。
だが本当はどこまで理解しているのか、疑わしいものだった。
雫本人にとってはどうと言うことも無かったかもしれないが、達也にとっては試合の直前に、

大幅に緊張感を殺がれる会話だった。

まあ、選手に悪影響が無ければ、それで良いのかもしれないが。

作戦は事前に何度もミーティングを重ねた。

達也が雫の為に考案し、その為のＣＡＤを組み立てた秘策もある。（「秘策」の出番は対戦型となる決勝トーナメントからだが）

「いよいよだな、雫」

「うん」

出番を前にして、言うべきことは一つしかない。

「よし、頑張れ！」

「ウン、頑張る！」

単純だが、それこそが最後の作戦なのである。

◇　◇　◇

「隣、空いてる？」

「アラ、深雪。空いてるわよ。どーぞドーゾ」

実は観客席に座っている彼女たちに対して先程から同じ問い掛けが繰り返されていたのだが、

今回と違って訊ねてくる相手は下心の見え隠れするヤローどもばかりだった（レオと幹比古が両端に座っているにも関らずである！）。その度にエリカが殺気を乗せた嘘八百でナンパ男を追い払って確保した空席だ。

座っている順番は、幹比古、美月、ほのか、空席、エリカ、レオ。真ん中に深雪の席を空けておいたのは、そうして左右からガードしておかないと怖いもの知らずの身の程知らずが何人寄ってくるか分からないからである。なお、エリカは最初、レオの隣を嫌がっていたのだが、レオとほのかはクラスも違うしあまり面識が無いと美月に説得されて、渋々納得した。――その割には、今日は珍しくいがみ合っている様子もなかったが。

深雪が来るまで、ほのかを除いた四人は新人戦のスケジュールを見ていたようで、観客用のパンフレットを手に持っていた。（ほのかは選手だから今更確認する必要は無い）

深雪とあいさつを交わす為に顔を上げた後、パンフレットに目を戻した美月が、ふと気づいた、という表情でほのかに話し掛けた。

「……ほのかさん、準備はいいんですか？」

「大丈夫です。私のレースは午後だから」

美月に問われて、ほのかは少し、硬い笑顔で答えた。

深雪が呆れ声で口を挿む。

「ほ・の・か。今から緊張していては、試合までもたないわよ？」

「うっ、分かってるんだけど……」
「大丈夫よ、ほのかなら。お兄様もそう仰っていたでしょう？」
「う、うん……」
「レースのことを考え過ぎないように、こちらを観に来たのでしょう？　今は、雫の応援をしましょう」
「……ウン、そうよね」
必要以上に強く頷く仕草から、到底緊張を紛らせ切れていないことが窺われた。
生真面目で思い込みが強い性格だから、緊張するなと言う方が無理なのかもしれない。
「……あの、私、余計なこと言いましたか？」
そして美月の繰り出す悪意の無い追い討ちに、ほのかの顔が、わずかに引きつった。

◇　◇　◇

そんな一年生たちの、ある意味初々しい一幕が繰り広げられている席から少し離れたところに、生徒会プラス風紀委員長の三年生トリオは陣取っていた。
「摩利、寝てなくて良いの？」
「病気じゃないんだ。暴れなければ問題ない。それより真由美の方こそ、テントに詰めていな

くて良いのか？」

「大丈夫よ。何キロも離れているわけじゃないんだし、何かあったら知らせてくるでしょ」

そう言って真由美は、頬に掛かる髪をかき上げて見せた。

露わになった耳には音声通信用のレシーバーが引っ掛けられていた。

「しかし、真由美だけならともかく市原まで一緒に席を外すのはどうかと思うが」

「問題ありません。今日の私は強制オフみたいなものです」

「……お前の冗談は相変わらず分かりにくいぞ、市原」

ニコリともせず返された答えに、一瞬、参謀の役目を事実上取られてしまったことに不満があるのかと摩利は疑ってしまった。

無論、そんなはずがないことは摩利も知っている。

鈴音は作戦スタッフの総責任者だが（と言っても作戦スタッフは四人しかいないが）、個々の作戦立案は分業体制に従っている。最も大きな担当分けとしては、男子の試合は男子のスタッフが作戦を立て、女子の試合は女子のスタッフが作戦を立てる。

本日の競技では、女子スピード・シューティングが鈴音の担当種目だ。

――が、元々この競技はあまり細かな作戦が入り込む余地の無い、能力任せの色彩が濃いもの。力任せ、と言ってもそれほど的外れではない。参謀が関与する部分があるとすれば、選手の特性に応じた魔法種類の選択と、それに合わせたＣＡＤのセッティング傾向になるのだが…

…この部分については技術スタッフの仕事と重なる領域だ。

そして一年女子スピード・シューティングの魔法種類選択とCADセッティングは、計画から実行まで達也が全て一人でやってしまっていた。

とはいっても、そのプランについては事前に鈴音も了解済みだ。

また彼女は、この程度のことでへそを曲げるような性格ではない。

「さて……考えてみれば、アイツのエンジニアとしての腕を実戦で見るのはこれが初めてだな」

好奇心をむき出しにした摩利の言葉に、真由美も興味津々の表情で頷いた。

「そうね。私のときは、本当にお手伝い程度だったし。彼が一から調整したCADがどんな性能を見せてくれるのか、楽しみだわ」

「北山さんを始めとして、選手からはとても好評のようですが」

鈴音の言葉に誇張は無かった。

一科生のみで構成される一年女子の選手団には当初、深雪、ほのか、雫の三人を除けば、同学年の、しかも二科生に、自分のCADの調整を任せることに対してアレルギーに近い抵抗感が、大なり小なり見られた。

だが彼が調整したCADで何回か練習を重ねるに連れて、そんなマイナス感情はすっかり消え失せていた。

その激変振りは、「吹っ飛んでしまった」という方が適当かもしれない。

「今日も自分のＣＡＤを持ち込んでいる選手がいたようですし」

この鈴音の暴露話には、摩利も思わず呆れ声を出した。

「おいおい……競技に差し支えるんじゃないか？」

「その辺りは司波君の方で上手くコントロールしているみたいですね。サービスしてあげるのは試合が終わってからのようですよ」

サービスというのは、ＣＡＤの調整のこと。

達也が調整した競技用ＣＡＤを使った選手が、私用のＣＡＤの調整まで持ち込んでくるようになったのだ。それも、一人や二人ではなく、一年生女子選手のほぼ全員が。

「地道にファンを増やしているのね」

「変なところで人が好いんだな」

真由美と摩利が、顔を見合わせてクスッと笑い合った。

◇　◇　◇

もし達也が真由美の「ファンを増やしている」発言を聞いていたなら、苦い顔で否定したことだろう。

事実懇親会では、彼女たちから避けられていたのだ（と達也は感じていた）。

だが言うまでもなく、彼はそのような「順風耳」など持ち合わせていない。
それに彼の注意は、雫の立つシューティングレンジに集中していた。
彼には、美月のような「目」は無い。
しかしその代わり、達也には情報構造を読み取る力がある。
自分で一から調整したCADの情報構造は、全て頭に入っている。
そこに少しでも手が加われば、その「手」を知覚できなくてもその「結果」を認識することが彼にはできる。
――雫が構えを取った。
スタートのランプが点り始めた。
(どうやら今回は大丈夫のようだな)
摩利の事故を引き起こしたようなCADが細工された形跡はなかったが、なおも「眼」を逸らすことなく、達也はそう思った。

◇　◇　◇

ランプが全て点った瞬間、クレーが空中に飛び出した。
得点有効エリアに飛び込んだ瞬間、それは、粉々に粉砕された。

次のクレーはエリアの中央で砕け散った。
次はエリアの両端で、二つ同時に破砕された。
大勢の観客から嘆声が漏れた。観客席でジッと瞳を凝らしていた深雪たちも、順調な滑り出しに対する安堵も込みで、詰めていた息を吐き出した。
雫の視線にブレは無い。
ただ正面を真っ直ぐ向いていて、飛び込んでくる標的を見ていないようですらある。
「うわっ、豪快」
エリカがシンプルな感嘆を漏らす反対側では、
「……もしかして有効エリア全域を魔法の作用領域に設定しているんですか？」
美月が自信なさそうに深雪とほのかへ訊ねていた。
「そうですよ。雫は領域内に存在する固形物に振動波を与える魔法で標的を砕いているんです。内部に疎密波を発生させることで、固形物は部分的な膨張と収縮を繰り返して風化します。急加熱と急冷却を繰り返すと硬い岩でも脆くなって崩れてしまうのと同じ理屈ですね」
「より正確には、得点有効エリア内にいくつか震源を設定して、固形物に振動波を与える仮想的な波動を発生させているのよ。魔法で直接に標的そのものを振動させるのではなく、標的に振動波を与える事象改変の領域を作り出しているの。震源から球形に広がった波動に標的が触れると、仮想的な振動波が標的内部で現実の振動波になって標的を崩壊させるという仕組みよ」

ほのかと深雪が目をシューティングレンジに固定したまま、二人掛かりで行った丁寧な解説に、美月はしきりと頷くばかりだった。

◇　◇　◇

「……という仕組みですね」

偶然か必然か、同じ会話が同じタイミングで、三年生トリオの間でも交わされていた。

「ご存知のとおりスピード・シューティングの得点有効エリアは、空中に設定された一辺十五メートルの立方体です。司波君の起動式は、この内部に一辺十メートルの立方体を設定して、その各頂点と中心の九つのポイントが震源になるように記述されています」

解説役は達也から調整プランを見せられている鈴音だ。

「各ポイントは番号で管理されていて、展開された起動式に変数としてその番号を入力すると、震源ポイントから球状に仮想波動が広がります。

波動の到達距離は六メートル。つまり一度の魔法発動で、震源を中心とする半径六メートルの球状破砕空間が形成されることになります」

「……余計な力を使っているような気もするが……北山は座標設定が苦手なのか？」

「確かに精度より威力が北山さんの持ち味ですが……」

摩利の問いに答える鈴音の顔は、彼女のデフォルトとも言うべきクールなポーカーフェイスのままだ。しかしその目の中に、同情交じりの苦笑の影が垣間見えた。

「この魔法の狙いは精度を補うことではなく、精度を犠牲にする代わりに速度を上げることにあります」

「……つまり、その気になればもっとピンポイントな照準も可能という事よね？　どういうことかしら？」

「この魔法の特徴は、座標が番号で管理されているという点です」

視線を正面に――試技中の一年生に戻して、真由美の質問に答える形で、鈴音は説明を始めた。すらすらと繰り出される答えは、彼女も以前に同じ質問をして既に回答を得ていたから、だろうか。

「スピード・シューティングは、選手の立つ位置と得点有効エリアの距離、方向、エリアの広さが常に同じです。それはつまり、この魔法で設定する必要がある震源ポイント、その位置決めをする仮想的な立方体と選手の距離、視野角も常に一定ということです。

故に、座標を変数として毎回入力する必要は無く、起動式に選択肢の形で組み込んでおいて、発動時にはその番号を指定するだけで魔法を発動させることができます。この程度の粗い狙いであれば、ＣＡＤの照準補助システムでその時に最適なポイントを自動的に選び出すことも可能です。

そしてこの魔法は、威力も持続時間も、変える必要がありません。実際にそれらは、起動式で定数として処理されています。選手は、ＣＡＤの補助に従ってポイントを設定するだけで、ほとんど変数入力を意識することなく、事実上ただ引き金を引くだけで、標的を破壊することができるのです」

試技は終盤に差し掛かっていた。

撃ち漏らしはまだ、一つも無い。

「制御面で神経を使う必要がありませんから、魔法を発動することだけに、演算領域のポテンシャルをフル活用することができます。連続発動もマルチキャストも思いのままです」

試技時間が終了した。

結果は、パーフェクト。

「魔法の固有名称は『能動空中機雷』。司波君のオリジナルだそうですよ。まあ、色々な要素が詰まっている分だけ大きな起動式になりますから、北山さんの処理能力があってこその魔法ですが」

「……真由美の魔法とは、発想がちょうど逆だな」

「……よくもこんな術式を考えつくわね」

真由美の声には、感嘆の成分よりも呆れ声の成分の方が多く含まれていた。

「しかし……面白いな」

一方、摩利の声は、興味の方が勝っていた。

「実戦では自分と攻撃対象の相対位置が常に同じということはあり得ないから、射撃魔法として見れば実戦的ではない、が……空中に仮想立方体を設定するのではなく、自分を中心にした円を設定して、その円周上に震源を配置すれば全方位に有効なアクティブ・シールドとして使えないかな？」

「持続時間が問題ね。短すぎるとタイミングが難しいし、長すぎると自分が巻き込まれる可能性が出て来るわよ？」

真由美の呈示した問題点も、摩利の興味を殺ぐには及ばなかった。

「そこは術者の腕次第だ。お前の言うとおり、タイミングを見極めることができれば持続時間は短くできる。……よし、早速今晩にでもアイツを捉まえて、あたしのＣＡＤにインストールさせよう」

「……試合の邪魔にならないようにね」

今度はハッキリ、呆れ声の純度百パーセントで真由美は応えた。

◇　◇　◇

「お疲れ様」

シューティングレンジから引き上げて来た雫に、達也はタオルを渡しながら労いの言葉を掛けた。エンジニアはマネージャーではないので、タオルの手渡しまでする必要は無いのだが、彼にはそんな、ちっぽけなプライドの持ち合わせは無かった。

「何だか拍子抜け」

斜に構えているわけではなく、本当にそう感じているのだろう。

額に軽くにじんだ汗を拭きながら、雫の表情は物足りなげだ。

だが同時に、喜びも隠し切れていない（隠す気も無いのだろうが）。

新人戦の予選突破ラインは、毎年大体、命中率八十パーセント前後。

皆中ならばそれ以上の得点は無いのだから、ボーダーラインに関係なく、当然決勝トーナメント進出となる。

「死角を突かれることは無いと思っていたが、予想どおり、そんな意地の悪い軌道設定はされていなかったな」

雫に使わせた魔法は、有効エリアの全てをカバーしていたわけではない。外縁部をかすめるようにして、死角が存在する。

しかし、クレー投射機の性能から見て、そのようなギリギリを狙う軌道設定はされていないだろうと予測していた。もしクレーが有効エリアを通過しなかったら、公平を期する為にその試技はやり直しとなり、大会委員の失態となる。競技の性質上、これは必要の無いリスクだ。

そこまで読んだ上の作戦なのだからそれほど心配はしていなかったが、実際に裏もかかれず上手く行ってみると、やはりホッとするものだ。

「達也さん、心配し過ぎ。ふるい落としの為に、わざわざ死角を突かなければならない程、新人戦のレベルは高くないよ」

雫の言い分はもっともだ。

達也は自分の気分を切り替えて、雫の気分の切替にかかった。

「まずは予定どおり。だが準々決勝からは対戦形式だ。ＣＡＤの調整は朝のうちに済ませてあるから、感触を確かめておいてくれ」

「分かった」

予選と決勝トーナメントでは試合形式が違う。予選は五分間に百個射出されるクレーを何個破壊できるか、魔法の速度と確実性を競う。だが決勝トーナメントは、同じエリアに射出されるクレーをより多く破壊した選手が勝ち上がる。速度、確実性と共に、相手の魔法に邪魔されない干渉力とテクニックを競うという側面が加わってくる。この、競技の性質の変化に合わせて、使用する魔法も変えるのが普通だ。

そして競技用の特化型ＣＡＤは、魔法の種類に応じてＣＡＤ自体も変えるのが一般的。

達也はこれから次の選手――次の次の試合の準備に入る。

雫は、決勝トーナメント用のＣＡＤが保管されている天幕へ、一人で向かった。

◇◇◇

「三人とも予選通過か……」

一高本部の天幕に戻った真由美の元へ届けられた、スピード・シューティングの予選結果。

それを見ながら、真由美が独り言のようにそう呟いた。

「今年の一年女子は特にレベルが高いのか？」

決勝トーナメントに進出するのは、予選二十四名の内、八名。

その八名に同じ学校からエントリーした三名が共に入っているというのは、本戦、新人戦を通じて、過去にもあまり例が無い。

「摩利、分からないフリはやめたら？」

真由美から質問をツッコミで返された摩利は、無言で肩をすくめてみせた。

お手上げ、のポーズである。

「バトル・ボードの方はどうなっているのかしら？」

真由美の問い掛けに、鈴音がわざわざ端末を取り出して確認する。（「わざわざ」というのは、本当は既に頭に入っているからだ）

「男子は二レースを終了していずれも予選落ち、女子は一レースに出場して予選突破です」

「男子はあと一人か。女子の方では、最終レースの光井さんが予選突破確実でしょうから……こっちもあーちゃんが頑張ってるからかな」

真由美の独り言めいた呟きに、

「当校も、もう少し技術者の育成に力を注ぐべきかもしれんな」

自分の端末で同じ成績表を見ていた克人が、苦味の混じった声で応じた。

◇　◇　◇

スピード・シューティングの準々決勝は四つのシューティングレンジを使用して行われる。決勝トーナメント進出の八名が全て別々の学校であれば四試合が同時に行われるが、同じ学校の選手が含まれている場合、試合が重ならないように時間が調整されることになる。（準々決勝では、同じ学校の選手同士の対戦は無い）

とは言っても、同じレンジで一試合ずつ行う準決勝に比べ、各試合のインターバルはどうしても短くなる。今回の第一高校女子チームのように、三名が準々決勝に進出すると、エンジニアは非常に忙しい思いをすることになるのだ。

「……達也さん、大丈夫？」

最後の順番に回された雫は、控え室（天幕の中だから厳密には「室」とは言えないが）に駆

け込んできた達也を見て、思わずそう声をかけた。
心做しか、雫には達也が少し息を切らしているようにも見えた。
「大丈夫」
短くそれだけを答え、達也はCADの最終チェックを始めた。
雫が見守る——と言うよりジッと凝視している前で、調整機のモニターを高速スクロールさせ異常箇所が無いことを確認して、達也はようやく雫へ目を向けた。
「分かっていると思うけど、予選で使った機種とは全くの別物だ。時間は無いが、少しでも違和感があったら可能な限り調整するから遠慮なく言ってくれ」
達也から受け取ったCADで一旦構えを取り、二、三回、トリガーに指を掛けては離すという仕草を繰り返して、雫はCADを下ろした。
「そんなの、無いよ。むしろしっくりきすぎて怖いくらい」
「そうか」
実際に胸を撫で下ろしたりはしないが、ホッとした顔で緊張を緩めた達也に、雫は随分気合の入った顔を向けた。
「二人とも、勝ったんだよね」
「ああ」
二人とも、というのは先に試合をしたチームメイトのことだ。



雫と同じく決勝トーナメントに進んだ二人は、いずれも準決勝に勝ち上がりを決めている。

「大丈夫」

もう一度、異なる意味で、同じ言葉を達也は使った。

「いつもどおりにやれば、雫も勝てるさ」

「もちろん」

そして雫も、いつもと同じく簡潔に、いつもと違って力強く頷いた。

「優勝する為のお膳立ては全て達也さんが整えてくれたんだから、あとは優勝するだけだよ」

「その意気だ」

少々気の早い優勝宣言をあえて修正したりせず、達也は雫を笑顔で送り出した。

◇　◇　◇

「いよいよ雫さんの出番ですね」

「コラコラ、美月が緊張してどうするの」

「だって、エリカちゃん、ドキドキしない？　これで雫さんが勝てば、当校から三人がベストフォーに進むことになるのよ」

「あんまり興奮しすぎて倒れないようにね？　雫は間違いなく勝ち抜くから」

自信たっぷりに断言した後で、「だから深呼吸でもして落ち着きなさい」と、からかい混じりに深雪から促された美月は、何も考えず素直に深呼吸を繰り返した。

「……これも一種のお約束かしら」

「……美月さんって時々お茶目よね」

深呼吸の成果と言うより、深雪とほのかに全く心配している様子が見られないのを間近で感じて、美月もようやく落ち着きを取り戻した。

「今度はどんな工夫を見せてくれるのかな」

幹比古の声が少し弾んでいるのを耳に留めて、エリカが「おやっ？」という表情を見せた。

「そうだよな。今度は何が飛び出してくるのか、予想がつかないぜ」

だが実際に声に出して応えたのは、レオだった。

「まるでビックリ箱だよ、彼の頭脳は」

「言えてる」

幹比古が魔法に対して前向きな興味を示す姿をエリカが見るのは随分久し振りだった。

この変化は、単に他人の試合を見ただけでもたらされるものとは、彼女には思えない。

自分の知らないところで、達也と幹比古の間に何があったのだろうか……声に出さず、エリカはそんな事を考えていた。

「えっ？　あれって……」

その思惟は、意識を向けていた当の本人が上げた、調子外れな声に破られた。

「どうしたんだよ？」

「あのＣＡＤ……？」

幹比古の視線は、雫が襷掛けにストラップでぶら下げ、脇の下に抱え上げたＣＡＤに向けられている。

その小銃形態のＣＡＤは一見、ストラップがついている以外は、他の選手が使用している競技用の物と大差が無いように見える。だが実弾銃の機関部に当たる部分が、他の選手が使用している物に比べて幾分厚みを帯びていた。

幹比古の流派では、元来ＣＡＤをそれほど重視しない。未だに呪符による術式の発動が主流だ。だが去年の事故以来、幹比古は取り憑かれたように現代魔法の技術について学んだ。

失ったものを、補う為に。

その成果は、定期試験の成績にも表れている。

ＣＡＤについても、並みの現代式魔法師より詳しくなったという自負が、幹比古にはある。

その彼の目に間違いが無ければ。

「あれって……汎用型？」

「えっ、マジか？」

「えっ、でも、あれは」

「小銃形態の汎用型ホウキなんて聞いたこと無いよ？　第一、照準補助システムと汎用型の組合せなんて、技術的に可能なの？」

レオ、美月、エリカから、次々に上がる当然な疑問。

だが幹比古は自信を持って頭を振った。

「でもあの、トリガーの真上に配置されたＣＡＤの本体部分は、ＦＬＴの車載用汎用型ＣＡＤ『セントール』シリーズに間違いないよ。セントールシリーズは本体にインターフェイスを持たず外部の入力機器につないで使用するタイプだけど、その為のコネクターでグリップと照準補助装置につないでいるんだ」

「よくお分かりですね」

ニコッと笑って振り向いた深雪の一言が、幹比古の観察を裏付けた。

「えっ？　じゃあ、アレって」

「そうよ、エリカ。あれはお兄様のハンドメイド。汎用型ＣＡＤで照準補助システムを利用する為にお作りになった物よ」

深雪が得意げに返した答えに、自身も特殊形状のＣＡＤをオーダーメイドして、その手間を知っているエリカは絶句した。

「もう驚く気にもなれんのだけど……一体、何の為に？」

「もちろん、試合の為ですよ」

簡潔に告げられたほのかの答えは、レオの、そして他の三人の疑問に対して十分なものではなかった。

だが、それに続く説明はなかった。

示し合わせたように息を呑み、六人の視線が前へ向いた。

競技開始のシグナルが点り始めていた。

◇　◇　◇

紅白のクレーが宙を舞う。

雫の破壊すべきクレーは紅。

その紅に塗られた三つのクレーが軌道を曲げ、有効エリアの中央に集まって衝突し、砕け散った。

「移動系……いえ、違うわね。収束系？」

各校が本部に使っている天幕には、進行中の全競技を映し出すことが出来る大画面の多段階分割モニターが設置されている。

そのモニターをほぼ一杯に使って、真由美と鈴音は雫の試合を観ていた。

「ご名答です」

今度は有効エリアの奥を飛び去ろうとしていた紅のクレーがエリア中央に吸い寄せられて砕け散った。

「今のは予選で使った魔法よね？」

「はい。収束系魔法と振動系魔法の連続発動ですね」

白いクレーは二つずつ、衝突によって破壊されている。

対戦相手の二高選手が採用している戦法は、移動系魔法により標的のクレー自体を弾丸として、他の標的にぶつけるオーソドックスなものだ。

オーソドックスであるが故に、有効性が過去の実績により立証されている戦法。

だが先程から、エリア中央付近で白は頻繁に的を外している。

外縁部ではほとんど命中させているから、本人の技術的な未熟の所為というより……

「有効エリア内を飛び交うクレーをマクロ的に認識して、中央部における紅色のクレーの密度を高める収束系魔法の影響で、白のクレーが中央部からはじき出されているのは分かるんだけど……」

収束系魔法の基本形は、魔法式で定義した空間内に存在する、魔法式で定義した「情報」を持つ対象を、魔法式で定義した座標に選択的に集める魔法。これを物質に対して使用した場合、対象物質の密度を高めると同時に、対象物質以外の物質の密度を低下させる効果を発揮する。

例えば真由美が使用したドライアイスの弾丸を作って飛ばす魔法も、十分な弾数を得る為に

初期工程で二酸化炭素を集める収束系魔法が組み込まれている。

この際、一箇所に集められた二酸化炭素がそれ以外の気体を押し除けて、二酸化炭素密度の高い空間が作り出されているわけではなく、指定された座標に二酸化炭素が流れ込み、同時にそれ以外の気体が流れ出しているのである。

この場合の二酸化炭素分子を赤のクレーに置き換えたのが、雫の使っている魔法だ。

特定の空間――この場合、有効エリアの中央部――の情報を「紅色のクレーが集まっている空間」に書き換える収束系魔法。

より具体的には、得点有効エリアをすっぽり覆ってなお余る二十メートル四方の空間を「中央部に近づくほど紅色のクレーの密度が高い空間」に改変する魔法。

空間の体積は巨大だが、同時に飛んでいるクレーの総数が少ないので術者の負担はそれ程でもない。改変の対象は空間そのものではなく、その空間内に存在するクレーの分布だからだ。

紅のクレーは魔法式による情報改変によってエリアの中央部へ引き寄せられ、白のクレーは中央部を横切る軌道から外される。二高選手が直接干渉しているクレーはこの副次的な干渉の影響を受けないが、二高選手がぶつけようとしている「的」の側のクレーは、二高選手の魔法によるコントロールを受けているわけではないので、雫の魔法の影響により軌道が変わって、その結果、白が的を外すという現象が起こっているのである。

スピード・シューティング決勝トーナメントのルールは、相手選手を直接攻撃しない限り、

妨害は認められている。ただクレーが射出される間隔は不規則でしかも短く、相手の邪魔をしながら自分の的を狙い撃つのはかなり難しい。妨害と狙撃と、どっちつかずになって結局自滅するというケースが多いのだが、雫が使っている収束系魔法は相手の妨害と標的の破壊が表裏一体となった術式であり、中々巧みな作戦だと言える。

この作戦は、少ないながら過去にも例があり、一定の効果を上げている。強い事象干渉力が必要になる為、選手を選ぶ作戦だ。故に、実際目にする機会は少ないが、真由美はこの戦術もしっかり研究していた。

だから、真由美が疑問を覚えたのはこの魔法そのものについて、ではない。

「でも、最後の振動系が発動したり発動しなかったりしているのは何故？」

複数の標的が集まった場合は、そのまま中心部で衝突させて壊している。

飛翔中の紅色のクレーが一つだけの場合に限って、振動系の破砕魔法が行使されている。

一つの魔法として構成されているなら、振動系魔法で標的を破壊するという最終工程が、発動したり発動しなかったりするのはおかしいのだ。

「標的が複数の場合、振動系が発動する前に衝突するよう、スケジュール設定されているのかしら？」

口に出した推論を自分でも信じていないのは、真由美自身の口調が物語っている。

そんな時間差を設けるメリットは、何も無いのだから。

「会長、私は『収束系魔法と振動系魔法の連続発動』と申し上げましたが」
少し人の悪い笑みを含んだ声で、鈴音が真由美の勘違いを正す。
真由美はその言葉の意味を即座に理解した。
そして反射的に、反論の声を上げた。
「嘘！　特化型ＣＡＤは系統の組合せが同じ起動式しか格納できないはずよ!?」
「お疑いはもっともですが、あれは特化型ではなく、汎用型ＣＡＤです」
鈴音の回答は、更なる混乱を真由美にもたらした。
「そんなのありえない！
汎用型ＣＡＤと特化型ＣＡＤは、ハードもＯＳもアーキテクチャからして違うものよ。
そして照準補助装置は、特化型のアーキテクチャに合わせて作られているサブシステム。
汎用型ＣＡＤの本体と照準補助装置をつなぐことなんて、技術的に不可能なんじゃない？」
真由美の語勢は徐々に落ち着いたものになって行ったが、紅潮した頬にまだ醒め切れぬ興奮の影が窺われる。
鈴音の笑みも、穏やかで大人びた、相手を落ち着かせる様なものに変わっていた。
「私もそう思っていました。ですが、実際は可能でしたね。これは司波君のオリジナルではなく、ドイツで一年前に発表されたものだそうですよ」
「……一年前なんて、ほとんど最新技術じゃない」

「この程度のことで驚かない方が良いですよ、会長。彼に口止めされていますが、もっとすごい最新技術を司波君は用意していますから」
「ハア……まあ、秘密というなら訊かないけど。でも、リンちゃんには話して、私には話せないなんて、チョッとショックかも」
「会長は選手ですから。きっと彼は、会長を動揺させたく無かったのでしょう」
「まぁね……。こんな術式があるなんて事前に知らされていたら、確かに動揺したかも」
ため息を吐いて視線を戻したモニターの角に、残り時間と両選手の得点が表示されている。
残り時間わずかで、勝利は既に確定していた。

◇　◇　◇

（残り三十秒）
この二週間、何度と無く繰り返し、積み重ねた練習により、体感時間で五分の競技時間を正確に測れるようになっている。
雫は、ゴーグルに映し出される青い球体の内側に紅のクレーが飛び込んだ瞬間、ＣＡＤの引き金を引いた。
標的は速やかに砕け散る。

保護ゴーグルを照準器として利用することは大会規定で認められている。むしろ、そのようなギミックを仕込んでいない選手の方が稀だ。（自前の照準手段を持っている真由美の様なケースは別として）

だが、標的に狙いをつける為ではなく、空間を仕切る為にＨＭＤ（ヘッド・マウント・ディスプレイ）の機能を組み込んでいるのは、おそらく雫くらいのものだ。――いや、達也くらいのものだ、と表現した方が正確か。

何から何までオーソドックスなノウハウとは異なる仕掛けを提案してくる達也に、雫も最初は戸惑った。しかし、実際の競技経験が無いことが逆に幸いしたのか、慣れるまでに時間は掛からなかった。そして慣れてしまえば、これ以外の装備、これ以外の術式が考えられない程、雫のフィーリングにピッタリとマッチした。

とにかく、楽なのだ。

魔法行使に伴うストレスを、ほとんど感じない。

雫は自分が細かい制御を不得手としている、ということを自覚している。

だから彼女がこれまでＣＡＤエンジニアにリクエストしてきたのは、細かな設定をスムーズに行えるようアシストする機能だった。

ある程度スピードを犠牲にしても、確実に魔法を照準し、確実に威力を制御できることをＣＡＤに求めていた。

スピードは自分の処理能力で補う自信があった。
しかし達也の組み上げた術式は、細かな設定を不必要としたものだった。
短所を補うのではなく、長所を最大限に活かすことをコンセプトとしていた。
零の、高速な連続発動を可能とする処理能力と、大規模な魔法式を構築するキャパシティを、最大限に発揮する為のものだった。
そして今、彼女が手にしているＣＡＤ。
照準補助システムと汎用型ＣＡＤをつないでしまったということにも驚いたが、それ以上に、起動式を処理するスピードに驚かされた。
汎用型は、処理速度において、特化型に劣る。
これは常識というより、構造的な条件だった。
汎用型ＣＡＤと特化型ＣＡＤは、ハードもソフトもアーキテクチャからして異なる。
両者の違いは、専用プロセッサと汎用プロセッサの違い、あるいは専用スパコンと汎用スパコンの違いに似ている。
中枢となる演算装置の性能が同等なら、その処理速度において、汎用型は特化型に決して敵わない。その差は通常、明確に実感できるレベルだ。
それなのに――このＣＡＤは、特化型に劣らぬスピードを発揮している。
（あと五秒）

――標的が飛び込む。
――引き金を引く。
――魔法が発動する。
――標的が砕け散る。

この処理速度は、予選で使った特化型と比べても、ほとんど遜色が無い。
達也はそのカラクリを「二種類の起動式に限定したから」と言っていた。
競技専用だから可能なことで、日常的に使用するＣＡＤには使えない裏技だ、とも。
詳しい理屈は、雫には理解できなかった。
理解する必要は無い、と雫は思っている。
魔法は道具。
ＣＡＤも道具。
道具は使いこなせればいい。
それ以上のことは、専門家に任せておけば良いのだから。
最後の二つは、「能動空中機雷」を使うまでもなく、ループキャストされた収束魔法で砕け散った。
「パーフェクト」
自分の成績を口に出して確認し、雫は勝利の笑みを浮かべた。

◇　◇　◇

正午。

第一高校の天幕は、浮ついた雰囲気に満たされていた。

「すごいじゃない、達也くん！　これは快挙よ！」

背中をバシバシと何度も叩かれ、達也は少し辟易していた。小柄な真由美の腕力はその外見に見合ったもので然して痛くはないのだが、あまりにしつこいので鬱陶しくなって来たのである。

「……会長、落ち着いてください」

アイコンタクトで助けを求められた鈴音が、すぐに真由美を諫めてくれた。

頼りになる先輩である――のだろうが、助けを求められるまで放置している時点で「同じ穴の狢」のような気もする。

「あっ、ごめんごめん」

自分がはしゃぎ過ぎている、と自覚できる程度には冷静さを残していたのか、真由美はすぐに叩くのを止めた。……が、達也を解放するつもりは無いようだった。

「でも、本当にすごい！　一、二、三位を独占するなんて！」

「……優勝したのも準優勝したのも三位に入ったのも全部選手で、俺ではありませんが」

「もちろん北山さんも明智さんも滝川さんもすごいわ！　みんな、よくやってくれました」
生徒会長から満面の笑顔で労われ、スピード・シューティング一年生女子チームは、緊張しながらも嬉しそうに「ありがとうございます」と声を揃えて一礼した。
「しかし同時に、君の功績も確かなものだ。間違いなく快挙だよ」
真由美ほど興奮していないものの、上機嫌な顔で摩利が称賛の環に加わった。
「はぁ、ありがとうございます」
「なんだ、張り合いのない。今回の出場全選手上位独占という快挙に、エンジニアとしての君の腕が大きく貢献しているという点は、我々皆が認識を共有しているところだぞ」
摩利の言葉に、雫たちが真っ先に、大きく頷いた。
「自分でも信じられません」
「何だか急に魔法が上手くなったって錯覚しそうです」
雫ではなく、残る二人のコメントである。
雫は当然とばかりの表情で、うんうんとただ頷いている。
「特に北山さんの魔法については、大学の方から『インデックス』に正式採用するかもしれないとの打診が来ています」
しかし、後に続いた鈴音の言葉に、真由美は目を見開き、摩利は絶句し、雫は硬直した。
インデックスの正式名称は、『国立魔法大学編纂・魔法大全・固有名称インデックス』。

国立魔法大学が作成している魔法の百科事典に収録された魔法の固有名称の一覧表のことであり、ここに採用されるということは、既存魔法の亜種として魔法大全に収録されるのではなく、大学が正式に認めた新種魔法として独立した見出しがつけられるということを意味する。これは魔法の開発に従事する国内の研究者にとって、一つの目標とされている名誉なのである。

しかし――

「そうですか。開発者名の問合せには北山さんの名前を回答しておいてください」

「そんな!?　ダメだよ！」

余り興味無さそうに返した達也に、雫が大慌てで詰め寄った。

「あれは達也さんのオリジナルなのに！」

「……新種魔法の開発者名に最初の使用者が登録されるのはよくある事だぞ？」

暴れ馬でも宥めているような仕草で雫から距離をとりながら、達也はなおも低いテンションで抗弁した。

「フム……謙遜も行き過ぎると嫌味だぞ？」

少し興醒めした表情で摩利にたしなめられると、達也は不本意とばかり頭を振った。

「謙遜ではありません」

「では何だ？」

「俺は、自分の名前が開発者として登録された魔法を、実際には自分で使えないなどという恥

を曝したくないだけです」

確かに、新種魔法の開発者として名前が知られれば、その実演を求められることが多い。自分で開発した魔法なのに「使えません」では、他人が開発した魔法を横取りしたという疑いを掛けられることもあり得る。

達也が忌避するのも、故無き事ではないのだが……

「……自分が使えない魔法を、どうやって作動確認したんだ？」

理論だけで魔法を組み上げることができるとすれば規格外が過ぎるが、仮にそれが可能だったとしても、実際に動作を検証していない魔法を他人に使わせるのはリスクを無視したマッドサイエンティストの行為であり、著しくモラルに反する。

「全く使えないわけではありませんよ。ただ発動するまでに時間がかかり過ぎて、『使える』というレベルじゃないということです」

「まあまあ、摩利も達也くんも、今はそんなことで口論しなくていいじゃない」

達也の受け答えが段々投げ遣りになってきたのを見て、真由美が二人の間に割って入った。

「せっかく幸先の良いスタートを切ったんだし。達也くん、この調子で他の競技も頼むわよ」

笑顔で彼の肩を叩く真由美に向けて、達也は控え目に頭を下げた。

◇　◇　◇

第一高校スピード・シューティング一年生女子チームの成績は、他校でも波紋を呼んでいた。特に「今年こそは覇権奪取」の意気込みで九校戦に乗り込み、女子バトル・ボードの思わぬアクシデントで「気の毒だが、これはチャンス」と盛り上がっていた第三高校では過剰とも見える程の反響があった。

「じゃあ将輝、一高のアレは、彼女たちの個人技能によるものではないってことか？」

二十人――三高新人戦選手の全員――の輪の中で、一条将輝は集まった視線の全てに向けて頷きを返した。

「確かに、優勝した北山って子の魔法力は卓越していた。あれなら優勝するのも納得できる。だが他の二人は、それほど飛び抜けて優れているという感じは受けなかった。魔法力だけなら、二位、三位まで独占されるという結果にはならなかったはずだ」

「それに、バトル・ボードは今のところウチが優位なんだし、一高のレベルが今年の一年だけ特に高いとも思えないよ」

ここまでのバトル・ボードの成績は、三高男子が二名出場していずれも予選突破、女子も二名出場して一名予選突破。これに対して一高は、男子が三名全てレースを終えて一名が予選突

破、女子は一名が出場して予選突破となっている。

「ジョージの言うとおりだ。選手のレベルでは負けていない。とすれば、選手のレベル以外の要因がある」

「一条君、吉祥寺君、それって……何だと思う？」

スピード・シューティングの準決勝、三位決定戦で一高に連敗した女子選手の問いに、将輝と吉祥寺はアイ・コンタクトでお互いの意見が一致していることを確認した。

「エンジニア、だと思う」

回答は吉祥寺の口から告げられた。

「多分、女子のスピード・シューティングについたエンジニアが、相当な凄腕だったんじゃないかな」

「賛成だ。ジョージ、あの優勝選手のデバイス……気がついたか？」

「ウン……あれは、汎用型だったね」

吉祥寺の答えは、彼ら二人以外の、三高の一年生に、大きな衝撃を与えた。

「そんな……だって、照準補助がついていましたよ？」

「そうよ！　小銃形態の汎用型デバイスなんて聞いたことないわ！」

「確かに。どのメーカーのカタログでも、そんなの見たことないぜ？」

一斉に上がった反論に、将輝はますます顔を曇らせた。

「……確かに、市販はされていないだろう。だが、照準補助と汎用型を一体化したデバイスの実例はある」

「マジかよ……」

将輝の言葉に、呆然とした声が上がる。

尚も「信じられない」というニュアンスが強かったが、吉祥寺がダメ押しを口にした。

「去年の夏にデュッセンドルフで発表された新技術だよ」

「去年の夏!?　最新技術じゃねえか！」

「ああ、俺も今回のことで調べ直してみるまで知らなかった」

「一条も知らなかったんじゃ、俺たちが知ってるわけないよな……」

居心地の悪い沈黙が一年生の輪を覆った。驚愕、不安、疑念、そして……畏怖の欠片。

「……吉祥寺君はよく知ってたわね。さすがにあたしたちのブレーンだわ」

その女子選手の言葉は、重苦しい空気を和らげる為のものだった。

だが、吉祥寺はそれに乗ることができなかった。

「うん……でも、デュッセンドルフで公表された試作品は、実用に耐えるレベルじゃなかったはずなんだ。動作は鈍いし、精度は低いし、本当に『ただ繋げただけ』の、技術的な意味しかない実験品だったんだ」

依然として眉を曇らせたまま紡がれた吉祥寺のセリフに、将輝も苦々しい声で応えた。

「しかし今回、一高の北山選手が使ったデバイスは、特化型にも劣らぬ速度と精度と、系統の異なる起動式を処理するという汎用型の長所を兼ね備えたものだった。それが全て、エンジニアの腕で実現しているのだとしたら……到底高校生のレベルじゃない。一種のバケモノだ」

「将輝、お前がそこまで言う相手かよ……」

「一人のエンジニアが全ての競技を担当することは物理的に不可能だけど……」

「そいつが担当する競技は、今後も苦戦を免れないだろう。少なくとも、デバイス面で二、三世代分のハンデを負っていると考えて臨むべきだ」

吉祥寺の推測を引き継いだ将輝の不吉な予言は、チームメイトの間に重苦しい沈黙を招いた。

◇　◇　◇

ライバル校の主力選手から人外扱いを受けた達也は、その様なことなど露ほども知らず（当たり前だ）、少し遅い昼食を済ませた後、女子バトル・ボードのコースに来ていた。

午後に予定されているのは第四レースから第六レース。

ほのかの出走は、第六レース。彼女との約束を守るだけなら、こんなに早く来る必要は無い。

「あっ、司波くん、どうしたんですか？」

深雪と雫を引き連れた達也の姿を見て、あずさはチョコンと首を傾げた。木の実を抱えたリ

スを連想させる小動物的な仕草で、憂鬱な気分に反して、達也は思わず頬を緩めてしまった。
ついつい笑みを浮かべてしまいそうになる唇を意識して引き締めようとするが、きっと緊張感が足りないのだろう。弛緩した口元を繕い切れていない。
「……いまバカにしませんでした？」
「滅相もない。中条先輩の人徳に感心していたところです」
「……やっぱりバカにしていますね？」
半眼で睨み付ける顔も、小さな子供が拗ねているようにしか見えなくて、達也は噴き出すのをこらえる為に目を逸らさなければならなかった。
「……いいです、別に」
しばらくそのまま達也を睨んでいたあずさだったが、やがてため息をつき、自分に言い聞かせるように呟いた。
おそらく彼女にとって、日常的な反応だったのだろう。
その姿にはどことなく、哀愁が漂っていた。
放置するのが後ろめたくなる姿だった。
「――本当に、バカにしてなどいませんよ」
「……本当に？」
「本当に」

「本当に本当ですか？」
「本当です」
疑わしそうに見上げる――身長差の所為で顔を上に向けても上目遣いになっている――あずさに、達也は力強く頷いて見せた。
その無駄に堂々とした態度に、あずさはようやく納得した（誤魔化された？）のか、笑顔を取り戻した。
「分かりました。司波くん、信じてますからね」
あずさがそう言って達也にニッコリ笑いかけた直後、彼の傍らでザワッと気配が揺らいだ。
達也には、目を向けなくても分かる。
深雪の眉がピクッと跳ね上がった様が、彼の脳裏にまじまじと浮かんだ。
（やれやれ……）
今晩はまた妹の機嫌を取らなければならないな、と心の中でため息をつきながら――その事を然程嫌がっていない達也は、精神的に少し病んでいるのかもしれない。
――それはともかくとして。
「それで、どうしたんですか？　光井さんのレースまで、まだ二時間以上ありますよ？」
「居心地が悪くなったので避難させてもらいに来ました」
再度首を傾げたあずさは、達也の隣で深雪が苦笑しているのに気づいた。

「……兄が気にし過ぎなんですよ」

目で問われ、「しょうがないですね」という口調で深雪が答える。

「やる気につながったんだから、結果オーライだと思うよ？」

その反対側で、雫が達也を慰めている。

「あ、ああ、そういうことですか……」

それだけで事情を察したあずさは、中々鋭いと言えるだろう。

雫たちの上位独占は、昼食時も称賛の的になった。

幹部だけでなく、観戦していた本日オフの上級生達も、口々に雫たち三人を褒め称し、そのついで、という感もあったが、達也の功績に言及する者も少なくなかった。

その事に、男子スピード・シューティングチームが異常な対抗心を燃やしたのである。

それ自体は、雫も言っているように、むしろ望ましいことだ。

気合が入って勝利に対する執着心が増せば、空回りにならない限り、プラスに働くだろう。

だが親の仇でも見るような目つきで睨まれる方としては、いい加減にしろよと言いたいところだ。

もっとも、実際にそんなことを口にすれば喧嘩になる。余計なトラブルを回避する為、早めに競技会場へやって来たという経緯だった。

九校戦の会場は国防軍富士演習場の南東エリアに作られている。一エリアとはいえ、元々広

大な富士演習場、各競技会場間を移動するだけでチョッとしたハイキングになるくらいの広さがある。また、その位の面積が無いとバトル・ボードのコースやモノリス・コードの戦闘フィールドは用意できない。

バトル・ボードの競技コースは、曲がりくねった全長三キロメートルの人工水路サーキット。それを男女二本作り、階段状の観戦スタンドも併設するのだからこのコースを作るだけでかなりの土地が必要だ。

会場内の移動の便を考えてか、バトル・ボードのコースは九校戦の為に用意された敷地の端に作られており（他の会場に向かう際、広いコースを迂回せずに済むようにだ）、この近辺で他の競技の選手、例えば現在行われている男子スピード・シューティングの出場メンバーと鉢合わせることは、まず無いと言っていい。

「一旦宿舎に戻ってもよかったんですが、せっかくですから何かお手伝いすることがあれば、と思いまして」

「本当ですか！」

歓声を上げたのは、あずさではない。

どこで聞いていたのか、ほのかが選手用のスペースから突然飛び出してきたのだ。

「じゃあ、是非！　私のＣＡＤも見てください！」

最近はほのかも、達也の影響で「アシスタンス」ではなく「ＣＡＤ」の呼称を使うようにな

っていた。それはともかく、ほのかの飛びつかんばかりの勢いに達也は思わず笑ってしまいそうになった。彼はこみ上げてきた笑いの衝動に逆らい顔を引き締めて、ほのかをたしなめた。

「こら、ほのか。その言い方は中条先輩に失礼だろう？」

ほのかの今の態度、今のセリフは、あずさの腕に不満があると取られても仕方がない。

「えっ、あ、すみません！」

大慌てで頭を下げるほのか。

「気にしないで。そんなつもりじゃないのは分かっていますから」

あずさは苦笑いしながら首を振った。

あずさの口調が微妙にお姉さんっぽい。

今度は笑いの衝動を抑えるのに、結構苦労した達也だった。

バトル・ボードの平均的な競技時間は一レース十五分。

しかし、ボードの上げ下ろしや水路の点検、魔法で損傷した箇所があればその修復など、レースの準備にはその倍以上の時間が掛かる。

そうした要因もあり、余裕時間を織り込んだ結果、バトル・ボードの競技スケジュールは一時間に一レースで組まれている。

最終レースの開始は午後三時半。選手は既に、スタート位置に移動している。

長すぎる待機時間にテンションの調整が上手く行かず、実力を発揮できないまま終わってしまうということもあり得るのだが（実際に毎年、本戦男女、新人戦男女のいずれかでそういう例がある）、深雪や雫と井戸端会議に興じていたのがプラスに働いたのか、ボード上のほのかの様子を見たところ、上手い具合にコンセントレーションを高めている。

達也に纏わりつくほのかの姿に段々と機嫌の勾配を傾けていった深雪が、ほのかを兄から引き離すようにしてどうでもいいような雑談に引きずり込んだ、という次第なのだが、結果的に良い気分転換になったようだ。

手首、足首まで覆うウェットスーツと厚手のスイムシューズは、落下や激突の摩擦と衝撃から選手の身体を守る為の物。だが圧迫気味に全身へ貼り付くユニフォームは、選手の身体のラインを実際以上に（？）メリハリのあるものとして見せている。

太腿には中抜き文字で大きく「ＩＣＨＩＫＯ」のロゴ。高校一年生とは思えぬ刺激的なプロポーションをカラフルなウェットスーツに浮かび上がらせ、ボードに片膝をつくスタイルで、ほのかはスタートを待っている。

ＣＡＤは前腕部を覆う、幅を広くし厚みを薄くしているタイプで、面積が増えた分だけ操作用のボタンも大きくなっている物だ。

最初に断ったとおり、達也はほのかのＣＡＤに手を加えていない。

一応システムをのぞいてはみたが、どうしても直さなければならないような箇所は無かった。

あずさとほのかの二人からアドバイスを請われて、達也が口を出したのは一点。

ほのかが着けている、濃い色のゴーグルは、彼が持って来た物だ。

確かに随分西へ傾いて来た真夏の日差しは、直接向き合うと邪魔に感じる程度には眩しい。

しかしグラス面に付着した水飛沫が視界を遮るのを嫌って、ゴーグルやサングラスの類を使用する選手はほとんどいない。

あずさには視界を狭めるデメリットしかないように感じられたが、ほのかは迷わず達也の持って来たゴーグルを着用した。

「……そういえば光井さんは何故、光学系の起動式をあんなに沢山準備してるんでしょう？」

エンジニアが起動式の種類にまで口を出すのは稀なこと。

起動式のラインナップまで自分で決めてしまう達也は例外で、普通エンジニアは、選手の希望したとおりに起動式をＣＡＤへインストールする。

ほのかが光波振動系の幻影魔法を得意としていることは、あずさも選手プロフィールから知っていたが、この競技の性質上、幻影魔法の出番は無いのではないか、というのがあずさの正直な感想だった。

「バトル・ボードのルールでは、他の選手に魔法で干渉することは禁じられています。しかし、水面に干渉した結果、他の選手の妨害となることは禁止されていません」

「……どういうことでしょう？」

あずさに重ねて問われた達也は、人の悪い笑顔を返したのみだった。

新人戦女子バトル・ボード、予選第六レースのスタートが切られた。

その、直後。

観客は反射的に、ほぼ揃って、水路から目を背けた。まるでフラッシュでも焚いた様に、水面が眩く発光したのだ。

選手が一人、落水した。

他の選手がバランスを崩し加速を中断する中、一人ダッシュを決めた選手が先頭へ躍り出た。

この事態を予期していたかの如く——と言うかこの状況を作り出した張本人なのだが——濃い色のゴーグルを着けた選手、つまりほのかだ。

「よし」

してやったり、と声を上げた達也の横顔を、あずさは呆気に取られて見上げていた。

「……これがお兄様の作戦ですか？」

サングラスを外しながら問い掛ける深雪の声も、さすがに呆れ声だった。（ちなみにサングラスは、スタート前に達也から三人に配られていた物だ。深雪たちは訳が分からぬまま、達也の指示に従って掛けているだけだった）

「確かに、ルールには違反していないけど……」

雫の声も、幾分非難混じり。

これはフェアプレーの精神に反していると言われても仕方が無い、と感じているのだろう。

しかし、著しくアンフェアなプレーがあった場合に示されるイエローフラッグ、競技中断の旗は振られていない。ルール違反選手の失格を示すレッドフラッグは言うまでも無い。

大会委員は、ほのかの魔法を、達也の作戦を合法と認めた、ということだ。

「……水面に光学系魔法を仕掛けるなんて、思ってもみませんでした」

どこまでも素直な性格なのか、あずさが感嘆と共に呟いた。

「水面に干渉と言われると、波を起こしたりとか渦を作ったりとか、水面の挙動にばかり意識が向きがちですが、ルールで許可されているのはあくまでも『魔法で水面に干渉して他の選手を妨害すること』ですからね。水面を沸騰させるとか全面的に凍結させるとかはさすがに危険すぎますけど、目眩まし程度のことは今まで使われなかった方が不思議だと、俺は思っていますが」

何の心構えも無く目潰しを喰らわされて、すぐに視力を回復できるものでもない。

緩やかにではあっても蛇行しているコースは、視界を塞がれた状態で全力疾走できるものでもなく、ほのかと他の選手の間には既に決定的とも言えるだけの差がついていた。

◇　◇　◇

「……決まりだな」
「……誰が考えたの、この作戦？」
モニター越しに見ていた真由美たちは、モニターの方で光量の調節が行われたので眩しい思いをせずに済んだが、それだけに作戦の独創性を冷静に評価し、驚きを覚えていた。（冷静に驚く、というのも奇妙な表現ではあるのだが）
摩利の呟きに続いて発せられた真由美の問い掛けに答えたのは鈴音だった。
「司波君ですが」
「えっ、でも達也くんは、この競技を担当していないはずだけど」
その答えを聞いて、真由美が「あれっ？」という感じで首を捻る。
それに対する鈴音の回答は、少し丁寧すぎるものだったかもしれない。
「作戦の具申は光井さん本人からです。しかし起動式のラインナップを含めて作戦プランを作ったのは司波君だと、その際に言っていました」
わざわざ「起動式のラインナップを含めて」とまで言い添えたのは、鈴音自身にこれが異例なことだという認識があるからだろう。

「……次から次へとやってくれるな」

摩利の口調からは、舌打ちが聞こえてきそうだった。

「どうしたの？　何か不機嫌みたいだけど」

真由美の問い掛けに、摩利は答えなかった。

もっとも、その沈黙自体が、摩利の内心を雄弁に物語るものではあったが。

「……工夫って大事よねぇ。老師の仰るとおりだわ」

真由美の見たところ、摩利は自分が思いつかなかった作戦を見せられて不機嫌になっているのだ。多彩なテクニックを売りにしている摩利にとって、面白いことではないのだろう。

「過去九年、誰も思いつかなかった作戦ですから、ここは素直に感心すべき所かと」

「……感心しているさ。だから癪に障るんじゃないか」

鈴音にズバッと斬り込まれて、渋々、嫉妬していることを摩利は認めた。

認められるだけの度量があるから、鈴音もあえてツッコんだのだが。

「でも、これって一回限りの作戦じゃないかしら？　決勝トーナメントはどうするのかな？」

摩利に対するフォロー、でもないだろうが、真由美がそんな疑問を口にする。

しかし、

「心配は要らんだろ。あの男がそこを考えていないはずはない」

「そうですね。これは次の試合の布石でもあります」

それはどうやら、杞憂のようだった。

◇　◇　◇

「うーん……これは、ほのかに悪いことをしたかな」

最初の奇策で稼いだリードを最後まで守りきってゴールしたほのかを見て、達也は少し苦い声で呟いた。彼の隣では、深雪が眉目を曇らせて兄の顔を見上げている。

「……どうしたんですか？」

二人の様子に、何となく他人に聞かれるのが憚られる様な気がして、あずさは達也に、声をひそめて問い掛けた。

「あ、いえ……」

返って来たのは歯切れの悪い、言い訳の為の枕詞。

それでもそのまま黙殺するようなことは無かった。

「このレースは単純なスピードだけでも勝てたようですから……目眩ましなんて必要なかったかな、と」

「はあ……でも、最初の眩惑魔法でリードを奪えたのですから、作戦として成功しているのでは？」

達也たちが何を案じているのか分からないあずさは、再度首を捻った。
「ああいう目立つことをすると、他の選手からマークされるんですよね……」
「準決勝は三人一組のレースですから……次の試合で、一対二の戦いになってしまうおそれがありますね」
達也の言葉を深雪が補完する。
それでようやく、あずさは彼らが何を心配しているのか理解した。
「何だ、そんなことですか」
そして達也たちの心配をあっけらかんと笑い飛ばした。
「そんなことって……かなり不利だと思いますが？」
控え目に反論した深雪に向けて、あずさは朗らかに頭を振った。
「そんなこと無くたって、ウチは最初っからマークされてますよ」
「はぁ……」
あまりにも朗らかに言い切ったので、達也は一瞬、あずさが自慢しているのかと勘違いしてしまった。
――まあ、一瞬だけのことだったが。
いくら鈍感といっても、慰められているのだ、ということが分からない程、鈍くは無かった。

◇　◇　◇

「勝ちました！　勝ちましたよ、達也さん！」

水路から上がるや否や、ウェットスーツのまま着替えもせず達也の所へ駆け寄って勝利を報告するほのかは、今にもピョンピョンと飛び跳ねそうな勢いだった。

「あ、ああ、見てたよ。おめでとう」

チームメイトばかりか他校のスタッフの視線まで集めている気がして、達也は祝福を送りながら両手を前に出して押し止めるような仕草で、ほのかを落ち着かせようとした。

しかし、それは逆効果だった。

「ありがとうございます！」

どんな風に勘違いしたのか、ほのかは目の前に差し出された達也の両手をガッシリと握り締めて、うるうると今にも嬉し涙を零しそうな潤んだ瞳で彼の顔を見詰めだしたのだ。

深雪でもここまでストレートな感情表現を示すことはあまり無い。

この方面における経験値の絶対的な不足から棒立ちとなってしまった達也を前に、ほのかは本当に泣き出してしまった。

「私、いつも本番に弱くて……運動会とか対抗戦とかこういう競技会で勝てたことってほとん

ど無いんです」

初耳だった。もし本当なら、新人戦の戦略上ひどい誤算につながりかねないところだ。

だが、途方に暮れ右に左にさまよい始めた達也の目に、ほのかの背後で指を揃えた掌をヒラヒラと左右に振っている雫の姿が飛び込んで来た。

その姿はあたかも、「ソンナコトナイナイ」とツッコんでいるかの如し。

ほのかに両手を委ねたまま、雫へ視線を固定すると、彼女は達也へ向けて口だけ動かし始めた。その唇の動きは「しょ・う・がっ・こ・う・の・こ・ろ・の・は・な・し・だ・よ」と読み取れた。

（小学校の頃の話、ねぇ……）

天を仰いで嘆息する達也。

「予選を突破できたのは、達也さんのお陰です！」

嘘をついているつもりはないのだろうが……少し思い込みが激し過ぎないだろうか。

深雪から向けられた氷柱の視線（氷の、と表現するには、先端が鋭く尖っていたのだ）にもめげず、ほのかが落ち着きを取り戻すには暫しの時間が必要だった。

◇　◇　◇

運動競技でも盤面遊戯でもヤル気が無ければ勝利はおぼつかない。
それは魔法競技でも同じ。
チームメイトの活躍を見て「今度は自分が」と意気込むことは、ヤル気を生み出す基本的なシステムで、それゆえ勝利は士気を高める特効薬とされている、のだが。
時として、「ヤル気」は「気負い」につながり、「気負い」は容易に「空回り」へと直結する。
彼女たちの目の前に、その実例があった。
「森崎くんが準優勝したけど……」
失望をオブラートに包んだ真由美の言葉に、
「あとの二人は予選落ち、か……」
失望を露わにした摩利のセリフが続いた。
新人戦一日目が終了し、ミーティングルームに集まった一高の幹部三年生は、男子スピード・シューティングの順位表を前に、そろってため息をついた。
「男子と女子で逆の成績になっちゃったわね……」
「そうとも言えません。三高は一位と四位ですから、女子で稼いだ貯金がまだ効いています。あまり悲観し過ぎるのもどうかと」
真由美の弱気な発言を、鈴音の冷静な分析が打ち消した。とはいえ、沈滞ムードを拭い去るには力不足だった

「……そうだな。市原の言う通り、悲観的になりすぎるのも良くない。元々、女子の成績ができ過ぎだったんだ。今日のところはリードを奪ったことで良しとしなければ」

「しかし、男子の不振は『早撃ち』だけではない。『波乗り』でも予選通過女子二名に対して、男子一名だ」

自分自身に言い聞かせるような口調だった摩利の発言に対し、克人が険しい表情で異を唱えた。（ちなみに「早撃ち」はスピード・シューティング、「波乗り」はバトル・ボードの通称）

「このままズルズルと不振が続くようでは、今年は良くとも来年以降に差し障りがあるかもしれん」

「それは、負け癖が付くということか？」

「そのおそれがあるだろう」

克人の指摘に、摩利も真由美も苦い顔で黙り込んだ。

魔法科高校のリーダーを自認し、常勝を自らに課している一高の幹部としては、「今年さえ良ければ」という安逸に甘んじることはできなかった。

「男子の方は、梃入れが必要かも知れんな」

「しかし十文字、梃入れと言っても今更何ができる？」

苦い声で呟いた克人に対する、摩利の反論。

確かに「今更」だ。

既に新人戦は始まっている。今からでは選手もスタッフも入れ替えることはできない。
視線で回答を促されても、克人の再反論は無かった。
ただそのたたずまいは、答えに窮したと言うより、何か腹案があって今はあえて黙っているという印象をもたらすものだった。

◇　◇　◇

いよいよ明日は、いや、既に「今日」は、深雪の出番だ。
例の、風間から警告があった犯罪組織が関っていると思しき妨害工作は、摩利の一件以来動きが無いが、達也としては気を抜くことはできない。
彼の推測が正しければ、「敵」がＣＡＤに細工を仕掛けるタイミングは競技の直前。
夜の内に妨害工作を受ける可能性は低いと見ているが、念を入れるに越したことはない。
相手は彼に手の内を読ませない、高いスキルを持っているのだ。
最終調整を終えたＣＡＤをシステム的に厳重ロックし、更に保管庫へ入れて三重に施錠し、達也はようやく作業車両を後にした。
人影はない。
人の気配も、人間以外の気配も感じられない。

敵にとっても、こちらの警戒は予想以上なのだろう。

風間やその配下、独立魔装大隊の精鋭が密かに協力してくれているのだから、例えその企てがあったとしても、直接的な攻撃はこちらに届かないと考えて良い。

達也は不必要にうろつき回ることなく、ホテルの通用口を通って（無論、バイオメトリクス認証が用いられている）、自分の部屋へ戻った。

部屋の中へ入る前に、扉の前で気づいた。

彼のルームメイトは息をせぬ機材。

故にこの真夜中、日付が変わって時計の長針がそろそろ一回りしようとしている深更、彼が廊下にいる以上、中から人の気配が漏れてくるはずはない——のだが、達也は迷わずキーを開けて中に入った。

「こら、何時だと思っているんだ」

いつもと違う、少し厳しい声で、先手を打って叱りつける。

いつもと違って、笑って済ませることができない背景があるのだ。

いつもと違っている、そのことを、叱責を受けた方も感じ取ったのだろう。

ビクッと肩を震わせ、浅く腰掛けていたベッドから慌てて立ち上がり、深雪は恐る恐る、兄の顔色を窺った。

「睡眠不足は集中力を低下させる。いくらお前でも、思わぬミスが敗北につながらないとも限

らないんだぞ」

「申し訳ありません！」

本気の顔で達也に叱られて、深雪は泣きそうな声で深々と頭を下げた。妹のこんな声を聞くと、こんな姿を見ると、達也にはもう、厳しい態度をとり続けることは不可能だ。

「……分かれば良いんだ。さあ、もう部屋へお帰り。送っていくから」

和らげられた声に力を得たのか、顔を上げた深雪は、眼差しで兄の言いつけを拒んだ。

「深雪？」

「……お兄様、少しだけ、本当に少しだけ、お時間をいただけませんか？」

「……少しだけだよ」

意地の張り合いは時間の浪費にしかならない。

経験でそれを知っている達也は、消極的な肯定で妹に先を促した。

「雫に聞きました。お兄様、『インデックス』にお名前を連ねる名誉を、断られたそうですね」

「正式に、ではないがな」

「正式のお話があっても、お断りになるおつもりでしょう？」

「ああ」

短く首肯した達也を前にして、深雪は、何かに耐えるように、唇を噛んで、暫し、立ちつくした。

「……それは、叔母上のご意向を酌んでのことですか？」

「ああ」

短い、即答。

深雪は、泣き出すのをこらえているような顔で、俯いた。

「魔法大学の調査力は極めて高い。ニュースサイトという名のゴシップサイトを運営している、そこらの報道機関など比べものにならない。あるいは軍の諜報機関に匹敵するかもしれない。新魔法の開発者には大学の資料を利用する上で様々な特権が与えられる関係で、その身元を詳細に調べ上げられる。敵性国家群のスパイや、テロ組織を排除する為にね。高校の入学審査とは桁が違う調査だ。四葉が念入りに情報をブロックしている『シルバー』ならともかく、『司波達也』では四葉とのつながりを暴き出される可能性が低くない」

泣き出しそうな顔をしている妹を前に、慰めるには少し冷たい声で、達也は理由を語った。

それは、妹を泣かせてしまうことになっても妥協できないことだからでもあったし、同時に自分を説得する必要もあったからだ。

「……」

深雪は俯いたまま、何も言わない。

泣き声が聞こえてこないことに、達也は微かな安堵を覚えていた。

「確かに、九校戦に出るだけでも、身元が調べられてしまうリスクはゼロじゃない。しかし、

魔法大全に名を残すとなれば、高校の競技会で活躍するのとは訳が違う。四葉の『ガーディアン』はあくまでも日陰の存在。日陰者が脚光を浴びるのを、あの叔母上が容認すると思うかい？」

深雪は何も答えない。気休めすらも、口にできない。

それが、彼の問い掛けに対する彼女の答えだった。

「今はまだ、力が足りない。一対一なら、『夜の女王』四葉真夜を倒すことも可能だろう。俺の『分解』は叔母上の『夜』に対して相性の良い魔法だからね。

しかし今の俺では、叔母上を倒すことはできても、四葉を屈服させることはできない。武力だけでは、暴力だけでは、不十分だ。叔母上を退けても、別の、もっと性質の悪い操り手が姿を見せるだけだ。今は、従うしかない」

妹に言い聞かせるセリフ、というより、自分に言い聞かせる為のセリフ。

そうやって自分を納得させた達也に、

深雪が、正面から、抱きついた。

彼の胸に、泣き出しそうな顔を埋める。

その姿は「しがみついた」と表現する方が相応しくも見えた。

「……わたしは味方ですから」
「深雪……」
「わたしはいつまでもお兄様の味方ですから。
その時はきっと、やって来ます。必ず、やって来ます。
その時まで、その後も、わたしはずっと、お兄様の味方ですから」
「……」
時計の針は「少しだけ」を大幅に超過している。
だが「もう少しだけ」妹の好きにさせてやろう……深雪の背中に優しく手を回して、達也はそう、思った。

［9］

九校戦五日目、新人戦二日目の朝。

達也は準備中の、新人戦アイス・ピラーズ・ブレイク競技場前に来ていた。

野戦工作用の特殊車両が大型の機械アームで一メートル×一メートル×二メートルの氷の柱を等間隔に並べていく。こういう光景を間近に見ると、前世紀のロボットアニメが現実のものとなる日もそんなに遠いことではないという気になってくる。

「……効率性を無視すれば、だけどね」

「お兄様？　何のことでしょうか？」

馬鹿げた空想を否定する為の言葉が、つい独り言になって漏れていたらしい。

「いや、何でもないんだ」

意味の無い回答に対する再度の質問は無かった。

「そろそろ行こうか」

「はい」

元々試合に向かう途中で少し足を止めただけのこと。

達也は深雪を促して、「櫓」の根元に隣接する控え室へと向かった。

◇◇◇

今日最初の試合となる一回戦第一試合の開始まで、まだ三十分以上ある。
達也は十分に余裕を持って会場入りした、
「おはようございます！」
……はずだったのだが、そこには既に、第一試合の出場選手が来ていた。
「おはよう……ごめん、待たせてしまって」
「いえいえ、私が早すぎたんですから」
女子ピラーズ・ブレイク第一試合の選手、明智英美は笑顔で首を振って、顔に掛かった、ルビーのような光沢の赤い髪を、片手でかき上げた。
「おはよう、エイミィ。早いわね？」
「おはよう、深雪。目覚まし鳴る前に目が覚めちゃって。昨日の興奮が抜けてないみたい」
彼女のもう一つの名前はアメリア＝ゴールディ。フルネームで英美＝アメリア＝ゴールディ＝明智。英美はイングランド系のクォーターであり、「エイミィ」という愛称は、「英美」という日本名よりむしろ、「アメリア」という英国名に由来している。
魔法師としての能力は遺伝的素質に大きく左右される。

魔法が国力と強く結びつくにつれて、各国は魔法師の血を囲い込み、公然あるいは非公然と魔法師の国際結婚を禁止するようになった（表向き婚姻の自由を標榜するこの国では「非公然」である）。

しかし達也たちの祖父母の世代では、「優秀な血」の「交配」によって、より優れた魔法師を「開発」するという目的から、同盟国間で魔法師の国際結婚が奨励された時代がある。

その結果、魔法科高校には全高校の平均を上回る比率で、西欧系及びインド系の血統を持つ生徒が在籍している。

レオもその一人。そしてこの明智英美という女子生徒もその内の一人だ。

本人のセリフからも分かるとおり、彼女は昨日のスピード・シューティングにも出場しており、達也と組むのも二日連続。深雪たち三人を除けば女子チームの中で最も早く達也に打ち解けたのは彼女であり、達也にとっても気分的に楽な相手だった。

女性陣二人があいさつ代わりの軽口を交換する傍らで、達也は手に提げて来たケースからテキパキとCADを取り出し、ざっと外回りをチェックしてから英美に手渡した。

少女の手には不似合いな、全長五十センチの無骨なショットガン形態・特化型CAD。

反動を考慮しなくて良い分、実弾銃に比べ大幅に素材の軽量化が図られているとはいえ、拳銃形態の物に比べれば見た目に応じた重量を有するそれを、英美はウェスタンムービーよろしくクルクルと振り回し、窓の外へ向けてピタリと構えを取った。

「……エイミィ、貴女本当は、イングランド系じゃなくてステイツ系でしょう？」
「違うって何度も言ってるのに、深雪までそんなこと言うの？　グラン・マの実家はテューダー朝以来『サー』の称号を許されているんですからね」
口にした内容に反して、口調は気さくそのものだ。
そのままのポーズでＣＡＤに想子を流す。何時の間にセイフティを解除したのか、森崎のクイック・ドロウとはまた別の意味で、鮮やかなＣＡＤアクションである。
「どうかな？」
「うーん……雫の気持ちが分かりますねぇ」
大富豪・北山家の令嬢が達也を「お抱え」にしようとアプローチしていることは、一年女子チームの間に知れ渡っている。
「問題ない？」
「ええ、バッチリです」
構えを解いてニコッと笑う英美。
ルビーの色の髪とモスグリーンの瞳以外は、日本人の血が色濃く表れている彼女の外見は、同級生よりむしろ子供っぽい印象がある。今の笑みも「ニコッ」というよりむしろ、「にぱっ」という効果音をつけたくなるような無邪気なものだった。
「自分じゃ気づかないのか……」

その笑みは達也の独り言に首を傾げている間も消え去ることは無かった。何を言われたのか分からなかった、というのが主な理由ではあるが。

「少し調整するよ。ヘッドセットをつけてくれないか？」

「えっ、何故です？」

「エイミィ……実は早起きしたんじゃなくて、昨日あまり眠れてないんだろう？」

しかしこの思わぬ指摘には、さすがに笑っていられなかったようだ。

「……分かります？」

目を丸めた質問に達也は無言で頷きを返し、英美の手からＣＡＤを受け取って調整機にセットした。

「……ウチの親より鋭いかも」

素直に測定用のヘッドセットを着けた英美は、「まいったなぁ」と言いたげな口調でそう呟きながら、センサーパッドに両手を置いた。

計測数値が次々と並ぶディスプレイを前に、達也の表情が段々険しいものになっていく。

そして達也の表情の変化と共に、英美の身体が徐々に縮こまっている様に、深雪には見えた。

「あの、お兄様？」

深雪は何も具体的なことは言わなかったが、達也はその声にハッと顔を上げて、愛想笑いしながら眉間を指で揉み解した。

「もしかしてエイミィも、安眠導入機を使わない人かい？」
「もっ、て、司波くんも？」
英美の反問に、幾分和らいだ表情で達也が頷く。
「ワァオ、お仲間。あれって何か、気持ち悪いじゃないですか。妙なウェーブが出てて」
「一応健康に害は無いことになっているけど……気持ち悪いのは同感だ。だけどどうしても眠れない時はまた別の話だよ。特に、次の日に試合を控えているような場合は」
「は～い」
親に叱られている子供のような英美の返事に、達也は苦笑するしかなかった。
「じゃあ、フィードバックを少し強めにしておくから……刺激が強いように感じるかもしれないけど、我慢すること。寝不足で負けたなんて言われたくないだろ？」
「我慢するからお願いします！　そんなことになったら、みんなのオモチャにされちゃうよ」
セリフだけなら大した意味は無かったが、そう言いながら顔を赤らめてキュロット（乗馬用ズボン）の上から微妙な辺りを手で押さえたりしているものだから、達也はたっぷり一秒間、固まってしまった。
「疑うようなことは言いたくないが、深雪……お前たちは部屋で何をしているんだ？」
「い、嫌ですね、お兄様、深雪は何もやましいことなどしておりませんよ！」
「そっか～、深雪の部屋は安全地帯なのね」



「エイミィ！　お兄様の前で変な事を言わないで！」
居心地の悪い沈黙が室内を覆う。これを打ち破る為には、唐突な話題転換もやむを得ない、と誰に対する言い訳か定かでないことを達也は心の中で呟いた。
「……幸い競技は朝一番だし、試合が終わったら二回戦まで仮眠を取ること。深雪、悪いけど、『カプセル』が使えるように手配してきてくれないか」
「分かりました。すぐに戻って参りますので」
感覚遮断カプセル（完全防音、防振、遮光の閉鎖型ベッド）を借りる為の手続きに深雪を送り出して、達也はＣＡＤの微調整を始めた。

◇　◇　◇

第一試合はいささかドーピング気味ではあったが、自陣残り三本で何とか勝ち抜いた。
ちなみにその反動で、英美は今、「暗いよ～」とか「狭いよ～」とかごねる暇も無く熟睡に近い眠りについている。
そして第五試合、一高女子にとっては二試合目が始まる前の控え室。
（同じようなことをつい最近、口にした記憶があるぞ）
達也はそう思いながら、やはり、そう言うのをやめられなかった。

「雫……本当にその格好で出るのか？」

「そうだけど？」

何かおかしい？　という表情で問い返されて、達也は頭を抱えたくなった。

ピラーズ・ブレイクは高さ四メートルの櫓の上から十二メートル四方の自陣に配置された氷柱十二本を守りながら、十二メートル四方の敵陣の氷柱十二本を先に倒す、あるいは破壊するという競技である。

選手は純粋に遠隔魔法のみで競い、肉体を使う必要は全く無い。

これはつまり、この競技に選手の服装は一切影響しないということだ。（ＣＡＤを構えるのに邪魔になる、とかいう服装は論外だが）

ルール上も服装に対する規制は唯一つ、「公序良俗に反しないこと」。

その結果、必然的に――とは思いたくないが、何時の頃からか女子のピラーズ・ブレイクはファッション・ショーの様相を呈していた。

ちなみに二日目と三日目の本戦に出場した花音は、私服とほとんど変わらないスポーツウェア。丈の短いスパッツと、それがスッポリ隠れてまるでミニワンピのように見えるシャツと、太ももまであるサイハイソックスにスニーカーだった。

英美は白のハイネックシャツに赤いライディングジャケット、白い細身のキュロットに黒のロングブーツ、同じく黒のホースキャップという乗馬服スタイル。

しかしまあ、ここまでは良くあるコスチュームで、それほど派手な部類でもない。
だが、雫の衣装は……
「なあ、雫……」
「なに？」
「その振袖……邪魔にならないか？」
そう。問答無用で「振袖」だった。
「大丈夫だよ。袖は小さめだし、襷を使うから」
そう言って、達也の見ている前で器用に襷を掛ける雫。
その淀みの無い仕草を見ていると、彼女が和装に慣れているということが分かる。
しかし――
（襷で袂を押さえなきゃならんのなら、最初から振袖は止めた方がいいんじゃないか？）
やはり達也は心の中で、そうツッコまずにはいられなかった。

試合前にそうそう余分な時間が取れるはずも無く、達也はすぐに説得を諦めた。――気合を入れる為に「正装」したのだ、と言われれば、引っ込むしかなかったのである。
雫が選択した――というか、達也が彼女に持たせたＣＡＤは汎用型。
これは攻守にバランス良く力を配分した戦術を取ることを意味している。

達也も奇策ばかり使うわけではない。と言うか、達也本人には「奇策」を弄しているという意識はないのだ。

彼としては、プレーヤーにとって最適の道具と、それを活かす作戦を提供しているだけなのだ。故に正攻法が最も効果的な場合は迷わず正攻法を採用する。

今回がそれだった。

雫がステージに姿を見せると、その奇抜なスタイル故か、観客席がどよめいた。

しかし本人はどこ吹く風とばかり平気な顔で、欅によって露わになった左腕を胸の前に持ち上げた。

雫のCADは普段使っているものと同じく、コンソールが腕の内側を向いているタイプ。

最近では女性魔法師もコンソールが外向きのタイプを主流としている中で、フェミニンなコンソール内向きタイプを愛用しているのは、さすがにお嬢様と言うべきか。普段の無口無表情から時折容赦のないツッコミを繰り出している姿からは、正直違和感を覚えるが。

そんな、本人に聞かれたら無言で殴られそうな感想を頭の片隅に懐きながら、達也もモニター機器のピントを合わせた。

これからの時間は、

フィールドに集中するのが、雫の役目。

その彼女に集中するのが、達也の役目だ。

◇　◇　◇

「深雪……達也さんの所に行かないの？」

一般観客席ではなく、選手・スタッフ用の観戦席で試合開始を待っている深雪に、隣からほのかが問い掛けた。

一回戦の英美の試合でも、達也がモニター室に上がる直前、深雪は彼と別れている。

同じ学校の選手なら、モニター室から応援してもおかしくはないのだが――

「ピラーズ・ブレイクは個人戦ですもの。わたしと雫はいずれ対戦することになるのだから、手の内を盗み見るのはアンフェアでしょう？」

手の内ならば、練習中にいくらでも見る機会があったはずだ。第一高校といえど、この競技の練習に使える大規模施設をいくつも持っているわけではないのだから。

だから深雪が本当に言いたいのは、別のことだ。

いずれ自分と対戦する選手のサポートに、達也が余計なことに気を取られないように、という配慮なのだろう。

また雫が、彼女の存在に気を取られないように、という配慮でもあるのだろう。

ほのかと雫は小学校時代からの親友でありライバルだ。中学時代まで、ほのかにとっての最

高の好敵手は雫であり、雫にとっての最高の好敵手はほのかだった。

二人に比肩し得る魔法の才能を持つ子供は、彼女たちのコミュニティに存在しなかった。

高校に入って、本格的に魔法を学ぶことになって、お互い以外の切磋琢磨するライバルが得られることを、ほのかも雫も望んでいた。だが同時に、自分たち以上の才能には巡り会えないのではないかという思いも彼女たちの心の片隅に棲みついていた。

同じ学校、同じ塾に十師族の子供はいなかったが、「数字付き」の百家の子弟とは何人か知り合った。その中にも、好敵手と呼べる同級生はいなかった。

しかし、そんな彼女たちの「思い上がり」は、高校の入学試験で、粉々に打ち砕かれた。

今、隣にいる、この美し過ぎる少女によって。

定期試験におけるほのかの実技成績は、深雪、雫、森崎に続いて四番目だが、ほのかとしては、雫はともかく森崎に劣っているという意識はない。

高校最初の定期試験の課題になったのは十工程の単純な術式だった。（十工程の術式を「単純」と言えるのは、ほのかの才能あってのことだが）

処理に負荷が掛からなかった分、単純なスピードで森崎に後れを取っただけで、もっと工程数の多い複雑な術式ならば自分の方が明らかに上だと、ほのかは考えている。

しかし深雪は、「別格」だった。

嫉妬することすらもバカバカしくなるほどの、圧倒的な才能、そして実力。

彼女が十師族直系と言われても、自分は素直に信じるだろう。
むしろそれが当然と思うだろう。
――入学試験の会場で、深雪の魔法を最初に見たとき、ほのかはそう思った。
ほのかは、それと知らず真実に到達していたわけだが、それ程に深雪の魔法は衝撃的で圧倒的だった。
その印象は入学してから四ヶ月、一向に薄れることはなく、逆に、ますます強まっている。
いくらマイペースな雫でも、間近に深雪の存在を感じていつもどおりの魔法は使えないだろうな、とほのかは思う。
深雪が新人戦ミラージ・バットの出場を取りやめ本戦のミラージに回ると聞いて、直接対戦することが無くなったと分かって、自分は思わず胸を撫で下ろしたくらいなのだから。
入学試験の時のことを思い出して、連鎖的に、ほのかは「彼」を初めて見た時のことも思い出していた。
ほのかが達也を意識したきっかけは、実は、あのオリエンテーションの日のトラブルではなかった。エリカたちを相手に校則違反の魔法攻撃を仕掛けて風紀委員長に捕まるところだったのを達也に救われた、あの事件より前に、ほのかは彼と会っている。
入学試験の日、深雪だけでなく、達也もたまたま、ほのかと同じ試験グループだった。
この兄妹の外見はそれ程、似ていない。

全員の名前を記憶する程、ほのかにも余裕は無かった。
だから達也に目を留めたのは、深雪の兄だから、ではない。
実技の結果は平凡なものだった。
スピードも、威力も、規模も、いずれも見るべき所は無く、平均よりむしろ下。
だが、彼の魔法は、美しかった。
ほのかは達也のように、魔法式を解析できるわけではない。
美月のように、想子や霊子に対する特別鋭敏な感覚を持っているわけでもない。
ただ光波振動系統を得意とするほのかは、一般の魔法師に比べて、魔法行使の副作用で生じる光波のノイズに敏感だった。
余分な干渉力、魔法式の無駄が空間を震わせ、光子がそれに反応して生じる光波のノイズ。
そのノイズが、彼の魔法からは全く感じられなかったのだ。
その意味するところは、一切の無駄がない魔法式。魔法力を全て事象改変に使い切った、計算され尽くした精緻な魔法。
それをほのかは、美しいと思った。
今までに見たことのない、美しい魔法だと感じた。
その後、深雪の圧倒的な魔法を見せられてもなお、忘れられない程に。
だからオリエンテーションのあの日、左胸に八枚花弁のエンブレムをつけていない達也を見

て、ほのかは**裏切られた**、と感じた。
あの日、**ほのかが達也**たちに過剰な敵意を懐いてしまったのは、その所為だった。

――何故**貴方はそちら**（二科生）側にいるのか!?

――何故貴方はこちら（一科生）側にいないのか!?

そういう理不尽な怒りにほのかは囚われてしまったのだ。
確かにスピードも威力も規模も、（一科生としての）合格ラインには程遠かった。
でも、あれほど美しい魔法を編み上げる「彼」が「補欠」に甘んじているなど、許し難い背信に思えたのだ。

「……ほのか、どうしたの？」

ハッと顔を横へ向けると、不思議そうに――不審そうに、深雪が自分を見ていた。
会話の途中で考え事に耽ってしまった自分のことを、変に思ったのだろう。

「ご、ゴメン、何でもない」

そんなことをされれば、自分でも訝しむ。今の自分の行いと、あの時の自分の「逆ギレ」と、それが「彼」のことを意識していた所為だったという三重の理由で、ほのかは赤面して俯いた。

◇　◇　◇

「いよいよ北山の出番か」

「今度は普通のＣＡＤみたいね」

本部のモニターの前でまたしても、女子の幹部二人が雁首を揃えているのを見て、次々と舞い込んでくる試合結果のまとめ上げに忙しい鈴音はため息をついた。

だがこれ見よがしな不満の表明にも、二人は全く動こうとしなかった。

「今度はどんな奇策を見せてくれるのかしら？」

「いや、分からんぞ？　そう思ってるあたしたちの裏をかいて、正攻法で来るかも知れん」

真由美と摩利は、お気に入りのビデオプログラムに群がる子供のような目でアイス・ピラーズ・ブレイクの試合会場が映し出された大型モニターを見ている。

鈴音は諦めて、もう一度ため息をつき、手伝ってくれる者の無い仕事へ戻った。

真由美も摩利も、雫の衣装には眉一つ動かしていない。

九校戦三回目の彼女たちにとっては、振袖などそれ程奇抜なコスチュームではないからだ。

むしろ「あら、今年は少ないのね？」程度のもの。

まあ、だからこそ、九校戦を毎年観戦に来ていた雫が、特に恥ずかしがることもなくこの衣

装を選んだのだろうが。
「おっ、始まるな」
二人は心持ち、モニターに顔を近づけた。

◇
◇
◇

フィールドの両サイドに立つポールに赤い光が灯った。
光の色が黄色に変わり、更に青へと変わった瞬間、
雫の指が、コンソールを舞った。
自陣十二本の氷の柱。
その全てを対象として、魔法式が投射される。
一拍遅れで相手選手の魔法式が雫の陣内に襲い掛かった。
移動系統の魔法で敵陣の氷柱を倒すポピュラーな戦術。
だが、対戦相手の魔法は、雫の氷柱を微動だにさせることができなかった。

◇
◇
◇

「ほう、情報強化か」

各校本部のモニターは、発動中の魔法を解析してその種類と強度をサーモグラフ映像の様に色で表示するオプションを備えている。

その機能が、今の攻防の詳細を教えていた。

情報強化。

対象物の現在の状態を記録する情報体であるエイドスの一部又は全部を、魔法式としてコピーし投射することにより、対象物の持つエイドスの可変性を抑制する対抗魔法。属性の一部をコピーした情報強化は、その属性に対する魔法による改変を阻止する機能を持つ。

モニターの映像は、敵校の選手が放った移動魔法が、位置情報、つまり「そこにある」という属性を強化した雫の魔法によって、無効化された様子を映し出していた。

「これはまた、随分と正攻法だな」

「摩利の予想が的中したのかな？」

その会話を聞いていた鈴音が「別に、貴女方の裏をかく目的で作戦を考えたわけではないと思いますが……」と、心の中でツッコんだが、観戦に夢中な二人には当然、届かなかった。

―もっとも、北山さんのように干渉力が特に強い魔法師なら、情報強化より領域干渉を使うのが正攻法だと思うけど」

「昨日から見ている限り、北山はキャパシティも中々のものだ。エイドスの複写が苦になる、

ということもないだろう。それに特定の系統を妨害するなら、領域干渉よりも情報強化の方が効率的だしな」

画面の中では、再び移動系魔法を仕掛けた相手校の攻撃が、最初と同じように無効化されていた。

そして攻撃の魔法が不発となった一瞬の間隙、敵陣の氷柱が続けざまに三本、粉々に砕け散った。

「……今のは何だ？　真由美、見えたか？」

訝しげに問い掛けて来た摩利に、真由美は少し自信なさげな顔を向けた。

「モニター越しでは推測にしかならないけど……」

ほぼリアルタイムで分析画像が表示されるといっても、その場で直に魔法を感じ取るのとは、やはり勝手が違う。

「多分、『共振破壊』の応用だと思うわ」

間接的に仕掛けられた魔法は、対象物に魔法の効果が表示されない為、周囲の映像から使われた魔法を推測しなければならない。

「周波数を無段階に変更する振動魔法を敵陣の地面に仕掛けて、柱と共鳴が生じたところで振動数を固定、一気に出力を上げて共振状態を作り出したんじゃないかしら」

「なるほどな……対抗魔法を避ける為に、柱に直接魔法を仕掛けるのではなく、地面を媒体に

使ったか。同じ地面媒体でも、力任せな花音の『地雷原』に比べて、高度に技巧的な術式だ。どっちが上級生か分からんな」

「共鳴点を探るのに時間が掛かるから、情報強化でその時間を稼いでいるのね。振動数の操作はお手の物、ということかしら？」

「そうだな」

真由美と摩利が共通に思い出しているのは、服部を破った達也の無系統魔法、サイオン波の振動数を緻密に制御して合成波を作り出したあの技術だ。

モニターの中で展開されている技巧は、雫の個人的なテクニックというより、達也のアレンジによるものという性格が強いことを、二人は疑っていなかった。

◇　◇　◇

（さすがに雫はキチンと仕上げてきてるな）

選手の状態を監視するモニターを見ながら、達也は無言で頷いていた。

既に敵陣は氷柱四本となっている。

こちらはまだ、十二本とも健在だ。

モニターのバイオリズム曲線は、軽い疲労状態を示しているだけで、魔法の行使には全く影

響しないレベルを保っている。

寝不足だった英美のように体調を崩しているというような兆候は全く無い。そして『情報強化』も『共振破壊』も、練習と同様、否、それ以上にスムーズに発動している。

真由美たちの推測は、半分当たりで半分外れだった。『共振破壊』は雫の母親が得意としていた魔法で、雫も達也と組む前から高校生にしては高いレベルで使いこなしていた。

ただ本来の『共振破壊』は、対象物に無段階で振動数を上げていく魔法を直接掛けて、固有振動数に一致した時点、「振動させる」という事象改変に対する抵抗が最も小さくなった時点で振動数を固定し、対象物を振動破壊するという二段階の魔法だ。対象物に直接振動魔法を掛ける場合は、魔法式の干渉に対するエイドスの抵抗で感覚的に共鳴点を探ることができるが、間接的に仕掛ける場合は対象物の共振状態を別に観測しなければならない。

それを観測機械に頼るのではなく、魔法の工程として起動式に組み込んだのが達也の工夫した部分だった。

自分が慣れ親しんだ魔法に新たな工程を追加したこの『共振破壊』の派生術式を、雫は良く使いこなしている。学校の練習時間だけでなく、学校外でも自分一人で相当練習を積んだことが窺われる熟達ぶりだった。

敵陣の氷柱が一本砕けるのと同時に、自陣の氷柱が一本倒された。

だがそれは、相手の「最後の悪あがき」に過ぎないことが達也には一目瞭然だった。

相手選手は、今の攻撃に魔法力の全てを注ぎ込んでいる。おそらく敗北は免れないと認め、一本も倒せずに終わる完封負けだけは避けようと考えたのだろう。

モニターではなく、自分の眼で雫の背中を観察する。

彼女の放つ想子波に乱れは無い。

動揺も気負いもなく、今までどおり自陣の氷柱を守り、敵陣の氷柱に攻撃を仕掛けている。

元々完全勝利などという変な欲目は持っていないのだろう。見ていて安心できる戦い振りだ。

そして全力を放出した直後の敵選手に、意味のある抵抗ができようはずもなく。

残り三本となっていた敵陣の氷柱は、砂の城が波にさらわれるが如く、脆く崩れ去った。

◇　◇　◇

深雪の試合は、一回戦の最終ゲーム。

朝から考えれば長い待ち時間だが、間に昼食の時間が入るので、本人もそれほど待たされたという感覚は無いだろう。

達也はといえば、朝からこれで三試合目なので「待つ」どころではなかった。

選手の控え室には深雪と達也。

ほのかと雫の姿はない。

昼食時に観客席で応援する、と言っていたから、今頃はエリカたちと合流しているだろう。
その代わりに、というわけでもないだろうが、五十里と花音と、そして真由美と摩利まで応援に来ていた。
（大応援団だな……）
呆れ混じりに心の中で呟いた達也だったが、口にしたのは無論、別のセリフだ。
「応援に来ていただけるのは嬉しいんですが……委員長、寝てなくて大丈夫ですか？」
バトル・ボードの準決勝で事故に見せかけた妨害工作により摩利が全治一週間の怪我を負ったのは三日前。魔法治療の効果もあり、無理をしなければ日常生活に支障は無いとはいえ、ベッドで安静にしていた方が望ましいのは間違いない。
「何だ、君まであたしのことを重傷扱いするのか？　飛んだり跳ねたりするのではないのだから、問題ない」
「はぁ……」
いえ、一応重傷です、というセリフは呑み込んで、今度は真由美に話し掛ける。
「会長は、本部に詰めていなくてもよろしいので？　確か男子の方も、試合中だと思いますが」
「大丈夫よ。向こうははんぞーくんに任せてきたから。私も再来月には引退だし、何でも一人でやっちゃうのは良くないと思うのよね」
正論である、が、どうにも白々しく聞こえる。

だが、彼女たちが競技の邪魔をするはずもないし、これ以上の問答は無益だった。
「深雪、頼もしい応援団だが、逆に緊張し過ぎるなよ」
プッ、と小さく吹き出す音が聞こえたが、達也は無視した。
多分、過保護だなぁ、とか思われたのだろうが、達也にとって妹はいつまで経っても妹（のはず）なのだ。
「大丈夫です。お兄様がついていてくださるのですから」
そして、全幅の信頼を込めて兄を見上げる深雪の耳には、そのような雑音など届くはずもなかった。

◇　◇　◇

深雪がステージに上がると、観客席が大きくどよめいた。
「そりゃあ、驚くよね、あれは……」
「でも似合ってるよ。花音はそう思わないの？」
「似合い過ぎて驚くって言ってるの」
花音と五十里の会話をＢＧＭとして聞き流しながら、達也はテキパキとモニターの準備を進める。瞬く間にセッティングを終わらせて、深雪に目を向け、「はて、何をそんなに驚くのだ

ろう」と、ふと、思った。

深雪の衣装は白の単衣に緋色の女袴。白いリボンで長い髪を首の後ろでまとめたスタイル。そう、髪のまとめ方が厳密には異なるが、ＣＡＤの代わりに榊か鈴を持たせると更に絵になる、あの格好だ。

ただでさえ整いすぎている美貌が、その衣装と相まって、神懸かった雰囲気さえ醸し出している。いや、神懸かりを通り越して、神々しいという形容すら、過言ではない程だった。

「可哀想に、相手の選手は呑まれちゃってるわよ」

「仕方がなかろうな。あれはあたしでも、チョッと気後れするかも知れん。……ああ、もしかして、それが狙いか？」

背中から聞こえてきた真由美と摩利の声は間違いなく自分の方へ向けられていたので、達也は身体ごと振り返って答えた。

「狙いと仰いますと？　魔法儀式の装束としては、珍しいものではないと思いますが」

もっともその答えは認識が噛み合っていない疑問の応酬の形を取っていた。

「……達也くんのお家は神道系？」

戸惑いは、反問された方に大きかったようだ。躊躇いがちに再度質問を返した真由美に、達也は躊躇なく首を振った。

「そういうわけではありませんが、日本人ですから」

「……そう、かも、ね」

歯切れ悪く真由美が頷くのを見て、「この話題はこれでお終い」とばかり達也はモニターのコンソールへ身体の向きを戻した。

達也の言い分は、反論が難しい程度には、一応筋が通っている。

だが今日の出来事を全て見ていた者がいれば、彼の態度に首尾不一致を見出すに違いない。

同じ和装でも雫の振袖にはあれほど抵抗感を示しておきながら、妹の巫女姿には何の疑問も懐かない達也の感性は——客観的に見れば、やはりどこか、おかしかった。

◇　◇　◇

舞台裏でそのような寸劇が演じられているとは露程も考えていない——まあ、それが当たり前だ——深雪は、心を落ち着けて開始の合図を待っていた。

フライングは重大なルール違反だ。

あまり気合を入れ過ぎると、無意識に魔法を発動させてしまう自分の悪癖を十分自覚している深雪にとって、試合開始を待つこの時間は、他の選手のように闘志を高める時間ではなく、ひたすら自分を抑えつける時間だった。

……それが、端から見ると「静謐なたたずまい」に映るわけだが。

フィールドの両サイドに立つポールに赤い光が灯った。
深雪が、薄く閉ざしていた目を開いて、その瞳を真っ直ぐ敵陣へ向けた。
観客席でため息が漏れた。
一箇所だけでなく、観客席のあちらこちら、否、そのほぼ全域で。
意外なことに、若い男性より若い女性が、その強い光を放つ瞳を陶然と見上げていた。
既に会場は、試合を観戦する空気ではなくなっている。
相手選手には気の毒だが、観客の目は深雪の一挙手一投足に釘付けとなっていた。
ライトの色が黄色に変わり、更に青へと変わった瞬間、
強烈なサイオンの輝きが、自陣・敵陣関係なくフィールドの全面を覆った。
そしてフィールドは——二つの季節に分かたれる。
極寒の冷気に覆われた深雪の陣地。
熱波に陽炎が揺らぐ敵の陣地。
敵陣の氷柱はその全てが融け始めている。
相手選手は必死の面持ちで冷却の魔法を編み上げているが、まるで効果がない。
味方の陣は厳冬を超えて凍原の地獄となり、
敵の陣地は酷暑を越えて焦熱の地獄となっていた。
だがそれすらも、過程。

ほどなくして、
自陣は氷の霧に覆われ、
敵陣は昇華の蒸気に覆われ始めた。

◇　◇　◇

「これはまさか……」
摩利の、
「氷炎地獄……？」
真由美の呻き声を、達也は背中越しに聞いた。
良く知ってるな、と思いつつ、振り返りはしなかった。
達也の目は、モニターと深雪の後ろ姿を往復している。
中規模エリア用振動系魔法『氷炎地獄』。
対象とするエリアを二分し、一方の空間内にある全ての物質の振動エネルギー、運動エネルギーを減速、その余剰エネルギーをもう一方のエリアへ逃がし加熱することでエネルギー収支の辻褄を合わせる、熱エントロピーの逆転魔法。
時折魔法師ライセンス試験でA級受験者用の課題として出題され、多くの受験者に涙を呑ま

せている高難度魔法だが、深雪にとっては当たり前に使える魔法でしかない。

元々が対エリア用の魔法だからフィールドからはみ出すルール違反の心配もなく、それほど神経質になることもないのだが、魔法というものはどんな簡単な術式でも油断は禁物だ。何かあれば例え失格を宣告されるようなことがあっても、あらゆる手段で介入する心づもりで達也は深雪を見守っている。

だがそれも、無用な心配に終わりそうだった。

既に敵陣内の気温は摂氏二百度を超えていた。

急冷凍で作った氷柱は、内部に多くの気泡を含む粗悪な氷だ。その気泡が膨張して、熱で弛んだ氷柱にひび割れを起こしている。

不意に、気温の上昇が止まった。

次の瞬間、敵陣の中央から衝撃波が広がった。

深雪が魔法を切り替えたのだ。

空気の圧縮と解放。

脆弱化していた敵陣の氷柱は、その全てがひとたまりもなく崩れ落ちた。

◇　◇　◇



選手数三百六十名、技術スタッフ七十二名。作戦スタッフを連れて来ない学校もあるものの、選手団は九校で合計四百五十名を超えている。パーティー（宴会でも可）ならばこの人数でも賄い可能だが、大会期間中毎日宴会というわけにもいかない。

朝食はバイキングで早い者から順に済ませていく形式、昼食は仕出弁当を各学校の天幕や作業車、あるいは部屋に持ち帰って食べるのが基本、夕食は三つの食堂を学校別に各一時間三交代で利用する決まりになっている。（学校別になっているのは作戦の漏洩を防止する為）

実は、この夕食の時間は、自校のメンバーが一堂に会する一日で一度の機会。

一時間の夕食時間は、その日の戦績に喜びと悔しさを分かち合う時間でもあった。

そして今晩、第一高校の食卓は、見事に明暗が分かれていた。

暗は、一年生男子選手が集まった一角。

明は、一年生女子選手が集まった一角。

そして女子選手の集団の中に、逆・紅一点（白一点と言うべきか？）で、達也の姿があった。

「すごかったわよねぇ、深雪のアレ」

「『インフェルノ』、って言うんでしょ？　先輩たち、ビックリしてた。A級魔法師でも中々成功しないのにって」

「エイミィ、結構、決まってたよ。一回戦はハラハラしたけど」

「乗馬服にガンアクションが格好良かったよね」
「雫もカッコ良かった！　振袖、素敵だったし、相手に手も足も出させず追い詰めていく戦い振り。クールだったよ～」
新人戦女子クラウド・ボールは準優勝と入賞（六位以上）一人で「まあまあ」の成績だったが、新人戦女子ピラーズ・ブレイクで出場全選手三回戦進出という、スピード・シューティングに続いての好成績に女子選手はお祭り気分に浸っていた。
ピラーズ・ブレイクのトーナメントの仕組みは、出場二十四選手、一回戦十二試合、二回戦六試合。三回戦に三人が進出するということは、上位六名の半分を一校で占めているということなのだ。
三回戦の勝者三名で競う決勝リーグを同一校の選手のみで独占という、まさしく快挙の可能性も見えているだけに、浮かれるな、と言う方が難しいのかもしれない。上級生も「仕方ないな」と言いたげな表情で笑いながら、彼女たちがはしゃぐ姿を見守っている。
「司波君、雫のあれって『共振破壊』のバリエーションだよね？」
話し掛けてきたのは達也が担当していない一年女子の選手。顔と名前は知っていても、それほど親しい相手ではなかった。居心地悪そうに（他の席に移ろうにも深雪が放そうとしなかったのだ）黙々と食事を進めていた達也は、突如注目を浴びてたじろぎながら、何とか普通に返事をすることができた。

「正解」

素っ気無い回答だが、それでもいつもに比べて声が柔らかい。同じ学校、同じ一年生といっても、相手は普段ほとんど接する機会のない一科生の女子生徒だ。怖がらせないように、という程度の気遣いは、達也も持ち合わせているのである。

だがその気遣いは、喧騒を増幅する結果となった。

「やっぱり起動式は司波くんがアレンジしたの？」

「雫がスピード・シューティングで使った術式は司波君のオリジナルだったんでしょう？」

「インフェルノをプログラムできたのも司波くんだからですよね」

「ほのかの眩惑作戦も司波君が考えたって聞いてるよ」

一つ一つ返答する暇も無く矢継ぎ早に話し掛けられ、達也は内心辟易していたが、彼女たちが一種の躁状態にあること、競技会の緊張が続く中ではこのようなお祭り騒ぎが大きな気分転換になること、この大袈裟な賛辞も裏を返した自画自賛であり自信を高め不安を払拭する為のものであること、そうした心理が理解できるので、わざわざ水を差すような真似はしないつもりで聞いていた。

「いいなぁ……あたしも司波君に担当してもらえれば優勝できたかも」

しかし、さすがにこの発言は行き過ぎで、看過することはできない。

それでも彼の口から注意したのでは角が立つ。達也は隣に座った深雪に、そっと目配せした。

「菜々美、それはちょっと問題発言よ」

柔らかくたしなめられて、その女子生徒は、自分のセリフが担当エンジニアに対する不満の表明とも受け取られかねないということにすぐ気づいた。

あわわわ、と態度だけでなく口にも出して慌てて立ち上がり、上級生の中に担当エンジニアの姿を探したが、本人が笑いながら手を振っているのを見つけてホッとした表情を浮かべ、ピョコンと大きく頭を下げて席に戻った。

「あーっ、焦った」

「ナナ、自分の未熟をＣＡＤの所為にしちゃだめだよ」

「えへへ……反省」

少女たちのお喋りは幾分、ボリュームが下がったが、まだ内緒話と表現するには程遠かった。

「でも司波君のお陰で、いつも以上の力が出せたのも間違いないし」

スピード・シューティングで三位になった滝川という女子生徒がそう言うと、英美が大袈裟に頷いた。

「ＣＡＤの調整って、ある意味自分の内側をさらけ出すわけじゃない？　それが男の子のエンジニアなんて……って最初は思ってたけど、司波くんが担当してくれて、ホント、ラッキーでした！　司波くんを譲ってくれた男子には感謝ですね」

無邪気な笑みに込められた多大な勘違いに、達也は苦笑するしかなかった。

だが、苦笑で済ませることのできない者も、いた。

「あっ、おい！」

ガタッ、と荒々しい音を立てて、一人の男子生徒が立ち上がった。

制止の声に振り向きもせず、森崎は食べ終わった食器を手にして配膳口へ向かい、そのまま食堂を後にした。

◇　◇　◇

奇しくも同時刻。横浜、中華街。

満漢全席、とまではいかないが、高校生の食卓より遥かに高価な食材が並ぶ中華料理フルコースのテーブルを、陰鬱で苛立たしげな表情が取り囲んでいた。赤と金を主調とした豪華な色彩の内装が男たちの顔色の悪さを引き立たせているようですらあった。

「……新人戦は第三高校が有利ではなかったのか？」

彼らの会話は英語で行われている。

「せっかく渡辺選手を棄権へ追い込んだのに、このままでは結局、第一高校が優勝してしまうではないか」

だが、人種的には明らかな東ユーラシア人混血種の特徴を備えていた。

「本命が勝利したのでは、我々胴元が一人負けだぞ」
「今回のカジノは特に大口の客を集めたからな。支払い配当は、我々にとっても安くはない。今期のビジネスに大きな穴を開けることになるだろう。そうなれば……」
男たちが深刻な表情で顔を見合わせる。
「……ここにいる全員が、本部の粛清対象になる。損失額によっては、ボスが直々に手を下すこともあり得るぞ」
男の一人が、空中でうねり渦を巻く竜の胴体が金糸で刺繍された掛け軸を見上げて、声をひそめ呟く。
重い沈黙が、男たちの頭上から襲い掛かった。
「死ぬだけならまだいいが……」
ポツリと漏らされた呟き。
その声は、恐怖に震えていた。

◇　◇　◇

魔法競技は非魔法スポーツ競技ほど、性差の影響は大きくない。
それでもバトル・ボードやクラウド・ボールのような身体能力が勝敗に影響する競技の存在

を考慮して、新人戦も今年から男女別になった。

裏を返せば、新人戦が男女別になったのは今年が最初ということだ。

去年までは男女混合だったから、バトル・ボードやクラウド・ボールは男子選手、女子選手は身体能力の影響が小さいピラーズ・ブレイクやスピード・シューティングという棲み分けができていたし（学校によっては男子選手に比率が偏っていたところもあった）、観客が同時開催される男女の競技に分かれるということもなかった。

男子競技と女子競技、どちらの人気が高いか。

本戦では例年、一般客は女子の競技に、軍・警察・消防・大学などの関係者は男子競技に集まる傾向がある。

――それで、今年の新人戦は、と言うと。

「すごい人ねぇ……」

「男子の方は結構余裕があるみたいだがな」

混雑とは縁の無い、大会参加者用の観覧席から、ぎっしり満員になった一般客席を同情の眼差しで見詰める少女二人。

真由美と摩利である。

「何だか随分、大学の関係者が多い気がするけど」

今度は招待客席に目をやって、真由美が、そう呟くと、

「昨日のアレを見せられれば、映像記録だけでは満足できないのも当然じゃないか？」
回答の形で、摩利が同意を示す。
「それもそうか。私たちも改めて見に来てるんだしね」
コンディションの公平を期す為、試合の順番は昨日とひっくり返されている。
大会六日目・新人戦三日目。
ピラーズ・ブレイクの三回戦第一試合。
深雪の登場を待って、真由美は時計に目をやった。

◇　◇　◇

時間は少し遡る。
達也と深雪の二人がピラーズ・ブレイクの控え室に赴いたところ、その前に二人の第三高校生徒が立っていた。
いずれも男子。
一人は達也とよく似た体格。身長も肩幅もほとんど変わらない様に見える。――もっとも、ルックスは相手がだいぶ上だった。
もう一人はやや小柄。だが戦闘実技を重視する校風ゆえか、ひ弱な印象は無い。

向こうも同時に気づいたのか、達也たちの方へ真っ直ぐ歩いて来た。
「第三高校一年、一条将輝だ」
大柄な方が口火を切った。
初対面の相手に対するものとしては横柄な口調だが、達也は不思議と不快感を覚えなかった。
同じ一年生でありながら、自然とリーダーシップを取る、リーダーとして振舞うことが自然だと思わせる風格のようなものが一条将輝にはあった。
そしてその眼は、真っ直ぐに達也を見ていた。
「同じく第三高校一年の、吉祥寺真紅郎です」
小柄な方は丁寧な口調で、だが挑戦的な眼差しで、古風な名前を名乗った。
「第一高校一年、司波達也だ。それで、『クリムゾン・プリンス』と『カーディナル・ジョージ』が試合前に何の用だ？」
害意は感じない。
敵意、とも少し違う。
だが、友好的な態度でないことも確かだ。
あえて言うなら、むき出しの闘志。
達也は将輝と同じく、初対面の人間相手には少々乱暴な、普段どおりの言葉遣いで応じた。
ここで今、上辺だけの礼儀を取り繕うのは、この二人にかえって失礼だと達也は感じていた。

「ほう……俺のことだけでなく、ジョージのことまで知っているとは話が早いな」
「しば・たつや……聞いたことが無い名です。ですが、もう忘れることはありません。おそらくはこの九校戦始まって以来の天才技術者。試合前に失礼かとも思いましたが、僕たちは君の顔を見に来ました」
「弱冠十三歳にして基本コード（カーディナル・コート）の一つを発見した天才少年に『天才』と評価されるとは恐縮だが……確かに非常識だ」
自分勝手な言い草に、歯に衣を着せるつもりも無い返答。
だがお互い、逆上している気配は無い。確かな意志をもって、敵を見据える構えだった。
「深雪、先に準備しておいで」
もう少し相手をしなければならないようだ、と判断した達也は、目線を動かさず、深雪にそう指示した。
「分かりました」
深雪は達也に一礼した後、将輝たちがそこに存在していないかの如く、一瞥もせずに控え室へ入った。あえて目を逸らしているという素振りも無い、自然で完璧な無視。
一瞬、将輝の目が深雪を追いかけたが、すぐに視線を達也へ戻した。
「……『プリンス』、そっちもそろそろ試合じゃないのか？」
だがその一瞬に、見間違えようの無い動揺と未練を見て取った達也は、やや気が抜けてしま

っていた。

呆れていることを隠そうとしていない達也の視線に、将輝は返事に詰まってしまった。

「……僕たちは明日のモノリス・コードに出場します」

代わりに応えたのは吉祥寺だった。

吉祥寺は新人戦男子スピード・シューティングの優勝者だし、将輝は新人戦男子ピラーズ・ブレイクの優勝候補筆頭。各校がエース級を投入してくるモノリス・コードにエントリーしてくるのは、言われるまでも無く予想の範囲内だった。

「君はどうなんですか？」

どうとは何だ、と問い返してやりたかったが、そろそろ時間が惜しい。

「そっちは担当しない」

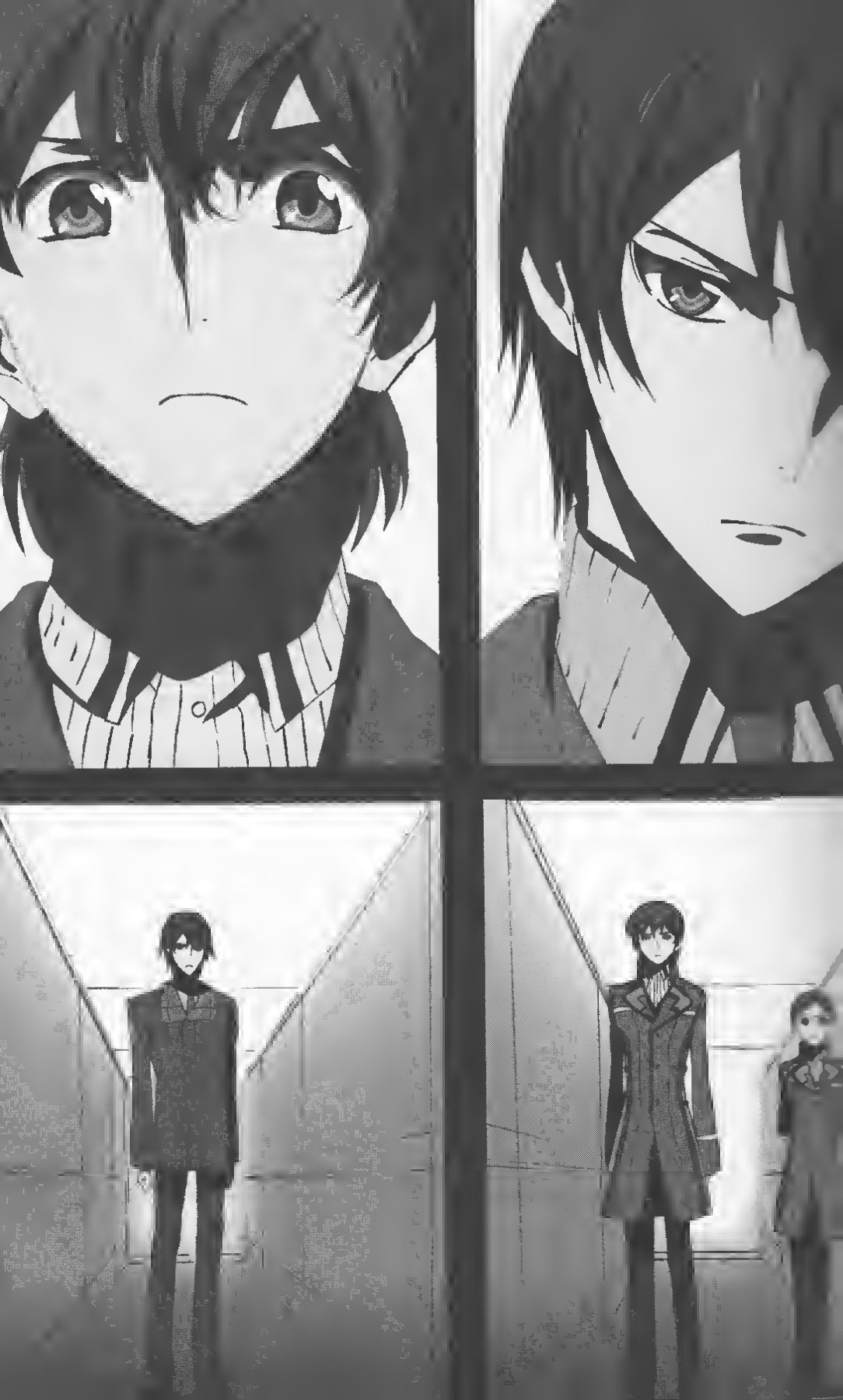
とは言うもののこちらだけ丁寧に答えるのは癪に障るので、同じ様に抽象的な答えを返した。

「そうですか……残念です。いずれ、君の選手と戦ってみたいですね。無論、勝つのは僕たちですが」

吉祥寺のセリフに「喧嘩を売っているのか？」と達也は感じたが、まさしくこの二人は喧嘩を売りに来たのだとすぐに思い直した。

「時間を取らせたな。次の機会を楽しみにしている」

達也が吉祥寺に応えを返す前に、将輝が達也へそう告げて、吉祥寺と共に達也の横を通り過



ぎていった。

――最後まで偉そうなヤツだったな、と達也は思ったが、振り返ることはせず、深雪の待つ控え室へ向かった。

「結局、彼らは何をしに来ていたのですか？」

更衣室から出てきた深雪は、開口一番、先程の一幕について訊ねた。

「偵察、かな？　意味は無いと思うが」

達也は首を傾げながら当たり障りのない表現を選び、深雪が着替えている間に準備を済ませたＣＡＤを彼女に手渡した。

試合前だ。余計なことに気を取られるのはマイナスにしかならないので、達也はもう、この話を終わりにしたかったが、深雪は達也の返事にクスッと意味ありげな笑いを漏らした。

「宣戦布告、だと思いますよ、お兄様」

妹が何を言いたいのか、分からなくはなかった。彼自身、喧嘩を売られたと感じていた。だが達也にはそれが、突拍子も無いことに思えた。

「……信じていらっしゃいませんね？」

上目遣いに拗ねた眼差しを向けられても、そう簡単に納得はできない。

「いや、だってな……俺は選手ですらないんだよ？　魔法科高校の枠を超えて、魔法師の世界

で既に評価を確立しているあの二人が、俺を敵視するとは思えないんだが」

この場合の「敵視」とは、対等の敵手と認めること。

客観的に見て、自分はあの二人より随分格下だ。少なくとも、表面的には、格を問題にすることそのものがおこがましい程に。かといって、自分の裏事情を知っている様子もなかった。普通に考えれば、『クリムゾン・プリンス』や『カーディナル・ジョージ』が自分のことをライバル視することなどありえない――それが達也の考えだった。

謙遜ではなく、本気でそう思っている兄を見て、妹は深くため息をついた。

「……お兄様、ご自分の過小評価はこの場合、戦況の誤認につながります。どれだけご自分が注目され、意識されているのか、どれだけ他校がお兄様に――お兄様の技術と戦術に対抗心を燃やしているのか、もう少し客観的に認識なさるべきだと思いますが」

深雪にしては珍しい、遠慮のない諫言だった。

思わぬ迫力で思わぬ非難に曝されて、達也は目を白黒させた。

◇　◇　◇

深雪が三度、神秘的な美貌で客席を虜にし、神懸かりとも思える圧倒的な力で敵陣を蹂躙している頃。

バトル・ボードの水路では、女子準決勝の第一レースが始まろうとしていた。
既に選手はスタート位置についている。
その中に、ほのかの姿もあった。
「う～ん」
「……」
「これはチョッと……」
「……」
「まあ、その、ね……」
「……」
「さっきから何だよ、二人して」
スタート位置に並んだ三人の選手を見て、客席で悩ましげに唸っているエリカとその隣で絶句している美月に、レオが呆れ顔で問い掛けた。
「何かさ～、異様じゃない？　選手全員、黒メガネって」
「エリカちゃん、そこは『ゴーグル』と言おうよ……」
そう、エリカと美月の言うとおり、今回はほのかだけでなく、他の二人も濃い色のゴーグルを着けていた。
「当然じゃないのか？　光井さんの眩惑魔法対策としては一番手頃で確実なんだから」

幹比古が常識的な推測を返すと、エリカは「つまらないな～」とでも言いたげな気の抜けた笑い声を漏らした。

「……何が不満なんだよ？」

「だってさ～、これって多分、達也くんの思うツボだよ？　バトル・ボードで選手がゴーグルを使用しなかったのは、付着した水飛沫で視界が妨げられるのを嫌った、っていうちゃんとした理由があるのに、一回、目眩ましが使われたのを見たからって、安直にゴーグルを使用するなんて……。眩惑魔法対策なら他にも色々な手があるのにねぇ……」

「ほのかさん、今度は水飛沫で目潰しを掛けるってことなの？」

美月の問い掛けに、エリカは試合に対する興味の薄れた表情で頷く。

しかし。

「それはどうかな……達也がそんな、単純な手を使ってくるとは思えないんだけど」

「……それはそうかも」

幹比古の指摘に、エリカは好奇心を漲らせた。

スタート直後の閃光、は、今回無かった。

「出遅れた!?」

「いや、ついて行ってる！」

スタンド前の緩い蛇行を過ぎて、ほのかは二番手で最初の鋭角コーナーへ侵入した。

「えっ？」

ここで先行していた一番手の選手が、妙なコース取りを見せた。

大きく減速しながら、コースの中央をターンしたのだ。

同じように減速してコースの内側ギリギリをすり抜けたほのかが、大回りした選手を抜いてトップに立った。

「何だ、今のは？」

普通なら、大きく減速してインベタを回るか、減速を抑えてアウトギリギリを回るか。

今のように大きく減速しながら、内側を広く空けてコーナーを回るのは、中途半端というしかない。

「……コースに影が落ちたような気がしたけど」

レオの声に、エリカが鋭く目を細めて呟いた。

「あっ、まただ！」

今度は緩く大きなカーブ。

ほのかに抜かれた選手が、アウトに大き過ぎる余裕を残し必要以上に減速してカーブを抜けた。その結果、ほのかとの差が更に開く。

「……なるほど、そういうことか」

「えっ、なに？」

頷く幹比古にエリカが訊ねる。

「達也の狙いが、他の選手にも遮光効果のあるゴーグルを着けさせること、というエリカの読みは正しかったようだよ」

いつもの感情的な確執も忘れて、興奮した口調で幹比古は答えた。

「ただしそれは、水飛沫で視界を遮る為じゃなくて、暗いところを見えにくくする為だ」

「そうか！　幻術にこんな使い方があるなんて……！」

「ああ。明るくする、暗くするというだけで、敵の行動をコントロールすることもできる。魔法って本当に、使い方次第なんだな……」

「……二人で納得してないで、どういうことか教えてくれよ」

レオの不満げな声に、自分の世界へ沈みかけていた幹比古がハッと我を取り戻した。

「ゴメンゴメン。つまり、達也の作戦は……」

◇　◇　◇

「**司波君**の作戦は単純なものですよ。

光波振動系で、水路に明暗を作る。

ただでさえ濃い色のゴーグルで視界が暗くなっているのです。明るい面と暗い面の境目で水路が終わっていると錯覚して、相手選手は暗い面に入らないようにする。つまり、相手選手にコースを狭く使わせているのです」

男子ピラーズ・ブレイクの観戦に行った克人の代わりに本部へ詰めている服部と、彼について来た桐原は、食い入る様な表情で鈴音の解説に耳を傾けていた。

「本当はもっと広いはずだと頭で分かっていても、目から入ってくる情報に逆らうことは困難です。そしてどんな選手でも、狭いコースでは広いコースよりスピードが出せません。相手選手に、その実力を発揮させない。戦術の基本ですね」

「……しかし、光井さん自身は影響を受けないのですか？」

「その為の練習を積んでいますから」

服部の質問に対する回答は、実にシンプルなものだった。

「……普通なら、術者本人は影響を受けない、って安心しちまうものだと思いますがね？」

「安心できなかったんでしょうね。コースの幅は決まっているんだから、目に頼らず身体で覚えろ、と司波君は言っていました」

鈴音の回答に、桐原は唸り声を上げた。

「……奇策に見えて、実は正攻法というわけかい……性格が悪いだけじゃねえんだな」

桐原の漏らした感想に、鈴音は声を上げて笑った。

◇　◇　◇

午前の競技が終わって、第一高校の天幕は完全なお祭り状態になっていた。
新人戦女子ピラーズ・ブレイク三回戦三試合、三勝。
午後の決勝リーグを第一高校の出場選手で独占することになったのだ。
バトル・ボードでもほのかが決勝に進んでいる。快進撃、という言葉に相応しい成績だ。
ただ、一年生男子選手十名は、一緒に浮かれることなどできずにいた。
いつもどおりに戦えば女子にそれほど見劣りしない成績を収められるはずのメンバーを揃えていながら、気合が空回りしてミスから敗退、ますます焦りを募らせるという完全な悪循環に陥っていた。
そんな中、女子ピラーズ・ブレイクの三選手――深雪、雫、英美と、その担当エンジニアである達也は、本部天幕ではなく、ホテルのミーティングルームに呼ばれていた。
「時間に余裕があるわけじゃありませんから、手短に言います」
呼んだのは、真由美。待っていたのは、彼女一人だった。
「決勝リーグを同一校で独占するのは、今回が初めてです。司波さん、北山さん、明智さん、本当によくやってくれました」

丁寧に、静かに、慌てて、三者三様ではあったが、三人は同時にお辞儀して、真由美の賛辞に応えた。

「この初の快挙に対して、大会委員会から提案がありました。決勝リーグの順位に関らず学校に与えられるポイントの合計は同じになりますから、決勝リーグを行わず、三人を同率優勝としてはどうか、と」

三人が顔を見合わせ、達也は皮肉げに唇を歪めた。

建前をどう取り繕おうと、自分たちが楽をしたいという大会委員会の本音は丸見えだった。

「大会委員会の提案を受けるかどうかは、皆さんの意思に任せます。ただし、あまり考える時間はあげられません。今、この場で決めてください」

真由美の言葉に、英美がそわそわと目を泳がせ始めた。

自分の力では、深雪にも雫にも勝ち目が無いことを、彼女はよく弁えていた。

さっきまでは三位でも十分、と思っていたが、同率であっても優勝の可能性が出てきたとなれば、人の心理として色気を出すなと言う方が無理だ。

深雪は、達也を見ていた。

そして雫は、深雪を見ていた。

「達也くん、貴方の意見はどうかしら？　三人が戦うとなれば、貴方もやりにくいと思うけど」

なる程、真由美としては同率優勝で落ち着かせたいようだ、と達也は思った。

確かにチームリーダーとしては、それが一番望ましい決着ではあるだろう。
「正直に言いますと、明智さんはこれ以上の試合を避けた方が良いコンディションですね。三回戦は激闘でした。あと一時間や二時間程度で回復できるとは思えません」
まあ、達也としては、そんな思惑に慮る必要は感じない。ただ彼が知る事実を告げるだけだ。
「そうですか……明智さん、達也くんはこう言っていますが？」
「あ、あの、……私は今のお話をうかがう前から、棄権でも構わないと思っていました。さっきから調子が悪いのは確かだし、司波くんに相談して決めようって……司波くんは私自身より、私のコンディションが分かっていますから」
少し口調に後ろめたさが混じっているのは、大会委員会の思惑に便乗するのが狡いと感じているからだろう。落ち着きが無かったのも、主にこの所為だったようだ。
「そうですか」
真由美は労わりを込めた微笑みで頷き、視線を深雪と雫に向けた。
「私は……」
先に口を開いたのは、雫だった。
「戦いたい、と思います」
強い意志が込められた瞳で、真由美の目を真っ直ぐ見返して。
「深雪と本気で競うことのできる機会なんて、この先何回、あるか……。私は、このチャンス

を逃したくない、です」

「そうですか……」

真由美は視線を床に落として、一つ息をついた。

「深雪さんはどうしたいのですか？」

「北山さんがわたしとの試合を望むのであれば、わたしの方にそれをお断りする理由はありません」

実は極めて気が強い性格の深雪であれば、こう答える事は真由美にも分かり切っていたことだった。

「分かりました……。では、明智さんは棄権、司波さんと北山さんで決勝戦を行うことにすると大会委員に伝えておきます。決勝は午後一番になるでしょうから、試合の準備を始めた方が良いでしょうね」

真由美の言葉に、真っ先に一礼したのは達也。

ミーティングルームを出て行く彼の背中に、すかさず真由美へお辞儀した深雪と雫が続き、英美が慌てて「失礼します」と頭を下げた。

◇　◇　◇

観客席は、超満員だった。

新人戦女子ピラーズ・ブレイク決勝リーグは、決勝戦に看板を架け替えて、午後一番、他の競技とわざわざ時間をずらして行われることになった。

一般客席だけでなく、関係者用の観戦席もギッシリ満員。

そこには真由美と摩利に挟まれた達也の姿もあった。

二人のCADの調整を済ませた達也は、深雪につくことも、雫につくこともなく、関係者用観戦席の最後列に席を取っていた。

二人にもそう告げていた。

二人とも頑張れ、という言葉と共に。

「でも本当は、深雪さんの方につきたかったんじゃないの？」

しかし、せっかくの「良い話」をぶち壊しにするように、人の悪い笑みを浮かべて真由美がそう問い掛けた。どうも彼女は達也に対すると、小悪魔の度合いを増すようだ。

「ええ」

それはきっと、こういう手応えのなさにムキになっている、という面があるのだろうが。

「……随分あっさり認めるんだな」

偽悪家ではあるが素顔は真由美より余程善良――なのかもしれない――摩利が、既にパターンとなりつつあるため息交じりのツッコミを入れる。

「シスター・コンプレックスという言葉を知っているかね？」
「試合で肉親を応援するのが何故シスコンにつながるのか理解しかねますが？」
そしてこれも恒例となりつつある、白々しい正論返し。
しかし真由美たちもさすがに学習しているようだ。
「うわっ、聞いた、摩利？　この子、開き直っちゃったわ」
「重症だな。完治の見込みは無いんじゃないか？」
いつもと違う「下級生イジメ」に、聞こえよがしの内緒話は本人を挟んでいては意味が無いんじゃないか、と達也は呆れ果てながら考えた。

その様な幕間のコントは、最終幕が上がるまでの息抜きでしかない。
それを証明するかのように、二人の選手がステージに上がると同時、客席は水を打ったように静まり返った。
フィールドを挟んで対峙する二人の少女。
片や、目に清冽な白の単衣に緋の袴。
片や、目に涼しい水色の振袖。
深雪は髪を縛っておらず、雫は襷を掛けていない。
長い髪と振袖の袂が、夏の微風になびいていた。

締め付けるような静けさが、二人の少女から放たれている。
それは、純粋に魔法のみで競うこの競技に相応しい、熱狂を伴わない冷徹な「戦う意志」だった。
始まりを予告するライトが点った。
灯火が色を変え、開戦を告げる狼煙となった瞬間、
同時に、魔法が撃ち出された。

熱波が雫の陣地を襲う。
だが氷柱はよく持ちこたえていた。
エリア全域を加熱する『氷炎地獄』の熱波を、氷柱の温度改変を阻止する『情報強化』が退けているのだ。

深雪の陣地を地鳴りが襲う。
だがその震動は、共振を呼ぶ前に鎮圧された。
自陣全域の振動と運動を抑えるエリア魔法が、地表・地下にも魔力を及ぼしたのだ。

二人はお互いの魔法をブロックしながら、事象改変の手を敵の氷柱に伸ばしている。玄人受

けする、専門家を唸らせる、互角の攻防――に、見える。

だが当人たちは、そう考えていなかった。

（届かない……！　さすがは、深雪！）

雫の『共振破壊』は敵陣から完全にブロックされている。

それに対して、深雪の熱波は雫の陣地を覆っている。

対抗魔法『情報強化』は、魔法による対象物の情報書き換えを阻止するもの。

物理的なエネルギーに変換された魔法の影響は排除できない。

魔法による氷柱自体の加熱は阻止できても、加熱された空気により氷柱が融け出すのは時間の問題だった。

（だったら！）

雫はＣＡＤをはめた左腕を、右の袖口に突っ込んだ。

引き抜いた手に握られていたのは、拳銃形態の特化型ＣＡＤ。

それは、達也が雫に持たせた切り札だった。

銃口を敵陣最前列の氷柱へ向けて、雫は左手でＣＡＤの引き金を引いた。

（二つのＣＡＤの同時操作!?　雫、貴女それを会得したの？）

雫の左手に拳銃形態のＣＡＤが握られたのを見て、深雪の心に動揺が走った。

複数のＣＡＤを同時に操る技術は、彼女の兄の得意技。「特異」技、と言ってもいいくらい、難度の高いテクニックだ。

深雪も達也に複数ＣＡＤの同時操作技術の習得を勧められていたが、彼女はそれを無理だと断っていた。

魔法を暴走させてしまう自分が、想子の完全な制御を必要とする複数ＣＡＤの操作技術に挑戦するのはまだ早すぎると思っていたし、兄の得意技に手を出すのは畏れ多いような気持ちもあったからだ。

しかし雫は、今、彼女の目の前で、二つ目のＣＡＤを手に取った。

想子信号波の混信を起こすことなく、二つ目のＣＡＤで起動処理を完了させた。

一瞬、深雪の魔法が止まった。

魔法の継続処理が中断する。

そこへ、雫の新たな魔法が襲い掛かった。

「『フォノンメーザー』っ？」

真由美が上げた悲鳴に、達也は「本当によく知っているものだ」と他人事のように感心した。

深雪の陣地、その最前列の氷柱から白い蒸気が上がっている。

今までの三試合、相手選手に触れさせもしなかった――魔法的な意味で――深雪の氷柱が初

めてまともに攻撃を受けダメージを負っているのだ。
振動系魔法『フォノンメーザー』――超音波の振動数を上げ、量子化して熱線とする高等魔法によって。
達也が、深雪を倒す為に、雫に授けた作戦だが……彼の表情は冴えなかった。
深雪がやられそうだから、ではない。
結局この程度では、あの妹を凌駕することはできないと分かってしまったからだ。

動揺は、ほんの一瞬だった。
雫が新たな魔法を繰り出したのに合わせて、深雪も魔法を切り替えた。
氷柱からあがる蒸気――氷の昇華が止まった。
熱線化した超音波射撃を遮断したわけではない。『フォノンメーザー』による加熱を上回る冷却が作用し始めたのだ。
深雪の陣地がたちどころに、白い霧に覆われた。
霧はゆっくりと雫の陣地へ押し寄せて行く。
雫が『情報強化』の干渉力を上げたのが、深雪には分かった。
だが、しかし。
(……残念だけど、甘いわ、雫)

押し寄せる霧は「冷気」。温度変化――融解を妨げる魔法は、この攻撃には意味がない。

「……『ニブルヘイム』……だと？　どこの魔界だ、ここは……」

呻き声が、摩利の口から漏れた。

達也としても、かなり共感できる部分があったが、言葉にはしなかった。

広域冷却魔法『ニブルヘイム』。

この術式は本来、領域内の物質を比熱、相に関わらず均質に冷却する魔法。だが、応用的な使い方として、ダイヤモンドダスト（細氷）、ドライアイス粒子、そして時に液体窒素の霧すらも含む大規模冷気塊を作り出し攻撃対象にぶつけるという使用法もある。

そしてその威力は今、最大レベルに上げられていた。

液体窒素の霧が雫の陣地を通り過ぎ、フィールドの端で消えた。

雫の氷柱は、その一つの面――深雪が見ている面に、液体窒素の滴をびっしりと付着させ、その根元に「水溜り」を作っていた。

深雪は『ニブルヘイム』を解除し、再び『氷炎地獄』を発動した。

雫の『情報強化』は、元々そこにあった氷柱に作用しており、新たな付着物には作用していない。

気化熱による冷却効果を上回る急激な加熱によって、液体窒素は一気に気化した。

その膨張率は、七百倍。

轟音を立てて、雫の氷柱が一斉に倒れた。その轟音は、氷柱が倒れた音だったのか、根元を掘り崩された音だったのか、はたまた蒸気爆発そのものの音だったのか。

氷柱はその表面が粉々に弾けていて、爆発の激しさを物語っていた。

あるいはその光景に、度肝を抜かれていたのか。

一拍遅れて、試合終了が告げられた。

◇　◇　◇

「優勝おめでとう、ほのか」

先に部屋へ戻っていた雫は、レース終了後のメディカル・チェックを終えて着替えに戻って来たほのかを、立ち上がって祝福した。

「ありがとう……雫は残念だったね」

「うん……悔しいよ」

淡々と語られた声音は「本当に悔しいのか？」と、その発言内容を疑わせかねないものだったが、小学校からの親友であるほのかは、雫の本音を誤解するはずも無かった。

「雫……」

ほんの少し、自分より低い雫の頭を、ほのかは胸の中に抱え込んだ。

雫はダラリと手を下したまま、ほのかの胸に頭を預けた。

「最初から、勝てるとは思ってなかった」

「そう……」

「でも、手も足も出なかった」

「……」

「悔しいよ、ほのか……」

「……残念だったね」

そのまま、いくばくかの時が過ぎた。

「……ありがとう。もう、大丈夫」

そう言って、身体を離す雫。

彼女の顔に、涙の跡は無かった。

「そう……？　ねっ、お茶に行かない？　少しお腹が空いちゃったの」

「……うん」

「じゃあ着替えるから、チョッと待っててね？」
明るく振舞うほのかに、雫は少し恥ずかしそうな笑顔で頷いた。

ティーラウンジに足を踏み入れてすぐに、ほのかは立ち尽くす羽目に陥ってしまった。
先客――深雪と、バッチリ目が合ってしまったのだ。
そのまま踵を返すことなどできようはずもなく、かと言っていつものように気軽に同席することもできず。余りのタイミングの悪さに、ほのかは泣きたくなった。
「**優勝おめでとう、ほのか**」
深雪の笑顔はいつもと変わらず華やかなものだったが、何となく作り物めいている。「いつものように」できないのは、程度の差はあれ深雪も同じであるようだ。
「ほのか、**優勝おめでとう**」
その気まずい空気を断ち切るように、達也がすかさず――ここでほのかが口ごもったり不自然な愛想笑いを漏らしたりしてはますます雰囲気が悪くなるから、その暇を与えないように――いつもどおりの口調で声をかけた。もっとも、それは同時にほのかの逃げ道を塞ぐ行為でもあったのだが。
「あっ、その、ありがとうございます……」
「達也さん、同席しても良い？」

進むに進めず、退くに退けず、の状態を打開したのは、雫だった。
「良いよ、もちろん」
そう言いながら立ち上がって、達也は空いている椅子の背後に回り、深雪はソーサーごとカップを持って達也の向かい側から隣の席へ移動した。
「どうぞ」
「ありがとう」
達也が引いた椅子――深雪の向かい側に、雫は躊躇わず腰を下した。
達也の向かい側の席には、同じように椅子を引いてもらって、ほのかが頬を染めながら腰掛けた。ちょうど通りかかったウェイトレスを呼び止め、ほのかと雫がケーキセットを注文し終えてから、達也は改めて二人へ目を向けた。
「優勝と準優勝のお祝いだ。ここは俺がご馳走するよ」
「えっ、良いんですか」
「……じゃあここは、遠慮なく」
ほのかは逡巡を見せたが、雫は達也の真意――彼が自分を慰めようとしているということが何となく判ったので、必要以上に遠慮することなく首を縦に振った。
思ったより早く友人が立ち直りを見せたことにほのかはホッと一息ついて、ようやく自分自身へ意識が向いた。

「あっ、あの……」
「うん？」
「その、優勝できたのは達也さんのお陰です！　ありがとうございました」
自分のことに意識が向いて、自分がまだ達也に優勝のお礼を述べていないことに気づき、さっきまで以上の動揺に捕らわれたほのかだったが、何とか噛まずに感謝の気持ちを伝える。
そんな彼女に、達也は笑って頷いた。
「少し、だけどな」
謙遜し、否定しなかったのは、大袈裟にしたくないからだ。少し、という言葉をほのかが打ち消したりしなかったのは、その笑みの意味を理解できたからだろう。
それを確認した後、達也は雫に目を転じて、笑みを消した。
「雫には悪いことをしたな」
「えっ？」
何の事だが解らない、という表情で、雫は達也の顔を見返した。
「勝敗はともかく、本来ならもっと拮抗した試合になったはずなんだが……俺の判断が甘かった。たった二週間で『フォノン・メーザー』をものにするのは、さすがに無理があったと思う」
「あっ、そのこと……ううん、達也さんは全然悪くないよ。そもそもアレがなかったら、反撃

の手段すら無かったんだし」

達也が何について謝っているのかを理解して、雫は勢い良く頭を振った。

「マスターできなかったのは私の所為。私の方こそゴメンナサイ。アレを使いこなせていれば、もっと良い試合ができたのに。深雪にも、歯応えが無い相手で申し訳無かったって思ってる」

「そんなことないわ。あの時は本当にビックリしたのよ。いきなりあんな高等魔法が、複数CADの同時操作なんていうオマケ付きで出て来るんだもの」

深雪は雫に向かって笑顔で首を（横に）振って見せた後、冗談っぽく、達也を睨みつけた。

「お兄様、あれは本気で、わたしを負かすおつもりでしたね？」

何とも答えにくい質問で、達也もすぐには回答できなかった。

「……俺は二人のどちらにも、最善を尽くしただけだよ」

結局、そういう建前論しか捻り出せなかったが。

建前と言っても決して嘘はついていない、とは解っている。

解ってはいるが、深雪にとってそれは、本音の部分で満足できる答えではなかった。

「もう……この人は妹が可愛くないのかしら」

「手を抜いたりしたらそれこそ本気で怒るだろうに」

友人に対して兄のことを愚痴るという、世間的には当たり前でも深雪の場合極めて珍しい姿は、反論した達也ばかりでなく、ほのかと雫の笑いも誘った。

◇◇◇

大会七日目、新人戦四日目。
今日は、九校戦のメイン競技とも言えるモノリス・コードの新人戦予選リーグが行われる日だが、観客の関心は花形競技ミラージ・バットに集まっていた。
女子のみを対象とするミラージ・バットのコスチュームは、カラフルなユニタードにひらひらのミニスカート、袖なしジャケット又はベスト。ファッションショー（コスプレ大会？）と化している女子ピラーズ・ブレイクとはまた、一味違った華やかさがある。
いや、このコスチュームで若い女性が空中を舞い踊るのだ。
華やかさにかけては、魔法競技中随一だろう。
男性ファンの関心（と言うよりも注目）が集まるのも無理からぬことだった。
しかし――達也の気の所為でなければ、少し注目され過ぎている気がする。
それも煩悩まみれの色ボケな視線ではなく、敵意の棘を大量に生やした視線だった。
「……自分のことになると鈍いってのは本当なんだね」
第一試合に出場する為のスタンバイを終えた選手が、からかうように達也へ声をかけた。
「鈍いのは否定しないが……里美には分かるのか？」

「もちろん」

彼女の名前は里美スバル。所属は第一高校一年D組。もちろん一科生。里美、というのは実は苗字で、名前で呼ぶほど親しい間柄というわけではなかった。

「みんなは司波君を見てるんだよ」

彼女は少し、摩利に似ている少女だ。具体的にどこが似ているかというと、異性よりも同性に人気が高いところ、だったりする。

もっとも似ているのはあくまで「少し」であって、二人が並んでいるとだいぶ印象が違うだろう。

例えば二人にタキシードを着せてみるとする。

摩利の方は「男装の麗人」。

スバルの方は「劇団の美少年役」。

おそらく、こんな具合に印象が分かれる。

そんな自分の外見を意識してか、スバルは言葉遣いも立ち居振る舞いも、少年っぽい部分が多い。

もっとも、だからといって「がさつ」ということではなく、現在見せているように、中々鋭い観察眼の持ち主でもあった。

「スピード・シューティングに続いてピラーズ・ブレイクでも上位独占だもんね。見る人が見

れば、高度に効率化されたデバイスソフトの貢献が大きいって分かるだろうし、一体どんなエンジニアが調整したんだ、って考えるのは当然だと思うよ」

「……そりゃあ、担当したエンジニアが誰かなんて、少し調べれば分かるものだが」

「そういうこと。司波君はさ、各校の警戒の的なんだよ」

もしスバルの言うとおりならば——否定する材料は何も無いのだが——事態は達也にとって、好ましくない方向へ進んでいるということだった。

およそ全ての物事は、準備不足のまま着手することを余儀なくされる。それが「世の常」というものだ。

だがそれにしても、今はまだ、準備不足が過ぎていた。

予定では、「司波達也」の表舞台登場は、高校を卒業した後のこと、のはずだった。

「さてと……今回は僕も、役得で勝たせてもらうとするかな。このデバイスなら、正直、予選程度で負ける気はしないからね」

競技フィールドへ続く扉の前で立ち止まり、ブレスレットをはめた右腕を持ち上げて朝日にキラキラと光らせながら、スバルは肩越しに不敵な笑みを見せた。

達也は親指を立てて彼女を送り出した。

彼女が自分で言ったとおり、スバルは予選を勝ち抜くだろう。

彼の調整したCADを使って。

目立つのは好ましくない、とはいえ、手を抜くこともできない。

二科生――ウィードとして入学仕立ての頃の、ただ一人を除いて誰からも期待されていなかった時分ならいざ知らず、今の彼にそんな事は許されない。

この九校戦に彼を抜擢した真由美と摩利、それを支持した克人、己の心を押し殺して彼を推した服部と危険を顧みず実験台になった桐原、彼に期待を寄せるほのかや雫や他の女子選手たち、そして――彼を無条件で信じてくれる、力を貸してくれる、深雪。

一度絡み合った人間関係は、彼にも「分解」しがたいものだった。

◇　◇　◇

ミラージ・バットは四人一組で予選六試合を行い、各試合の勝者六人で決勝戦を行う。

九校戦で試合数が最も少ない競技だが、それは、選手にとって負担が小さいということを意味しない。

まず十五分一ピリオドの三ピリオドという試合時間が、九校戦中で最長だ。ピリオド間の休憩時間五分を加えた総試合時間は約一時間にも達し、時間制限の無いピラーズ・ブレイクやモノリス・コードに比べても格段に長い。

しかも、その試合時間中、選手は絶え間なく空中に飛び上がり空中を移動する魔法を発動し

続けなければならず、選手に掛かる負担はフルマラソンに匹敵するとも言われている。

それが一日に二試合。

スタミナ面では、クラウド・ボールやモノリス・コード以上に苛酷な競技とも言われている。

それ故に、選手の疲労を考慮して予選と決勝のインターバルが長く取られているのも、この競技の特徴と言える。

第一試合の開始時間は朝八時。二つのフィールドを使用し、正午に予選が終了する。

そして決勝の開始時間は午後七時。九校戦唯一のナイターとなる。

無理をせずに予選と決勝を二日に分けて開催すれば良さそうなものだが、こんなスケジュールになっている理由は一応、ある。

ミラージ・バットは空中に投影したホログラム球体（正確には立体映像の球体。現代の空中結像技術は厳密な意味でのホログラフィーとは映像形成の原理が異なる）をスティックで打つ競技。それは即ち、十メートル上空の幻像が地上から見分けられなければ成り立たない競技ということであり、真夏の明るい日差しの下で行うには向いていない。晴れの日には昼近くの第三試合になると、上空に飛行船で日除けのスクリーンを広げたりもする。

その性質上、ミラージ・バットは本来、ナイターで行われる競技なのである。

立体映像の投影設備自体が、選手の身体で投影の光線が遮られて幻像が消えてしまわないように、フィールドを円形に取り囲む照明塔の頂上に設置されていることからも、この競技がナ

イターを前提としたものであるということが理解できよう。

◇　◇　◇

第二試合を終わって――予定どおり、ほのかとスバルは二人とも予選を勝ち抜いた――達也は仮眠を取る為に、一旦ホテルの部屋へ戻った。

選手の二人もそれぞれの部屋に戻ってサウンドスリーパーで熟睡中のはずだ。

この競技に決勝に備えた体力の回復は不可欠。

エンジニアの達也は身体を休める必要も無いのだが、神経を休めておいた方がベターであるのは間違いない。本当は感覚遮断カプセルを使いたいところだが、あれは選手に優先割り当てされているので、部屋の遮光カーテンを閉め切ってベッドで横になることにした。

今頃ミラージ・バットは第三試合が行われているだろう。第一試合・第二試合に割り振られたのはラッキーだった。一時間しか違わないが、その一時間が体力の回復と精神力の回復に大きく影響することもあり得る。

本戦の予選でも、深雪には早い時間に試合をさせてやりたいが、これは彼の自由になることではない。考えても仕方が無い、と割り切って、達也はこの思考を中断した。

肉体的に疲れているわけではないので、無理に眠ろうとせず、意馬心猿に意識を委ねる。

目を閉じたままベッドに横たわる達也の思考は、昨日の朝に跳んだ。

一条将輝と吉祥寺真紅郎――同じ年齢でありながら、魔法師の世界において既に確固たる名声を確立している二人の天才少年。

一条将輝――三年前の大亜連合（大亜細亜連合）による沖縄侵攻に同調して行われた新ソ連（新ソビエト連邦）の佐渡侵攻作戦に対し、弱冠十三歳で義勇兵として防衛線に加わり、一条家現当主・一条豪毅と共に『爆裂』を以て数多くの敵兵を葬った実戦経験済みの魔法師。

戦闘自体は小規模だったものの（新ソ連は未だに佐渡へ侵攻した武装集団との関係を否定している）、彼はこの実績により「一条のクリムゾン・プリンス」と称せられることになった。（この『クリムゾン（血に塗れた）』という形容詞は「敵と味方の血に塗れて戦い抜いた」という敬意の表れであり、「血に飢えた」という蔑称ではない）

吉祥寺真紅郎――弱冠十三歳にして、仮説上の存在だった「基本コード」の一つを発見した天才魔法師。本名の吉祥寺と彼が発見した「基本コード」からつけられた『カーディナル・ジョージ』の異称は、魔法式の原理論方面の研究者なら知らぬ者はいないと言われるほど注目されている英才。

あの二人が同じ学校の同じ学年に在籍しているというのは、反則級の偶然だ。

あの二人がチームを組むモノリス・コードは、少なくとも新人戦のレベルでは敵無しだろう。

森崎たちも気の毒にな、と達也は完全に他人事として同情した。

救いがあるとすれば、

（『爆裂』が殺傷性Aランクの魔法だということ……くらいか）

一条家の切り札『爆裂』は、対象物内部の液体を気化させる発散系魔法。

生物ならば体液が気化して身体が破裂。

内燃機関動力の機械ならば燃料が気化して爆散。燃料電池でも結果は同じ。可燃性の燃料を搭載していなくても、バッテリー液や油圧液や冷却液や潤滑液など、およそ液体を使用していない機械は存在しないから、『爆裂』が発動すればほぼあらゆる機械が破壊され停止する。

兵士、機械の区別無く葬り去る戦闘用魔法。純粋に軍事目的で開発された『爆裂』は、当然モノリス・コードのレギュレーションに引っ掛かる。

（とは言っても、『クリムゾン・プリンス』の異名を取る十師族次期当主の手持ちカードが『爆裂』一種類であるはずもない……そう言えば）

手綱が外された思考は、モノリス・コードに出場するとわざわざ彼の前で宣言した二人から、モノリス・コードの試合そのものへ移った。

戦力分析や三高対策に取り組み始めた、のではない。

単に、もうすぐ（一高の）二試合目が始まるな、と思っただけだ。

（一試合目は順当に勝ったということだし、二試合目はここまで最下位の四高だ。さすがに取りこぼしはしないだろう……）

達也は目を閉じたまま、ゆったりと押し寄せて来た眠気に身を委ねた。

◇　◇　◇

昼寝を終えて競技エリアに戻った達也は、会場が動揺に包まれているのを感じ取った。
パニック一歩手前の空気が各校の天幕が置かれたエリアを覆っている。
その中心は、第一高校の天幕だった。
「お兄様！」
天幕に足を踏み入れた途端、深雪が一直線に駆け寄ってきた。その隣には雫の姿もある。
「深雪？　雫も……エリカたちと一緒じゃなかったのか？」
ほのかが起きてくるまで――五時から決勝の準備を始めることになっている――深雪と雫はエリカたちとモノリス・コードを観戦している予定だったはずだ。
それが今、ここに居るということは……。
「何があったんだ？　モノリス・コードで事故か？」
答えを待たずに、達也は更に質問を重ねた。
何かあったのか、とは訊かない。何かがあったことは、この雰囲気から明らかだ。
ただそれが、思った以上に深刻な事態かもしれない、と達也は考えたのだった。

「はい、事故と言いますか……」
「深雪、あれは事故じゃないよ」
言い淀む深雪の横から、雫が強い口調で口を挟んだ。
「故意の過剰攻撃。明確なルール違反だよ」
その口調は抑制を保っているが、雫の目には見間違えようの無い憤りが燃えていた。
「雫……今の段階であまり滅多なことを言うものじゃないわ。まだ四高の故意によるものという確証は無いんだから」
「そうですよ、北山さん」
二人の背後から、今度は真由美が割り込んできた。
「単なる事故とは考えにくい……それは確かですけど、決め付けてはダメ。疑心暗鬼は口にするほどますます膨れ上がって、それがいつの間にか事実として独り歩きしてしまうのだから」
こういうことを考えては多分、失礼なのだろうが、随分と上級生らしい正論だった。
優しくたしなめられて反省を口にする雫を傍目に、「生徒会長は伊達じゃないんだなぁ」などと達也は考えていた。……と、真由美が半眼で達也を睨みつけた。
「……何でしょうか？」
「……今なにか、とても失礼なことを考えていたでしょう」

（す、鋭い！）

あまりに的確な洞察に、達也は動揺を禁じえなかった。

しかしそこは彼も、年齢どおりの人生経験ではない。

「いえ、さすがは生徒会長だ、と考えていただけですが……？」

誠実そうな仮面に、濡れ衣を着せられた人間に標準的な偽りの動揺をトッピングして、相手の表情を窺うような声音で答える。

「……そう？」

なおも疑わしそうな目をしていたが、一応、真由美は矛先を納めた。達也の演技に穴が見つからなかっただけでなく、今はそれどころではない、という理由もあったのだろう。

「それで、怪我はどの程度のものなのですか？」

「今の会話だけで森崎君たちが怪我をしたって分かるのね……」

ため息をつく真由美の顔には「やりにくい」と書かれていた。

「……重傷よ。市街地フィールドの試合だったんだけど、廃ビルの中で『破城槌』を受けてね。瓦礫の下敷きになっちゃったの」

「……屋内に人がいる状況で使用した場合、『破城槌』は殺傷性ランクAに格上げされます。バトル・ボードの危険走行どころではない、明確なレギュレーション違反だと思いますが」

二人が話題にしている『破城槌』は『念爆』と呼ばれるPKの研究から開発された魔法で、

対象物の一点に強い加重が掛かった状態に対象物全体のエイドスを書き換える魔法。建物に使用される場合は壁の一面、天井の一面といった、少なくとも柱で区切られた「一つの面」として認識できる広さに干渉しなければならず、大きなキャパシティと強い干渉力が必要になる。

単に建物を破壊するだけなら、移動系魔法でハンマーを飛ばしたほうが簡単に済むという、難度の高い魔法だ。その能力に特化した魔法師でない限り、間違いで発動できるような代物ではない。

「そうね……いくら軍用の防護服を着けていたといっても、分厚いコンクリートの塊が落ちてきたんじゃ気休めにしかならないわ。それでもヘルメットと立会人が咄嗟に加重軽減の魔法を発動してくれたお陰で大事には至らなかったけど……三人とも、魔法治療でも全治二週間。三日間はベッドの上で絶対安静よ」

だがあくまで真由美は故意か事故かの判断を避けたいようで、話の方向性を微妙に逸らした。

「……想像以上に酷いようですね」

真由美の立場上、不用意な発言は出来ないということは良く理解できたので、達也もそれ以上の追及は控えることにした。

「ええ。不謹慎だけど、治療を見てて気持ち悪くなっちゃった」

本人の言うとおり、これは怪我人に対する問題発言だった。

まあ、それだけ真由美も動揺していて、それだけ達也に心を許しているということかもしれ

ない。

「しかし、状況が良く分かりませんね。三人が同じビルの中に固まっていたんですが？」

達也が気にすることではないかもしれないが、オフェンス一人とディフェンス二人、あるいはオフェンス二人とディフェンス一人に分かれる戦法が定石となっているモノリス・コードで、チームの三人が同一の攻撃で全員行動不能に陥るというのは、どのような状況だったのか少し理解しにくかった。

「試合開始直後に奇襲を受けたんだよ。開始の合図前に索敵を始めてなきゃできないこと。『破城槌』はともかく、フライングは間違いなく故意だと断言できる」

答えをくれたのは、憤懣遣る方無いといった雫の声だった。

「なるほど……そりゃあ、大会委員も慌てているだろうね」

「フライングを防げなかったから……ですか？」

人の悪い笑みを浮かべた達也に、深雪が首を傾げながら訊ねた。

素直な深雪には、達也ほど捩じくれた思考はできなかったようだ。

「それは大した問題じゃないよ。それより、崩れやすい廃ビルにスタート地点を設定したことが、今回の事故――と一応言っておくけど、事故の間接的な原因だと言えるからね。大会委員としては、このまま新人戦モノリス・コード自体を中止にしたいんじゃないかな」

「……そういう考え方もあるのですね」

達也の推理に、しみじみと頷く深雪。そこにすかさず、真由美が割り込んできた。
「確かに、中止の声もあったけど……結局、うちと四高を除く形で予選は続行中よ。最悪の場合、当校は予選二試合で棄権でしょうね」
真由美の言葉に、今度は達也が首を傾げた。
「最悪の場合も何も、選手が試合をできる状態ではないのですから、棄権するしかないと思いますが……」
「それについては、十文字くんが大会委員会本部で折衝中よ」
「はあ……」
九校戦では予選開始後の選手の入れ替えは認められていないが、相手の不正行為を理由に特例を認めさせる、ということだろうか。
しかし、モノリス・コードのチームは一年男子の実技成績上位者から選りすぐったメンバーだ。代わりを出しても、勝ち抜くことは難しい。それより不正が行われたことを理由に、モノリス・コードのポイントを全体のポイント集計から外させる方が有利なのではないか、と歯切れの悪い受け答えの裏で達也は思った。
達也が心の中でそんな腹黒い計算をしていることなど、真由美はもちろん知らない。
「――ねぇ達也くん、少し、相談したいことがあるんだけど」
真由美の声に媚びるような響きが混ざっていたのは、立て続けのアクシデントに不安を覚え、

無意識に依存の対象を求めているからに違いない。

現在進行形で妹からきつい視線を向けられている達也は、逃避気味にそう思った。——というより、この場合の睨む相手は真由美にしてもらいたかったのだが、そんなことは言えるはずも無かった。

「チョッと一緒に来てくれないかな」

他聞を憚る話、ということだろう。

きつい視線がデュエットになったが、達也は気付かないフリをして真由美の背中に続いた。

◇　◇　◇

奥に、と言っても仕切りはあるが天幕なのでそれは当然、布でしかなく、普通に考えれば遮音性など無いに等しいはずだ。しかしそこは世界の理を覆す魔法の領分、真由美はチョコチョコ、っという感じでたちどころに外界から音が遮断されたフィールドを作り上げた。

「見事な遮音障壁ですね」

「そう……？　フフッ、ありがと」

照れ笑いと共に真由美は腰を下し、達也にも椅子を勧めた。

「それで、早速なんだけど……」

「はい」

「……」

早速、と言いながら、真由美は中々話を切り出そうとしない。いつまでもここで二人きり、というのは色々と具合がよろしくないので、達也は自分の方から話を進めることにした。

「今回の件も、何者かの妨害工作と考えられるかどうか、ですか？」

「……ええ。そのことで、達也くんの意見を聞きたかったの。摩利の事件で、達也くんはCADに細工をされた可能性を指摘していたわよね？」

改めて問う真由美に、達也は「はい」と頷いた。

「今回も同じ手口だとすれば、四高の暴挙も説明がつくんだけど……どうすればそれを立証できると思う？」

「細工の現場を捕まえるしかないでしょうね」

「四高からCADを借りられたとしても……ダメかしら？」

「起動式を入れ替えた痕跡が残っていれば良いんですが……失格になった七高が沈黙しているところを見ると、期待できません」

「そっか……」

テーブルの上で指を組んだ両手に、真由美は視線を落とした。

期待を外してしまったな、と考えながらその姿を見ていた達也に、真由美は目を上げぬまま、

再度問い掛けた。

「……達也くんの考えているとおり、当校を標的とした妨害工作が行われているとして……目的は何だと思う？　遺恨かな？　それとも、春の一件の報復かな？」

なる程、真由美はそれを悩んでいたのか、と達也は思った。校内で暗躍していたテロリストを相手の本拠地まで乗り込んでいって退治した、あの一件の報復ではないか、と恐れているというわけだ。

達也はそれを打ち消す情報を持っている。この事件は彼らが潰したテロ組織「ブランシュ」の残党の仕業でもその協力組織の仕業でもないと知っている。彼が知っている事情を教えてやれば、真由美の心労を減らしてやることができる。

だがそれを彼女に明かして良いものかどうか、少しの時間、彼は迷った。

「……春の事件とは別口ですよ」

しかし結局、達也は手持ちのカードを一枚だけ切ることにした。

「えっ、何故そう言えるの？」

勢い良く顔を上げた真由美の反問は、そう言える根拠があって欲しい、という願望の反映。

達也にはそれを叶えることができる。だが同時に、全てを明かすことは許されていない。

「開幕前日……いえ、日付は変わっていましたか。とにかく開幕日直前の真夜中に、ホテルへ忍び込もうとした賊がいたんですよ。人数は三人、いずれも拳銃で武装していました」

「……初めて聞いたわ」

「口止めされていましたから。それで、たまたまその場に居合わせた俺は、賊を取り押さえるのに協力することになりまして……そいつらの素性も少しであれば知っています。香港系の犯罪シンジケートらしいですよ、今回の九校戦にちょっかいを出しているのは」

明らかにできない部分は、事実を使い、もっともらしい経緯をでっち上げて代用する。

真由美にそれを疑っている様子は無かった。

「偶然なのかもしれないけど……あんまり危ない真似はしないでね」

「どちらかと言えば、いつも巻き込まれている立場だと思うんですが」

肩をすくめる達也を真由美は疑わしげな目でジーッと見詰めていた。が、そんな場合ではないと、ほどなく自分で気がついたようだった。

「そっか……口止めされていたんでしょう？　教えてくれてありがとう」

「その代わり、他言は無用に願います」

「分かってる。約束します」

右手を上げて宣誓の真似をする真由美。

ナチュラルにお茶目なその仕草に、達也は危うく、噴き出すところだった。

「……重ね重ね不謹慎だけど、少し気が楽になっちゃった」

「……余所では聞かせられないセリフですね」

「大丈夫よ。達也くんの前でしかこんなことは言わないから」

はて、それはどう解釈したら良いのだろうか？　と達也は少し悩んでしまった。

先日の「気の置けない弟」発言をまだ引きずっているのだろうか？

相変わらず真由美の考えていることは、彼にとって謎が多かった。

◇　◇　◇

「首尾はどうだ？」

「予定どおりだ。第一高校はモノリス・コードを棄権するしかない」

横浜・中華街、某ホテル最上階。赤と金を基調とした派手な内装の大部屋で、茶器の並べられた円卓を五人の男が囲んでいた。

壁には、空中でうねり渦を巻く竜の胴体が金糸で刺繍された掛け軸。

「モノリス・コードは最もポイントの高い競技だ。新人戦のポイントは本戦の二分の一とはいえ、影響は小さくない」

男たちが一様に笑顔で頷く。しかしその顔色は芳しくなく、その笑みは強がり、あるいは空元気の色合いが濃いものだった。

◇　◇　◇

あの後、真由美に「一年生の女子に動揺が広がらないよう協力して欲しい」と言われてそのまま天幕に残った達也だが……具体的に何をすればいいか、彼には全く分からなかった。

そもそも女子選手のメンタルケアは、女子の上級生の役目だと思うのだ。

うっかり頷いてしまった自分の迂闊さに内心で臍を噛みながら、表面上「何事も無かったように」、決勝戦に備えたCADの調整に取り組んでいた。

ただそれだけなのに、彼はいつの間にか、一年生の女子選手に囲まれていた。

これは単に、彼の隣に一年生女子のリーダー格である深雪が貼り付いているからだ、と達也としては思いたかったが、生憎とそれを素で信じ込めるほど鈍感では無かった。

彼女たちの視線は、確かに彼へ向いていた。

色めいたものではない。それこそ、そんな勘違いをするほど自惚れてもいないし、そんな眼差しを向けられて全く気づかないほど枯れてもいない。

だが同時に、その意味が解らない程度には、彼は鈍感だった。

無言の視線に囲まれて非常にやり辛かったのだが、まさか威嚇して追い払うこともできない。無駄話を振られて邪魔をされているわけでもない。仕方が無いので彼女たちのことは気にし

ないことにして、彼はいつもどおり黙々と作業を進めた。
いつもと変わらない姿。
いつもと変わらないもの。
その価値を、彼は知らない。
万物流転の理を直視し続けることを、自らの能力により強制されている達也にとって、変わらぬものなど何一つ無いのだから。
だから、いつもと変わらぬ彼の姿に少し落ち着きを取り戻した少女たちの姿を見て、深雪が兄の代わりに微笑み、頷いていた。

彼の平常心——あるいは平常を演じる心——による精神安定の効果が最も大きかったのは、ほのかだった。
最初、森崎たちが「事故」に遭ったのを聞いて顔の色を真っ青にしていたが、何事も無かったかのようにブリーフィングを始めた達也を前に、見る見る落ち着きを取り戻した。
その変わり様に、今度は達也の方が不安を覚えたくらいだ。
「予選と戦い方が変わるわけじゃない。とにかく持久力勝負だからね、ミラージ・バットは」
もっとも、不安を覚えたからといって、今、何ができるわけでもない。
もうすぐ決勝戦なのだ。そんな時間があるはずは無かった。彼は不安を棚上げし、自分の心

を作戦に集中させた。

「気力で勝負、は厳禁だ。必要なのは、あくまで冷静なペース配分」

達也の眼差しを受けて、スバルが大袈裟に首をすくめた。

「余計な細工も無しだぞ、ほのか。練習でやってたみたいに、幻影魔法でダミーをばら撒くなんて、スタミナの浪費でしかないからな」

釘を刺されて、今度はほのかが首をすくめる。

「二人とも、自分の持ち味を出すことだけを考えていれば良い。大丈夫、それでワンツーフィニッシュはいただきだ」

達也の大胆な一位、二位独占宣言に、わずかな不安を残しつつ、それ以上の自信を与えられて、二人は嬉しそうに頷いた。

◇　◇　◇

真夏と言っても、一年で最も日が長い時期は過ぎている。

夜七時となれば、日はすっかり落ちきり、青空は星空に変わっていた。

湖面が、照明の光を反射してキラキラと煌めいている。

その中に点在する、足場となる円柱に立つ六人の少女。

身体の線を際立たせる薄手のコスチュームは不思議と生々しさが無く、水面に揺らめく光の中で妖精郷の趣を醸し出していた。——男性ファンが多いのも宜なるかな。

ミラージ・バットは、地上十メートルに投影される立体映像の球体を専用のスティックで叩いて消し、その数を競う競技だ。

ただし叩くといっても手応えは無いし、球体が割れたり散ったりするわけでもない。

選手の持つスティックが出す信号と球体の投影位置を演算機で分析し、両者が重なった時点でその球体の投影が終了しスティックの信号から選手が判別されてポイントが加算される、という仕組みだ。

この競技に勝利する為のスキルは二つ。

如何に速く球体の投影位置まで跳び上がるか。

如何に早く球体の投影位置を把握するか。

この二つのファクターのうち、二番目のファクターは意外に見落とされがちだ。光より速いものは無いのだから、立体映像の光を確認してから動くのが結局は一番早い、と考えられているから、だが——ここにも例外がある。

空中立体映像は、結像するまでにコンマ数秒のタイムラグがある。この結像中の光波の揺らぎを知覚できれば、実際の光を確認するより早く光球の位置を把握することができる。

光波に——正確には、光波の発生を意味するエイドスの変化に鋭敏なほのかの感覚は、予選

に続いてこの決勝でも、彼女に大きなアドバンテージを与えていた。
頭上に赤い球体が結像する一瞬前に、ほのかの術式が発動した。
他の選手は諦めを以てそれを見送っている。
次の光球が結像した。
色は青。光っている時間が最も長く、その分、最もポイントをゲットしやすい球体だ。
五人の選手が一斉に起動式の展開を始める。
最初に跳び上がったのは、スバル。
同時に起動処理を始めて、その処理が最初に完了するのは常に第一高校の二人だった。
同じフィールドで競い合っている選手よりも、フィールドの外でそれを見ていた技術スタッフが歯を食いしばり、あるいは唇を噛み締めている。
ここまで安定的に差が生じている以上、ＣＡＤの性能差を認めぬわけにはいかないからだ。
とはいっても、各校ともレギュレーションの上限ギリギリの機種を選んでいるはずだから、ハード面の性能は同じ。
残るは、ソフト面の性能差。
エンジニアの腕の違い、ということになる。
「クソッ、何であんなに小さな起動式で、あんなに複雑な運動ができるんだ！」
どこかで、そんな声が上がった。キルリアン・フィルター（想子の濃度と活性度を可視化す

る為のフィルター）付きのカメラで、ほのかやスバルの起動処理（起動式の展開から読み込みまでの処理）を撮影していたのだろう。

一直線に――重力加速度の影響を無視して――立体映像へ向かって飛び、光球の前で静止、得点後に放物線を描いて足場へ戻り、慣性をキャンセルして着地。

この一連の運動中、ほのかもスバルも一度もCADを操作していない。それはつまり、跳び上がる時点で使用した起動式に、着地までの工程が全て記述されているということだ。

起動式が小さいほど、起動処理は早く終わる。

起動処理の回数が少なければそれだけ、魔法師の負担は軽くなる。

最小の魔法力で、最速の事象改変。

「まるで、トーラス・シルバーじゃないか！」

誰かが、舌打ち混じりにぼやいた。

「あーちゃん、どうしたの……？」

あずさがハッと振り向くと、目を見開いて突然硬直してしまっていた彼女自身を、真由美が不思議そうに見ていた。

「いえ……何でもありません」

俯いて縮こまるあずさに、「そう？」と応えて真由美は観戦に戻った。

あずさのこういう反応はいつものことだから、あまり気にならなかったのだろう。
だがあずさの心中は、いつもと違って、羞恥心とは別のもので占められていた。
（……まるで、「トーラス・シルバー」みたい？）
先程、誰かがぼやいた声。
歓声と悲鳴に紛れたその言葉が、あずさの耳には何故かハッキリと響いた。
（あの起動式の完全マニュアルアレンジ……汎用型のメインシステムと特化型のサブシステムをつなぐ最新研究成果の利用……汎用型CADにループ・キャストを組み込んだ技術力……『インフェルノ』……『フォノンメーザー』……『ニブルヘイム』……どれも起動式が公開されていない高等魔法のプログラム……）
同じ魔工師を目指す者として、この大会で度肝を抜かれ続けた数々の「離れ業」が、あずさの脳裏をグルグルと駆け回る。
（まるで？　トーラス・シルバーみたい？
ううん、これって……トーラス・シルバー本人じゃなきゃ不可能なんじゃ……）
――俺たちと同じ日本人の青少年かもしれませんね――
不意に、あずさの記憶の中から、彼の声が聞こえた。

「……ホント、どうしたの？　具合が悪いんだったら休んでてもいいのよ？」

「いえ、本当に、何でも……」

いきなり跳び上がったあずさを怪訝と心配が綯い交ぜになった眼差しで真由美は見詰めていたが、あずさにそれ以上の取り繕う余裕は無かった。

記憶の中から蘇った声。もしかしたらあれは、推測なんかじゃなくて……

（まさか？　まさかまさか？　まさかまさかまさか？）

そのフレーズだけが、今のあずさの意識を占めていた。

遠ざかった現実の中で、二人の下級生が圧倒的リードを奪って、第一ピリオドの終了を迎えていた。

◇　◇　◇

結局、新人戦ミラージ・バットは達也が予言したとおり、ほのか、スバルのワンツーフィニッシュで幕を閉じた。その試合が終わってすぐ、優勝の喜びを分かち合う間も無く、達也はミーティング・ルームへと呼び出されていた。

そこでは、完全にたがの外れた狂躁状態となった同級生（の女子）とは対照的な、抑制の効いた感情さえも改まった表情の下に隠した上級生が達也を待っていた。

真由美、摩利、克人、鈴音、服部、あずさ。
第一高校の幹部が勢揃いしている。
他にも桐原や五十里の顔が見える。
重傷者を出したばかりだから立場上喜びを表に出すことはできないのだろうが、それにしても、彼ら（彼女たち）は少し表情が硬すぎるように見える。特に服部は、表情の選択に窮するあまり自分の顔で仮面を作って被った、とでもいえそうなコチコチの表情になっている。
あまり愉快な話ではなさそうだと判断して、達也は心の中で身構えた。
「今日はご苦労様。期待以上の成果を上げてくれて感謝しています」
真由美が随分と格式張った――というより形式張った言葉を掛けてきた。
彼女がその言葉を発する前に、克人と瞬きほどの目配せを交わしていたのを、達也は目敏く見留めていた。
「選手が頑張ってくれましたので」
達也も無難に形式的な答えを返す。こういう緊張感は、入学直後以来久し振りだった。
「もちろん光井さんも里美さんも他のみんなもそれぞれに頑張ってくれた結果です。
でも、達也くんの貢献がとても大きいのは、ここにいる全員が認めているわ。
担当した三競技で事実上無敗……現段階で新人戦の二位以上のポイントを確保できたのは、達也くんのお陰だと私は思っています」

「……ありがとうございます」

達也は少し間をおいて、控え目に頭を下げた。

そして視線を合わせぬまま、次の言葉を待った、が、真由美は中々本題に入ろうとしない。

達也がソロリと目を上げると、真由美が克人を目で抑えていた。

どうやら言いにくい話を、克人が代わりに切り出そうとした様子だ。

ここまで躊躇わなければならない話とは、一体何なのだろうか。

達也が自分を観察しているのに気付いて、真由美は観念したように少し長い瞬きをした。

「今も言ったとおり、モノリス・コードをこのまま棄権しても新人戦の準優勝は確保できました。現在の二位は第三高校で、新人戦だけで見た点差は五十ポイント。モノリス・コードで三高が二位以上なら新人戦は三高の優勝、三位以下なら当校が優勝です」

では、新人戦でポイントを引き離されないという、総合優勝の為の戦略目標は達成したことになる。

それなのに彼女たちは、一体全体、何をそんなに緊張しているのだろうか。

それに、自分は何の為にここへ呼び出されているのだろうか。

達也はいい加減、気持ちが焦れていた。

「新人戦が始まる前は、それで十分だと思っていたのだけど」

彼が気分を害し始めているのが、真由美にも分かったようだ。取り繕っていた表情に、軽い

狼狽の色が混入した。焦りを浮かべ、慌てた声で、
「ここまで来たら」
それでも仕切り直しはせず、一気に言い切ろうとする姿勢が見える。
この段階で、達也はようやく彼女たちが自分に何をさせたいのかを悟った。
「新人戦も優勝を目指したいと思うの」
いつの間にか真由美の口調が、いつもの話し方に戻っていた。
「三高のモノリス・コードに一条将輝くんと吉祥寺真紅郎くんが出ているのは知ってる？」
真由美に問われ、達也は一言、「はい」と答えた。
「そう……一条くんの方はともかく、吉祥寺くんのことは達也くんの方が詳しいかも知れないわね。あの二人がチームを組んで、トーナメントを取りこぼす可能性は低いわ。モノリス・コードをこのまま棄権すると、新人戦優勝は、ほぼ不可能です」
だから、彼に――
「だから達也くん……森崎くんたちの代わりに、モノリス・コードに出てもらえませんか」
――真由美から告げられた「用件」は、達也が途中から予想したとおりのものだった。
「……二つほど、お訊きしてもいいですか？」
「ええ、何かしら」
答えは九割方分かっていたが、一応、ハッキリさせておこうと達也は思った。

「予選の残り二試合は、明日に延期された形になっているんですね？」
「ええ、そのとおりよ。事情を鑑みて、明日の試合スケジュールを変更してもらえることになっています」
「怪我でプレーが続行不能の場合であっても、選手の交代は認められていないはずですが？」
「それも、事情を勘案して特例で認めてもらえることになりました」
これまた、予想どおりの答えだった。
しかし、予想どおりの事情だからといって、受け容れられるかどうかは別問題だ。
「……何故自分に白羽の矢が立ったのでしょう？」
これは質問ではなく、遠回しな拒絶。上級生に対する儀礼上、「否」を返さないだけだ。
達也がこう出るのを半ば予想していながら、説得の方策を考えつかなかったから、真由美は中々用件を言い出せなかったのだろう。今も彼女は、困り顔に愛想笑いを浮かべている。
「達也くんが最も代役に相応しいと思ったからだけど……」
「実技の成績はともかく、実戦の腕なら君は多分、一年生男子でナンバーワンだからな」
ここまでの話を全て真由美に任せていた摩利が、真由美の歯切れが悪い回答に形勢不利と見たのか、「説得」に加わってきた。
「モノリス・コードは『実戦』ではありません。肉体的な攻撃を禁止した『魔法競技』です。こんなことは自分が指摘しなくとも、ご理解されているはずですが」

それでも、達也を沈黙させるには及ばない。

「魔法のみの戦闘力でも、君は十分ずば抜けていると思うんだがね」

摩利がチラッと服部に視線を投げ、服部は苦虫を嚙み潰した表情に顔を顰めた。

かなり非情な、それだけに効果的な説得術で、達也もそれ以上「力不足」を口実に唱え続けることはできなかったが、彼の手札はそれだけではなかった。

「しかし、自分は選手ではありません。代役を立てるなら、一競技にしか出場していない選手が何人も残っているはずですが」

今度は摩利からも、反論がなかった。

「一科生のプライドはこの際、考慮に入れないとしても、代わりの『選手』がいるのに『スタッフ』から代役を選ぶのは、後々精神的なしこりを残すのではないかと思われますが」

それは多分、彼女たちが最も悩み、最も言われたくなかった部分。

新人戦は新入生の育成という性格が強い。例え今年優勝できたとしても、来年・再来年の本戦に悪影響があるようでは、ある意味本末転倒だ。

メイン競技の代役にスタッフ、しかも二科生が選ばれたとなれば、残っている選手だけでなく、一年生一科生全体のプライドが、ズタズタに切り裂かれることにもなりかねない。

真由美たちから反論はない。どうやらこの話はこれで終わり、と判断して、達也がキッパリと辞退の言葉で締め括ろうとした、その時。

「甘えるな、司波」

克人のズッシリと重みのある声が響いた。

達也は咄嗟に応えを返すことができなかった。

何を言われたのか、理解できなかったからだ。

彼が口にしたのは確かに、正論に包んだ逃げ口上だが、正論であることも間違いないはずだ。

彼が出れば、三高には勝てなくても、二位にはなれるかもしれない。

モノリス・コードの一位と二位のポイント差は四十点。二位になれば、新人戦は優勝できる。

しかしその場合、新人戦優勝の立役者は誰が見ても達也だ、ということになってしまう。

それは、薄っぺらいエリート意識に凝り固まった一科生にとって、受け容れ難い結果に違いなかった。例え予選敗退という結果に終わったとしても、彼が、二科生がモノリス・コードの代表選手として出場するということ自体、彼らには耐え難いはずなのだ。

「お前は既に、代表チームの一員だ」

しかし、克人の指摘は、達也の思考のエアポケットを直撃するものだった。

「選手であるとかスタッフであるとかに関わりなく、お前は一年生二百名の中から選ばれた二十一人の内の一人」

言外に、克人は言う。

彼の、達也の存在は、既に一科生の精神に大きな衝撃と混乱を与えている、と。

「そして、今回の非常事態に際し、チームリーダーである七草は、お前を代役として選んだ。チームの一員である以上、その務めを受諾した以上、メンバーとしての義務を果たせ」

「しかし……」

しかし、それでも言わずにはいられない。それで、彼らが……

「メンバーである以上、リーダーの決断に逆らうことは許されない。その決断に問題があると判断したなら、リーダーを補佐する立場である我々が止める。我々以外のメンバーに、異議を唱えることは許されない。そう……本人であろうと当事者であろうと、誰であろうと、だ」

達也は目を瞠って、言いかけたセリフを中断した。

克人が何を言っているのか、達也にもやっと理解ができた。

克人は、誰が納得しなかったとしても、どのような結果に終わったとしても、その責任は全て責任者である自分たちが負うと、そう言っているのだ。

「逃げるな、司波。例え補欠であろうとも、選ばれた以上、その務めを果たせ」

このセリフは、九校戦のみを念頭に置いたものではなかった。元々九校戦には、補欠という制度は無いのだから。

――二科生であることを逃げ道にするな。

――言い訳にするな。

――弱者の地位に、甘えるな。

補欠であっても、とは、そういう意味だ。補欠であっても、という意味を含んだ言葉だ。

逃れる道は、全て塞がれてしまった。

また――ここまで言われて、逃げるつもりもなかった。

「分かりました。義務を果たします」

真由美と摩利の顔が安堵に弛んだ。

克人はしっかりと頷いた。

「それで、俺以外のメンバーは誰なんでしょうか」

上級生を前にして、少し砕けた口調になったのは意識してのこと。

と言うより今までが、いつもより堅い口調を意識して作っていたのだった。

「お前が決めろ」

「はっ……？」

達也は別に、とぼけたわけではない。またしても、何を言われたのか理解できなかったのだ。

「残りの二名の人選は、お前に任せる」

同じ内容の指示を違うセリフで下して、克人は言うべきことを今この場で思い出したように付け加えた。

「今この場で決めるのが望ましいが、時間が必要なら一時間後にまたここへ来てくれ」

克人の言葉を聞いて、達也は反射的に「相変わらずだな」と思った。

四月、「ブランシュ」のアジトに突入した時もそうだった。下級生に決定権を委ねてまるで気にした様子が無い。

これで責任まで押し付けるのであれば単に姑息な保身の為の遣り口だが、克人の場合は責任だけを手放さないのだ。リーダー教育の成果、というより、これは天性のものだろうな……そんなとりとめも無い思惟を振り払って、達也は問われた事に意識を戻した。

「いえ、選ぶだけなら時間をいただく必要はありませんが……」

達也の脳裏には既に、二人の候補者がリストアップされていた。

「相手が了承するかどうか」

「説得には我々も立ち会う」

……つまり、拒否はさせないということだ。

十文字家の総領は、実はかなり強引な性格だということを、達也は今日初めて知った。

「誰でも良いんですか？　チームメンバー以外から選んでも？」

達也は何だか、愉快な気分になってきた。存分に悪ノリしてみたくなる気分だった。

「えっ？　それはチョッと」

「構わん。どうせ例外に例外を積み重ねているのだ。あと一つや二つ、例外が増えても今更だ」

「十文字くん……」

真由美が呆れ顔で軽い非難の目を向けたが、克人の顔面筋は小揺るぎもしなかった。

「では、一―Eの吉田幹比古と、同じく一―Eの西城レオンハルトを」

「おいっ、司波!?」

慌てた声で服部が口を挟もうとしたが、鈴音に手振りで制止される。

「良いだろう。中条」

「は、はいっ！」

過剰な反応を見せたあずさにも、克人は全く気にした様子を見せなかった。

「吉田幹比古と西城レオンハルトをここに呼んでくれ。確かその二人は、応援メンバーとは別口で、このホテルに泊まっていたはずだ」

豪放で大胆に見えて――実際そのとおりなのだろうが――こんな細部まで良く知っているものだ。まあ、この時期に正規メンバーでも応援メンバーでもない生徒がこのホテルに宿泊しているというのはかなり異例なことで、そういう事情を知っている者にとっては目につく事ではあろうから、知っていたとしても不思議ではないのだが。それでも達也は克人にすっかり感心してしまっていた。

「……達也くん。その人選の理由を訊いても構わないかね？」

摩利も克人に説得を任せた以上、今更異議を唱えるつもりもないのだろう。

ただ、納得できない、というより不審を覚えていることも間違いないようだった。
「無論です。最大の理由は、俺が男子メンバーの試合も練習もほとんど見ていないということです」
達也は女子のメンテに掛かりきりで、事実全く、男子一年生メンバーの試合も練習も見ていない。
「俺は彼らの得意魔法も魔法特性も何も知りません。試合は明日です。一から調べていたのでは、作戦も調整も間に合わない」
「……今の二人なら、良く知っているということか？」
「ええ。吉田と西城のことは、同じクラスであるというだけでなく、良く知っています」
「ふむ……一理ある。調整は他のエンジニアが手伝うとしても、相手のことが分からなければチームプレイは難しいだろうからな」
思案顔で頷いていた摩利が、ここで不意に、人の悪い笑みを浮かべた。
「それで、最大でない理由は何かね？」
摩利の意味ありげな問い掛けに、達也はわずかな躊躇も無く、端的な答えを返した。
「実力ですよ」
「ほう？」
その自信に満ちた回答に、摩利だけでなく、真由美からも、克人からも、鈴音からも、興

味深げな視線が達也へ向けられた。

◇　◇　◇

「なあ、達也……マジ？」

訝しげ、というよりどこか途方に暮れた顔で何度も同じ事を問うレオに、

「七草会長ならともかく、十文字会頭がこんな手の込んだ嘘をつくと思うか？」

達也の答えは段々突き放した感じのものになっていた。

「いや、会長さんならともかく、ってのも俺には良く分からんのだけどよ……はぁ、やっぱりマジか」

今にも自分の頬を抓り出しそうな勢いで、レオが深いため息をついた。

その隣では幹比古が、所在なげにそわそわと視線をさまよわせている。

「ミキ、チョッとは落ち着いたら？」

「僕の名前は幹比古だ」

エリカといつものお約束をこなして少しは気が紛れたのか、幹比古は空いているベッドにどっかりと腰を下ろした。

ここは達也が使っているツイン・シングル。幹部総出で二人に代役を引き受けさせた後——

あれはもう、ほとんど強制だった――今後の段取りを説明する為に、達也が二人を引っ張ってきたのだ。

そこにエリカや美月がついて来ているのはそれこそ「お約束」だろう。

なお深雪とほのかと雫は、英美やスバルや他のメンバーに捕まって狂躁の輪の中から抜け出せずにいた。

「でもよ……俺も幹比古も、なーんも準備してないぜ？」

「そうだね……ＣＡＤはおろか、僕たちは着る物も用意していないよ？」

幹比古は顔色が少し、蒼褪めている。突然の抜擢に、二科生の自分が新人戦の選手に選ばれたという思い掛けない出来事に、戸惑い、怖じ気づいているのだろう。幹比古本人は自分が怯懦を覚えているなど決して認めようとしないに違いないが。

レオは顔の色こそ普段どおりだが、いつもの不敵な表情が影をひそめている。見るからに気が乗らない、という感じだ。

幹比古はともかく、レオが弱気な姿勢を見せているのは達也にとって予想外だったが、だからといって巻き込むのを中止するつもりは毛頭無かった。自分だけが苦労するなど、達也にとっては論外だったのだ。

「安心しろ。試合用の服を準備していないのは俺も同じだ」

「いや、それ、不安にしかならんのだけど」

すぐさまツッコんできたレオに向かって、達也はヒラヒラと手を振った。
「安心しろ。それが無理なら、心配するな」
「やっ、それ、同じだから」
今度の打てば響くツッコミは、エリカのもの。
やはりこの二人は、息がピッタリだな、と達也は思った。
「まあ、そうだな。つまり、同じことしか言えない、ってことだが……大丈夫だ。防護服とアンダーウェアは中条先輩に頼んである。ああ見えて中条先輩は、段取りの良い人だからな。抜かりなくジャストサイズの物を揃えてくれるさ」
ああ見えて、に反論は無かった。外見に反してしっかり者、という評価に異論は無いようだ。
「CADは俺が準備する。一人一時間でバッチリ仕上げてやる」
CADを白紙の状態から魔法師個人に合わせて使用可能な状態まで調整する為には、通常その三倍の時間が必要と言われている。
だが、レオにも幹比古にもあまり驚いた様子はなかった。
一つにはこの「一時間」の凄さが良く分かっていないということもあるのだろうが、この四日間で散々「ビックリ箱」を見せられた所為で、「達也なら何でもアリかな」という気持ちが生まれているのだった。
「大丈夫？　もう九時だよ？　自分のもあるでしょう？」

この四人の中では最もＣＡＤの調整の手間を知っているエリカが、唯一、心配そうな顔で問い掛けてきたが、

「大丈夫だ。自分のなら、十分で終わる」

どうやらそれは、杞憂だったようだ。彼の規格外の加減を改めて思い知らされることになって、エリカは盛大にため息をつくこととなった。

「十分間ね、そう、十分……。何だか心配するのがバカバカしくなってくるわ」

「残念ながら、それほど余裕があるってわけでもないんだ、実のところ」

「えっ？」

しかし、エリカが半ば演技で作っただらけた顔は、達也が珍しく漏らした弱音に、キュッと音が聞こえそうなくらい迅速に引き締まった。

「何せ急な話なんで、作戦らしい作戦も立てられない。練習する時間なんてあるはずもないから、ぶっつけ本番で行くしかない。大雑把な段取りをつけて後は出たとこ勝負なんて、力ずくと変わらない。俺にとっては、不本意な条件ばかりだよ」

達也の口から零れたものは、弱音と言うより愚痴だった。

エリカは硬く引き締めていた表情を緩めて、大袈裟に頷いた。

「……そっか。悪知恵が達也くんの持ち味だもんね」

「酷いな、その言われようは」
あえて偽悪的な表現を使ったエリカに、達也はフッと肩の力を抜き、ついでに顔面筋の力も抜いた。
「さて……決まってしまったことを愚痴っていても何一つ片付かない。市原先輩と中条先輩が必要な機材を揃えてくれている間に、作戦の打合せを終わらせておこう」
「作戦、立てられないって言ったクセに」
すかさず揚げ足を取りに掛かったエリカの前に、美月が沈鬱な表情で立ち塞がった。（と言うか、単に目の前に立っただけだが）
「エリカちゃん……せめて、達也さんの邪魔をするのは止めようよ」
「ひどっ！　美月、あたしはこの重た～い空気をどうにかしようと思って……」
「ハイハイ、その重た～い空気がハッチャケて散り散りになる前に、少し静かにしていようよ。時間が無いって言ったの、エリカちゃんだよ」
美月も最近ようやく、この友人の扱いのコツが分かってきたようで、以前のように振り回されてオロオロ、ということも少なくなっていた。
「むぅ……」
軽くあしらわれて頬を膨らませたエリカだが、さすがにそれ以上茶々を入れようとはしなかった。何を言ってもどういう態度を取っても、彼女は結局の所、達也とレオと幹比古が心配に

なって、この場にいるのだから。
「まずフォーメーションだが」
達也も今の茶々を無かったこととして話を進め始めた。
「オフェンスが俺、ディフェンスはレオ、幹比古は遊撃を頼みたい」
「いいぜ。けどよ、ディフェンスって、何すりゃ良いんだ？」
「僕も訊きたいな。遊撃って？」
レオと幹比古の二人も、ここに至り観念したのだろうか。それとも、血が騒ぎ始めたのだろうか。単に開き直っただけ、という可能性が最も高かったが、理由はどうあれ打って変わった積極姿勢に、説明する達也の舌も滑らかになっていく。
「ディフェンスは、自陣のモノリスを敵の攻撃から守る役目だ。モノリス・コードの勝利条件は知ってるだろ？」
この質問には、レオが少し、自信なさげに答えた。
「相手チームを戦闘続行不能にするか、モノリスに隠されたコードを端末に打ち込むか、だよな？」
「ああ。それで、隠されたコードを読み取る為には、無系統の専用魔法式をモノリスに撃ち込まなきゃならない。専用の魔法式が鍵になっていてモノリスが二つに割れるんだが、一旦分割されたモノリスを魔法でくっつけることは禁止されている。だが、モノリスの分割を魔法で阻

止することは禁止されていない。また、専用魔法式の最大射程は十メートルに設定されていて、それ以上の距離で発動させても、鍵として機能しないようにプログラムされている」

「……ってことは、ディフェンスの役目は敵のチームをモノリスから十メートル以内に近づけないこと、鍵の魔法式を撃ち込まれてもそれでモノリスが割れないように押さえておくこと、モノリスを割られてもコードを読み取られないよう敵の邪魔をすることの三つか？」

「満点だ」

レオの問い掛けに、達也は満足げな頷きを返した。

「普通は対抗魔法で『鍵』の発動を阻止するんだが、例の使い方で硬化魔法でもモノリスの分割を阻止できる。正確には、割れてしまってもくっついたまま、の状態を作り出し維持することができる。これなら、割れてしまったモノリスを再びくっつけることにはならないから、ルール違反は取られない」

レオはまず呆れ顔を浮かべ、その後すぐに胡散臭そうな目を達也に向けた。

「言いたかないけど、達也、それは立派な『悪知恵』だぜ……？」

しかしこの程度の嫌味で（といっても友人同士の冗談だが）、達也を畏れ入らせることはできない。

「レオはエリカと同じことを言うんだな」

動揺し、叫び声を上げたのはレオの方だった。

「止してくれよ！」
「どーゆう意味よ！」
すかさずエリカが連鎖反応を起こす。
「ハイハイ、エリカちゃん、抑えて抑えて。レオくんも落ち着いてください」
美月の仲裁によって、二人はすぐさま、ぶつけ合った視線を逸らした。
「……『鍵』の方は理解できたけどよ。敵を撃退する方は、どうすりゃ良いんだ？」
気を取り直したレオが、質問を続行する。
「殴るのも蹴るのもダメなんだろ？　自慢じゃないが、遠隔攻撃魔法は苦手だぜ、俺」
「これを使う」
そう言いながら達也が取り出したのは、レオを実験台にした、あの「剣」だった。
「……でもよ、物理的な打撃は禁止されてるんじゃなかったっけ？」
レオがそう言うと、達也は薄い小冊子を差し出した。
「パンフレット？」
それがどうしたんだ？、と問う前に、ページの角が一枚、折ってあるのに気付いて、レオは質問の代わりにそのページを開いた。
「モノリス・コードのルールか……？」
そのページは、モノリス・コードについて、予備知識の無い者に向けた簡単なルール解説と、

試合の様子が写された写真が印刷されていた。

「そこに書かれてあるとおり、質量体を魔法で飛ばして相手にぶつける攻撃はルール違反にならない」

「質量体を魔法で飛ばして……って言や、そうか」

この「剣」の動作は、ブレードの半ばから切り離した剣先が柄の動きに連動して空中を移動するという形態を取る。魔法のシステム的に言えばブレードを中抜きの状態で伸ばしていると表現するのが適切だが、表面的には半ばから折れた剣先が飛び回っているように見える。物質的につながっていない以上、「質量体を魔法で飛ばす」という条件を満たしている。

「じゃあ達也、そこまで考えてソレを作ってたのか？」

レオの結構本気な質問に、達也は苦笑しながら首を振った。——無論、横に、である。

「どうも買い被られてる気がするな……これは単に思いつきで作った物だ。俺はそこまで、いつもいつも悪企みばかりしているわけじゃないぞ」

レオもエリカも、この言い分に納得していないのは何となく分かったが、時間が惜しかったので達也は無視することにした。

「この武装デバイス——『小通連』には、レオの個人設定を済ませてある。この前言ってた分離距離と持続時間の変数化も処置済みだから、操作を間違えないでくれよ」

「うへぇ、ブッツケ本番かよ」

「明日は全部ぶっつけ本番みたいなものだ」

一呼吸、言葉を切って、達也は思わせ振りにニヤリと笑った。

「それに、この前より格段に使い易くなったのは保証するぞ」

「まっ、だったら大丈夫かね」

達也の悪役チックな笑顔に不敵な表情で応えて、レオは『小通連』を受け取った。

「次に幹比古の役目だが……」

「そうだよ、達也、僕は何をすれば良いんだい？」

幹比古がベッドの上で身を乗り出してきた。最初は明らかに戸惑っている様子だったが、幹比古は随分前向きに、あるいは、やる気になっているようだ。少しくらい血気に逸るくらいの方がこの状況では望ましいので、達也はその点については何も言わずに説明に移った。

「遊撃はオフェンスとディフェンス、両方を側面支援する役目だ」

簡潔に回答し、達也は逆に、質問に転じた。

「この前の雷撃魔法、あの種類の遠隔魔法は他にも持っているんだろう？」

「それは、まあ……」

幹比古の返事は歯切れの悪いものだった。

古式魔法を伝承する家では、自分たちが保有する魔法技能を秘匿しようとする傾向が強い。

現代魔法学の下で魔法の分類と体系化が進んだ現状において、その意味は一部の特殊な魔法

を除いて形式的なものとなっていたが、すり込まれた価値観が無意識の行動に色濃く反映し続けているということだろう。

しかし明日はチームを組んで戦うのだから、今は正直になってもらわなければ困るのだ。

「あの雷撃魔法は殺傷性ランクCだよな？」

「……あれはあくまで麻痺させることが目的の魔法だからCランク相当だよ。公開していないからランク表には載ってないけど」

「非公開か……じゃあ、明日使うのはまずいんだろうな？」

「いや……構わない。秘密にしているのは魔法そのものの原理じゃなくて発動過程だから。呪符じゃなくて、CADで発動すれば問題ないよ。……達也」

「何だ？」

「達也は……言ったよね？　僕の……吉田家の術式には無駄が多くて、その所為で僕は魔法が思うように使えていないって」

「ああ」

エリカが目を丸くして見詰めている横で、達也は躊躇無く——あるいは、遠慮無く、頷いた。

美月は、両手で口を押さえていた。

レオですら、絶句していた。

古式魔法の名門が、長い年月を掛けて練り上げた術式を「欠陥品」と断ずるなど、余程の自信がなければできることではない。

あるいは、我流が最高と思い込んでいる井の中の蛙、身の程を弁えない浅慮者か。

達也は、後者とは思えない。

「……じゃあ、達也は僕に、もっと効率的な術式を教えてくれるのかい？」

「教えるんじゃない。アレンジするんだ」

「……ゴメン、違いが分からない」

よく見ると、幹比古の両手は強く組み合わされ、微かに、だが確かに、震えていた。

「例えばあの雷撃魔法、多分『雷童子』の派生形だと思うが、俺にできることは、あの術式に含まれた無駄を削ぎ落とし、より少ない演算量で同じ事象改変効果を得られる魔法式が構築できるよう起動式を組み直すだけだ。使う魔法はあくまで、幹比古が前から知っていた魔法だ」

「……見ただけで分かるっていうのは本当なんだね。確かにあれは『雷童子』の派生形。術の弱点を衝かれないように、術の正体を分かりにくくする偽装が施されている。でも多分それが、達也の言う無駄につながっているんだろうね」

「長い呪文を必要としていた頃なら、施術の途中で妨害される可能性に対する備えも有効だろう。しかしＣＡＤで高速化された現代魔法では、術式が固有に持つ弱点につけ込むという対抗手段は、起動式の段階で魔法の種類を判別できない限り、ほとんど意味がない。魔法式から術

式を認識して、対抗手段を選択している内に、術式が発動してしまうからな。現代魔法に対して本当に有効な対抗魔法は、魔法の種類を問わずその効力を打ち消すものだけだ」

幹比古が小さく吹き出した。

その笑いには不思議と、自嘲の色は無かった。

「ハハッ、なるほど……威力では勝っているはずの古式魔法が、現代魔法に敵わないわけだ」

「それは違うぞ、幹比古」

「えっ？」

「古式魔法と現代魔法に、優劣は無い。それぞれに長所と短所がある。単に正面からぶつかり合えば、発動速度が圧倒的に勝っている現代魔法に分があるというだけで、知覚外からの奇襲ならば古式魔法の威力と隠密性に軍配が上がるだろう。九島閣下も仰っていたじゃないか。要は、使い方だ。そして俺がお前を推薦したのは、お前の持つ魔法の奇襲力が大きな武器になると考えたからだ」

「奇襲力ね……そんなことを言われたのは初めてだよ」

幹比古は瞼を閉じてしみじみと呟いた後、迷いを振り払うように目を開いた。

「分かった。僕が使える術式は、呪符だけじゃなくてＣＡＤにも一応プログラムしてあるから、達也が思うとおりにアレンジしてよ。僕は、達也を信じることにするから」

「ありがとう、幹比古。信じてくれたついでに、もう一つ、教えて欲しいことがある」

「良いよ。必要なことなんだろう？　だったら隠すつもりはない。僕をここに送り込んだのは父上なんだから、こういう経緯で秘密が漏れても、家として文句は言えないはずだ」
「安心してくれて良い。口は堅い方だ」
「あ～……俺も口は堅い方だ。ここで聞いたことは他言しないと約束するぜ」
「私もです」
「あたしが口、堅いの、知ってるでしょ？」
それまで黙って聞いていた達也以外の同席者が、競うように口の堅さをアピールした。
最後の一人については、胡散臭げな眼差しを向けた幹比古だったが、感情を理性で納得させて、達也へ向け頷いた。
「じゃあ手短に訊くぞ。『視覚同調』は使えるか？」
答えに少し、間があったのは、躊躇いによるものではなく、驚きによるものだった。
「……そんなことまで知ってるのかい？　九重先生はそんなことまで君に教えているの？」
「まあな」
「……つくづく君には驚かされるよ、達也。えっと、質問の答えはＹＥＳだ。『五感同調』はまだ無理だけど、一度に二つまでなら『感覚同調』を使える」
「視覚だけで十分だよ、幹比古。じゃあ、作戦だが……」
達也が特に声をひそめたわけではなかったが、幹比古は自然に、耳をそばだてる姿勢になっ

ていた。

達也が自分で宣言したとおり、レオのCADの調整は一時間も掛からず終了した。

調整し直した自分のCADと武装デバイスの二つを受け取ったレオは、小通連の慣熟訓練の相手を買って出たエリカと一緒に、野外演習場へ向かった。

随分遅い時間だが、レオが一緒なら間違いも起こらないだろうし間違いも起こさないだろうと、達也も妥協したのである。

そして今、幹比古用のCADを猛スピードで調整している達也の隣で、あずさがそれを、呆然と見詰めていた。ユーザーとして同席している幹比古も、その独特の調整方法とタイピングのスピードに目を丸くしているが、あずさがショックを覚えているのは、そんな表面的な部分ではなかった。

今、達也が扱っているのは、古式魔法の伝統的な術具で発動することを前提に組み立てられた術式を、現代魔法用にアレンジした起動式。その「翻訳」はお世辞にもスマートなものではなく、自動翻訳のぎこちなさに似た細かな無駄と細かな間違いがそこそこに散らばっている。

それを修正するだけなら、あずさにもそれほど難しくはない。

だが彼女の目の前で展開されているアレンジは、本格的な起動式の書き換えだった。

起動式から魔法式の作動原理を理解し、魔法式の機能を損なわない形で起動式を書き換える。

起動式は、魔法式の設計図。起動式を書き換えるということは、魔法式を書き換えるということでもある。魔法師の適性に合わせた細かな修正に止まらず、魔法式のプロセスに存在する無駄を取り除き効率化するというレベルになれば、それは最早「修正」や「アレンジ」ではなく魔法式の「改良」であり、魔法そのものの改良と言えるのではないか。

調整前に達也からその方針を示されたとき、あずさは正直、そんなことが可能なのか、と疑った。だが、あずさの目の前で現に今、実験による検証も無しに、いやそれ以前に、魔法が実際に発動している様子を観測することもなしに、起動式から直接魔法のエッセンスを抜き出し、不必要な部分を削り落として、新たな起動式として再構成するという作業がエディター上で行われている。

元々新人戦モノリス・コードを担当していたエンジニアに代わって達也のアシストに手を挙げたあずさだったが、こんなクレイジーな作業には到底手が出せない。せめてこの位、ということで請け負った、書き上がった起動式の文法チェックをしながら、あずさの懐いた疑惑は確信に変わりつつあった。

彼は――司波達也は、断じて高校生レベルの魔工師ではない

それどころが、魔工師という枠をも超えてしまっている

彼こそが――

そんなあずさの混乱を余所(よそ)に、達也(たつや)はジャスト一時間で、幹比古(みきひこ)用の起動式書き換(か)え作業を終わらせた。

［10］

新人戦五日目は、困惑の空気と共に幕を開けた。

前日のモノリス・コードで、前例の無い悪質なルール違反があり、その為に負傷・試合続行不能となった第一高校チームは、通常であれば残り二試合が不戦敗となるところを、大会本部の裁定により代理チームの出場による試合の順延が認められることになった。

モノリスコードの予選は一校が四試合を行い、勝利数の多い上位四チームが決勝トーナメントに進出するという変則リーグ戦を採用している。勝数が並んだ場合、不戦勝や相手チームの失格による勝利がある場合それを勝数から差し引いて戦績を比較する。不戦勝・失格勝ちが無ければ、勝ち数で並んだチーム同士の直接対決で勝利していた方がトーナメント進出、直接対決がなければ勝った試合の試合時間の合計が短い方が決勝トーナメントに進む。

現在の勝数は第三高校が四勝、第八高校が三勝、第一高校と第二高校と第九高校が二勝で並んでいるが、勝った二試合の試合時間合計は九高の方が二高より短く、一高は四高の失格による勝利が含まれている為、二勝ではトーナメントに進めない。

今日の特例の試合で一高が二高にも八高にも勝った場合、トーナメント進出は一高と三高と八高と九高。

二高に勝って八高に負けた場合も一高と三高と八高と九高。

二高に負けて八高に勝った場合は一高と二高と三高と八高。
二高にも八高にも負けてしまうと、トーナメント進出は二高と三高と八高と九高。
……という、微妙な星勘定になっている。
要するに一高が二高に勝利すると、本来不戦勝で勝ち上がれたはずの二高が予選敗退となってしまうのだ。今回の特例措置に対して、二高が強い不満を示しているのも当然と言える。かと言って、一勝したところで手を抜いたりすれば、九高が八百長と騒ぎ出すだろう。
「っていう訳で、八方丸く治める為には、ウチが二試合とも負ければ良いんだろうけど……」
「出る以上は、勝ちに行きますよ。当然でしょう。そもそも負けたのでは、特例で試合をする意味が無い」
「余計な心配だったみたいね」
とは、達也と真由美の間で交わされた会話。
一高の代役が三人とも登録選手外だったことも困惑の種となった。
実力者トップテンを揃えているはずの代表選手から代役を選ばずに、一人は技術スタッフ、後の二人は新たに招集したメンバー。
もしや、モノリス・コードのスペシャリストを隠し玉に持っていたか、と憶測する向きもあったが、だったら最初からモノリス・コード単一エントリーのメンバーとして入れておけば済む話であり、各校とも第一高校の意図を測りかねていた。

そして、フィールドに登場した三人の姿が、困惑に拍車を掛けた。

「……なんか目立ってる気がするんだけど」

落ち着かなげに呟く幹比古の言葉を、達也は解っていながらバッサリ切り捨てる。

「フィールドに立つ選手が注目を集めるのは当たり前だ」

「いや、そういうんじゃなくて……」

達也の嘯きに首を振り、幹比古は遠慮がちにレオへ目を向けた。

「やっぱり、これが目立ってるんだろうなぁ……」

その視線の意味を理解して、レオは自分の腰に目を落とした。

レオの推測を、客席の声が裏付けていた（もっとも彼らに客席の声は聞こえないのだが）。

プロテクション・スーツにヘルメットを被った姿は他校のチームと同じ。

「剣？　直接打撃は反則だろ？」

だが、小通連の存在が観客席のざわめきを誘っていた。

レオが腰に差した「剣」が武装一体型ＣＡＤであることを看破した観客は、全体の一割もいなかった。出場選手・技術スタッフでさえ、武装一体型ＣＡＤの存在を知っている者は少数派なのだから、やむを得ないことかもしれない。

しかも、通常、武装一体型ＣＡＤの使用方法は、一体化した武装――「武器」の性能を高める魔法を編み上げるものだ。「刀」ならば切断力。「槍」ならば貫通力。「棍棒」ならば打撃力。「盾」ならば防御力。

それは例えば『高周波ブレード』であったり『加速』であったり『慣性増大』であったり『硬化』であったり『リフレクター』であったりするのだが、いずれの場合も通常、武装部分が本来持っている武器としての性能を高める魔法が武装一体型ＣＡＤには組み込まれている。

「剣」であるならば切断力か貫通力か、いずれにしても直接物理攻撃の効果を増幅する魔法が組み込まれているはずであり、モノリス・コードのルールに違反していると、ＣＡＤに詳しい者ほどその様に考えたのだ。

しかし、注目を浴びているのはレオだけではなかった。

「出て来たね、彼が」

「そうだな。選手として出て来るとは思わなかったが」

「二丁拳銃スタイルに加えて、右腕にブレスレット……同時に三つのデバイスなんて、使いこなせるのかな？」

「アイツがやることだ。伊達やハッタリじゃないだろう。特化型は左右のレッグホルスターにロングタイプの拳銃形態か」

「隠し玉じゃなくて、最初から二つの特化型デバイスを同時に操作するスタイルだね。異なる系統の魔法を使いたいだけなら、普通は汎用型をチョイスするところだけど……」

「複数デバイスの同時操作、その狙いを見せてもらおうか」

この、将輝と吉祥寺の会話で象徴されるような視線が、各校の選手とスタッフから達也に注がれていた。

担当競技でことごとく上位を独占した、忌々しいスーパーエンジニア。

それが、達也が二科生であることを知らない各校メンバーの認識であり、その彼がまたまた披露したイレギュラーなスタイルは、相手校の警戒を招きこそすれ、それを嘲笑する者はいなかったのだ。

唯一の例外は、他ならぬ、第一高校選手団が観戦しているスタンドの一角。

一年生女子選手たちの熱狂的な声援と、対照的な一年生男子選手たちの冷ややかな視線。

相手チームに対する声援と、

その全てを圧する無数の好奇心。

その中で、第一高校対第八高校の試合が始まった。

◇　◇　◇

「八高相手に森林ステージか……」
「不利よね……普通なら」
モニター画面へ目を向けたまま呟いた摩利に、同じくモニターを見ながら真由美が応えた。
モノリス・コードは様々な条件付けをされた野外ステージで行われる競技だ。九校戦で使用されるステージは、森林、岩場、平原、渓谷、市街地の五種類。
第八高校は魔法科高校九校の中で最も野外実習に力を入れている学校であり、森林ステージは彼らのホームグラウンドのようなものだ。ステージの選定は乱数発生プログラムによってランダムに行われる、という建前になっているが、特例試合で本来ならば不戦勝だったチームに有利なステージが選ばれた、というのは作為の介在を疑わずにいられない。
――が、真由美も摩利も、天幕に集まった他の幹部たちも、それほど心配していなかった。
達也が「忍術使い」九重八雲の個人的な教えを受けているということは第一高校の首脳部にとって周知の事実であり、森林ステージのような遮蔽物の多い環境は「忍術」が最も得意とするフィールドだということも、彼らにとっては常識だった。
だが、その「事実」を知らない相手校にとって、それは大きな計算違いだ。
双方のスタート地点――モノリスが置かれた場所の間には、直線距離で八百メートル。
プロテクション・スーツを着け、ヘルメットを被り、ＣＡＤを携えた状態で、樹々の間を縫いながらこの距離を走破するには、最低五分を要する。

まして敵に警戒しながら進むとなれば、途中戦闘がなかったとしてもその倍の時間は掛かると見るべきだ。

ところが――開始五分も経たない内に、八高のモノリス近くで戦端が開かれた。

選手の姿はルール違反監視用のカメラが追いかけており、その映像は、客席前の大型ディスプレイに映し出される。障碍物の多いステージでは、この映像が観客の頼りとなる。

今、空中に吊るされた大型ディスプレイに、八高ディフェンダーの前に躍り出た達也の背中が映し出されていた。

「速い……！」

「自己加速か？」

吉祥寺の呟きに、目を画面に固定したまま将輝が質問の形で応える。

一瞬映し出された背中は、次の瞬間、画面の外に出ていた。

その向こうには片膝をついたディフェンス選手の姿。

画面は角度を変えて、ディフェンダーの右側面に回り込んだ達也がモノリスへ向かって疾走する姿を映し出している。

「いや、移動に魔法を使っている様子は無いけど……あっ！」

ディフェンダーがＣＡＤの銃口を達也へ向けた。先程の達也の攻撃は、相手の体勢を崩すに

留まっていたようだ。

拳銃形態の、銃身部分が短いショートタイプの特化型ＣＡＤが、起動式を展開。

その直後、想子の視覚化処理が施された画面は、八高選手の展開した起動式が急激に拡散する非物理的衝撃波――想子の爆発に消し飛ばされる様を映し出した。

さっきは、確かに、達也は左手にＣＡＤを握っていた。

背中越しに見えていた限りでは、右手は空いていた。

だが今、画面の中の達也は、走りながら右手に握ったＣＡＤの銃口をディフェンス選手へ向けていた。

「いつの間に？」

抜いたんだ？　という言葉が省略された将輝の問い掛け。

だが吉祥寺の応えは、質問に対する答えではなかった。

「今のは、まさか……術式解体」

「術式解体だとっ？」

起動式が破壊された衝撃で棒立ちになったディフェンダーを尻目に、達也はモノリス手前で右手の引き金を引いた。

「やった！　モノリスが開いたわ！」

達也が打ち込んだ鍵が作動し、敵チームのモノリスが二つに割れたのを見て、ほのかが手を叩きながら飛び上がった。

「……おかしい」

だがその隣で雫は、訝しげに眉を顰めた。

「雫、何がおかしいの？」

一年生女子が集まった中で、英美が雫に問い掛けた。

「モノリスが開いたのに、何故離脱するんだろう？」

雫の言うとおり、達也はモノリスのコードを読み取る為に接近するのではなく、走るコースを変えて樹々の陰へ飛び込んでいた。

「そう言えば……ねっ、深雪、どう思う？」

「いくらお兄様でも、敵の妨害を前にして五百十二文字の打ち込みは難しいわ」

モノリス・コードの勝利条件は、敵を全員戦闘不能にするか、モノリスの中に隠された五百十二文字のコードを審判席に送信すること。

左腕につけたクラムシェル型のウェアラブルキーボードが、コードを打ち込み送信する為の端末だ。いくら達也のタイピングスピードが速いといっても、この扱い辛いキーボードで五百十二文字のコードを打つには、それなりの時間を必要とする。

「そうか……ディフェンスを無力化する前に鍵を使うなんて、見るの初めてだから」

雫が言い訳のように呟く中で、棒立ちだった八高のディフェンダーが達也を追いかけて樹々の間へ突っ込んだ。

「今のは……あれは……」

達也が使った対抗魔法に最も衝撃を覚えていたのは、摩利だったかもしれない。

喘ぐ様に、意味の無い言葉を漏らす隣で、真由美が妙に感情の希薄な声で呟いた。

「術式解体（グラム・デモリッション）か……もしかしたら、と思ったけど、達也くん……使えたんだね」

「真由美、今のが何か、知っているのか!?」

つかみ掛からんばかりの勢いで迫る摩利にチラッと目を向けて、真由美はすぐに視線をモニターへ戻した。

「術式解体は、圧縮したサイオン粒子の塊をイデアを経由せずに対象物へ直接ぶつけて爆発させ、そこに付け加えられた起動式や魔法式なんかの、魔法情報を記録した想子情報体を吹き飛ばしてしまう対抗魔法よ。

魔法の記録を粉砕する魔法だから、グラム・デモリッション。

魔法と言っても、事象改変の為の魔法式としての構造を持たない想子の砲弾だから情報強化にも領域干渉にも影響されないし、砲弾自体の持つ圧力がキャスト・ジャミングの影響もはね返してしまう。

物理的な作用は一切無いから、どんな障碍物でも防ぐことはできない。
そうして、対象座標で発動途中の魔法を力ずくで吹き飛ばしてしまうの。
強力な想子流で迎撃するか、想子の壁を何層にも重ねて防御陣を作ることで、ようやく無効化できる。
射程が短い以外に欠点らしい欠点が無い、実用化されているものでは最強の対抗魔法って呼ばれている無系統魔法だけど……使える人はほとんどいないわ。
私にも無理。
術式を乱すんじゃなくて、吹き飛ばす圧力なんて、私の想子保有量じゃ作り出せないから。
本当に、超・力技なのよ」
「……つまり、大男が力任せにハンマーを振り回して建物を壊しているようなものか？」
摩利の回りくどい例えに、真由美はプッと吹き出した。
「余裕ね、摩利。そんな嫌味が言えるなんて。でも概ねそのとおり。はんぞーくんとの試合から判断して、達也くんって繊細な技巧派だと思ってたんだけど……実はすごいパワーファイターだったのね」
「じゃあ、やはり、ここに来る途中の事故の時……」
「そういうこと、でしょうね。私は見ていなかったけど、摩利は実際に見たんでしょう？　あの事故現場の、少なくとも十人分以上の重ね掛けされた魔法式を、一撃で消し飛ばしてしまう

なんて……一体どれ程の想子保有量なのかしら……」

八高のフォーメーションは、ディフェンス一人、オフェンス二人。

左右に分かれて進攻する二人のオフェンスのうち、一人が一高の本陣へたどり着いた。

「ああん、達也くん、早くしないと！」

「レオくん、頑張って！」

一高本陣、つまり一高のモノリスが置かれている場所は、応援席から直接視認できる地形だ。

モノリスの前に陣取ったレオが、エリカと美月が見詰める先で、腰の「剣」を抜き放った。

木の陰からオフェンスが姿を見せた。

手に持つCADは、チームメイトが携えていたのと同じタイプの特化型。

モノリスを開くより先に、ディフェンス、つまりレオを倒す意図が明らかだった。

オフェンス選手が銃口をレオへ向けるのと、

レオが武装デバイス『小通連』を横薙ぎに一振りしたのは、

全く同時だった。

「やった！」

「やるわね、アイツ！」

美月とエリカ、二人の口から歓声が上がった。

八高の選手は、木立の間を抜け真横から弧を描いて飛来した金属板によって、強かに打ち据えられ転倒していた。

木の配置から計算された迎撃位置に立っていたレオは、注文どおりの距離で立ち止まったオフェンス選手を、分離した刀身で殴りつけたのだ。

勢い良く飛んで来た「刃」と合体して元の姿に戻った「剣」を、レオは天に向けた。

その手元から「刃」が垂直に撃ち出され、空中高くに静止した。

「ウォオオリャアア！」

雄叫びと共に振り下ろされた「刃」は、運動半径に相応しい速度を以て、倒れ伏す八高の選手にとどめを刺した。

「何ですか、今のは？」

声を荒げるようなことは無かったが、問い掛ける鈴音の口調は、持ち前の冷静さが少し刃毀れしている様にも聞こえた。

「司波くんが開発した武装デバイスとオリジナル魔法、『小通連』です」

答えを返したのは、昨晩調整を手伝った時にその存在を知ったあずさだった。

「武装デバイスと同じ名前のオリジナル魔法ですか……一体どういう仕組みなんですか？」

簡潔なあずさの説明に、鈴音は繰り返し頷いた。

「なるほど、斬新な発想です。ですが、司波君にしては随分と杜撰なシステムですね」
「杜撰、ですか？」
鈴音は、小首を傾げたあずさに、言い含めるような口調で答えた。
「ええ、この魔法は使用者の肉体的な条件と、使用できる環境条件が著しく限定されています」

第八高校三人目の選手は、樹々の間をさまよっていた。
森林ステージと言っても富士の樹海を会場に使っているわけではなく、演習場の一部に人工の丘陵地形を作りそこに樹木を移植した、あくまでも訓練の為のフィールドだ。
既に移植から半世紀が過ぎて自生化しているが、八百メートル程度の道程を迷うような密林ではない。
だが現実に、八高の選手は自分の現在位置を見失っていた。
「どこだ、畜生！　こそこそ隠れてないで姿を見せろ！」
苛立ちがむき出しになった声で喚きながら、八高選手は超音波を打ち消す魔法を発動する。
超音波の威力自体は、大したことがない。せいぜい、軽い耳鳴りがする程度だ。
だがその耳鳴りが妙に鬱陶しかった。
選手が被っているヘルメットは軍が使用している物とはいっても、衝撃と圧力から頭部を守ることだけを目的とした一般歩兵用の基本装備で、ガスや音波の遮断効果は無い。顔はむき

出しで、耳の部分には音を通す為の細かな穴が多数開いている程だ。
音波攻撃を受ければ、自分の魔法力で防御しなければならない。
八高の選手は、チームメイトでお揃いのＣＡＤをホルスターにしまって、予備の携帯端末形態・汎用型ＣＡＤをポーチから取り出し、断続的に襲ってくる超音波に対抗しながら敵チームのモノリスへ向かっている、つもりだった。
しかし何時まで進んでも、敵の本陣が見えてこない。
彼は気付いていなかった。
超高周波音と超低周波音を交互に浴びせられ、高周波音にばかり気を取られている内に低周波音によって三半規管を狂わされてしまっていたことに。
視界が制限され、右に左に次々と方向転換――回転を重ねなければならない状況で、回転を知覚する器官を狂わされては、自分が今どちらを向いているか正確に把握できなくなるのも当然のことだ。
方向を見失ったという自覚があれば磁石を見るという対応も取れるが、気づかぬ内に感覚を狂わされては、迷うはずが無い人工的な環境であるが故にこそ、修正が効きにくい。
八高の選手はこの「思い込み」の陥穽に落ちてしまっているのである。
この罠を作り上げたのは幹比古だった。
精霊魔法『木霊迷路』。

反撃しようとしても、方向感覚が狂わされているから術者の位置が分からない。いや、仮に方向感覚が正しく機能していたとしても、幹比古の居場所はつかめなかっただろう。

幹比古は精霊――実体から遊離した独立情報体を介して、この音波攻撃を仕掛けていたのだから。

仮に魔法の発信源を突き止められたとしても、それは精霊が漂う座標でしかない。

相手に居場所をつかませない隠密性。

これこそが達也の評価する、精霊魔法の「奇襲力」だった。

前に進んでいるつもりで後戻りしている八高選手の後をつけながら、そろそろ次のミッションへ移行しようか、と幹比古は考えた。

ディフェンダーをモノリスから引き離し、樹々の間に誘い込んだところで、達也は迎撃か、連携か、どちらの戦術を選択すべきか考えた。

迎撃は、彼がディフェンス選手をコードを打ち込むのに必要な時間、行動不能の状態にする。

連携は、彼がこのままディフェンス選手を引き付け、幹比古がコードを入力する。

思案は一瞬。

達也は迎撃を選択した。

左のCADを抜き、地面に向けて引き金を引く。

加重軽減の術式が発動し、軽く地面を蹴った身体は樹上に舞い上がった。
魔法を使った以上、相手に自分の居場所が分かったはずだ。
何故なら魔法の行使には、エイドス側から不可避の反動が生じるからだ。
この波紋をたどれば魔法発動時点の術者の位置を読み取ることができる。
熟練者であれば使った魔法の種類まで分かるが、今の微弱な魔法から、加重軽減の魔法を使ったと八高の選手は見分けられただろうか？　仮に魔法の種類を見分けられたとして、それを樹の上に跳び上がる為に使ったということまで推測できただろうか？
――その方が、達也にとっては望ましい。
彼は枝の上から隣の樹へ、魔法を使わずに跳び移った。
脚のバネで樹の揺れを、ほぼ完全に抑え込む。
果たして八高ディフェンダーは、彼が跳び上がった地点で立ち止まった。
その視線が、上へと動いた。
その背中へ向けて、達也は右手の引き金を引いた。
想子の可視化処理が施された大型ディスプレイは、無系統魔法の想子波が八高のディフェンダーに浴びせ掛けられる様子を映し出していた。
よろめき、崩れ落ちるディフェンス選手。

「……『共鳴』、だろうね。無系統の」
「生体波動と想子波の共振で倒したのか」
吉祥寺の言葉に将輝が頷いた。
「どうやら、右手のデバイスが無系統、左手のデバイスが加重系統って使い分けてるみたいだ」
「ジョージ……アイツの無系統魔法、妙に古式魔法っぽいと思わないか？」
「将輝もそう思うかい？　修験道か……忍術か。生体波動――古式だと『気』って言うのかな、その操作を得意とする系統の魔法に似てるね」
「今は古式の連中も、『気』なんてイカサマくさい言い方はしてないと思うぞ」
「うわっ？　揚げ足を取るなんて、らしくないよ、将輝」

八高のディフェンダーは完全に行動力を喪失したわけではなかった。少なくとも、意識は保っている。しかし今の彼に、達也を追う脚力は無い。
達也は枝をしならせ、その反動で大きく跳躍した。地面に向けて左手の引き金を引き、着地姿勢をほとんど取らず疾走へ移行。瞬く間にモノリスへ到達した。
クラムシェルのカバーを開けて滑らかにコードを打ち込む達也の姿が、天幕に置かれたモニターに映し出されている。
八高応援団の悲鳴を遠くに聞きながら、真由美は何となく、摩利の方を見た。

摩利も、真由美の方を見ていた。
「……勝ったな」
「……勝ったわね」
これで、決勝トーナメント進出が決まった。
だが二人は何故か、諸手を挙げて喜ぶ気になれずにいた。

コードが受信され、試合終了のサイレンが鳴った。
一高の校旗が掲揚されるその途中から、第一高校の応援席は大騒ぎだった。
「勝った！　勝った!!」
「すごいすごいすごい！　完勝ですよ、完勝！」
「おめでとう、深雪！」
「お兄さん、やったじゃない！」
黄色い声ではしゃいでいるのは、一年生女子選手たち。
まるでもう、優勝したような騒ぎだった。

一般客席では、もう少し落ち着いた祝賀風景が繰り広げられていた。
「ふぅ……心臓に悪いわ、コレ」

「なんで？　達也さんもレオくんも吉田くんも、全く無傷なのに？」
「いや、なんか達也くん以外は危なっかしくてさ……」
「えっ、どこが？」
「どこがって……まあ、色々と」
何故か言葉を濁した友人に、美月は大きく首を傾げた。
「変なエリカちゃん」
美月に変人扱いされたことに対して、エリカの方には十も二十も反論があったが、友人をむやみに不安がらせるのは彼女の趣味ではなかったので、今回は変人扱いに甘んじておくことにした。

◇　◇　◇

次の試合、一高vs二高戦は三十分後に指定された。
インターバルが短すぎる気もするが、確実に今日対戦することになる（と確信している）将輝たちが心配することではない。むしろ一高選手の消耗は歓迎すべきことだが、そういう考え方をしていると性根が卑しくなっていきそうなので、将輝はその思考を意識的に頭の中から追い払った。

次のステージはまだ発表されていない。
試合が終わった後のスタンドに腰掛けたまま、将輝はやはり隣席に座ったままの吉祥寺に話し掛けた。
「今の試合、どう思う？」
「将輝が訊きたいのは試合の総括じゃなくて、『彼』のことだよね？」
省略した言葉を正確に補足されて、将輝は苦笑いを漏らした。
「そうだ。ジョージ、お前ならヤツをどう攻める？」
「彼は凄く、戦い慣れている気がする。身のこなし、先読み、ポジション取り……魔法の技能よりも、戦闘技術の方が警戒すべきじゃないかな」
「その魔法技能はどうだ」
「そうだね……『術式解体』には驚かされたけど……最後の『共鳴』、背後から完全な狙い撃ちだったにも関らず、意識を刈り取るには至らなかった。その辺りに攻略の糸口があるんじゃないかな？」
「フム……」
「考えてみれば、最初の接触のときも、多分あれは加重系統魔法で重力バランスを崩して相手を転倒――投げ倒そうとしたけど、片膝をつかせるに留まった、ってとこだと思う。
樹の上に跳び上がった重力軽減魔法だって、それだけで身体を持ち上げる出力は無かった。

彼はそれ程、強い魔法が使えないんじゃないかな？

もしかしたら、普段極めて高性能なデバイスを使っている反動で、スペックの低い競技用デバイスだと実力を出せないのかもしれない」

「ありそうなことだな。あれだけのアレンジスキルがあれば、ハードの方も高度にチューンナップされた物を使っている方が自然だ。急な代役だった所為で、スペックの低いデバイスに慣れる暇が無かったという可能性は高い」

「本当の事情は分からないし、分かる必要も無いんじゃない？　とにかく魔法力だけを見れば、『術式解体』以外は警戒する必要も無いと思う。最後に八高のディフェンダーが引っ掛けられたように、彼の駆け引きにはまってしまう事こそ警戒すべきだよ」

「――正面からの撃ち合いなら恐れるに足りない、ということか？」

「そうだね。どうやって力ずくの真っ向勝負に引きずり込むか……それができれば、百パーセント、将輝が勝つよ。例えば試合が『草原ステージ』だったら、九分九厘、こちらの勝ちだ」

◇　◇　◇

次の試合を待つ一高選手控え室では、幹比古がソワソワと落ち着かなげに立ったり座ったりを繰り返していた。

「幹比古……少しは落ち着いたらどうよ？」
試合後の微調整を済ませた『小通連』を、その重みを確かめるようにユラユラと振りながら、レオが呆れ声で言葉を掛ける。
「レオ……君はよく平気だね。その……普段接点が無いクラスの人たちばかりなのにさ」
何がだよ？　という視線を向けられて、苦し紛れに幹比古が捻り出した答えに、深雪がクスッと艶やかな笑みを漏らした。
「吉田君は、意外と人見知りなんですね」
力を抜き背もたれに身体を預けるような格好で座っている達也の背後に立ち、その肩を揉みながら、深雪は楽しげに輝いている笑顔を幹比古へ向けた。
「幹比古の態度の方が普通だと思うぞ？　少年はシャイなんだよ、深雪」
「まぁ、お兄様ったら。シャイなお兄様なんて深雪は見せていただいたことがありませんよ？」
閉ざしていた目を薄く開き、首を逸らして下から見上げてくる達也に、深雪はコロコロと笑い声を溢す。その間にも、彼女の白魚のような指は兄の肩を優しく揉み解している。
――確かに僕は人見知りだけど！
――それ以上に貴女たちを見ているのが恥ずかしいんです！

……と口に出せない幹比古は、苦労人の素質十分だった。

と、そこへ、キャンバスの仕切り（と言っても本当に麻で織られているわけではなく、二十一世紀仕様のハイテク布なのだが）をめくって、真由美とあずさが入って来た。

兄妹の姿を認めた瞬間、二人はカチンと固まり、あずさの顔は見る見る茹で上がった。

真由美はそこまで赤面することは無かったものの、薄汚れた野良犬でも見るような目を達也へ向けた。

「……何だか酷く非難されているというか、蔑まれている気がするんですが？」

「気の所為よ」

姿勢を正した達也に素っ気無く言い放ち、真由美は横を向いて「コホン」と一つ、咳払いをした。

顔の向きを戻した時には既に、達也は立ち上がっていた。

（何だか……軍人さんみたいよね、この子って……）

軽く足を開き、背筋を伸ばし、手を後ろに組んだ立ち姿が凄く自然で、緊張しているとか鯱張っているとか粋がっているとか、少しもその手の違和感を与えない。

対する自分の振る舞いが、如何にも子供っぽく思えてしまう。

「……本当に、何でもないの」

その結果、言わずもがなの言い訳を口にしてしまった真由美は、軽い自己嫌悪を抱えながら、

さっさと用事を済ませてしまおう、と思った。
「次の試合のステージが決まったから」
「わざわざ知らせに来てくださったんですか。ありがとうございます」
真由美に軽く頭を下げ、目線で「どこです？」と問い掛ける達也。
「市街地ステージよ」
真由美の回答は、達也を絶句させるほど意外なものだった。
「……昨日あんな事があったばかりで、ですか？」
「ステージの選定はランダムだもの。そんな事は考慮されないんでしょうね」
「はぁ……」
建前もそこまで徹底すれば立派なものだ、と達也は思ったが、口にしたのは別のことだった。
「早速移動します。ＣＡＤの調整は終了していますので」
「ご苦労様」
真由美が頷いたときには、既にレオと幹比古が準備に掛かっていた。
とは言っても、上半身だけ脱いでいた防護服を着直し、ヘルメットとＣＡＤを携える。
準備はそれだけだ。
ジャケットに袖を通して、ファスナーと留め金をシッカリ締める。
「あの、司波くん……」

ホルスターを巻いてCADを収めたところで、達也はあずさに話し掛けられた。
「何でしょうか？」
「西城くんのデバイスは……どうするんですか？」
「どうする、とは？」
「だって……室内とか階段が張り出したビルの谷間とかじゃ、『小通連』は使えないんじゃありませんか？　あの魔法は刀身を宙に浮かせるだけで、打撃力はそれを振り回すユーザーの腕力に依存しているもの、でしょう？　刀身が『伸びている』ことによって同じスイングで高速の打撃が可能になるというメリットは、そのまま、振り回すだけのスペースが無ければ相手を倒すだけの勢いを稼げない……ということになると」
「市原先輩が仰っていたんですね？」
見事に裏事情を看破されて、あずさは先程と別の意味合いで赤面した。
「さすがは市原先輩、正確な分析ですが……ご心配には及びませんよ。室内であっても、ロングソードを振る程度のスペースはあります。十メートルの剣として使えなければ、一メートルの剣として使うまでです」
達也の目配せを受けたレオは、「任せておけ」とばかりに頷いた。

◇　◇　◇

一高vs二高の試合は、昨日の事故にもめげず、双方のモノリスが屋内の中層階――具体的には五階建ビルの三階に設置された。

自分たちの責任・過失をあくまで認めようとしない強情さは、魔法大学も事務方は官僚機構なのだと再認識させられるものだった。

――もっとも、昨日の「事故」は大会運営側の責任とも過失とも言い切れない部分もある。

それに達也としては、見通しの良い屋外に置かれるより、いくらでも隠れる場所があるビルの中の方が都合が良かったから、文句を言うつもりは全く無かった。

彼は今、二高のモノリスが設置されているビルの最上階に潜んでいた。二高の索敵をかいくぐって隣のビルへ回り込み、魔法を使わずに屋上から屋上へ跳び移るという荒業で敵軍のディフェンダーに気付かれることなくここまで接近したのである。

建物の陰から陰へ、身を隠しながらの接近だったから、ここまでたどり着くのに随分時間が掛かっている。この試合は負けても決勝トーナメントへ進めるとはいえ、トーナメントの組合せは予選の一位と四位、二位と三位だ。準決勝で三高と当たるのと、決勝で三高とぶつかるのとでは、意味合いが全く異なってくる。今回は幹比古をレオのバックアップに残しているが、

時間的な余裕はない、と達也は判断していた。

「幹比古、聞こえるか」

『聞こえるよ、達也』

モノリス・コードで通信機の使用は禁止されていないが、使用する学校は少ない。内容は解読できなくても、電波の発信地点くらいなら、今の技術で簡単に探知できるからだ。

それにわずか三人のチームでは、通信機を使用しなければならないほど選手相互が離れてしまうと、意味のある連携はほとんど不可能になる。普通、通信機を使う意味は無いのだ。

それでも今回、達也が通信機を使用しているのは、無論、意味がある。

「やるぞ。モノリスの位置を探査してくれ」

『こっちも、そうはもちそうにない。急いで』

「了解した」

向こうは既に交戦状態のようだ。

達也は右手のブレスレットを操作して、喚起魔法を発動した。

気合と共に、レオが『小通連』を横に薙いだ。

長さ四十センチ、幅十二センチの小さな金属片――刀身の片割れが弧を描いて飛翔し、二高の選手を襲う。刀身の重量不足を腕力で押し切り、レオはオフェンスの足を刈り取った。

転倒する二高の選手。これが「実戦」ならば、駆け寄って踏みつけとどめを刺すところだが、モノリス・コードのルールは肉弾戦を禁じている。

「幹比古！」

聞こえないと知りつつ、ビルのどこかから精霊を介してこの部屋を「観て」いる幹比古に合図を送るレオ。

返事は、空中に生じた球電の形で返された。

電撃が、二高の選手を撃つ。

しかしレオには、一人撃退の戦果を喜ぶ暇は無かった。

自分の身体に移動魔法が仕掛けられたのを察知し、レオは慌てて叫んだ。

「Ｈａｌｔ！」

ヘルメットの口元に仕込んだマイクを通じて、音声認識スイッチが左腕のＣＡＤを作動させた。二つのＣＡＤを同時に使ったパラレル・キャストだが、発動する魔法が同じ種類のものであれば、混信による発動障害は生じない。

幸い――この場合は、という限定がつくが――レオの私有ＣＡＤは頑丈さと機械的な信頼性を重視したもので、起動式展開のスペック面では二世代前の物、つまり九校戦の規格に収まる物だった。音声認識スイッチの曖昧さとタイムラグは達也の趣味に合わないのだが、今回は本人の慣れを優先すべき状況、ということで、インストールされている起動式に（大幅に）手を

加えただけで、私有のＣＡＤをそのまま使わせているのである。

そしてその目論見どおり、レオのＣＡＤは完全な「後出し」だったにも関らず、移動魔法による敵の攻撃をブロックする魔法を間に合わせた。

自分が立っている所――自分の靴裏と接触している面を基準点として、自分の肉体と基準点の相対座標を固定する魔法。摩利がバトル・ボードで使っていた魔法の応用、と言うか、ダウングレード版だ。水上を移動するボードと自分の身体の相対位置を固定しながらも肉体を自由に動かせるよう構成していた摩利の魔法と違って、レオが今使った『固定』の魔法は不動の床を基準点とし自分の四肢頭部胴体が動かないようにするもの。継続時間もほんの一瞬だ。

だが大幅にダウングレードされているが故に、敵の魔法が発動している途中からでも、その相殺を間に合わせることができたのである。

このビルは、学校の校舎を想定しているのだろう。

破れた窓から、廊下を横切る敵選手の姿が見えた。

レオは右手を引いて突きを繰り出す体勢を作ったが、敵は既に走り去っていた。

倒れたまま時折痙攣しているオフェンス選手へ慎重に接近して、ヘルメットを脱がせる。

大会ルールにより、ヘルメットを敵に取られた選手はそれ以上の競技行動を禁止される。

（さて、とりあえず一人かよ……）

通じないと知りつつ、レオは頭の中で話し掛けた。

（頼むぜ、達也。こっちは結構ギリギリだ）

達也の喚起魔法によって、彼に貼り付けられていた精霊が活性化した。

達也に精霊魔法は使えない。

活性化した独立情報体を察知することはできても、それを制御することができない。現代魔法は魔法師が作り出した偽りの情報で、事象に付随する情報体を上書きする技術であって、情報体そのものをコントロールする技術ではない。

だが、精霊魔法の基本となる喚起魔法を発動するだけならできる。

人為的に作られた彼の仮想魔法演算領域は、意識領域内に作られているが故に、起動式に記述されている魔法式であれば如何なる魔法であろうと、魔法式の設計図たる起動式を意識的に読み解くことで、魔法式を組み立てて投射するところまでならば可能なのである。

それは魔法を使っているというレベルではなく、単に魔法発動のプロセスを模倣しているだけに過ぎない。だがそこに必要な情報が記述されていれば、模倣であろうと記述された範囲の効果は発揮される。

幹比古が不活性化して達也に貼り付けた精霊は、達也の魔法によって再活性化された。

そして元々の「主」である幹比古との間に、すぐさまリンクを確立する。

達也に精霊を制御することはできないが、この場合は彼が制御する必要は無いのだ。

ある意味、彼の役目は、幹比古とリンクしている精霊を敵の本陣へ連れて来ることだったのだから。

今の魔法によって、ディフェンダーが彼の存在に気づいたことだろう。

相手がモノリスを離れ、この階に上がってくるなら望むところ。

達也は足を忍ばせて移動を開始した。

自分が「契約中」の精霊に呼ばれ、幹比古は達也が「喚起」に成功したことを知った。

（本当に、何で君が二科生なんだい、達也……？）

心の片隅でそんな呟きを漏らしながら、幹比古は遠く離れた精霊へ意識を集中する。

実のところ、魔法にとって物理的な距離は、あまり意味を持たない。巨大な情報プラットフォームであるイデアには、物理的な距離などそもそも存在しないからだ。

本来であれば、イデアを経由しない、サイオンを直接撃ち出す類の無系統魔法だけが物理的な距離の影響を受ける。

だが、人間は五感に縛られ、経験に縛られるものだ。

物理的な距離が遠ければ、「遠い」と認識してしまう。

この認識上の距離が、魔法にとっての「距離」となる。

認識上の距離が遠くなれば、それだけ魔法も効き難くなる。

だから、遠くのものに魔法を掛ける秘訣は、対象物を近くに感じることなのだ。
その点、精霊魔法は、精霊と交信する――意思を通わせることで、精霊を近くに感じることができる。精霊魔法は、物理的な距離を飛び越えやすい魔法と言える。
――今のように。
（……見えた）
視覚同調。
精霊を手元に招き寄せてそこに記録されている情報を読み取るのではなく、影響下に置いた精霊からイデアを経由したリンクを通じてリアルタイムに情報を取得する技術が、精霊魔法の『感覚同調』。それを視覚情報に限定することによって、より鮮明な映像を取得する技が『視覚同調』である。
幹比古は大気流動現象の独立情報体――風の系統に属する精霊を操ることで、容易に敵モノリスの位置を突き止めた。
「達也、見つけたよ」
だが、ここからが本番だ。
幹比古は敵陣の精霊とレオにつけた精霊、二つのリンクを維持したまま、達也に話し掛けた。
（早いな……もう見つけたのか）

精霊魔法とは便利なものだ、と呑気なことを考えながら、彼の肉体は最高度の緊張を保っていた。

何せ今彼は、天井にぶら下がっているのだから。

取り壊し中あるいは建設中のビルを模したのか、二高のモノリスが置かれているビルは空調の配管がむき出しで天井を走っている。達也はそれに捕まって、左右に眼を配りながら慎重な足取りで通り過ぎていく二高のディフェンダーを見下ろしているところだった。

通信の声を聞きつけたのだろうが、まさか頭上にいるとは思い至らなかったようだ。

いや、と達也は思う。

彼の見るところ、この選手は緊張による視野狭窄を起こしている。

階段を駆け上がってきたのか、少々息も乱れていた。

あまりディフェンス向きの選手ではないように思えたが、敵の配役ミスは歓迎すべきことであって、同情するのは偽善というものだろう。

このままやり過ごそうか、とも考えたが、達也は身体を支えていた両手を離し、空中で右腰からCADを抜いた。

着地と同時に引き金を引く。

相手は振り返る素振りも見せない。

発動した魔法は、単純なサイオンの衝撃波。ほんの数秒、脳震盪の錯覚を誘発して戦闘不

能にするだけの術式。

実戦であればその数秒は決定的なアドバンテージとなるが、これは直接攻撃が禁止されたスポーツの試合。達也は相手選手の体勢が崩れたのを眼の端に留め、幹比古からもたらされた座標の真上へ向けて走った。

わずか二部屋の目的地点まで、十秒も掛からない。

ディフェンダーがようやく動き出した気配を捉えながら、達也は真下へＣＡＤを向けた。

このビルは一階層の高さが三メートル五十。

五階の床から三階の床まで、約七メートル。

余裕で「鍵」の射程、十メートル以内だ。

引き金を引く。

微かなエイドス改変の手応えが返って来た。

達也は念の為、来た方向とは逆側の階段から、下の階へ向かった。

精霊と同調した視覚は、幹比古にモノリスの内側に刻まれたコードを見せていた。

視点を移す。

現在、レオは敵と接触していない。

少しばかりの幸運を祈りつつ、精霊から送られてくる視覚情報に従って、幹比古はウェアラ

ブルキーボードにコードを打ち込んでいった。

試合終了のサイレンが鳴った時、

達也はディフェンダーが繰り出す『鎌鼬』から逃げ回り、

レオはモノリスを背中に一か八かの突撃を繰り出そうとしているところだった。

「ふぅ……スリル満点の試合だったわね」

真由美の漏らした満足げなため息に、摩利は不満そうな声を返した。

「アイツ……最後は遊んでたんじゃないか？」

「えっ、そうなの？」

「あんな攻撃、躱すのは簡単だろうに……何故さっさと倒してしまわないんだ」

「そうしたくてもできなかったんだと思うけど」

苦りきった表情で達也を詰った摩利に、真由美は醒めた声で反論した。

「何故だ？　前の試合で使った『共鳴』だって服部を倒したあの魔法だってあるだろう」

「はんぞーくんに使った魔法は、競技用ＣＡＤではハードの性能不足で処理できないんですって。前の試合の『共鳴』も、相手を完全に沈黙させるまでには至らなかったでしょう？」

摩利、忘れたの？

私たちが達也くんに代役を押し付けたのは昨日のことで、彼は準備期間に一晩しか与えられ

ていないのよ？　その一晩で、西城くんのCADを調整して、吉田くんのCADを調整して、二人の得意技を活かした戦術を考えて……。

摩利が達也くんのことを買っていて、それで歯痒くなるのは分かるけど、準備時間も与えずに高すぎる期待を押し付けるのはチョッと無責任だと思うな」

「それは……そうだな」

頬りに首を振って反省の意を表していた摩利が、ふと、その動作を止めた。

「……ところで真由美」

「むっ、何よ」

なにやら陰湿な（？）報復の気配を感じ取って、真由美が身構える。

だがそれは多分、摩利の思うツボだった。

「達也くんのことを随分熱心に弁護するじゃないか」

「なっ？　ち、ちがっ……」

「照れるな照れるな。まあ……あのシスコンっぷりじゃ、いくらお前でも苦戦は免れんと思うが……」

「違うって言ってるでしょ！」

摩利の疑念は女子高校生らしい（と言えば語弊があるかもしれない）脱線により有耶無耶に

なったが、観客席には同じような不満を、異なる確信を以て漏らした者もいた。

「結局、使った魔法は『術式解体』『共鳴』『幻衝』に加重系統か……『分解』を使わぬのは解るが、フラッシュ・キャストも『精霊の眼』も使わぬとは、手抜きが過ぎるのではないか？」

「彼には秘密にしなければならない事情があるんですよ。先生もご存知でしょう？」

「しかしな、藤林……フラッシュ・キャストはともかく、『精霊の眼』は使ったからといって、そんじょそこらの魔法師が端から見ているだけで、何をしているのか分かるという類のものではないぞ」

独立魔装大隊の山中軍医少佐と藤林少尉は、観客席で随分と突っ込んだ会話を交わしていた。知識がある者が聞けば飛び上がって驚きそうな内容だが、目立たぬ夏服姿で客席に紛れ込んでいる二人は、一見、恋人同士――ではなく、医者と看護師に見えていて（先生、という呼称も誤解に一役買っていた）、断片的に聞こえてくる耳慣れぬ単語も超心理医学関係の専門用語だろう、と回りの観客がスルーしていたのだった。

「それでも、見えないはずのものが見えているように行動すれば、注意深い者の不審を誘うでしょう。『精霊の眼』は知覚魔法というより異能ですからね。事によると『分解』以上に耳目を集めることになります」

彼らが話題にしている『精霊の眼』――エレメンタル・サイトは、達也が持つイデアの「景

色（形色）」を視る能力のことだ。

四系統八種の現代魔法は、イデアを経由してエイドスに魔法式を投射するもの。

つまり現代魔法を使う魔法師は皆、イデアにアクセスする能力を持っているのであり、イデアにアクセスして「存在」を認識することができる達也の知覚はこの能力を拡張したものと言える。

だが……その「拡張」がもたらす効果は、絶大だ。

この世界に実体を持って存在する限り、イデアにエイドスを刻まぬものは無いのだから。

また、五感や、所詮は物理次元の感覚の拡張に過ぎない「透視」や、補助システムのもたらす情報によって魔法の座標を定めるのでなく、エイドスを認識して直接照準することもできる。

エレメンタル・サイトに狙われて逃れられる者は、存在しないものだけなのだ。

ところで『精霊の眼』という名称は、実は誤った翻訳であり、それが定着してしまった為に本来の意味が解らなくなってしまった「専門用語」である。

エレメンタル・サイトの本来の意味は「元素を視る力」。この場合の「元素」は四大元素説に代表される象徴元素のことだ。

ところがこの言葉を最初に翻訳した学者が、形容詞として使われている「エレメンタル」を名詞の「エレメンタル（四大精霊）」と勘違いしてしまい、「四大精霊の眼」を縮めて『精霊の眼』としてしまったのだ。無論、その勘違いに気付いた者は大勢いたが、『精霊の眼』の語感

が『元素視力』より魔法的だという、詩的であっても少々非科学的な理由で、修正されないまま放置されてしまったのである。

こういう「誤訳」は専門家とそれ以外の人々をますます隔ててしまう有害物なのだが……それを誰も直そうとしないのは、困ったことというべきか、嘆かわしいことというべきか。

――閑話休題――

藤林の言っていることは、山中も先刻承知だ。エレメンタル・サイトもまた、『雲散霧消』同様に機密指定されてもおかしくはない技能なのだから。

しかしそれでも、山中は納得しなかった。

「手の内を見せるなと言ったのは我々も同罪なのだろうが……」

彼らは単純に、あるいは純粋に達也の応援に来ていたわけではない。人目に触れてはならない技術を苦し紛れに披露してしまうほど、達也の精神は脆弱ではない、ということを山中も、藤林も、風間も真田も柳も確信していた。それでも、万が一ということがある。万に一つのアクシデント、つまり、機密指定の魔法が衆人環視の中で使われてしまった場合に迅速な対応をとる為に、彼らは達也の試合に目を凝らしていたのである。

だから本来ならば四葉の秘密主義を非難できない、というのは、山中本人の言うとおりだ。いくら山中が、達也の本気を見たいと、達也が少しでも本気を出せれば良いと思っていたとしても。

「でも多分、フラッシュ・キャストは使うことになると思いますよ。いくら彼でも『プリンス』と『カーディナル』を相手にして、低スペックのCADだけでは戦えないでしょうから」

そんな山中の葛藤を宥めるように、藤林はこの場をそう締め括った。

観戦していた誰もが、達也にばかり注目していたわけではない。

観客の目はむしろ、初公開の武装デバイスで派手なアクションを見せて（魅せて？）いるレオに集まっていた。

そして少数ではあるが、遠隔地点から五百十二文字ものコードを正確に「透視」した幹比古に注目した観客もいる。その中には、透視のカラクリを知らない観客ばかりでなく、知っている幼馴染みもいた。

「なんだ、ミキったら……昔どおりじゃない」

「えっ、何が昔どおりなの、エリカちゃん？」

思わず漏らした独り言に首を傾げて食いついて来た美月を、適当な言葉であしらいながら、エリカの意識は自分の世界へ沈み込んで行った。

幹比古が何をやったのか、自分で言うより、自分で思っているより幹比古との付き合いが深かったエリカには理解できていた。

感覚同調は決して簡単な技術ではないが、事故を起こす前の、「天才少年」だった頃の幹比

古ならば、息をするように当たり前にできたことだ。だが、あの事故以来、こんなにスムーズに魔法を行使することはできなくなっていたはずだった。

（なんだ……もう、心の傷は癒えているんだ）

時々、身体の傷は治るけど心の傷は治らない、という感傷的なセリフを耳にすることがある。しかし実際には、身体の傷も、治る傷と治らない傷がある。

同じように心の傷も、癒える傷と癒えない傷があるはずだ。

（ミキ……気づいてる？　今日のアンタは、前と同じように魔法が使えてるよ）

エリカは精霊を見分ける力を持っていない。精霊を視る眼は、備わっていない。

だから、精霊魔法が成功したかどうか、直接確認することはできないが、彼女は対人魔法戦技を磨き続けた千葉家の娘だ。

チョッとした仕種や目の動き、表情の変化などから、その人間がいつ魔法を使ったか、何に魔法を使ったか、それが成功したか失敗したか、ある程度までなら読み取ることができる。

その、千葉家の娘としての眼、「剣士の眼」は、幹比古が思いどおりに魔法を成功させたことを見抜いていた。

（じれったいわね、ホント……早く気づきなさいよ。アンタはもう、立ち直っているのよ）

今の幹比古に、「力」は戻っていても「自信」は戻っていない。

何気ない表情からそんな事まで判る程度には、子供の頃からの付き合い、無理矢理に付き合

わせ付きまとっていた実績の積み重ねがある。
後はもう、本人が自信を取り戻すだけ。自分を、信じる、ただそれだけで――
「……リカちゃん、どうしたの？　エリカちゃん！」
「えっ？　なに？」
「えっ、なに、じゃないよ。どうしたの、急に考え込んじゃって？　何か心配事？」
「えっ、うん、まあ、心配事って言えば心配事かな。　さっき、結構ピンチだったじゃん？　次の試合、大丈夫かなぁ～って」
咄嗟にでっち上げた言い訳に、「そういえば」とか「でもきっと次も」とか「応援するだけ」とか素直に誤魔化されてくれている美月を放置して、エリカは再び自分の世界へ沈み込んで行った。

◇　◇　◇

決勝トーナメントの組合せが発表された。
準決勝第一試合、第三高校vs第八高校。
第二試合、第一高校vs第九高校。
予選リーグの成績は、一位・三高、二位・一高、三位・八高、四位・九高であり、大会規定

どおりなら準決勝は三高vs九高、一高vs八高になるはずなのだが、一高と八高はつい先程試合をしたばかりであり、またしても特例が適用されることになったのである。

トーナメントの開始は正午。

達也たちの出番は第二試合だが、三高の試合を見逃すわけにはいかない。

少し早い昼食になるが、達也はランチボックスを手に深雪を連れてホテルへ戻って来た。

――テントは落ち着いて食事を摂れる状態ではなかったのである。

レオと幹比古は一足先に自室へ避難していた。

ほのかは一緒に来たそうな顔をしていたが、彼女に誘発されて他の同級生たちがゾロゾロとついて来るという事態になればテントを抜け出した意味がない。そう耳打ちして雫が止めてくれたのである。

色々な種類の視線――深雪に向けられた熱い視線が最も多かった――を振り切るように足早に競技エリアを抜けてホテルのロビーへたどり着いた兄妹は、そこで珍しい光景を目にした。

「んっ？」

「まあ……」

ロビーの一角に、恥じらいにほんのりと頬を染めて、摩利が立っていた。

彼女の目の前には、少し年上の若い男性。

十歳は違わないだろう。おそらくは、二十歳前後。

摩利に年上の恋人がいるらしい、ということは二人とも知っていた。

この青年が、彼女の恋人だろうか。

中背というより長身の部類、達也よりわずかに背が高い程度。身近にその手の専門家が多かった二人には、その細身の引き締まった身体がアスリートのものではなく、武術・格闘術の類で鍛え上げられたものと一目で分かった。

涼しげな眉目は、世間一般の嗜好に照らして美男子と形容されるもの。摩利の器量も少し中性的ではあるが美少女の形容に恥じぬものであり、二人は似合いのカップルと言えた。

不意に、達也の足取りが鈍った。

「お兄様？」

半歩先に出た深雪が、小首を傾げて振り返った。

達也は別に、冷やかしてやろうとか出歯亀してやろうとか怪しからん事を企んだのではない。青年の顔に見覚えがあったのだ。記憶を検索するのに一瞬、足の方が疎かになったのである。

「……さすがは九校戦。あちらこちらで有名人に出会えるな」

話を聞いてみたい、という思いが達也の意識をかすめたが、自重すべき場面であることは十分理解していた。

「ご存知の方なんですか？」

「その方面では世界的な有名人だ」

横に並んで深雪を促す。答えは歩きながらにするつもりだった。

だが、彼が思いとどまった「逢瀬の邪魔」を敢行した者がいて、そのいささか甲高い声に達也も深雪も足を止めることになった。

「次兄上！　何故このような所にいらっしゃるのですかっ？」

聞き慣れた声が、いつもと異なる丁寧な言葉遣いで、青年を糾弾していた。

「兄上？　ではあの方はエリカの……？」

大股で青年に詰め寄るエリカから視線を戻して、深雪は達也に確認を求めた。

「俺の記憶違いでなければ、二番目の兄上だ。『千葉の麒麟児』千葉修次。まだ防衛大学校に在籍中でありながら、三メートル以内の間合いなら世界でも十指に入る達人と噂されている魔法白兵戦技の英才だよ」

「そのように凄い方だったのですか。……しかし、そのような方なら、エリカにとっても自慢の兄君でしょうに、何やら尋常な剣幕ではありませんが」

「そうだな。修次氏は、千葉家の中では異端視されているとも聞いているが……エリカが『正統』に拘る性格とも思えないしな」

「そうですね……」

兄妹がそのような会話を交わしている内に、エリカは彼女の兄へ食って掛かっていた。――すぐ側に立っている摩利には、目もくれずに。

「兄上は来週まで、タイへ剣術指南の為のご出張のはずです！　何故ここにいらっしゃるのですか！」

エリカはすっかり、頭に血が上っているようだ。

いつも他人や世の中をどこか斜に構えて傍観しているような雰囲気のある彼女には、本当に珍しいことだった。

「エリカ……少し落ち着いて」

青年――千葉修次が宥めようとしても、エリカの興奮は少しも治まらなかった。

「これが落ち着いておられましょうか！　和兄上ならばいざ知らず、次兄上がお務めを放り出すなど、昔であれば考えられませんでした！」

「いや、だから落ち着いて……僕は仕事を放り出してきたわけではなくてね……」

千葉修次は、その武名に似合わず気が弱いというか気性が優しい青年のようで、公衆の面前で収まる気配のない妹の興奮を前に、たしなめるでなく、言い訳しかできずにいた。

「ほう……そうですか。では、タイ王室魔法師団の剣術指南協力の件は、私の思い違いだと仰るのですね？」

「いや、それはエリカの言うとおりなんだけど……無断で帰国したわけではなくて、ちゃんと許可はもらったというか……」

「そうですか。日本とタイの外交にも関わる大事なお務めを中断しなければならなかったので

すから、さぞや重要なご用事なのでしょう。
その大切な大切な緊急のご用事で帰国された兄上が、何故高校生の競技会の会場になどいらっしゃるのです？」
声のトーンはマシになったが、反比例してエリカの機嫌は急角度で傾いているように、達也には見えた。
多分、修次にもそう見えていることだろう。
その証拠に、彼の顔は少しばかり、引きつり始めていた。
「いや、外交ってそんな、大袈裟な……任官前の士官候補生同士の親善交流で、大学生の部活の一環みたいなものなんだけど……」
「兄上っ！」
「はいっ」
「学生レベルの親善であろうと部活であろうと、正式に拝命した任務ではありませんか！
疎かにしていい理由などございませんっ！」
「はいっ、仰るとおりです！」
世界で十本の指に入る猛者、の意外な姿に、達也は驚きを禁じ得なかった。
「……恐妻家という言葉は聞いたことがあるが、恐妹家というのはチョッと記憶に無いな」

何となく直視し辛くなって目を逸らすと、少し離れた所で美月がオロオロしているのを見つけた。達也が手で合図すると、美月はホッとした顔で小走りに駆け寄って来た。
「達也さん……エリカちゃん、どうしちゃったんでしょう？」
「どうしたんだろうな、本当に……？」
美月に問われても、首を捻ることしかできない。
「お兄様、エリカは八つ当たりしているのだと思いますよ？」
すると、深雪が笑い出すのをこらえているような声で、達也には意味不明の説明をしてくれた。
「八つ当たり？　何についての八つ当たりなんだ？」
「きっと、もうすぐ分かりますよ」
ますます訳が分からず首を捻った達也たちの視線の先で、「兄妹喧嘩」は新たな局面を迎えていた。
「兄上、まさかとは思いますが、この女に会う為に、お務めを投げ出したのではないでしょうね？」
「いや、だから投げ出したのでは……」
「そのようなことはお訊きしていませんっ」
兄の言い訳をピシャリと遮ると、今まで（おそらく、意識的に）無視していた摩利を一度、

ジロリと見て、エリカは修次に視線を戻した。
「全く、嘆かわしい……千葉の麒麟児ともあろう兄上が、こんな女の為にお務めを疎かにされるなんて……」
「……エリカ、あたしは一応、学校ではお前の先輩になるんだがな。『こんな女』呼ばわりされる覚えはないぞ？」
それまで沈黙を守っていた、と言うより沈黙に耐えていた摩利が、遂に黙っていられなくなった、という感じで口を挟んだ。
だがエリカは、摩利の言葉を完全に無視した。
「そもそも兄上は、この女と関わり始めてから堕落しました。千刃流剣術免許皆伝の剣士ともあろう者が、剣技を磨くことも忘れて小手先の魔法に現を抜かして……」
「エリカ！」
多分それは、修次にとって禁句だったのだろう。それまでの気弱な態度が嘘のような、気迫のこもった叱責に、エリカはビクッと身体を震わせた。
「技を磨く為には常に新たな技術を取り入れ続ける必要がある。
僕がそう考えて、そうしたのだ。
摩利は関係ない。
今回のことも、摩利が怪我をしたと聞いて、僕がいてもたってもいられなくなっただけだ。

摩利は来なくても良いと言ってくれたんだぞ。
それでなくとも先刻からの礼を失する言動の数々、千葉の娘として恥を知るのはお前の方だ」
「……」
唇を噛み締め、黙り込み、それでもエリカは修次から目を逸らさなかった。
「さあ、エリカ。摩利に謝るんだ」
「……お断りします」
「エリカ！」
「お断りします！　兄上が正式な任務を放棄してこの場におられることは紛れもない事実です！　それがこの女の所為であることも！」
しかし、またしても形勢は逆転、気味だった。
「私の考えは変わりません！　次兄上は、この女とつきあい始めて堕落しました！」
クルリと身を翻し、足早に、走り出さないギリギリの速さで、エリカは兄の前から立ち去った。

◇　◇　◇

「エリカちゃん、待って、エリカちゃん！」

ロビーからエレベータホールに入った所――ロビーが完全に見えなくなった所で、エリカはようやく美月の声に振り返った。

そして、あっ、という形に口を開けた。

「……達也くん。深雪も……もしかして、聞かれちゃった？」

その口調も表情も、いつものエリカだった。

だが達也には何となく、エリカが泣き出すのをこらえているように見えた。

「すまん……盗み聞きするつもりはなかったんだが」

「達也くん、今度奢りね」

「おいっ？　まあ、いいか。あまり高くないもので頼むぞ」

「商談成立、っと」

エリカはいつもの、気まぐれで飄々とした笑顔で笑って見せた。彼女がいつもどおりの態度をとって見せるなら、達也も変に気を遣って逆に気を遣わせるのは本意でなかった。

「エリカ、お昼は？」

「うん？　まだ早いじゃない……っと、そうか。うん、あたしはまだ食べないけど、ご一緒はしたいかな」

深雪の問い掛けに、エリカは半分否定、半分肯定の返事を返した。

「お兄様？」

「そうだね。俺たちは部屋で済ませるつもりなんだが、こっちが食べながらで良かったら付き合わないか」
「うん、行く行く！　美月も来るでしょう？」
「はい、えっと、お邪魔します」
「いや、別に邪魔じゃないんだが」
「ふぇっ？　そういう意味じゃありませんよ！」

「もう……達也さん、からかうなんて酷いです」
雰囲気を変える為の出汁にされた美月は、ベッドに腰を下ろしてもまだご機嫌斜めだった。
まあ、彼女が本気で責めているわけではないことくらい理解できたので、達也は苦笑しながらサンドウィッチをパクついていた。
美月も達也も、そのままさっきのことはスルーする方向へ持って行くつもりだった。
「さてと……達也くんも深雪も美月も、あたしに何か聞きたいことがあるんじゃない？」
だが当の本人――エリカが、先程の一幕について、蒸し返してきた。
「渡辺先輩が交際されている方って、エリカのお兄様だったのね」
唯一、平気な顔でその話題に乗ってきたのは深雪だった。
「そっ。あのバカ兄貴、あんな女に誑かされちゃって、情けないやら腹立たしいやら……」

「世界的な剣術家でいらっしゃるのでしょう？　憎まれ口でも『バカ兄貴』なんて言うものじゃないわよ？」

「あれっ？　……ああ、そうか。達也くんだったら修次兄貴のことを知ってても不思議じゃないね」

「エ・リ・カ。わたしたちの前だからといって、呼び方を変える必要はないのよ？　修次兄上なのでしょう？」

「あ～っ、それ、忘れて！　あんなのあたしじゃないって！」

エリカはいきなり頭を抱えて、ベッドにダイブした。

彼女的には、ああいう「育ちの良い」言葉遣いは恥ずかしいのだろう。

……それより、男が使っている枕に俯せで突っ込む方を恥じらって欲しいと、達也は困惑気味に思った。

「まあまあ。エリカは修次さんのことが大好きなのよね」

「……」

硬直したのはエリカだけではなかった。

深雪が投下した冷凍爆弾は、達也も美月も瞬時に凍りつかせた。

「……違うっ！」

ガバッと起き上がりながら、エリカが叫んだ。

枕から顔を離しながらの言葉だったので「ガウッ」としか聞こえなかったが、この場合の反応としてはそれでも相応しいように感じられた。

追い詰められて雄叫びを放つ怪獣のような分かり易い態度に、深雪がクスクスと笑いを零している。

そして、更なる爆弾を投下。

「エリカって、ブラザー・コンプレックスだったのね」

「なっ……」

エリカは絶句した。

そして、臨界点越えの大爆発を起こした。

「アンタにだけは言われたかないわよコノ超絶ブラコン娘っ！」

――その直後に生じた出来事を、達也も美月も一切、口にすることはなかった。

◇　◇　◇

「……おい達也、顔色が悪いぜ？　大丈夫かよ？」

「何だか随分疲れてるようだけど……」

一般用観戦席でレオ、幹比古と落ち合った達也は、開口一番、口々にそう問われてしまった。

「少し、気疲れすることがあってな。なに、精神的な疲労というより情緒的な疲労だから、試合で気合が入れば大丈夫だ」

達也がなんでもない、という風に手を振る向こう側で、何事も無かったように深雪とエリカが腰を下した。

その後ろで美月が少しばかり挙動不審になっていたが、関心がこれから始まる試合の方へ行っているのか、レオも幹比古も気づかなかった。

「……悪いね。達也ばかり矢面に立たせて」

幹比古は何か、好意的な（好都合な？）誤解をしたようだ。

「いや、そんなことはない。大丈夫だから気にするな」

この「そんなことはない」は、本当にそんな事ではなかったという意味なのだが、あえて曖昧な言い方をする辺り、達也もいい性格をしている。

「大丈夫ってんならいいけどよ。達也は今回、散々無茶してるんだから、これ以上の無理はするなよ？」

「分かっている」

何とも自分にはもったい無い善良な友人だ、と達也は思った。

「そっちも含めて大丈夫だ」

そんな善人を心配させるのは彼としても本意ではないので、努めて力強く頷いて見せた。

もっとも、試合が始まってみれば、多少顔色が悪い程度のことはどうでもよくなる。

彼らの関心は――無論、達也も含めて――「岩場ステージ」で繰り広げられる三高と八高の試合に吸い寄せられた。

試合は予想以上の一方的な展開となっていた。

独り舞台になっていた、という表現の方が適切かもしれない。

カルスト地形を模した「岩場ステージ」は「平原ステージ」に次いで障碍物が少ないステージだ。所々に遮蔽物となる大きな岩が突き出し、転がっているものの、高低差は少なく、視界を遮る木立は無い。

その岩と岩の間を三高陣地から悠然と歩いて進む一人の選手。

一条将輝は堂々とその姿を曝して「進軍」していた。

八高もそれを黙って見ているわけではない。将輝へ向けて、次々と魔法を繰り出す。岩陰を伝って三高陣地へ進んでいたオフェンスの選手までが、その集中砲火に加わっていた。

だが。

将輝の歩みは、止まらない。

移動魔法で投げつけられた石や岩の欠片は、より強力な移動魔法で撃ち落とされた。
彼に直接仕掛けられた加重魔法や振動魔法は、身体の周囲一メートルに張り巡らせた領域干渉によって無効化された。
その「無駄な努力」を嘲笑うように、将輝の歩みは、速まらない。
「……『干渉装甲』か。移動型領域干渉は十文字家のお家芸だったはずだが」
レオも、幹比古も、その圧倒的な技量に絶句する中、達也は手放しで将輝の実力を褒めちぎっていた。
「あれだけ継続的に魔法を使いながら少しも息切れしないのは、単に演算領域の容量が大きいだけではないな。余程『息継ぎ』が上手いんだろう。ああなるともう、センスとしか言いようが無い」
息継ぎ、というのは同種の魔法を連続使用する場合の、一つの魔法が終了し、次の魔法を発動する、その切替を指している。前の魔法と次の魔法の重複時間が少ない程、魔法師に掛かる負担は小さい。この重複時間が短い魔法師のことを「息継ぎが上手い」と形容する。
深雪も非常に「息継ぎが上手い」魔法師だが、達也の見たところ、将輝は深雪に匹敵するセンスを持っている。
途絶えることの無い強力な防御に、八高のオフェンス選手が攻撃を止めた。
身を隠すこともそこそこに、三高陣地へ走り出す。

将輝を撃退することを諦め、先に相手陣のモノリスを攻略することに活路を見出そうとしたのだろう。

だが残念ながら、その行動は迂闊だった。

パニック行動だったのかもしれない。

注意が前方へ向いて無防備になった背中を、将輝が見逃すはずも無く、

至近距離で生じた爆風によって、八高オフェンスは前のめりに吹き飛ばされた。

「収束系『偏倚解放』か。単純に圧縮解放を使えばいいものを……結構派手好きなんだな」

「へんいかいほう、ですか？　その魔法は存じませんが」

隣から質問してくる深雪に、目をフィールドから逸らさず達也は答えた。

「手間の割に効果が少ない、マイナーな魔法だからね。

円筒の一方から空気を詰め込んで蓋をして、もう一方を目標に向けて蓋を外す、というイメージかな。解放された面から高圧の空気が噴出して、普通に圧縮空気を破裂させるより威力を出せるのと、爆発に指向性を与えることができるというのがメリットだが、威力を高める為だけなら普通の空気圧縮で圧縮する空気の量を増やせば良いし、攻撃に指向性を持たせたいなら圧縮空気を直接ぶつければ良い。

……いや、殺傷性ランクを下げる為に、あえてどっちつかずの術式を使っているのか。

力があり過ぎるというのもこういう場合は一苦労だな」

皮肉な笑みを浮かべる達也。

深雪に「それはお兄様も同じなのでは？」という目を向けられたが、それには気づかなかったフリをした。

達也が蓄蓄を傾けている間も、将輝は着実に八高陣地へ近づいている。

このままではジリ貧と思ったのか、ディフェンスに残っていた八高の選手が二人掛かりで将輝へ挑み掛かった。

岩が砕かれ、その欠片が将輝へ襲い掛かる。

将輝の足元の地面が細かな火花を散らし始めたのは、八高選手の放出系魔法による鉱物からの電子強制放出か。

前者は規模で、後者は改変難度で、いずれも上級、と言っても差し支えない魔法だった。

達也たちが八高に、一見あっさり勝利したのは、相手に実力を出させなかったからに過ぎない。正面から魔法をぶつけ合っていたなら、もっと苦戦しただろう。

だが将輝は、この二人掛かりの攻撃を、真正面から本当にあっさりと無効化した。

石飛礫の散弾は将輝を中心とする球状に展開された運動ベクトル逆転の力場にはね返され、放電は未発のまま抑え込まれた。

空気塊の槌が八高選手に叩き込まれる。

接触と同時に解放された圧搾空気が、二人の戦闘力を容易く奪った。

試合終了の合図が鳴る。
吉祥寺も、もう一人の選手も、試合開始から試合終了まで、三高陣地から一歩も動かず、遂に何もしなかった。

「予想以上ね、一条の『プリンス』は……」
ディスプレイから視線を外し、真由美は克人に話し掛けた。
いつもの相方である摩利は、ここにいない。
摩利は今、邪魔をすると馬に蹴られる類の取込中だ。
彼女は本来、ベッドで安静にしていなければならない重傷者なので、真由美も他の幹部たちも、固いことを言いはしなかった。
「何だか、十文字くんのスタイルに似ていた気がするんだけど」
自分のスタイルに似ている、と言われても、克人としては答えにくいだろう。
果たして、彼が返事をする前に、鈴音が会話に加わった。
「おそらく、意識してのことでしょう。一条家の戦闘スタイルは本来、中長距離からの先制飽和砲撃だったはずです。現に予選リーグでは遠方からの先制攻撃でディフェンスを無力化しています。根拠はありませんが……これは、一条選手の挑発ではないかと」
「挑発？」

首を傾げた真由美に、
「俺のスタイルを意識しているのかどうかは分からんが、これは司波に対する、正面から撃ち合ってみろ、という挑発だろうな」
克人が答えた。
「はぁ……気持ちは分かるけど」
随分子供っぽいことを、と真由美の表情は語っていた。
達也の武器は機動力と洞察力、そこから導かれる意外性。
魔法力よりも戦闘技術にあるということは、ここまでの二試合で明らかだ。
その達也が、そんな見え透いた誘いに乗るはずが無い、と。
だが、克人はその無言のメッセージに、同調しなかった。
「司波はこの挑発に乗るだろう」
「えっ、達也くんが？」
「本来の距離では勝ち目が薄い。これは、数少ない勝機だ」
「参ったね、これは……」
一般客席から遠く離れた本部天幕で行われた克人の指摘は、当然達也の耳に届きはしなかった。が、克人が指摘したことは、達也にも十分理解できていた。

そして第三高校の、おそらくは吉祥寺真紅郎の本当の狙いが、あえて隙を見せることで彼を真っ向勝負へ誘い出すことにある、ということも分かっていた。

更に性質が悪いことに、この誘いに乗ることが第一高校にとっても最も勝利の可能性が高い。

（大したものだよ、「カーディナル・ジョージ」……）

「まったくだぜ。何だよ、あの防御力は」

「結局、一条選手以外の手の内が全く見られなかったのも痛いね。これじゃあ、対策の立てようが無い」

達也のボヤキを、レオと幹比古は違う方向へ勘違いしてくれたようだ。

二人とも将輝の強さに呑まれている様だが、逃れられない蟻地獄の様な策略に呑み込まれていると分かってしまうよりはまだ、精神的な被害が少ないだろう。

「吉祥寺選手の方は大体予想できる。もう一人の方は分からないが」

「えっ、そうなのかい？」

だから達也は二人が誤解した方向で、会話を収拾することにした。

「吉祥寺真紅郎が発見した『基本コード』は加重系統プラスコード。出場した競技はスピード・シューティング。

ならば得意魔法は作用点に直接加重を掛ける『不可視の弾丸』だろう」

「基本コード？」

「対象物の個体情報を改変するんじゃなくて、部分的に加重を掛けるなんてできるのかい？」

「そうか……少し長い説明になるが、いいか？」

達也の念押しに、レオは躊躇いながら、幹比古は躊躇無く、頷いた。

「魔法式の研究分野には『基本コード仮説』と呼ばれる理論がある。

それなりに広く支持されている仮説で、『加速』『加重』『移動』『振動』『収束』『発散』『吸収』『放出』の四系統八種にそれぞれ対応したプラスとマイナス、合計十六種類の基本となる魔法式が存在していて、この十六種類を組み合わせることで全ての系統魔法を構築することができるという理論だ。

この基本となる魔法式が『基本コード』。

結論から言うと……全ての系統魔法を構築できる、という点でこの仮説は間違っているんだが、『基本コード』は実在する」

「……間違っているのに実在する？」

「……すまん、早くも混乱してきた」

幹比古とレオの上げた声に対して、達也は「慌てるな」という風に手を振った。

「安心しろ、ちゃんと説明するから。

四系統魔法には、どう組み合わせたって十六種類の『基本コード』だけでは構築できない魔法がある。だから基本コード仮説は誤りだ。だが、基本と呼ばれるだけの特徴を持つ魔法式は

存在する。

現代魔法は、魔法式に改変後の事象の状態を定義することで様々な作用力を発生させる。

改変を生じさせる為の作用力も魔法式の中に定義されているが、それは魔法が作用した結果を定義すること無しに発生しない。

だが基本コードは、作用力そのものを直接発生させることができる。

つまり基本コードとは、『加速』『加重』『移動』『振動』『収束』『発散』『吸収』『放出』の作用力そのものを定義した魔法式のことなんだ。

だから、個体のエイドス全体に働きかけるのではなく、個体上の一点に直接力を及ぼすという魔法が可能になる。

現在発見されている基本コードは、加重系統プラスコードの一つだけ。

それを発見したのが三高の吉祥寺真紅郎、『カーディナル・ジョージ』だ」

最後の言葉に、幹比古が怯んだ表情を見せた。

「吉祥寺真紅郎、って、どっかで聞いた名前だと思ってたけど……『カーディナル・ジョージ』だったのか」

彼の顔色を見て、達也は「まずったな」と思ったが、口にしてしまった以上は仕方が無い。

「そう。だから一条選手だけ警戒していれば良いってわけじゃない。優れた研究者が優れた実行者であるとは限らないが、『基本コード』はそれを使えるというだけで厄介な代物だからな」

基本コードを使用した魔法は、作用力そのものを定義するが故に、一般の魔法に不可欠な事象改変結果を定義する必要が無い。面の一点に圧力をかけた状態を引き起こすという点で、達也がモノリス・コードに出場する直接の原因になった『破城槌』と『不可視の弾丸』は同じ効果を有する術式だが、『破城槌』は圧力をかける面全体の状態を、加重点に圧力がかかった状態に丸ごと改変する必要がある。これに対して『不可視の弾丸』は、圧力を掛ける面――それは壁面でも床面でも人体の表面でも何でもいい――の状態を描き換える必要は無い。『不可視の弾丸』は圧力そのものを描き加える魔法だ。

それゆえ対象物の情報を丸ごと描き換えるのに対して必要となる情報の記述＝魔法式はずっと小さなもので済むし、対象物そのものの情報を改変するものではないので、対象となる事象の情報改変を妨げる『情報強化』では防御できないという利点もある。

より小さな魔法式で、事象改変対象の情報の強度に影響されず魔法を発動できるというのは、かなり大きなアドバンテージと言える。

「幸い、『不可視の弾丸』には作用点を視認しなければならないという欠点がある。エイドスではなく対象物に魔法を直接作用させる為に生まれた皮肉な欠点だが、『不可視の弾丸』による攻撃は遮蔽物で防げるはずだ。領域干渉でも防御可能だが、情報強化では防げないから注意しろよ」

「分かった。気をつけるよ」

「なあ……一つ、疑問があんだけど」
幹比古が頷いたのに続いて首を縦に振った後、レオは遠慮がちにそう切り出した。
「何だ、レオ」
「試合にゃ関係ねえんだけどよ……達也、さっき『十六種類の基本コードだけでは構築できない魔法がある』って言ったよな？　てことは、達也は十六種類の基本コードを全部知ってるってことなんじゃねえか？」
態度や言動に誤魔化されてしまいそうになるが、レオは決して馬鹿ではない。
知識はともかく、知力はむしろ高いと言える。
達也はそれを知っていたはずだが、それでもこの鋭い指摘に驚かされてしまった。
「……基本コードを発見したのは現時点で吉祥寺真紅郎だけだ。俺はただ、基本コード仮説では理論的に構築できない四系統魔法を知っているというだけだよ」
「お兄様、そろそろ移動するお時間では？」
レオが口を開きかけたところで――更に質問を重ねようとしたところで、深雪が会話に割って入った。
「そうだな。そろそろ次のステージが決まる頃だ。本部へ移動しようか」
立ち上がった達也の背中は、それ以上の追及を拒んでいた。

◇　◇　◇

第九高校との試合は「渓谷ステージ」で行われた。

渓谷ステージの形状は「く」の字形に湾曲した人工の谷間。水が流れていると上流・下流で有利・不利が生じるので、実態は渓谷というより崖に囲まれた細長い「く」の字形の湖だ。いや、湖というほど水深は無いので（最も深いところで五十センチ前後）、細長い「く」の字形の「水溜り」か。

この試合は幹比古の独擅場だった。

左右が塞がった細長いフィールドを白い霧が覆った。

試合状況が全く分からなくなった観客からはブーイングが生じたが、それはすぐに静まった。観客は魔法競技を観戦に来ているだけあって、これだけの面積に魔法を及ぼし維持することの難易度を、程度の差はあれ理解していた。

しかもその霧は、一高選手には薄く、九高選手には濃く纏わりついていた。

九高の選手は霧に邪魔をされて、一高のモノリスへ近づくことができない。

何度も霧を消し去ろうとするが、また実際に何度も吹き飛ばしているが、白いヴェールは彼らの努力を嘲笑うように、すぐにその視界を奪う。

風を起こして霧を吹き払っても、代わりに流れ込んでくる空気までが霧に染まっていては意味がないし、気温を上げて飽和点を引き上げても「湖」からの蒸発を促進して徒に不快指数を増進させるだけだ。

霧を発生させている「結界」の古式魔法は、飽和水蒸気量に関係なく空気中の水蒸気を凝結させる魔法であり、気温を上げても供給される水蒸気が増えて霧を濃くするだけの結果になる。また、「結界」の魔法は「閉鎖」の概念を含むから、気流を起こしても霧に満たされた空気が循環する結果にしかならない。

元々、曖昧な対象に継続的な作用を及ぼし続けることは、現代魔法の苦手分野。

現代魔法でこの「霧の魔法」を打ち消す為には、幹比古の魔法作用エリア――「結界」を認識しない限り有効な対抗措置は取れないのだが、九高の新人は古式魔法について勉強不足のようだ。

この霧は分布が人為的に均一でない点を除けば、自然現象以上の効果は無い。

幻惑作用もなければ、衰弱効果もない。閉じ込める効果もない。

だが視界が効かないというだけで、人間の行動を制限するには十分なのだ。

崖に沿って恐る恐る進む九高オフェンスを尻目に、達也は霧に紛れて易々と九高陣地へ到達した。

意図的に彼の周囲だけ薄くなった霧は早足で進む程度なら十分な視界を与えていたし、仮に

視界ゼロメートルであっても達也には何の障碍にもならない。

観客から見られる心配のないこの状況なら、存在認識の視力を遠慮なく使うことができるからだ。

相手に気付かれることなく九高ディフェンダーの背後に回り、達也は「鍵」を撃ち込んだ。

コードを隠していた「蓋」が剝がれ落ちた轟音に、ディフェンダーは慌てて振り返ったが、達也は既に離脱している。

今回は達也が精霊を喚起する必要もない。

霧の結界を維持しているのは幹比古がコントロールしている精霊であり、この霧の中には至る所に幹比古の「眼」が潜んでいるのと同じ。

一高対九高の試合は、一度も戦闘を交えることなく、一高の勝利で幕を閉じた。

◇　◇　◇

決勝戦は三位決定戦の後に行われる。

モノリス・コードの試合時間はどんなに長くても三十分以上掛かることはないが、決勝開始時刻は余裕を持って今から二時間後、午後三時半と決定された。

ＣＡＤの調整も担当している達也は、二時間のインターバルを競技エリアで過ごすことにし

たが、幹比古とレオは一旦競技エリアから出て寛ぐことにしたようだ。

――また兄妹の睦み合いを見せつけられてはたまらない、と思ったかどうかは定かでないが。

集合時間を試合開始一時間前に決めて、それぞれ思い思いの場所へ足を向ける。

レオは食堂で軽く腹ごしらえしてから部屋で休むと言っていた。

彼ほど健啖家でない幹比古は、ホテル最上階の展望室に来ていた。

富士裾野演習場に建てられたこのホテルの展望室は、富士山を間近に仰ぎ見ることができる。

吉田家の神祇魔法は神道系の古式魔法であり、更に細かく分類すれば地祇神道系（国津神を祀る神道系の意味）に属する。

神道系古式魔法の術者にとって、富士山は特別な意味を持っている。

富士山の祭神は天津神（の嫡孫）に嫁いだ国津神であり、富士信仰は天神地祇を問わない。

またそういう教義的な意味合いを抜きにしても、「霊峰富士」は魔法的な力の巨大な集積地である。

展望室のバルコニーに出れば、霊峰の気吹を直に浴びることもできるだろう、そう考えて最上階へ上がってきた幹比古を、予想外の人物が出迎えた。

「あら……こんな所にどうしたの？」

麦藁帽子で日差しを遮り、バルコニーの手摺に肘をついて富士山を眺めていた姿勢から、顔だけを彼の方へ向けてエリカがそう話し掛けてきた。

「僕は富士山を見に……エリカの方こそ、独りでどうしたの？」

幹比古の言う様に、展望室――バルコニーも含めた最上階――には、エリカ以外の人影が無かった。

いや、今は幹比古が来たから二人きりか。

それも当然で、今日ここに集まった人々は、全員が九校戦目当てと言って過言ではない。

今はインターバルとはいえ、三位決定戦も間も無く始まることだし、わざわざホテルまで戻って来て、富士山以外見えるものも無い展望室に上がって来るのは、幹比古の様に特別な目的を持つ者か、余程の変人かのどちらかだろう。

「あたしは、独りになりに、かな」

視線を景色に戻したエリカの横顔はどこか寂しげで、幹比古は軽い狼狽を覚えた。

だからと言って立ち去ってしまうこともできず、立ち尽くしているのも不自然で、仕方なく――少なくとも彼が意識している限りでは「仕方なく」――幹比古はエリカの横に並んだ。

「幹比古君」

相変わらず、視線を日本最高峰に固定したまま、話しかけて来るエリカ。

「えっ、なに？」

――違和感。

「感じる？」

「えっ？」

「気吹を浴びに来たんでしょ？　ちゃんと感じてる？」

いつもと同じ言葉遣い、いつもと違う声音。

いつもどおりでいつもと違う口調。

手摺から身体を起こしたエリカの表情は、この四ヶ月、否、ここしばらくで見たことのない真摯なものだった。

この表情を最後に見たのは、彼女が髪を短くする前、春から伸ばし始めた髪がもっと長かった頃。彼女が一時も刀を手放すことが無かった、二年前のこと……。

「……幹比古君？」

「あっ、ごめん。えっと、そう、エリカの言うとおりだよ」

しどろもどろで答えながら、幹比古はようやく違和感の元に気がついた。

――エリカが彼のことを「幹比古」と呼んでいる――

「気吹を浴びに来たんだ」

「そうじゃなくて」

「えっ？」

「あたしが訊きたかったのはそこじゃなくて。……霊峰の気吹を、ちゃんと感じられてる？」

思いがけない真剣な眼差しに気圧されながら、幹比古は姿勢を正し呼吸を調えた。

深く息を吐き出し、吸い込む。

リズムを保つことは重要だが、それ以上に大切なのはイメージだ。

呼気と共に器を作り、吸気と共に器に取り込む。

吸って、吐く、のではなく、吐いて、吸う。

二回、三回と「呼吸」を繰り返すうちに、幹比古の身体に「生気」が充溢していく。それは想子や霊子のような「粒子」ではなく、もっとエネルギーそのものに近い波動、「気息」とも呼ばれている「力」。

霊峰の気吹を幹比古がキチンと受け止めている、それをその目で確かめて、エリカは彼女らしからぬ、控え目な笑みを浮かべた。

――それは少し、寂しそうな笑みだった。

「エリカ……？」

「何だ、やっぱりできてるじゃない」

「……ごめん、何のことだか分からない」

相手のことを考えていない、自己完結型の省略が多い物言いはいつものことだが、今は、それを理解できない自分が間違っているように幹比古は感じていた。

「幹比古君、気づいてる？　貴方は以前と同じように、あの事故に遭う前の、『吉田家の神童』と呼ばれていた頃と同じように、魔法を使えてるんだよ」

「えっ？」

「ううん。以前と同じ、じゃなくて、それ以上、かな。感覚の同調も霧の結界も気吹の取り込みも、それこそ息をするように自然にできてる」

まさか、とは言わなかった。

何故そんなことが言える、とも幹比古は口にしなかった。

エリカが、「千葉の剣士」がどんな「眼」を持っているのか、彼も知らないわけではない。

「良かったじゃない！」

いきなり「バンッ！」と背中を叩かれて、幹比古は半歩ほど蹈鞴を踏んだ。

「ミキがこの調子なら、三高だって恐るるに足らずね！　決勝、頑張んなさいよ」

「僕の名前は幹比古だ！」

突然いつもの調子を取り戻して、返事も待たずに去っていくエリカの背中へいつものセリフを投げつけながら、幹比古はホッと胸を撫で下ろしていた。

自分が何故、何に安堵したのか、幹比古は意識していなかった。

◇　◇　◇

妹と睦み合っているはずの（とチームメイトに勝手に思い込まれていた）達也は、二人と別れてすぐ、会場のゲートへ呼び出されていた。

「小野先生、ご苦労様です」

彼を呼び出したのは遥だった。

「コラッ、目上にご苦労様とは……分かってて言ってるのね？」

達也が人の悪い笑みを浮かべ、遥はガックリと肩を落とした。

「……私の立ち位置なんてこんなものなのね……ネタがばれたサブキャラなんて、こうして『その他大勢』に埋もれて行くだけなんだわ……」

「何をメタなこと仰っているんですか。ほとんど意味不明ですよ」

「いいの。どうせ私は意味不明な女なの」

「……そろそろ預かって来ている物を渡していただけませんか。俺の方も、時間に余裕があるわけじゃないんで」

達也が手を差し出すと、遥はこれ見よがしにため息をついた。

口には出さず表情で「ノリが悪いわね」と非難しながら、それでも時間が無いということは

理解しているのか、引っ張ってきた電動バッグ（電動アシストキャスター付スーツケース）を大人しく達也に渡した。

「まったく……少しは労わって欲しいわ。私はカウンセラーであって、使い走りじゃないのよ」

「先生に運搬を依頼したのは師匠であって俺じゃありませんよ。でも……そうですね。雑用がご不満なら、本来の仕事をお願いすることにしましょうか」

「いえ、無理に仕事が欲しいわけじゃないんだけど」

「税務申告が必要ない臨時収入……欲しくないですか？」

遥の目に、分かりやすい動揺が走った。

……こんなに人が善い性質（「性格」ではない）で諜報員が務まるのだろうか、と達也は野次馬的にそれを眺めていた。

待ち時間は、それほど長くなかった。

「……仕方ないわね、不安を抱えた生徒の力になるのは私たちの務めだもの。担当外とか時間外とか言ってる場合じゃないわね」

なるほど、そういう名目で折り合いをつけたのか、と達也は思った。

しかし――

「残念ながらそちらの仕事ではなく、もう一つの方の仕事です」

「……何をさせる気？」

途端に強い警戒を示す遥。

こんなに分かり易くて大丈夫か？　と今度は結構本気で、達也は心配してしまった。

まあ、彼女がドジを踏んで捕まって「あんなこと」や「こんなこと」をされても、彼としては一向に構わないのだが。

「ノー・ヘッド・ドラゴン……香港系国際犯罪シンジケート『無頭竜』のアジトの所在を調べてください」

遥は慌てて左右を見回し、今にも抱きつかんばかりの勢いで達也との間合いを詰めた。

「何故ノー・ヘッド・ドラゴンのことを知ってるの!?」

興奮した口調で、それでも声をひそめることだけは忘れずに遥が問う。もっとも、訊かれたからといって答えられる質問でもなかったが。風間たち独立魔装大隊と達也の関係は、秘密にしなければならないもの。それは四葉家当主である叔母直々の命令だ。例え「チョッと話を聞いた」というレベルのものであっても、そこからどんな糸を手繰られるか分からない。

「自分たちに危害を加えようとしている敵の正体を調べるのは当然だと思いますが」

だから達也は、いくらでも広く解釈できる抽象的な回答を返した。しかし遥は彼が、九校戦に対する妨害工作について言っているのだと正しく理解した。

「……何を企んでるの？　今回の件は『公安』も『内情』も既に動いているわ。司波君が手出しする必要は無いのよ」

傍から見れば結構問題のある構図で遥が囁き掛ける。
深雪はもちろんだが、ほのかや雫や他の皆にも見られていなければいいが、と達也は思った。
「今のところ何もするつもりはありません。ただ、反撃すべき時に、反撃する相手の所在が摑めないというのはそれだけで不安ですので。……ところでこの体勢は、誤解を招くと思うんですが」
勢い良く遥の体が離れた。
年上のプライドか、誤魔化し笑いで恥じらいを隠そうとしている。
そろそろ真剣に、諜報の世界から足を洗うことを達也は勧めたくなってきた。
……だからと言って、自分の依頼を取り下げようなどとは思わないのだが。
「……保険、なのね？」
「そう取っていただいて構いませんよ」
探る視線に、即、頷く。
「……分かった。一日、頂戴」
「素晴らしい。一日ですか」
これは裏表の無い、手放しの称賛。
遥は満更でも無さそうに、照れ笑いを浮かべた。

◇◇◇

電動バッグを引っ張ってテントに戻った達也は、残っていたスタッフ全員から向けられる興味津々の視線を全て無視してバッグの中身を取り出した。

「……コート？」

一際遠慮のない態度でわざわざ彼の傍に寄って来て達也の手元をのぞき込んでいた真由美から、そんな質問が投げ掛けられる。

「いえ、マントです」

達也は黒い布地を持ち上げ、広げて見せた。

それは彼の身長でも地面に引きずりそうな、洋風の長いマントだった。

「そっちも？」

「こちらはローブですよ」

黒いマントを机に置き、今度は灰色の布地を広げて見せる。こちらも裾を引きずりそうな、フード付のローブだった。

「一体……何に使うの、それ？」

テントの中を「？」マークが盛大に飛び交う中、独り深雪だけが訳知り顔で笑いを噛み殺し

ていた。

「決勝戦で使います。いや、間に合って良かった」

「お兄様、ルール違反にはなりませんか？」

話について行けない真由美たちを余所に、深雪は少し真面目な顔で達也にそう問い掛けた。

「大丈夫だとは思うが、試合前のデバイスチェックには提出するよ。ルールブックには魔法陣を織り込んだ衣類を着用してはならない、とは書かれていないけどね」

深雪に対する回答を聞いて、真由美が頭上に「？」を追加しながら達也に訊ねた。

「魔法陣を織り込む？」

「ええ。古式の術式媒体で、刻印魔法と同じ原理で作動します。このマントとローブには着用した者の魔法が掛かりやすくなる効果を付与しています」

「補助効果か……それ自体に特定の術式が組み込まれているのでなければ問題ないかな……」

真由美の視線を受けて、鈴音が頷いた。

「ルール上の問題はありません。ルールはそこまで想定していない、というのが正確なところですが」

「ダメだと言われれば諦めますよ。これが無きゃ戦えない、ってわけでもありませんし」

真由美は少し、眉を曇らせて達也に向き直った。

「ねえ、達也くん」

彼女の声には、不安よりも心配が色濃く混ざっていた。

「まだ試合中だからお祭り騒ぎは控えさせてるけど、決勝戦に進んでくれた時点で新人戦の優勝は決まっているのよ。あまり無理をしなくて良いんだからね」

「分かっています」

言われなくても、達也は半分以上、勝負を諦めていた。

――この時点では、まだ。

五十里にマントとローブのチェックを依頼して（というのも、五十里家は刻印魔法の権威として知られており、五十里本人も興味を隠そうとしなかったからだ）、達也は身体を解しにテントの外へ出た。

代役を任命された時に真由美から与えられたミッションは、第一高校の新人戦優勝。

モノリス・コードの決勝戦まで進んだ時点で――つまり現時点で、ミッションは完遂したと達也は考えていた。

入念なストレッチは怪我をしない為のもの。

擦り傷や打撲程度ならともかく、骨を折ったり動脈を切ったりすれば、秘密にしなければならない彼の能力が自動的に発動してしまう。

意識的に止めることはできるものの、それが間に合うかどうかは微妙だ。彼の自己修復能力

は、損傷の度合いが酷ければ、意識が追いつく間も無く一瞬で彼の肉体を修復してしまうのだから。

九校戦は映像を記録されている。例え人の意識が捉えられない一瞬の出来事であろうと、映像記録を後から分析することは可能だ。

改めて自分にそう言い聞かせながら、ストレッチというよりヨガのような運動を続けている途中、深雪がテントから出て来たのに気づいたが、特に急ぎの用という気配もなかったので、そのまま一通り試合前の準備運動を終えた。

「お兄様、タオルをどうぞ」

ストレッチを終えて腰を伸ばした直後、よく冷えた濡れタオルが差し出された。

深雪が真夏の熱気の中に出て来てから短くない時間が経っていたが、冷蔵庫から取りだしたばかりのような冷え具合は……彼女の得意魔法を知っていれば不思議ではなかった。

こういう何気ない一つ一つをとっても、本当に自分には過ぎた妹だと達也は思う。

世が世ならば、この妹の為なら命も惜しくないという男たちが群れをなしていることだろう。

いや、今の世の中でも、わずか一言で男に命を懸けさせることが、この妹には可能かもしれない。真っ先に命を懸けるであろう自分のことは棚に上げて、妹の将来に薄ら寒い戦慄を達也は覚えた。

「お兄様、わたしの顔に何かついていますか？」

本当に自分の顔に何かついていると思ったわけではないだろうが、自分を見詰める兄の名状し難い表情に、深雪としては他に訊きようがなかったのだろう。

――達也の方にも答えようが無く、言葉を濁すことしかできなかったが。

「お兄様……」

達也が誤魔化したことについて、深雪は追求して――来なかった。

「いよいよ決勝戦ですね。次の相手は、相当手強いと思われますが……」

「……そうだね」

強がってみても仕方がない。

もしこれが試合ではなく実際の戦場で、お互いに何の制約もなくぶつかり合ったとしても、あの二人を同時に敵にして、否、相手が一条将輝だけであったとしても、「勝てる」と言い切るだけの自信は、今の達也には無かった。

「力も技も制限された状態で……制限した側の人間であるわたしがこの様なことを申し上げるのは、筋違いでありご不快かもしれませんが……」

躊躇いがちに、俯き加減にそう言って、また実際そこで深雪のセリフは一旦途切れた。

しかしすぐに顔を上げて、はにかみながら、こう言った。

「……それでもわたしは、お兄様は誰にも負けないと信じています」

達也に返事の暇を与えず、ツバメのように素早く軽やかに身を翻してテントの中へ戻っていった妹の後ろ姿を見送った姿勢で、達也は暫し立ちつくしていた。

（参ったね、本当に……）

深雪本人が言っていたように、達也の力を制限しているシステムに、彼女は重要な役割を果たしている。

彼が本来の力で本当の技術を使えない理由の一端は、間違いなく深雪にある。

しかし達也は――深雪のことを、自分勝手だとは思わなかった。

誰にも負けないと信じている、それは、誰にも負けて欲しくないという願望でもある。

そうした機微が完全に理解できるほど、達也も精神的に大人ではない。

だがそのことを達也は、感覚的に理解していた。

彼にそう願った相手が深雪だからこそ、理解できた、と言うべきかもしれない。

そして達也は、深雪の願いを無視できない。

これは誰に命じられたとか誰に仕組まれたとかではなく、そういう風にできているとしか言いようのない彼の心理特性だ。

参った、とはそういうこと。

次の試合、どうやら負けられないらしい。

だが、言うは易く、行うは難し。

どう計算しても目処が立たない勝算に、達也はため息をついた。

◇　◇　◇

三位決定戦が終わり、決勝戦の使用ステージが「草原ステージ」と発表された。
それを聞いた両校の反応は対照的だった。
三高の天幕では、歓声を上げる者もいた。
「お前の言うとおりになったな、ジョージ」
「ついてるね、将輝」
浮かれて声を上げるような真似は自制しているものの、二人とも笑顔を隠せずにいた。
「後はヤツが誘いに乗ってくるかどうか、だが……」
「彼は間違いなく乗ってくるよ。遮蔽物が無い草原ステージでは、正面から一対一の撃ち合いに応じる以外、向こうにも勝機は無いからね」
「ヤツが『術式解体』という手札を持っているからこそ、そこに活路を求めるしかない、か」
「そのとおりだよ、将輝。
彼の戦術は一見、奇を衒っているように見えて、実は凄く緻密な計算の上に成り立っている。
対抗手段が無いなら、分が悪いことを承知で奇策に走るかもしれない。

でも『術式解体』という対抗手段を持っているが故に、最も勝率が高い正面対決を選択するはずだ」

「後はお前が後衛と遊撃の二人を制圧するだけだな」

「後衛の方は問題ないと思う。硬化魔法の腕は中々のものだと思うけど、それ以外の魔法は上手く使えないようだからね。

遊撃の選手は……古式魔法を得意としているみたいだね。名前から見て多分、あの『吉田家』の術者じゃないかな。何をやってくるか分からないという点は不気味だけど、古式魔法と現代魔法なら、スピードの面で現代魔法に分があるからね。遮蔽物が無い草原ステージのメリットがここでも効いて来るよ」

「特にお前の場合は『基本コード』を使えるというアドバンテージがあるからな」

「残念だけど、新人戦の優勝は向こうに持って行かれちゃったから……せめて、モノリス・コードの優勝は勝ち取らないと」

「ああ、やってやるさ」

吉祥寺の言葉に、将輝が力強く頷いた。

「障碍物が無い『草原ステージ』ですか……厳しい戦いになりましたね、お兄様」

深雪の言葉は、激励に来た面々の意見を代弁していた。

「いや、渓谷ステージや市街地ステージに比べればまだマシだ。贅沢を言えばキリが無い」

彼の言葉に、深雪だけでなくチームメイト――レオと幹比古も首を捻っていたので、達也は解説を加えることにした。

「一条家の『爆裂』は、液体を気体に変化させその膨張力を破壊力として利用する術式だ。一条家の人間なら、水蒸気爆発を利用した攻撃はお手の物だろう。

一条選手にとって渓谷ステージは、大量の爆薬がフィールド全域に用意されているようなもの。市街地ステージには実際に水が流れている水道管が張り巡らされている。

それに比べれば草原ステージは『爆薬』となる液体が無い。いくら『プリンス』でも地下水を汲み上げて『爆薬』にはできないだろうからな。

無論、森林ステージか岩場ステージの方がやり易かったんだが……渓谷ステージという最悪のフィールドを免れただけでよしとしなければならないだろう」

一年生が「なるほど」という表情を浮かべたのとは対照的に、上級生の顔色は曇ったままだった。

「……でも、遮蔽物の無いフィールドで砲撃戦が得意な魔法師と対戦しなければならない、っていう不利が無くなるわけじゃないわ」

「司波、策はあるのか？」

真由美の指摘に続いて、服部が訊ねて来た。

彼が達也に自分から話し掛けるのは極めて珍しいことだ。
達也も意外感を隠し切れず、回答が一拍遅れてしまった。
「本来の戦い方をされると正直、手も足も出なかったところですが……一条選手はどうやら俺のことを過剰に意識してくれているようですからね。接近戦に持ち込めば、何とか」
「格闘戦は禁止されてるぜ？」
「触らなければ良いんですよ。手はあります」
桐原の疑問に、達也は少し、自信無さげに笑った。

◇　◇　◇

新人戦、モノリス・コード決勝。
選手の登場に、客席が大きく沸いた、と言いたいところだが、戸惑いにざわめく観客の方が圧倒的に多かった。
野次馬的な好奇の目に曝されて、幹比古はフードを更に深く被り直した。
一方、被り物の無いレオは、少しでも顔を隠そうとしているのか、マントの高い襟の陰で首をすくめていた。
「なあ……やっぱおかしくねえか、この格好」

「使い方は説明したとおりだが」
あからさまに方向性が違う達也の回答は、レオに対する「諦めろ」という勧告だった。
「……何で僕たちだけ」
幹比古のボヤキは一人だけ仮装をしていない達也に対する恨み節。
「前衛の俺がそんな走りにくい物を身に着けてどうする」
しかし幹比古の抗議も、作戦の名の下にスッパリと切って捨てられた。
「クソッ……今頃笑ってやがんだろうな」
レオのセリフは「誰が」という部分が欠けていたが、あとの二人にとっても、あえて特定する必要は無かった。

「アハハハハ……お、おかし～。何アレ、何アレ！　アハハハハハ……」
三人の推測に違わず、エリカは客席で爆笑していた。
「エリカちゃん、ちょっと……」
美月が恥ずかしそうに何度もたしなめて、哄笑はようやく失笑のレベルに落ち着いた。
「あ～、笑った笑った。だから達也くんのやる事からは、目を離せないのよね」
「……エリカちゃんの方が注目集めてたよ、今」
楽しそうに嘯くエリカの隣で、美月が恥ずかしそうに縮こまっていた。

「ゴメンゴメン。チョッと、ツボに入っちゃって。もうバカ騒ぎしないから、機嫌直して、美月？」

「もぅ……お願いだからね？」

周りの席から突き刺さっていた視線がフィールドの方へ戻ったのを肌で感じて（直接目で確認する勇気は無かった）、美月はようやく、顔を上げた。

「でも何だろうね、アレ」

草原ステージは遮蔽物が無いから、観客席から直接フィールド全域が見渡せる。しかし、それでも距離があり過ぎて細かい部分が観えないから、他のステージと同じように、大型ディスプレイが各選手の表情を映し出している。

一高陣地を映した画面の中の、幹比古とレオの姿を凝視するエリカ。

しばらくジーッと見詰めてから、「お手上げ」という感じで首を振った。

「ダメ。あたしじゃ何が目的か分からない。達也くんのことだから、ハッタリなはずは無いんだけど」

「……『精霊』が吉田くんのローブにいっぱい群がってる……」

「えっ？」

独り言に意外な答えを返されて横を向いたエリカは、メガネを外した美月の瞳が、不思議な色合いを帯びているのを見て、息を呑んだ。

何やら時代錯誤か場違い感があるレオと幹比古の衣装にざわめいた観客が多かったが、嘲笑や冷笑の類はほとんど見られなかった。観客の意識を捉えていたのは、あの「ローブ」や「マント」を一体何に使うのか、という好奇心。

しかし、対戦する相手は「好奇心」では済まされない。

「ただのハッタリじゃないのか？」

チームメイトの推測に、将輝と吉祥寺は揃って首を横に振った。

「ヤツはジョージのことを知っていた……あれは『不可視の弾丸』対策か？」

「確かに僕のあの魔法は貫通力が無いけど……布一枚で防がれるようなものじゃないし、彼がそんな甘い考えで対策を立ててくるとは思えない」

「そういう風に思わせる作戦かもしれないぜ？」

「その可能性も無いわけじゃない、が……」

歯切れの悪い将輝のセリフに、

「……分からないな。まさかこの期に及んで隠し玉を用意していたなんて……」

唇を噛み締める吉祥寺。智謀を自認するが故に、悔しさもひとしおなのだろう。

「全くの無警戒というわけにはいかないが、分からないことをあれこれ考えても意味は無い。力押しに多少のリスクは付き物だ」



吉祥寺の迷いを断ち切る為か、将輝は少し強い語調で言い切った。
だからといって、将輝自身に戸惑いが無いというわけではない。
観客にとって好奇心の元は、対戦相手にとって警戒心の元だった。

選手たちや応援席からは知る術が無かったが、スタンドがざわめいた理由はもう一つあった。
本部席近くのスタンドがざわめいた理由。
それは、思いがけない来賓にあった。
「九島先生！　このようなところへ如何なされました!?」
いつもであれば、大会本部のＶＩＰルームでモニター観戦している九島老人が突如来賓席に姿を見せたのだ。
「たまにはこちらで見せてもらおうと思ってな」
直立不動で迎え入れる大会委員たちへ鷹揚に頷きを返し、九島烈は急遽用意された革張りの椅子に腰を下した。
「それはもちろん、我々にとって光栄なことと存じますが……」
何故、こんなに急に？、という言外の問いに、九島老人は気さくな答えを返した。
「なに、一人、面白そうな若者を見つけたのでな」

試合開始直前の時間は、おそらく、選手の心の中に最も迷いが渦巻く時間だろう。どれだけ自信があっても、どれだけ勝算があっても、実際に戦ってみるまで勝敗は分からない。シーズンリーグ制で同じ相手と何度も戦うのではなく、同じ相手と一回しか戦わない競技会であれば特に、敵の実力が分からないことに対する不安が強くなる。

しかしその迷いは、試合開始の笛が鳴るまでのもの。

戦いの火蓋が切られれば、迷いを持つことなど許されない。

試合開始の合図と共に、両陣営の間で砲撃が交わされた。

魔法による遠距離攻撃。

それを観客は大喜びで迎え、第一高校の応援席は意外感に言葉を失っていた。

両陣地の距離はおよそ六百メートル。

森林ステージや渓谷ステージに比べれば短い距離だが、実弾銃の有効射程で測れば、突撃銃では厳しい間合いであり狙撃銃の距離だ。

それをお互い、外見上は自動拳銃そのもののCADを突きつけ合い撃ち合いながら、相互に歩み寄って行っている。

達也は予選、準決勝と同じ二丁拳銃スタイル。

それに対して将輝は、準決勝の汎用型を特化型に持ち替えている。

右手のCADで相手の攻撃を撃ち落とし、左手のCADで攻撃を仕掛ける達也に対して、将輝は意識的な防御を捨てて攻撃に専念している。

その結果、

ただでさえ大きな攻撃力の差が、ますます広がっていた。

将輝の「射撃」が一発一発に決定的な打撃力を秘めているのに対して、達也の「射撃」は牽制以上のものにはなっていない。

単に相手へ攻撃が届いているだけで、特に防御を意識しなくても魔法師が無意識に展開している情報強化の防壁で防がれてしまう程度の振動魔法だ。

手数も圧倒的に劣っている。

だが色々と裏技じみた手札を隠し持っているとはいえ、普通の意味での魔法技能は間違いなく劣っている達也が、相手の攻撃に曝されながら肉視が難しいこの距離で的確に攻撃を当てているというだけで、驚くべきことだった。

「何という胆力」

三年生の男子生徒が、唸り気味に呟いた。

「彼は本当に二科生なの？」

女子選手の一人が、チームメイトに訊ねている。

魔法そのものの威力ではなく、攻撃を受けているというプレッシャーの中で正確に魔法を行

使している精神力に、上級生たちは驚きの声を上げていた。
だが、真由美や克人、鈴音、あずさ、服部……彼ら、彼女たちの顔色は優れない。
今のところは単なるあいさつであり、一歩近づくごとに、達也は防御に力を回すことを余儀なくされ、その分、攻撃の手数が減っていることが、彼らの目には明らかだった。
吉祥寺は三高の陣地内で、一高の選手やスタッフとは別の意味で驚いていた。
達也が今、行使している魔法は、振動系統。
しかしここまでの三試合で、達也が使用した魔法は無系統魔法と、加重系統だった。
（わずか二時間足らずで起動式の構成を変えてきた……？）
吉祥寺は頭を振って雑念を追い出そうとした。
ＣＡＤの調整技術がどれほど優れていようと、調整の過程は試合に影響しない。
試合を左右するのは調整が終わった後の結果だけだ。
調整のスピードに感心している場合ではない。それは番狂わせを生む可能性がある「迷い」だ――
「打合せどおり、僕も行くよ」
「おう、後は任せろ」
自分が何時の間にか、相手チームを格下と見下しているという事実に気づかず、吉祥寺は将

輝の背中を迂回して一高陣地へ駆け出した。

吉祥寺が自陣から飛び出すことにより試合は新たな段階に突入した。しかし観客の意識は、その大半が達也と将輝の攻防に釘付けとなったままだった。

人々は強力な魔法を絶え間なく的確に放ち続ける将輝の技量にため息を漏らし、それ以上の感嘆を、将輝の魔法を撃ち落とす達也の『術式解体』へ向けていた。

高位対抗魔法『術式解体』のことを知る観客は、それほど多くない。規格外の想子保有量を要求する『術式解体』は、専門の研究者であっても目にする機会が少ない魔法だ。

だが知識は無くとも、想子の可視化処理が施された大型ディスプレイで、激しく輝く想子の砲弾が空中に顕現した空気圧縮の魔法式を撃ち抜き消し飛ばしていく様を見ることができる。

それは幻想的で、スペクタクルで、興奮を誘う映像だった。

想子を視覚的に認識することができる魔法師、あるいは魔法的な素質を持つ観客は、ディスプレイではなく直接フィールドを見て、空中に乱舞する想子の嵐に圧倒されていた。

彼らは、理屈抜きで感情を揺さぶるその光景に、目を奪われていた。

達也は今、将輝の攻撃を撃ち落すのに神経を集中している。

それでも、三高陣地から吉祥寺が飛び出したのは見えていた。

それにつられるように――実際、吉祥寺が動いたのを見た結果――、達也はそれまでの慎重な歩みを疾走に切り替えた。

達也のダッシュにも慌てることなく、将輝は的確に圧縮空気弾の魔法を達也めがけて放っている。

ジグザグに回避行動を取りながら走る、ようなことはしない。

手で照準をつけているのではないのだから、その程度の回避行動に意味は無い。

達也は走りながら、空中に生じる事象改変の気配に神経を張り巡らせ、想子の砲弾――『術式解体』をぶつけて将輝の攻撃を魔法が顕在化する前に潰しながら、三百メートルの距離を駆け抜けようとする。

だが――彼我の距離が近くなれば、照準も容易になる。いくら物理的な距離に直接左右されないといっても、物理的に近くなれば認識上も近く感じることがたやすくなる。

特に空気のような目に見えないものに狙いをつける場合は、対比物が近くにある程、照準はつけやすい。

この場合の対比物は、攻撃対象である達也。

残り五十メートルを切ったところで、達也は遂に、将輝の攻撃をさばき切れなくなってしまった。

撃ち落し損ねた圧縮空気弾が達也に襲い掛かる。

それを五感全てで察知し、五体に刻み込まれた体術で躱しながら、なおも将輝へ向けて進む。真っ直ぐ進むことができなくなった今、数十メートルの距離が厚い壁となって達也の前に立ちはだかっていた。

「とうとう誤魔化し切れなくなった様だな」

追い詰められた達也を見て、観客席の山中は、むしろ楽しそうに呟いた。

「不謹慎ですよ、先生。魔法の発動兆候と透明の空気弾の両方を五感だけで把握し切るのは、いくら達也くんでも無理でしょう。それにこの状況なら、『精霊の眼』でなくとも『第六感』で言い訳が利きます」

藤林の弁護に、山中は人の悪い笑みを浮かべた。

「そうかな？　確かに、そこらの有象無象の目は誤魔化せるだろうが……あちらの御仁の眼まで誤魔化せるとは思えんが」

山中が視線で指し示した先は本部来賓席、そこには九島老人の興味深げに試合を見詰める姿があった。

藤林はそちらをチラッと見ただけで、すぐに視線を達也へ戻した。

フィールドを迂回して一高モノリスの横手を目指した吉祥寺は、その途中、一高陣地まで

およそ百メートルの地点で、レオに行く手を遮られた。
ディフェンダーがここまで前進していることに戸惑いを覚えつつ、吉祥寺はレオに向かって『不可視の弾丸』を放った。
否、放とうとした。
「なっ？」
その視線の先に広がる、黒い壁。レオが脱ぎ捨てたマントが、翻り広がった姿そのままで固まって、レオの前に突き立ったのだ。
横手から、吉祥寺へ向けて、風を切って金属片が襲い掛かる。
武装デバイスの空飛ぶ刃を、一瞬で発動した移動魔法によって大きく後方へジャンプすることで吉祥寺は躱した。
そこへ突風が襲い掛かる。
吉祥寺は加重系魔法で自分の身体にかかる慣性を減らし、風に逆らわず飛ばされることで風撃のダメージを緩和した。
（厄介な！）
心の中で舌打ちしながら、『不可視の弾丸』の照準をレオの十メートルほど後方に姿を見せた幹比古へ合わせる吉祥寺。
まず邪魔な援護射撃を潰そうという判断だ。

だが、灰色のローブに目の焦点を合わせた途端、遠近感が定まらなくなった。
ユラユラと揺らぐ陽炎が、ピントの狂った銀塩写真のように灰色の人影をぼやけさせている。
(幻術!?)
視線を目標に合わせなければならない『不可視の弾丸』を逆手に取られた、と覚った瞬間、吉祥寺は頭上から襲い掛かる『小通連』の刃に気付き、回避不能なタイミングに、目を閉じた。
「ガアッ!」
しかし、肺から空気を搾り出されたような苦鳴は、レオの口から放たれた。
必倒のタイミングでレオが振り下ろした刃は狙いを逸れて地面にめり込んでおり、レオの身体は横合いから叩きつけられた空気の爆発で吹き飛ばされ地面に横たわっていた。
「将輝!」
助かった、という謝辞を省略して、吉祥寺が救い手の名を呼んだ。
まんまと敵の策に落ちた吉祥寺を、達也に攻撃を続ける傍らの援護射撃で将輝が助け出したのだ。
吉祥寺の指がCADのコンソールを走り、加重の系統魔法が発動した。
重力の方向を急に変えられ、幹比古は為す術も無く横へ「落ちた」。
倒れた幹比古へ、得意魔法への拘りを捨てた吉祥寺の、加重増大魔法が襲い掛かる。
地面に押し付けられた幹比古の口から、押し出された息が漏れた。

その光景を、達也も黙ってみていたわけではない。
吉祥寺へ将輝の注意が逸れた一瞬で、達也は彼我の距離を五メートルまで詰めていた。
達也の体術を以てすれば、一投足の間合い。
一投足を必要とする、間合い。
将輝の顔に、紛れも無い動揺が走った。
恐慌に似たそれは、あるいは、実戦を経験した兵士が持つ、脅威に対する直感か。
レギュレーションを超えた威力の圧縮空気弾が十六連発で達也へ向けて殺到した。

対抗魔法・術式解体は、想子の圧縮弾で強引に魔法式を吹き飛ばす技術。
強引であるが故に、その効率は極めて悪い。
あまり知られていないことだが、魔法式にも強度がある。
干渉力の強い魔法式とは、その構造を維持しようとする力が強いサイオン情報体でもある。
将輝ほどの術者が作り出す魔法式を、技術的に分解するのではなく力ずくで消し飛ばす為には、達也にとっても大量の、並みの魔法師では一日掛けても搾り出せない程の想子を圧縮する必要がある。
それが一瞬で、十六連発。
術式解体では間に合わない、と瞬時に判断しながらなお、達也は『分解』を選択しない。

頑なに、機密指定された魔法を使おうとしない。
情報構造体を『分解』する『術式解散』を隠したまま、『術式解体』で迎撃する。
その結果、それはある意味、必然か。
迎撃は十四発までしか間に合わず、達也は最後の二発の直撃を受けた。

自分の足元に沈む達也の姿を見て、将輝は「しまった」と臍を噛んだ。
自分が衝動的な危機感に駆られて、ルールを逸脱した出力で魔法を放ってしまったということを、彼は魔法発動直後に自覚していた。
一瞬のことだ。もしかしたら、審判は気付かなかったかもしれない。
レッドフラッグは挙がっていない、が、自分が失格に該当する反則を犯してしまったと、彼自身が知っていた。
その自覚が、将輝の時間を奪う。
それは、取り返しのつかない、一瞬の空白となった。

【肋骨骨折　肝臓血管損傷　出血多量を予測】
【戦闘力低下　許容レベルを突破】
【自己修復術式／オートスタート】

【魔法式／ロード】
【コア・エイドス・データ／バックアップよりリード】
【修復／開始――完了】

――それは達也の意識より速く走り、達也が意識するより早く完了した。
無意識領域の情報処理速度は、意識領域の処理速度を大きく凌駕する。
自分が倒された、と彼が意識した時には既に、肉体の修復は完了していた。
手の届く距離に、立ち尽くした足。
何故将輝がそのような隙だらけの状態で硬直しているのか、達也は知らない。
今は、知る必要が無い。
そんな余計なことを考える前に、彼の身体は跳ね上がっていた。
右足を踏み込み、不意を衝かれ強張った将輝の顔面目掛けて、右腕を突き出す。
反射的に傾けた首の横を、傾けた以上の距離で、達也の右手がはしり抜ける。
最初から当たらない軌道で放たれた右手の突きが将輝の耳元を通り過ぎた瞬間、
音響手榴弾に匹敵する破裂音が、達也の右手から放たれた。
その轟音に、スタンドが静まり返った。
戦闘中の吉祥寺ですら、振り返り、動きを止めた。



達也の右手は、親指と人差し指の指先を付け、親指と中指を交差させた形で、突き出されている。

選手と審判と観客と応援団と、この場に集う全員が見つめる中で、将輝が地面に崩れ落ち、達也はガックリと膝をついた。

「なに？　今のは一体何なの？」

すっかり狼狽しきった声と表情で、真由美は左右の席に訊ねた。

だが答えは返って来ない。

鈴音もあずさも、真由美の質問に答えられない。

「……指を鳴らして、その音を増幅したのだろう」

答えは鈴音の更に向こう側、克人からもたらされた。

「……そうですね。単純な、音波の増幅。大音響による鼓膜の破裂と三半規管のダメージで、一条選手を戦闘不能に追い込んだのでしょう。ルール上は問題ありません」

克人の言葉を、鈴音が引き継いだ。

「今の魔法は、音量の増幅度こそ大きいものの、術式としては振動系統単一の簡単なものです。だから魔法の高速発動が苦手な司波君でも、あの一瞬で発動できたんでしょう」

「そんなことは最初から分かってるわ！　あの右手を見れば一目瞭然じゃない！」

だがその解説に対する真由美の反応は、八つ当たり気味のヒステリックなものだった。

「だから何で一条選手の攻撃で倒されたはずの達也くんが立ち上がっていたの!?

達也くんは倒されたんじゃなかったの!?

迎撃は、『術式解体』は間に合わなかったはずよ!?

少なくとも二発は直撃を受けたはずよ!?

ルール違反の過剰攻撃で大怪我をしたはずの達也くんが、何故立ち上がって戦い続けたの!?」

「七草、落ち着け」

達也が大怪我をしたというショックで真っ青になっていた真由美を、克人がどっしりと落ち着いた声で宥めた。

「俺にもそう見えたが、現実に司波は立ち上がり、怪我人には不可能な動きで敵を倒した。こうして見る限り自分が放った音響攻撃にダメージを受けているだけで、それ以上の怪我は無い」

「でも……」

「司波は古流の武術に長けているとか。古流には肉体そのものの強度を高める技や、衝撃を体内で受け流す技もあると聞く。おそらくは、その類だろう」

「……」

克人の言葉に納得した様子ではなかったが、とりあえず、真由美は落ち着きを取り戻したようだった。

「俺たちが知っている知識だけが、世界の全てではない。魔法だけが『奇跡』ではないのだ。それよりまだ試合は終わっていない」

「……そうね。ごめんなさい、十文字くん。リンちゃんもゴメンね」

真由美と鈴音が和解している内にも、戦況は新たな段階を迎えていた。

「彼の自己修復は、何時見ても凄いな！」

楽しそうに――それでも周囲の耳を気にして囁き声で――歓声を上げた山中に、藤林は半信半疑の視線を向けた。

「……本当に自己修復術式が働いたんですか？　私には術式発動の想子波動も見えませんでしたが」

「私にだって見えなかったさ。九島閣下だって気づかなかっただろうね。何せ、彼の自己修復スピードは人間の認識速度を超えているからな」

そこまで言って、山中はようやく、藤林が自分を険しい顔で睨んでいることに気づいた。

「ああ、いや――確かに見えなかったな。私は司波達也君が、使えないはずの自己修復術式を使ったところなど、見てはおらんよ。いや、人間離れして頑丈だな、彼は。実に面白い」

そう言いながら楽しそうに含み笑いを始めた山中に、藤林は呆れ顔で注意した。

「だからと言って彼を実験台にしても良いということにはなりませんからね？　彼はこの国に

二人しかいない、世界にも五十人はいないと言われている貴重な戦力なんですから」
「多少の実験くらいで壊れるようなひ弱な男ではないと思うがね」
「壊れなければ良いというものではありません！」
ピシャリとたしなめられて、山中は首をすくめた。
「まあ、それはそうと……藤林の言うとおり、あれを使ったな」
「ええ、やはり規定内の低スペックCADでは、一条君の相手は厳しかったのでしょう。フラッシュ・キャストの使用は仕方が無いと思いますよ？」
「振動系単一のフラッシュ・キャストか。まあ、こちらの機密は守られたわけだな」
フラッシュ・キャストの技術を秘しておきたいのは四葉であって独立魔装大隊ではない。この技術は人道上の問題が大きすぎて正規の軍隊では採用できないのだ。
独立魔装大隊にとって秘密にしなければならないのは、達也が持つ本来の魔法。達也は圧倒的に不利な戦いの中で「分解」を最後まで使わなかったし、自己修復術式は誰が見ても認識できないレベルでしか使わなかった。これで達也は普通に注目されるだけに留まるだろう。さもなくば軍としては、達也という貴重なサンプルにして戦力を、敵対勢力に手出しされないよう保護する必要も生じていたかもしれない。
それは同時に、彼の自由を更に奪うということだ。そんなことになれば、達也と対立、否、対決する場面も考えられないではないのだ。憎まれ口を叩いていても、山中も実のところ、こ

の結果にホッとしているのだった

「左手に振動系をインストールしたCADを持っていたのは、このカモフラージュなのでしょう。相変わらず彼は、用意周到です」

「あれで高校生だというのだから、世の中間違っとるよ。しかし、フラッシュ・キャストか。敵として考えればあのスピードは脅威だな」

山中の言葉に、藤林は深く頷いた。

「本当に……洗脳技術の応用で記憶領域に起動式をイメージ記憶として刻み付け、CADから起動式を読み出すのではなく記憶領域から起動式を読み出すことで、起動式の展開・読込み時間を省略する技術……。

彼の場合は意識内の演算領域という特異性からこの技術を更に発展させ、記憶領域に魔法式をイメージ記憶として蓄えることで魔法式構築の時間すら省略……これによって演算領域のスピード不足を完全に補ってしまうのですから」

「補って余りある、と言うべきだろうな。ウチの隊に、今の術式を彼以上の速度で発動できる者がおるか？　同じ系統の技術を持つ柳が、辛うじて匹敵するくらいだと思うが」

「……確かに、他には思いつきませんね」

二人は最早、試合を見ていない。

膝をついたままの達也を、気遣うように見詰めているだけだった。

吉祥寺は、パニックに陥りかけていた。
自分が目にしているものが、信じられなかった。
将輝が地面に倒れている。
相手選手、達也は膝をついているが、その目は光を失っていない。
つまり……
（将輝が、負けた……？）
それはありえない光景だった。
決して起こりえないはずの出来事だった。
チームとして負けることはあっても、将輝が倒される確率はゼロのはずだった。
「吉祥寺、避けろっ！」
ディフェンスに残したはずのチームメイトの声を間近に聞いて、ハッと我を取り戻した吉祥寺は、反射的に『避雷針』の魔法を行使した。
電気抵抗を改変された丈の短い草が、放たれた電撃を吸い寄せ地面に流す。
吉祥寺は、加重魔法で押さえ込んでいたはずの敵選手が、荒い息に灰色のローブを揺らしながら立ち上がり彼を睨みつけているのにようやく気がついた。

轟音を耳にしても、幹比古には何が起こったのか分からなかった。
周囲の状況を視認する余裕が彼には無かった。
ただ、彼を地面に押え込んで圧力が急に消え去って、急いで地面を転がり、距離をとって立ち上がる、反射的な避難行動を取っただけだった。
そこでようやく状況を理解した。
レオは、倒されている。
達也は、膝をついている。倒れてはいないが、戦闘続行は難しいコンディションに見える。
そしてその前に、一条将輝が倒れている。
（やったんだね、達也！）
達也なら何とかするに違いない、と思いつつ、その一方で「いくら達也でも」と考えていた幹比古は、彼がその目で確かめた現実に奮い立った。
幹比古自身のコンディションも良好とは言えない。
むしろ最悪と言った方がいいかもしれない。
息をするたびに胸が悲鳴を上げる。
折れていなくとも、ひびくらい入っているかもしれない。
長時間圧迫されていた所為で、軽い酸欠状態になっている。
倒された時に激しく打った背中が痛い。草が生えているくせにやたらと硬い地面だ、と幹比

古は心の中で毒づいた。

しかし――ここでリタイヤすることはできない。

例えコンディションが最悪で、一対二になってしまったとしても。

否、例え、ではなく現実にそのとおりの状況なのだが、それでも――負けられない。

達也は「クリムゾン・プリンス」を正面から倒したのだ。

ならば自分は、せめて「カーディナル・ジョージ」だけでも倒してみせる――そういう意地が、震える幹比古の脚を支えていた。

ＣＡＤを操作し雷撃魔法を放つ。同時に、灰色のローブに魔力――信号化された想子を通す。

ローブに宿らせた「影」の精霊が彼の姿をにじませたはずだ。

影、イコール闇、ではない。

物の輪郭は影によって見えている。

影という概念の独立（孤立）情報体である「影の精霊」が明暗の輪郭を狂わせることにより、相手の視覚認識を妨げ、正確な照準が取れないようにする。

元々の術式は彼の、吉田家のものだが、術式を補助するローブと、ソフトウェアを徹底的に効率化したＣＡＤで、視覚認識阻害の術式を発動するスキームを考えたのは達也だ。

彼が昔に近い――エリカは昔以上と言っていた――感触で魔法を使えるのも達也のお陰だ。

ボーイの真似事などという、由緒ある家系の術者にとっては屈辱そのものの仕事に放り込ま

れた自分が、こうして戦いの場に立てているのも達也のお陰だ。
決勝戦まで勝ち抜けたのも、間違いなく、達也の作戦のお陰だ。
このままでは、何もかもが、達也のお陰、になってしまう。
幹比古はそう考えて、自ら唇を噛み切ることでふらつく足に活を入れた。

――何もかもが、達也のお陰なんて
――そんなことは、僕のプライドが許さない
――何としてでも、一矢を報いる
――自分を地べたに這いつくばらせた、吉祥寺真紅郎を
――今度は僕が、地面に引きずり倒してやる

あえて高慢に、驕慢に、傲慢に、幹比古は己に対して言い聞かせた。
達也は言った。
彼に、教えてくれた。
幹比古自身の力が足りないのではなく、術式に欠陥があるのだと。
ならば――
（達也、君の言葉を証明させてもらうよ！）

彼の身体をかすめて行く魔法は無視する。
影の魔法は、彼の姿を身体一つ分ずらして、敵の目に映し出しているはずだ。
自分の魔法の効力を信じて、幹比古はローブの内側で、両手操作の大型携帯端末形態ＣＡＤのコンソールに、長いコマンドを打ち込んだ。
そしてＣＡＤから離した右手を、足元の地面に叩きつけた！

通常の汎用型ＣＡＤは、二桁の数字と決定キー、合計三つのキー操作で起動式を展開する。
上位機種、特に携帯端末形態の高性能機種には、ショートカットキーを備えたものがあり、使用頻度の高い魔法を選んで一操作で魔法を発動できるようにしているものもある。
今、幹比古が操作したキーの数は十五回。
通常の汎用型ＣＡＤによる魔法発動手順の五倍。
それでも古式魔法の術式手順より遥かに所要時間が短い。
格納している起動式の数が同じである以上、幹比古のＣＡＤが余分にキーを叩かなければならないということはない。幹比古は五つの魔法を一つの魔法の工程としてまとめ上げるのではなく、五つの魔法の連続発動を指定したのだ。
それは逐次展開と同じ発想の技法。
五つの魔法を含む一つの魔法式をまとめて構築するのではなく、一つの魔法を発動中に次の

魔法式を構築する。
一つ一つの魔法の結果を確認しながら対話式で術式を完成させる、精霊魔法では当たり前の手順。
それを一連の連続動作として、一々結果を確認せずに一気に処理を進める。
それが達也の、幹比古に示した解だった。

叩きつけた手の下で、地面が揺れた。
ローブに身を包んだ古式の術者が手で打ったから地面が揺れたのではなく、地面の表層を振動させる魔法が発動した結果だということは吉祥寺にも分かっている。
それでもその如何にも「魔法遣い」然とした姿と、アクションと、その結果もたらされた現象が、「掌で叩いて地面を揺らした」という錯覚を吉祥寺に呼び起こした。
バランスを崩した吉祥寺の足元へ、幹比古の手元から地割れが走った。
地面を引き裂いているのではなく、土に圧力を掛けて押し広げているのだ、とこれも理屈では分かる。
だが何故か、そういう論理的な思考が現実味を失っていた。
吉祥寺は、加重軽減と移動の複合魔法で、空中へ逃れようとした。
だが彼の足は、地面を離れなかった。

草が彼の足首に絡みついていた。

――植物を動物のように操る魔法を、彼は知らない。

未知の魔法に、心が揺さぶられる。

これは単に、地面すれすれの気流を起こして草を絡みつかせただけなのだが、現代魔法しか知らない魔法師であれば、そのように「適当」な――角度を指定して風向きを変えて行くのではなく、「もつれさせる」という曖昧な結果をもたらすような――気流操作が可能とは思わないだろう。

地割れが彼の足の下に到達し、

草が彼の足を地割へ引きずりこんだ、ように吉祥寺は感じた。

全ては錯覚。

だがこの錯覚から逃れる為に、吉祥寺は全魔法力を跳躍の術式に注いだ。

――そんな必要は、全く無かったにも関らず。

絡まった草を引き千切り、必要以上に高く飛び上がる。

不気味な緑のアギトから脱出できた安堵感に満たされた吉祥寺の意識から、幹比古のことが一時的に消え去っていた。今まさに交戦中の敵のことを、吉祥寺は意識の焦点から外してしまった。

そこに、決定的な隙が生じる。

幹比古が連続発動した魔法は五つ。
『地鳴り』『地割れ』『乱れ髪』『蟻地獄』。
それがここまでに発動し終えた、四つの術式。
そして最後の一つ、『雷童子』の雷撃が、吉祥寺を空中から撃ち落した。

「このヤロウ！」
地面に手をついたままの姿勢で撃墜の成果を確認した幹比古へ、三高最後の選手の魔法が襲い掛かった。
土を掘り起こし、土砂の塊を叩きつける移動系魔法『陸津波』。
この魔法の本来想定している形に比べれば随分と小規模な土砂の津波だ。本当は不得意な魔法なのかも知れないし、ルールを考慮して威力を落としているのかもしれない。
だがいずれにせよ、既に吉祥寺の攻撃によって小さくないダメージを受けている幹比古には、十分決め手になる打撃力を秘めている。
まだ彼の干渉下に留まっている精霊に命じて土砂を退けようか、と考えて――その短い時間で、幹比古は諦めた。
残念ながら、それだけの魔法力が残っていない。
精霊魔法と言っても「精霊」自体が力を持っているのではない。精霊はあくまで情報体。事

象改変の干渉力を伝える媒体に過ぎないのだ。

結局、負けちゃったな……そう思いながら、押し寄せて来る土砂を、瞬きもせずに見ていた幹比古の視界が、急に、黒く遮られた。

まるで鉄の壁に跳ね返されたような重い音がして、土砂が元の動かざる地面に戻る。

幹比古は黒い壁が飛んできた方へ顔を向けた。

そこには、雄叫びを上げて腕を振り回すチームメイトの姿。

大きく弧を描いた武装デバイスは、三高最後の一人を横殴りに打ち倒した。

「……勝った、わよね？」

「……勝ちました、ね」

独り言のような真由美の問い掛けに、独り言のような口調で鈴音が答えた。

それが、合図になった。

誰かが歓声を上げた。

一人の歓声に二人の歓声が呼応し、四人、八人と連鎖的に拡散し、

歓声が、爆発した。

一高生の無秩序な叫び声が、渾然一体となり地響きと化してスタンドを揺るがす。

それは無邪気で、純粋すぎる、感情の発露。

勝者を讃えると同時に、敗者を打ちのめす、裁きの槌音。
しかし、その無慈悲なお祭り騒ぎは、何故か、すぐに収まっていった。
第一高校応援席の、最前列。
両手で口を押さえ、ポロポロと嬉し涙を流しながら、フィールドを見詰める一人の少女の姿。
よろめきながら立ち上がり、彼女へ向けて手を振る兄を、深雪は声を失ったまま、ただ見詰めることしかできない。
まるで、そんな彼女を励ますように、彼女の周りから、徐々に拍手が広がっていった。
やがて拍手は第一高校の応援スタンドを超えて、敵味方の区別無く、激闘を終えた選手を分け隔て無く讃える拍手へと変わって、
――会場全てが、暖かな拍手に包まれた。

思いがけない拍手のシャワーに、達也たちは照れ臭さを禁じ得なかった。
ヘルメットを脱いで二人の元へ歩み寄る達也も、彼を待っていたレオと幹比古も、あえて客席を見ようとしない。
「……それにしても一番美味しいところをさらっていったな。狙ってたのか？」
顔を合わせるなりいきなり放たれたこの偽悪的なこのセリフも、照れ隠しであることは、言われたレオにも聞いていた幹比古にも口にした達也本人にも明々白々だった。

「そりゃ、まさかだぜ。しばらく本当に動けなかったんだよ。あんな衝撃は、二年前、大型二輪にはねられて以来だ」

「はっ？　大型二輪にはねられたって？」

幹比古が「冗談だよね？」という表情で問い返したが、レオは大真面目に頷いた。

「いや、あん時はマジでこたえたね。後ろにガキンチョがいてさ、避けるに避けられず、覚悟を決めてドンッ！　だったんだけどよ……さすがに無傷とは行かず、肋骨三本、ひび入っちまってさ。まっ、今回はそれよりやマシってえか、楽だったけどな」

「えっ、と……レオ？　念の為に訊いておきたいんだけど、さっきの圧縮空気弾は、硬化魔法で防いだんだよね……？」

「いやぁ、恥ずかしながら、攻撃に気を取られちまって……お察しのとおり、ガードが間に合わなかったんだよ。いや、面目ねえ」

幹比古の顔が疑問符に埋め尽くされた。歯に衣を着せずに言えば実に間抜けな表情だったが、幸いそれを笑う者は今この場にいなかったし、大型ディスプレイもフィールドの俯瞰映像に切り替わっていて選手の細かな表情まで拾っていない。

「じゃあ、もしかして……一条選手の攻撃魔法を、生身で凌いだの？」

「凌げなかったぜ？　だから立ち上がるのに時間が掛かっちまった。んっ？　幹比古も、唇を切ってるじゃねえか。大丈夫か？」

「あっ……うん、大丈夫……だよ」

噛み合わない会話、それ以上に信じ難い告白に、幹比古は目を白黒させていたが、上機嫌のレオは相手の戸惑いに気づいていなかった。

「そういや、達也の方は大丈夫か？」

「んっ？　すまん、もう一回言ってくれ」

「達也は大丈夫か？　って言ったんだけど」

「ああ……鼓膜が片方破れててな。今、耳が良く聞こえないんだ。それより幹比古、どうしたんだ？　何だかＵＭＡ（未確認生物）を発見したような顔をしているぞ」

幹比古の内心はそれに近いものだったが、「もしかしたら自分の方が非常識なのかもしれない、いや、そんなことはあり得ない」という葛藤もあった。

「えっと、じゃあ達也はさっきまでの僕たちの話が……聞こえてなかったんだよね？」

「すまんな。今も唇を読んでようやく理解できている状態だ。レオが大型二輪にはねられたことがある、ってとこまでは読み取れたんだがな」

「……その発言に疑問を感じなかったの？」

その葛藤にケリを付け自分の常識を守るべく、幹比古は恐る恐る問い掛けたのだが。

「疑問？　何に？」

達也の答えを聞いて、幹比古は絶望に捕らわれ天を仰いだ。

「幹比古、一体どうしたんだよ？　急に辛気くさい顔しやがって。俺たちゃ、勝ったんだぜ。優勝だ、優勝」

「そうだね……」

急に疲れ切った表情を見せた幹比古に、無理もねえな、とレオは勝手に納得し、達也もまた、レオに同調した。

そんな二人を見て、幹比古は思う。

結局、最後に物を言ったのは、魔法力でも技術でもなく、頑丈な身体だったのか、と。

衰えを見せぬ拍手に観念したのか、肩を組み、腕を振って、照れながらも歓声に応える二人を見て、「僕は鍛え方が足りない……」と幹比古はしみじみ思った。

[11]

新人戦優勝のパーティーは総合優勝のパーティーまでお預けとなった。

一つには代役としてモノリス・コードに出場し、競技優勝と新人戦優勝を決めた三人が決勝戦で肉体的に大きなダメージを受けていて、ドンチャン騒ぎができる状態ではないという事情もあった。しかしそれよりも大きな理由として、総合優勝がかかった明日のミラージ・バットの準備でそれどころではなかったのである。

一高の新人戦優勝により、一高と三高の総合ポイントは更に差が開いていた。

その差、百四十ポイント。

明日のミラージ・バットの配点は一位が五十ポイント、二位が三十ポイント、三位が二十ポイント、四位が十ポイント。

明日予選、最終日決勝のモノリス・コードの配点は、一位チームに百ポイント、二位チームに六十ポイント、三位チームに四十ポイント。

明日のミラージ・バットの成績次第で、最終日を待たずに一高の総合優勝が決まる。

選手とエンジニアはコスチューム（モノリス・コード選手は防護服）とCADの仕上げ調整に余念が無く、手の空いたメンバーも様々な形で彼らを手伝っていた。

右耳鼓膜破裂をわざと「修復」せずに医務室で通常の魔法治療を受けた達也は、その後、自

己修復術式を発動して完治させた耳を医療用の耳当てで隠して、深雪とマンツーマンで明日の準備に当たっていた。

チームのメンバー、特に上級生が、既に治っている右耳をそうとは知らず気遣ってくれるのが達也としても少し心苦しくはあったが、彼にも隠さなければならない事情がある。真夏には暑苦しい覆いを耳に被せたまま我慢することを代償に、なけなしの良心には目を瞑らせることにした。——そんなものは代償になどならないと、分かってはいたが。

もっとも、「余念が無い」とは言っても、前日にじたばたしなければならない事はほとんど無い。

いや、全く無いと言った方が良いかもしれない。

昨晩の、いきなり二人分——自分の物も含めれば三人分——のCADを白紙の状態から仕上げなければならない様な慌ただしさは、滅多に起こらない異例の事態。

新人戦から本戦への鞍替えはあったものの、深雪がミラージ・バットに出場するのは予定されていたことであって、その為の準備は抜かり無く進めて来ている。一日、予定外に別件で塞がってしまったからといって、それで大した影響を受けるわけでも無いのである。

「無理をせずに休んで、達也くん。貴方は昨日から散々無理をしてるんだから」

「深雪さんも、もう休んでください。貴女が頑張っていると、怪我人が何時までも無理を止めようとしませんので」

ＣＡＤのフルチェックを手際よく終わらせた達也は、真由美や鈴音から、深雪込みで、半ば追い立てられる様にして本日の活動に終止符を打った。

◇　◇　◇

しかしその一方で、この同じ夜、一睡もできないほど追い詰められていた者たちもいた。

「第一高校の優勝は最早確定的だ……」

「馬鹿な！　諦めると言うのか？　それは座して死を待つということだぞ！」

「このまま一高が優勝した場合、我々の負け分は一億ドルを超える。ステイツドルで、だ」

「これだけの損失、楽には死ねんぞ？　ただでさえ今回の企画は負けた場合の金額が大きすぎて本部が渋っていたのを、我々が無理に通したものだからな。良くて生殺しの『ジェネレーター』、適性が無ければ『ブースター』として死んだ後まで組織に搾り取られることになる」

テーブルを囲んだ男たちは、おぞましい物を見る目で、部屋の四隅にボンヤリと立ち尽くす四人の男を順番に窺い見た。

「この企画がなければ今期のノルマを達成できなかったとはいえ……少し強引すぎたか」

「そんなことを言っている場合ではなかろう！　……こうなっては最早、手段を選んでいる場合では無い」

「そうとも！　最初から本命に負けてもらう予定で色々と手間を掛けたのだ。多少手荒な真似になっても今更躊躇う理由は無い。客に疑いを持たれたところで、証拠を残さなければ何とでも言い訳は立つ。この際、徹底的にやるべきだ」

「協力者に使いを出そう。明日のミラージ・バットでは、一高選手の全員に途中で棄権してもらう。――強制的にな」

「運が良ければ死ぬことはあるまい。さもなくば、運が悪かったというだけだ」

狂気を孕んだ含み笑いが、同意の印に投げ交わされた。

◇　◇　◇

大会九日目は、前日までの好天から打って変わって、今にも雨が降り出しそうな分厚い雲に覆われた、薄暗い曇天だった。

もっとも、眩しい日差しの無い、夜明けを随分と過ぎてもなお薄暗い空は、ミラージ・バットにとって滅多に無い好条件であり、この競技に出場する深雪たちにとってはむしろ「好天」と言えた。

「ミラージ・バットにとっては試合日和、なんだろうが……どうも、波乱の前触れに見えるな」

空を見上げて独り言の様に呟いた達也の言葉に、深雪は眉目を曇らせた。

「まだ何か起こるのでしょうか……？」

「狙いが分からないからな……起こるという確証もないし、起こらないという保証も無い。だがまあ、深雪が心配する必要はないよ。何があろうとお前だけは、俺が守ってやるから」

達也の言葉に他意は全く無い。

達也としては、深雪だけを守れれば良いのだ。

本音を突き詰めれば、他の選手が犠牲になっても自己責任であり自分の関知するところではないと達也は考えている。

だが――二人の会話を誰も見聞きしていなかったことを、彼は天に感謝すべきかもしれない。もしこの場に第三者がいたなら……尚も空を見上げる達也の傍ら、彼の視界の外側で恥じらい俯きながらも至福の笑みを浮かべて身を寄せる深雪の姿を見ていた者がいたなら、「悶え殺し」という世にも奇妙な罪状で、彼ら兄妹は告発されることになったかもしれなかった。

◇　◇　◇

深雪の出番は第二試合に決まった。

本当は休息時間をたっぷり取れる第一試合が良かったのだが、そう何もかも都合良く運ぶはずはない、第三試合にならなかっただけよしとしよう、と達也は考え直した。

二人は第一試合を競技フィールド脇のスタッフ席で観戦することにした。

第一試合終了から第二試合開始まで四十五分のインターバルがあるとはいえ、一々客席からフィールドへ移動するのは時間がもったいない。

他校の選手は、と見れば、やはりフィールド脇に、皆揃っていた。

「小早川先輩、随分気合いが入っているご様子ですね」

湖面に突き出た円柱の上で開始の合図を待つ先輩選手を、深雪はそう評した。

達也の目にもそう見えた。

小早川は気分屋だ、と摩利がこぼしていたが、もしかしたら自分の手で総合優勝を決められるかもしれない、となれば気を抜く方が難しいに違いない。

勝敗は相手のあることだが、この分なら大丈夫だろう、と達也は思った。

観客が、スタッフが、チームメイトが注目する中、始まりを告げるチャイムが鳴った。

第一ピリオドは順位が目まぐるしく入れ替わる接戦となったが、小早川がわずかな差でトップに立った。

我知らず息を詰めていたエリカは、ホッと力を抜いて、隣に座る美月に話し掛けようとして――いつもと違う友人の姿に目を瞠った。

「美月……メガネを外して大丈夫なの？」

霊子放射光過敏症の魔法師がオーラ・カット効果の施されたメガネを掛けているのは、活性化した霊子の影響でその場を覆う激しい感情に巻き込まれるのを防ぐ為だ。今のこの状況、大勢の観客が興奮をぶつけ合っている中でそのメガネを外しては、精神に大きな負荷が掛かってしまうはずだ。

「正直……チョッと辛いかな」

膝の上に置くメガネに添えた美月の両手が、時折微かに震えているのに、エリカは気づいた。

「でも、いつまでも自分の力から逃げてるだけじゃダメだと思うから」

「……美月は別に、逃げてるわけじゃないと思うけど」

彼女が魔法科高校に進学した理由をエリカは何度か聞いている。

もちろん、主な理由は魔法の素質という稀な才能を活かす為であり、具体的には魔法大学に進学し魔工師になる為だ。

だがそれと同時に、視えすぎている「眼」をコントロールする技術を学び身につけるという目的も持っている。二科生に許されている範囲で最大限、その為の指導も受けている。

未熟であっても自分の「力」にキチンと向き合っているのだから逃げているのではないし、未熟な内は道具の助けを借りるのもむしろ当然のことだとエリカは思う。

だから、だろう。

「無理したって良いことは無いと思うけど。一足飛びに技術が身に付くことは無い、とは言わ

ないけど、身体を壊しちゃうことの方が多いんだから。美月の場合は、もっと取り返しのつかないことになる可能性があるんだよ？」

少し厳しい言い方になってしまったのは。

「うん……でも、見なくちゃいけないときに、見えている物から目を逸らすのは、やっぱり間違っていると思うの……」

それでも美月は、メガネを膝の上に置いたままだった。

「渡辺先輩が怪我したときも、私がちゃんと見ていることができたら、少しは達也さんたちの役に立てたと思うから」

「……だから今回は、何か起こった時に備えて、見張っているつもり？」

「うん、あのね……深雪さんは大丈夫だと思うの。だって、深雪さんに何かされるのを達也さんが見逃すはずはないもの。でも今日は、他の選手まで、手が回らないと思う。昨日もあんなに無理をしたばかりだし。そしてもし」

「他の選手が犠牲になった場合、達也くんが知らん顔するはず無い、か。まあそうだろうねぇ……冷たいように見えて、意外とお人好しだから」

「達也さんは仲間思いのすごく暖かい人だよ！」

「ハイハイ、分かってるって」

（「仲間」じゃなきゃ、トコトン冷酷になれる人のような気もするけどね）

後半の本音は心の中に止め、エリカは手振りを併せて少しムキになっている美月を宥めた。

そこへ、二人の話を聞いていた幹比古が、美月の向こう側の席から口を挟んだ。

「エリカが柴田さんを心配するのは分かるけど、もし達也の考えているとおり、妨害工作に精霊魔法が使われているなら、柴田さんの『目』が一番頼りになるのも確かだ。一応、霊子放射光の刺激を緩和する結界を僕らの周りに作っておいたから、後遺症が残るようなことにはならないと思う」

必要以上に熱がこもっている（とエリカは感じた）幹比古の言葉に、エリカは意地の悪い笑みを浮かべた。

「フ～ン……？　ミキが美月を守ってあげるんだ？

じゃあ美月に何かあった時には、ミキが責任を取りなさいよ？

もちろん、男の子が女の子に対して取る責任だからね？」

「なっ、今は、そんなことを言ってるんじゃないだろ！」

顔を赤くして反論する幹比古は、愛称に対するいつもの抗議も忘れている有様。

美月はと言えば、顔を茹で上がらせて抗議すらできない状態だ。

「……お前ってホント、意地の悪い女だな」

そしてエリカはといえば、もう一つの隣の席からもたらされたため息混じりの非難を、どこ吹く風とばかり黙殺していた。

無視されたレオと知らん顔をしたエリカの間でいつものにぎやかな掛け合いが続いている内に、第二ピリオド始まりのチャイムが鳴った。

二人は「物足りない」と表情で語り合いながらも、選手と他の観客の邪魔にならないよう口を閉ざした。

そして、第二ピリオドが始まって程なくして、それは起こった。

緑色の光球に向けて、小早川と、もう一人、同時に跳び上がった。

優先権が与えられる一メートル圏内への到達は、残念ながら相手がわずかに早かった。

跳躍の勢いを止める魔法を、小早川が行使した。

彼女の身体が空中で静止する。

続けて、元の足場に戻る魔法を編み上げようとして、その足場が別の選手に使われているのに気づいた。

彼女は慌てず、一番近い、空いている足場へ着地する為の魔法に魔法式を切り替えた。

重力を無視して、真っ直ぐ斜めに、ゆっくり空中を滑空する移動魔法。

だが、斜めに降りるはずの彼女の身体は——重力に引かれて、真っ直ぐ落ちて行った。

真下へ向かう落下の感覚に小早川の表情が引きつったのが、観客席からもハッキリ分かった。

驚愕。
恐慌。
恐怖。

彼女の身体を支えるはずの魔法が発動しない。

これまで彼女の人生を支えてきた魔法から示された突然の裏切りに、もがくことすら忘れて湖面に落ちて行く。

水面とはいえ、十メートルの高さだ。落ち方が悪ければ、致命傷ともなり得る。

そして小早川は、落下に備えた姿勢を取る素振りも見せていない。

だが幸いこれは、二重、三重に安全を考慮されたスポーツ競技だ。選手が魔法のコントロールを失って落下するという事態には当然、対策が為されていた。

立ち合いの大会委員が減速の魔法を放った。小早川が落ち始めてから、大会委員の魔法が彼女の身体を受け止めるまで、実際には一秒も掛かっていないだろう。

それでも、水面まで残すところの高度は半分程度しか残っていなかった。

それは、彼女の心を打ちのめすのに十分な時間、十分な道程だった。

時計が止められ、担架で運ばれていく上級生を、達也は痛ましげな眼差しで見送った。

魔法を学ぶ少年少女が魔法を失う原因の内、最大を占める理由は、魔法の失敗による危険体

験、それによってもたらされる魔法に対する不信感だ。

魔法は世界を偽る力。

魔法それ自体が、世界の理からはみ出した偽りの力。

それでも達也自身のように、魔法を「眼」で見ることができれば、偽りであっても確かにここにある力だと信じることもできる。

だが、多くの魔法師（の卵や雛鳥）にとって、魔法は目に見えない、あやふやな力。想子を見ることはできても、魔法がどういう仕組みで働いているかを見ることはできない。理論でしか、知ることができない。

――自分が使っている魔法は、本当に自分の中からもたらされた力なのか――

この問い掛けは、魔法を学ぶ過程で誰もが、と言っていい程、ほとんどの魔法師が一度は懐く疑問、否、疑念。そして、発動するはずの魔法が効果を顕さず、魔法によって避けられたはずの危険に直面した時、この疑念が確信に変わる、ことがある。

――やはり、魔法など無いのだ――

という、確信に。

この確信に取り憑かれた魔法師は、二度と魔法を行使することができなくなる。

魔法は、それ程までに脆く危うい、精神の微妙なバランスの上に成り立っているのである。

（……小早川先輩はもう、ダメかもしれんな）

蒼褪めた深雪を励ますように、その肩を抱き寄せながら、達也は心の中でそう呟いた。
重力に囚われた瞬間、それを自覚した瞬間に小早川の表情を塗りつぶした、恐怖。
他人だ、と割り切っていても、貴重な才能が失われるのは、やはり寂しいことだった。
そんな彼の感傷を断ち切るように、胸ポケットの通信端末が振動した。
ピタリと身体を密着させていた深雪が物問いたげに見上げる前で、達也は折りたたみ式の音声通信用ユニットを展開して耳と口元に当てた。
『達也、幹比古だけど、今、話しても大丈夫かい？』
「……ああ、大丈夫だ」
音声通信ユニットの音波干渉消音機能が作動していることを作動ランプで確認して、達也はそれでもなお、声をひそめて応えた。
『今の事故のことなんだけど、残念ながら僕の方では、術の兆候を見分けられなかった』
「そうか……」
『ゴメン、期待してくれてたのに、応えられなくて……』
「いや、捉えられなかったのは俺も同じだ」
『でも、柴田さんが、達也に話したいことがあるって』
「美月が？　もしかして、メガネを外していたのか？」
達也の口調に、演技ではない、驚きが混ざる。

だが、幹比古はそれに、直接は答えず、
『達也さん、美月です』
通話相手を交代することで答えにした。
「美月、何か視えたのか？」
大丈夫なのか、という言葉も達也の喉元で待機していた。
だがそれは、美月の心意気に失礼だと達也は思った。
彼女は自分の「視力」を、魔法に携わる者として、自分の意思で行使したのだ。ならばその成果を問うのが、同じく魔法の世界で生きる自分の返すべき言葉だ、と達也は思った。
『ええ、その……小早川先輩の右腕で……多分、ＣＡＤをはめている辺りで光が、いえ、「精霊」がパチッと弾けたみたいに、その、視えました』
「そうか……視えたのか。それで、その『精霊』は弾けて散ってしまったんだな？」
『えっと……ええ、そんな感じでした。こう、とても古い電化製品が、パチッと火花を散らして止まってしまう、みたいな……』
「そうか。なるほど、分かった……そういうことか」
達也は朧気ながら、「敵」の仕掛けたカラクリが見えたような気がした。
『あの、達也さん……？』
彼が頷く雰囲気が、音声通話越しにも分かったのだろうか。

おずおずと、ではあったが、少し、期待の込められた声が、受話器から流れ出した。
「良くやったな、美月。今の情報は、とても役に立った」
『ありがとうございます！』
美月が訊きたいことを、聞きたかったことを先取りして答えた達也のセリフに、美月の弾んだ声が返って来た。

◇　◇　◇

第一試合、第一高校の成績は、残念ながら途中棄権。
重苦しい雰囲気に包まれた一高テントを抜け出して、達也はＣＡＤのチェックを行っている大会委員のテントへ赴いた。
深雪は選手控え室――テントの中でも一応は「部屋」だ――に残して来た。
今までのやり方を見る限り、二試合連続で手を出してくるとは思わなかったし、選手に直接暴力的な手段を用いることは無いだろう。だがそれとは別に、試合前の選手は試合に集中すべきで、機器のチェックなどという雑事に煩わされるべきではない、と達也が同行を押し止めたのだ。
ＣＡＤのレギュレーションチェックはこの数日で何度も繰り返した手続きであり、何事もな

く進み、何事もなく終わるはずだった。しかし、そんな彼の楽観的な見通しは、ＣＡＤを検査装置に掛けた瞬間、彼の脳裏から蒸発して消えた。

それは完全に、衝動的な行為だった。

係員が彼の手からＣＡＤを受け取り、検査機にセットし、コンソールを操作したのと同時、異常を感知した、という認識が彼の意識に届いた時には、既に、

彼の手は、

係の委員をテーブルの向こう側から引きずり出し、地面に叩きつけていた。

悲鳴が上がった。

続けて、怒号が――正確には怒号を上げながら警備担当の委員が――駆け寄って来た。

だが、そんなものは、彼の耳には届いても、彼の意思には届かない。

一切の手加減無く放射した殺気が、足音を止め、喧騒を静寂に塗り替える。

それは、彼に唯一残された「本気」の発露。

「……なめられたものだな」

苦鳴が上がったのは、組み伏せた胸を抑える膝の圧力を高めた結果の、生理的反応か。

彼が叩きつけた係員は、苦痛に呻きながらも、達也の放つ鬼気に、歯の根が合わず、歯を鳴らすこともできず、口元と頬を痙攣させていた。

「深雪が身につける物に細工をされて、この俺が気づかないと思ったか？」

そんなことを言われても、彼の家族事情を知らない第三者に分かるわけがなかった。
だが同時に、何も分からないまま、誰もが理解せずには、いられなかった。
彼が漏らした不吉な含み笑いに。
一方的な暴行を受けているこの係員は、決して触れてはならぬ物に、竜の逆鱗に触れてしまったのだと。
そんな、自分を取り囲む人々には見向きもせず、達也は組み敷いた検査係員へ冷ややかに問い掛けた。
「検査装置を使って深雪のＣＡＤに何を紛れ込ませた？　ただのウイルスではあるまい」
係員の顔がこれ以上無いまで引きつった。その恐怖と絶望の表情は、単に死神に出会っただけの人間のものではない。それは冥府の御遣いに罪を暴き立てられた、咎人の顔だった。
「なるほど、この方法ならＣＡＤのソフト面に細工することもできるだろう。大会のレギュレーションに従うＣＡＤは、検査装置のアクセスを拒むことができないからな」
達也を取り押さえようと駆け寄った警備担当委員の内、最も達也に近い場所に立っていた者が、彼の独り言めいたセリフを聞いて息を呑んだ。達也に押さえ込まれたＣＡＤ検査係の男を見るその警備員の目が、被害者を見る眼差しから容疑者を見る視線に変わった。
「だがこの大会、今までの事故が全てお前一人の仕業というわけでもあるまい？」
達也の膝の下で、男が目に涙をにじませて何度も弱々しく首を横に振った。

「そうか。言いたくないか」

達也が男に見せつけるようにして、右手の指を揃え真っ直ぐ伸ばして手刀を作った。

その指先を、蛇の鎌首のように男へと向ける。

達也の右手が、組み伏せた男の喉元へゆっくりと近づいて行く。

それを見ていた者たちは、目を逸らすこともできず、何故か同じことを思った。

同じ光景を想像した。

この少年の指は、この哀れな罪人の首の皮を容易く突き破り、喉を抉り、血溜まりの中に無慈悲な裁きを執り行うだろう……。

「何事かね？」

だがその避け得ない破局は、穏やかな老人の声によって、回避された。

威圧感も厳しさもない、春風のようなその声が、その声に含まれた波動が、その場を蹂躙していた殺意を柔らかく呑み込み、中和した。

「――九島閣下」

憑き物が落ちたように鬼気を収めて、達也は手を離し、膝をどけ、立ち上がって九島老人に一礼した。

「申し訳ありません。見苦しい姿をお見せしました」

「君は――第一高校の司波君だな。昨日の試合は見事だった。それで、一体何事かね？」

達也の鬼気が収まったのを肌で感じて、狼藉を働いた彼を取り押さえようという動きを見せた者もいたが、最前列で達也の言葉を聞いていた同僚に制止された。

「当校の選手が使用するＣＡＤに対する不正工作が行われましたので、その犯人を取り押さえ背後関係を尋問しようとしておりました」

「そうか」

その場にいた者は皆、彼の殺意に凍り付いていた者は誰もが、その言葉を嘘だと感じた。

尋問だけで、済ませたはずがない、と。

だが九島老人は、彼が放っていた鬼気については何も追求せず、達也の言葉に頷いた。

「不正工作が行われたＣＡＤというのはこれかね」

「そうです」

かつて「最高にして最巧」と謳われた老魔法師は、検査機械からＣＡＤを取り外して目の前に持って行き、繁々と見詰め、頷いた。

「……確かに、異物が紛れ込んでおるな。これは、見覚えがある。私が現役だった頃、東シナ海諸島部戦域で広東軍の魔法師が使っておった電子金蚕だ」

そう言って、地面から立ち上がれぬままの男へ冷ややかな視線を投げた。

ヒッ、と声を上げて、男が腰を抜かしたまま後退る。

「電子金蚕は有線回線を通して電子機器に侵入し、高度技術兵器を無力化するＳＢ魔法」

ＳＢ魔法とは「精霊」を含む自律性の非物質存在(Spiritual Being)を媒体とする魔法の総称。

九島老人は自分の記憶を掘り起こし、どこか懐かしむような口調で、その魔法の正体を語る。

「プログラムそれ自体を改竄するのではなく、出力される電気信号に干渉してこれを改竄する性質を持つ為、ＯＳの種類やアンチウイルスプログラムの有無に関わらず、電子機器の動作を狂わせる遅延発動術式。我が軍は電子金蚕の正体が判るまで、随分苦しめられたものだが……君は電子金蚕のことを知っておったのか？」

「いえ」

九島老人の問い掛けに、達也は身振りを伴わず、「休め」の姿勢を保持したまま言葉だけで答えた。

「電子金蚕という言葉は初めてうかがいました。ですが、自分の組み上げたシステム領域に、ウイルスに似た何かが侵入したのはすぐ分かりました」

「そうか」

達也の言葉に、九島老人は楽しげな笑みを浮かべた。

しかし視線が告発を受けた検査係へ向けられた時には、その笑みは、歴戦の魔法師が敵を見下ろす際に浮かべる笑いに変わっていた。

「では君は、一体どこで電子金蚕の術式を手に入れたのだね？」

悲鳴を上げ、四つん這いでその場を逃れようとする工作員は、達也を取り押さえようと集まっていた警備員に拘束された。

「さて、司波君。君もそろそろ競技場に戻った方がよかろう。ＣＡＤは予備の物を使うと良い。このような事情だ、改めてチェックは必要ない。――そうだな、大会委員長？」

突如掛けられた声に、背後に付き従っていた老人――と言っても、九島老人より一回り以上若い――は、大急ぎで頷いた。

「運営委員の中に不正工作を行う者が紛れ込んでいたなど、かつて無い不祥事。言い訳は後でじっくり聞かせてもらおうか」

今にも卒倒しそうな顔で、それでも何とか肯定の応えを返す大会委員長とその取り巻きたちから視線を外し、九島老人は再び楽しげな目を達也へ向けた。

「司波達也君、君にもいずれ、話を聞かせてもらいたい」

「ハッ、機会がございましたら――」

「フム、ではその『機会』を楽しみにしていようか」

これが達也と九島烈の、最初の直接遭遇だった。

◇◇◇

第一高校の本部天幕へ戻ってみると、自分に向けられる視線が、そこに込められた感情が、微妙に、だが確実に変化していることを、達也は敏感に感じ取った。

――あるいは、「元に戻った」と言うべきかもしれない。

微妙であるのは、隠そうとして隠し切れていない為。見る目を変えることに後ろめたさを覚えながら、そうせずにはいられない心の揺らぎ。

達也は決して鈍い人間ではない。

情緒に偏りがあるだけで、その偏っている部分では、むしろ、極めて鋭敏であると言える。

感が鈍いのは、好意。

鋭にして敏であるのは、悪意。

今、彼に向けられている眼差しは、彼にとってお馴染みのもの。得体の知れぬ異質な存在に対する戸惑いと恐れ、そして、忌避。

「お兄様……」

そして、その中でただ一人、彼を忌避していない少女は、眉と声を曇らせて彼を出迎えた。

「すまんな、心配掛けて」

そしてその、唯一つの眼差しだけが、彼の心に鈍い痛みをもたらす。

「そんなこと！　だってお兄様は、わたしの為に怒ってくださったのでしょう？」

勢い良く首を振ったはずみに、結い上げている途中の髪が、少し解れた。

「早いな。もう事情を聞いたのか？」

零れ落ちた髪をすくって頭をそっと撫で上げた手に、深雪は恥じらい、俯き、それでもシッカリと、兄の問い掛けに答えた。

「いいえ。ですが、お兄様が本気でお怒りになるのは、いつも……わたしの為、ですから……」

シッカリと答えながらも、徐々に涙声に変わっていく妹の頬に手を添えて、達也はそっと、上を向かせた。

「……そうだな。俺は、お前の為にだけ、本当に怒ることができる。

でもね、深雪。兄貴が妹の為に怒るのは当たり前なんだ。

そしてそれは、俺の心に唯一つ残された『当たり前』だ。

だから深雪、お前は哀しまなくても良いんだ」

達也は空いている右手でハンカチを取り出して、涙をたたえた妹の目元にそっとあてがった。

「それに……せっかく綺麗にメイクしたのに、涙で汚してしまってはもったい無いよ？　今日はお前の為の、晴れ舞台になるんだから」

「もう……お兄様ったら。試合に出るのはわたしだけではありませんのに。それは身贔屓とい

うものですよ」

苦笑い気味ながら、それでも深雪の笑顔は誰よりも輝いていた。

少なくとも達也にはそう見えた。

妹が笑顔を取り戻したことに安堵と満足を覚え、頬に当てていた手をそのまま肩に移して、一緒に中へ入ろうと天幕の方へ顔を上げた達也は、彼を取り囲む視線が再び、そして今度は奇妙な、変化を遂げていることに気がついた。

息をひそめ身を縮めて物陰からこっそりと窺い見る視線から、

ウンザリしながら無視することもできずにいる生暖かい眼差しへ。

「あら、達也くん」

こんな時でも、生徒会長は生徒たちの代弁者、と言わんばかりに、真由美が一際生温い視線と薄ら寒い声で達也を迎えた。

「大会本部から『当校の生徒がいきなり暴れ出した』と言われた時には一体全体何事かと思ったのだけど……とってもシスコンなお兄さんが、大事な大事な妹にちょっかいを掛けられそうになって怒り狂っていただけだったのね」

極めて不本意な言われよう、だったが、台風接近間近の如きじっとりと湿った生温い風が吹き付けてくる中、兵数の圧倒的劣勢を悟った達也は、戦略的撤退を選択した。

つまり、エンジニアに割り当てられた作業室へ、こそこそと逃げ込んだのである。

こうして達也は一高の中で、忌み嫌われ孤立する、という事態を免れたのであるが、それが彼の本意だったかどうかは……本人に訊いても、分からなかったに違いない。

◇　◇　◇

夜明け前からどんよりと曇った空は、二試合目の始まる九時半になっても回復へ向かう気配は無かった。

「今日は良い天気だな……できれば夜まで、このままの天気が続いて欲しいところだ」

「夕方から晴れるそうですよ」

「星明りも結構邪魔になるんだが……まあ、雨が降るよりマシだろうね」

予選を通過し夜の決勝へ進むことを完全に前提としている兄妹の会話を、少し離れた椅子で聞いていたあずさは、それを「呑気だ」とは感じなかった。

一般に、一年生と二年生以上の実力差は、二年生と三年生の実力差よりも大きい。魔法の専門教育は、高校課程から本格化するものだからだ。

だから仮に新人戦がなくとも、本戦に一年生がエントリーするケースはわずかだろう。普通なら、大会期間中にいきなり新人戦から本戦へコンバートされても、上位進出どころか予選通過も難しい。

だが――

（深雪さんにそんな常識は通用しないでしょうね……司くんまでついているんだし）

あずさは気が弱いところを除けば、同年代の少年少女の中で間違いなくトップクラスにランクされる魔法師（の雛鳥）だ。これだけ気の弱い性質で第一高校の生徒会役員に選ばれていること自体が、彼女の能力を逆説的に証明している。

そのあずさが見るところ、深雪には本気で優勝を狙える実力がある。

妹単独でもそれだけのずば抜けた力があるのに、それをあの兄が全力でサポートするのだ。

例え優勝候補筆頭だった摩利が万全の状態で出場していたとしても、勝てないかもしれないとさえ思えてしまう。

心の中でそんな、第三者的な論評を加えていたあずさだったが、実は彼女も第三試合を担当するエンジニアであり、今ここにいるのは少し早めにＣＡＤの最終チェックを行う為だった。

本戦のモノリス・コードとミラージ・バットは九校戦男女それぞれの最終競技とあって、どの学校もスタッフをフル稼働で貼り付けている。

第一高校では、選手一人にエンジニア一人体制で両競技に臨んでいた。

だからこの競技に限っていえば、司波兄妹はあずさにとってライバル。

同じエンジニアとして、達也があずさのライバル、と言った方がより正確かもしれない。

だが――あずさは始まる前から、勝ち負け以前に、競い合うという気持ちすら持てなくなっ

ていた。

さっきの出来事。

大会本部から達也が係員に暴行を働いている、と一報された時には、驚くよりも「怖い」と思った。

意外感はなく、逆に「彼ならば」と心のどこかで納得していた。

まだそれほど長くも深くも無い付き合いだが、「彼は理由なく暴力を振るうような男の子じゃない」とあずさは思っている。だが同時に、理由があれば暴力に訴えることも躊躇わないだろう、とも思っている。

そして、暴力に躊躇いを持たない心が、あずさには恐ろしかった。

魔法が軍事目的で開発され、今でも戦力・抑止力としての役割が魔法の用途の中で大きな比率を占めていることは、あずさも当然、弁えている。だが軍事力にしろ警察力にしろ、それは行政システムに組み込まれた「暴力」だ。その行使には、決定する者、命令する者、実行する者、監督する者、多種多数の人間が責任を分かち合う。

だが彼はきっと、自分一人で決定し、実行し、その責任を負う。

おそらくはそれが、相手の死――殺人という結果につながるものだとしても。

その冷たい鋼のような心のあり方が、恐ろしく感じられた。

恐れから驚きへの変化は、彼の口から詳しい経緯を聴くことでもたらされた。

ＣＡＤに不正な工作を加えていた現場を見つけ出し、取り押さえたという事情説明。

小早川を担当していた平河という三年生技術スタッフの、泣き出しそうに歪んだ表情が、あずさの瞼に焼き付いている。悔しかったのだろう、とは、容易に想像できる。容易に共感できる。

自分はＣＡＤに細工されたことが分からなかった。その所為で選手が事故を起こして、その結果、特に優秀な同級生が一人、再起不能になってしまうかもしれない。それに比べて、彼は。……もし自分が平河の立場だったら、あの場で逃げ出してホテルの部屋で泣いていたかもしれないと、あずさは思う。

達也が二科生であり「劣等生」であるというのは、紛れも無い事実だ。

彼の実技成績は、ギリギリで赤点を取っていないというレベルのもの。

入学直後の実技試験で赤点を取る生徒は毎年五人以下だから、彼の成績は「良くない」ではなく「悪い」と評価されても仕方の無いものだ。

だが現実は――テストという作られた状況下における「実力」ではなく、魔法師が現実に直面する諸状況への対応能力で見たならば、その評価は、まるで逆。

開発においても、分析においても、調整作業においても。そして、戦闘に、おいても。

彼の力量は「超」が付く位、一流だ。

魔法という能力だけを切り取って評価するのではなく、魔法が活用されているシーンで評価

するならば、彼はトップクラスの「優等生」だと言える。

ならば――

（わたしたちの「成績」って……「一科生」って、なに？　「一科生」と「二科生」の区別に意味なんてあるの？）

この九校戦で達也のことを間近で見ていて、あずさはそんなことを考えるようになっていた。

それは、迷い。

今まで当たり前のこととして、疑問を懐いたこともなかった価値観が、俄かにあやふやで頼りなく思えてしまう不安感。

あずさは自らを「ブルーム」と誇り、二科生を「ウィード」と見下すような、虚飾に侵されたエリート意識は持ち合わせていない。

少なくとも、意識していない。

だがそれでも、自分の魔法技能が優れたものであり、それ故に自分は優秀な魔法科高校生であるという「自負」に縁がないというわけではない。

自分の**魔法技能に対する自信**は、未だ深い霧に閉ざされた魔法師としての、魔工師としての未来を切り拓く**勇気を与えてくれる**、大切なパートナー。あずさ自身がそれを意識していなくても、**魔法師としての自信が彼女の背中を押している**のは紛れも無い事実だった。

それは何も**魔法に限ったことではなく**、「未来」や「将来」に対して期待と同じくらい大き

な不安を抱えている若者は、自分を支える「経験」や「実績」が不足している分、「自負」や「自信」に依存している部分があるものだ。

それがあずさにとっては、彼女のような「魔法科高校の優等生」にとっては、「魔法」に由来するということ。より正確には、「魔法の成績」が、自負を生み出し自信を作り出している。

しかし達也を見ている内に、その自負が、自信が、何だか根拠の無いものに思えてきたのだ。試験の成績は自分が一年生だった当時の方が間違いなく上なのに、実戦魔法師としても、魔工技師としても、魔法研究者としても、全く勝てる気がしない。自分の持つレアスキル、これだけは真由美にも摩利にも負けないと密かに思っている特殊な魔法でさえも、達也の前では意味をなさないように思えてしまう。

それでもまだ、自分はそれほど劣等感に悩まされずに済んでいる方だろう、とあずさは思っている。

彼女は達也が「彼」であると、最早九割以上、確信している。

――「彼」が相手なら、敵わないのは当たり前だ。

――「彼」を相手に、劣等感を覚える方がおこがましい。

あずさは自分をそう、納得させていた。

(だけどみんなは、まだ知らない……)

知らないから余計に、思うはずだ。

感じるはずだ。

彼と同じ一年生は、特に。

二科生に劣る一科生の自分たちは――自分たちの「成績」は何だったのか、と。

「あーちゃん、あんまり思い詰めない方がいいわよ？」

背後から不意に声を掛けられて、跳び上がる様にして振り返ると、真由美が苦笑いを浮かべながらあずさを見ていた。

「アレはね、と・く・べ・つ」

後輩を「アレ」呼ばわりした声は、その語句に反して暖かかった。

「納得できない子もいるでしょうけど……高校生にもなったら、納得できなくても受け容れる、ってことも覚えなきゃ、ね。二科生が魔法技能で一科生に劣っているのも事実なら、達也くんが私たちのレベルを超えてるのも事実なんだから」

「えっ、でも……」

意外なセリフを聞かされて、あずさは絶句してしまった。

確かに達也のレベルは自分より数段高いところにある、とあずさは思う。――いくら「彼」であるといっても、少し残念に感じてしまうのは否めない。

だが真由美のレベルも卓越した水準にあり、達也にそうそう劣っているとは、あずさには思えなかった。

「全部負けてるってわけじゃないけどね」

そんな戸惑いを読み取ったのか、真由美はもう一度苦笑いを浮かべた。

「総合的な魔法技能なら私の方が上だろうし、魔法の撃ち合いになっても距離を取れば私に分があると思うし」

軽く言葉を切った真由美の表情は、ため息をついた後の力が抜けた感じに似ていた。

「でも、間違いなく負けてる面もある。CAD関係の技術はとてもじゃないけど敵わないし、悔しいことに魔法に関する知識もあっちが上」

上級生の面目丸潰れよね、と真由美は他人事のように付け加えた。

「誰にだって得意、不得意があるんだから、全部が全部相手より勝っていることなんて滅多に無いわ。達也くんのレベルが上、っていうのは、魔法工学面の知識と技術ではとても敵わない、ってこと」

あずさの瞳をのぞき込むように、真由美が改めて、しっかりと視線を合わせた。

「その代わり魔法実技の成績では私もあーちゃんも達也くんよりずっと上なんだから、悲観する必要なんて全く無いの。魔法実技の試験の内容はちゃんと意味のあるものだし、試験の成績だけが人間の価値じゃないのと同じように、試験の成績も人間の価値の一つなんだから」

あずさは絶句したまま、真由美の語る言葉に聞き入っている。

「ところが、ね……」

フゥ、と今度は本当に、真由美はため息をついた。

「得てして『自分の方が上』って思い込むと、全部勝ってないと耐えられなくなっちゃうのよ。実際には、一科生と二科生の違いなんて、実技の授業の都合上、実技テストの成績で分けてるだけに過ぎないんだってことを忘れてしまって」

あずさは、知らず知らず、目を大きく見開いていた。真由美の言葉に含まれる意外な事実に、頭の中が真っ白になってしまいそうなショックを受けていた。

忘れているも何も、一科生と二科生の区分けが本当に実技の授業の為だけのものだったという話は初耳だった。

「やっぱり、制服がいけないのかしら……。最初は単に、生徒数を増やす際に、刺繍の直しが間に合わなかったってだけなのにねぇ……」

「えっ、そうなんですかっ？」

「あれっ？　知らなかった？」

初めて聞いた裏話に、さっきとはまた別の衝撃を受けて、あずさは絶句したまま、「そっかぁ、あまり知られてないんだね……」と呟く真由美に、ただカクカクと首を縦に振った。

「昔は一高も一学年百人だったのは知ってる？　外国に伍していく為には魔法師の数を増やさなければならない、ってことで、まず一高の定員が増やされたんだけど、当時の政府は焦ってたんでしょうね。新年度から増員すれば良かったものを、年度途中から追加募集を掛けちゃっ

たの。

でも年度途中から、いきなり教師の数を増やすことはできない。当時の魔法教育者の人材不足は、今以上に深刻だったから。それで苦肉の策として考え出されたのが、途中編入の一年生は進級まで集中的に理論を教えて、実技は二年になってから、という二科生制度。

ところが、いざ二科生を入学させるという段になって、学校が制服の発注をミスっちゃったのよ。その所為で二科生として編入した一年生はエンブレムが無い制服で我慢しなきゃならなかったんだけど、それが思わぬ勘違いを招いちゃってね……。二科生制度はあくまでも進級までの暫定措置で、二科生は定員増加によって追加募集された生徒に過ぎなかったんだけど、それが補欠と見做されるようになってしまった。そして、無理な増員計画に見合う教師が結局は確保できずに、誤解に過ぎなかった『補欠扱い』が追認されてしまったのが、今の二科生制度。

制服も、この泥縄な追認を取り繕うように、最初から計画どおりだったかの如くずっと放置されてる、っていうのが真相よ。考えてみれば、制服を二種類作るのも無駄なのよね……どうせ縫製まで一貫自動加工なんだから、一度に作っちゃえばサイズ違いでも同じデザインの方がコストも安いし」

開いた口が塞がらない。

それが、真由美の説明を聞き終えたあずさの、正直な感想だった。

校内に度々陰湿で深刻な対立を招いて来た「ブルーム」と「ウィード」の由来が、そんなに

くだらないものだったとは。
この話、深雪にはとても聞かせられない、とあずさは思った。――何が起こるか、怖すぎる。
「……この話、深雪さんには内緒ね？」
真由美も同じことを思ったらしい。
あずさは一も二もなく、頷いた。

◇　◇　◇

生徒会の先輩二人から揃って危険人物扱いされたと知らぬ深雪は、始まりを待つミラージ・バットのフィールドに上機嫌で立っていた。
九校戦開幕以来、兄の方から自分の為だけに時間を取ってくれるのは、自分だけに構ってくれるのは初めてだったからだ。
いつもであれば、家に帰れば実質二人暮らし。
いくらでも二人きりの時間を持てる。
だが九校戦の宿舎では、そうは行かない。
決して欲求不満を募らせているわけではない（と本人は思っている）が、しばらくお預け状態に近かった所為で嬉しさもひとしおだった。

関係者が控えるブースでは、兄が自分を見詰めている。

自分だけを見詰めてくれている。

何だか、魔法の力を借りなくても、空に浮かべそうな気分だった。

身体のラインが丸見えのコスチュームにまとわりつく煩悩むき出しの視線も、今は気にならなかった。特に意識することも無く、達也の眼差し以外の全ての視線をフィルタリングして、ゴミ箱へ放り込んでいるからだ。観客はジャガイモと思え——ジャガイモは玉葱でもニンジンでも可——とは、あがり症の人間に対する効果の無いアドバイスとして知られるテンプレートだが（人間をジャガイモに置き換えることができる神経の太い人間は最初からあがったりしない）、今の深雪にとっては本当に、達也以外、ジャガイモ同然だった。

兄は男女を問わず姿勢の良い人間を好むと知っているから、立ち姿にも隙が無い。

抜群の美少女が見せる、管弦の音を待つ舞手のようなたたずまいは、客席の青少年に動悸と息切れを引き起こし、このままでは試合が始まる前から担架が呼び出されそうだ、という有様となっていた。

観客のボルテージに急かされた、というわけでもないだろうが、予定時刻より数秒早く、試合開始のチャイムが鳴り響いた。

深雪の身体が軽やかに舞い上がった。

ミラージ・バットの選手は皆、コスチュームを二種類用意している。
強い日差しの下でも翳むことの無い鮮やかな色合いの昼用コスチュームと、
照明に映える明るい色の夜用コスチューム。
どちらも選手同士の衝突を避ける為に定着している、経験からもたらされた不文律だ。
深雪が纏う基調色は濃いマゼンタ。
一歩間違えばとんでもなく下品な配色だが、深雪が着ると高貴な雰囲気になった。
紫外線除けを兼ねる濃いメークも、彼女の品位を損なうことは無い。
華奢な身体つきはまだまだ発展途上だが、真っ直ぐに伸びた細く長い手足と、対照的に優美な曲線を描く胸や腰は、動物的な肉感が無い代わりに咲き誇る花樹の様な色香を漂わせている。
そしてまさしく、花のような美貌。
誰にも劣らぬ勢いでターゲットへ向かって翔け上がっているのに、一人だけ、「ふわっ」という形容が相応しく見えてしまう。
観客の目はまたしても、深雪に釘付けだった。
これが演技の美しさを競う採点競技なら、文句無く一位だっただろう。
だがさすがに本戦の、しかも花形競技になると、九校戦は甘くなかった。

「深雪さんがリードされるなんて……」

第一ピリオド終了の合図とともに、詰めていた息を吐き出しながら「信じられない」という感想を声に込めて、美月が呟いた。

「トップに立った二高の選手……BS（Born Specialized）魔法師とまでは行かなくても、『跳躍』の術式にかなり特化した魔法特性を持っているように見えるな……」

「それだけじゃないわよ。跳び上がる軌道を計算して、巧みに深雪のコースをブロックしてる。『跳躍』のスペシャリストと言うより、『ミラージ・バット』のスペシャリストと言うべきじゃない？」

美月と驚きを共有しながら、幹比古とエリカがそれぞれに自分の考えを述べると、

「二高の選手は渡辺先輩と並んで優勝候補に挙げられていた選手だから……」

「あれだけ目立てば、マークされるのも仕方ない。三年生の意地もあるだろうし」

今日は一般客席で応援しているほのかと雫が、異なる角度から賛同を示した。

「まっ、このままじゃ終わらんだろうけどな」

そして最後にレオが、悲観的な空気を吹き飛ばすように明るく言い放った。

次のピリオドでは深雪が挽回し、第二ピリオド終了の段階でトップに立った。

だが、ポイント差はわずか。深雪もまだまだ余力を残しているが、相手も第三ピリオドに備えてペースを調整していた節が窺われる。

勝敗の行方はまだ分からない。

いくら使用魔法のバリエーションが限定された条件下とはいえ、高校のレベルで深雪と対等に競い合える魔法師がいることに達也は驚きを覚えていた。

「この国も狭いようで広い……」

腰を下して息を調えている深雪の前で、達也が誰にとも無く呟く。

彼の視線は妹ではなく、二高のブースへ向けられている。

……と、不意に袖を強く引っ張られた。

眼を下へ向けると、椅子から立ち上がった深雪が、双眸に強い光をたたえて達也を見詰めていた。

「――お兄様、アレを使わせていただけませんか？」

その目が、声が、彼の袖をつかむ指が、「負けたくない」という意志を伝えてきている。

綺麗なだけの、可愛いだけの「お人形さん」ではない、強い意志を宿したこの顔が、深雪の見せる様々な表情の中でも達也はとりわけ好きだった。

自然と唇がほころび、目が愛しげに細められた。

「……いいよ。全てはお前の望むがままに」

本来は決勝戦用の秘密兵器。

だが、一切の計算も打算も忘れて、達也は笑顔で頷いた。

「あれっ？　深雪のホウキが変わってる」

最終ピリオドのフィールドに立った深雪の変化に、エリカが真っ先に気がついた

さっきまでいつもの携帯端末形態のＣＡＤを使っていた深雪が、右腕にブレスレット形態のＣＡＤを着けている。

「でも、左手にもＣＡＤを持っているみたいだけど……」

目を凝らしていた幹比古の指摘に首を傾げた一同の中で、ほのかだけが一人、感慨深げに頷いていた。

「そう……深雪、早くもアレを使う気ね……」

「アレ？」

雫の問い掛けに、ほのかは憧れと悔しさが綯い交ぜになった表情で答えた。

「達也さんが深雪の為だけに準備した秘策。深雪にしか使いこなせない達也さんの秘密兵器。驚くわよ……きっと。今ここにいる人たち皆、一人残らず」

それは一体何か――雫がそう質問する前に、第三ピリオド開始のチャイムが鳴った。

右腕に巻いたブレスレットは予備。本命は左手に握る、携帯端末形態の特化型ＣＡＤ。

オンとオフのスイッチしかない単純なコンソールの、オンのスイッチに乗せていた指を、ピ

リオド開始の合図と共に、深雪は素早く押し込んだ。
展開される極小の起動式。
止まることなく、途切れることなく、繰り返される起動処理。
そして深雪の身体は、フワリと空へ舞い上がった。
二高の選手がその行く手を遮る。
左下から交差する軌道。
相手の方が上昇スピードが速い。このままでは深雪の方から当たりに行く形となってしまう。
深雪は自らの飛翔速度を加速することで、それを回避した。
客席がどよめいたのは、光球を打ち消した深雪が身体を反転させ、空中に静止した後だった。
ジャンプしている途中で更に加速する魔法力。
観客が驚き称賛したのは、あくまでも魔法の常識の範囲内で示された力量に対してだった。
しかし、空中で一旦立ち止まった深雪が足場へ降りて行かず、空のステージに作られた風精（シルフィード）のリンクを優雅に滑走してそのまま次のターゲットへ向かったのを目の当たりにした時、歓声（どよめき）は絶句に変わった。
二つ、三つ、四つ……。
十メートルの高度を往復しなければならない他の選手と、水平に移動するだけで済む深雪とでは、最初から競争にならなかった。

五つ目のポイントを連取したところで、凍り付いた観客の声帯は、徐々に融け始めていた。
「飛行魔法……？」
誰かが、そう呟いた。
今や選手ですらも、呆然と上空を見上げている。
囁き声に等しい呟きは、離陸・着地のステップの音も消えた、静まりかえった競技場に、不思議なほど響いた。
スティックを振るう深雪の姿は、戦天使さながらに凛々しく、それでいて優美だった。
「トーラス・シルバーの……？」
囁きが連鎖し、
「そんなバカな……」
「先月発表されたばかりだぞ……」
波紋は徐々に広がって行く。
「だがあれは……」
「紛れもなく、飛行魔法……」
その場に居合わせた全員の目が、一人の例外もなく、空を舞う少女へ向けられていた。
湖の上空で繰り広げられる天女の舞。
バランスを取る為に広げられた腕が、姿勢を変える為に振り出された足が、風と手を取り合

って踊っているように見える。

空を飛ぶという現代魔法の革新に、「不可能」とすら言われていた奇跡の実演に、この美しい少女はこの上なく相応しい……年齢を超え、性別を超え、敵味方すら超えて、人々は陶然と空を舞う少女を見上げていた。

彼らは、彼女たちは、皆、現代魔法でもない、古式魔法でもない、感動という名の魔法に絡め取られていた。

試合終了の合図が鳴り、少女が地上に戻るまで、その魅了の呪文が解けることはなかった。

――ミラージ・バット予選、第一フィールド・第二試合、深雪は大差で決勝へ勝ち上がった。

◇　◇　◇

選手が退場を始めて、観客はようやく我を取り戻した。

選手退場に決められた順番はない。

競技終了時点でゲートに近い選手から順番に退場していく。

湖の中央に降りていた深雪は、四人中の三番目。

一高の応援席へ向かい膝を折って一礼すると、フワリと浮かび上がって氷の上をスケート靴

で滑っている様なめらかさで空中を移動し、ゲートへ向かった。
その優雅な所作に、客席から大きな拍手が沸き起こった。
通信端末を慌しく操作している姿も客席のあちこちで見られた。
興奮のあまり怒鳴りつけるような口調でマイクへ泡を飛ばしている者、上ずった口調で何度も同じセリフを繰り返して回線の向こう側に呆れられている者、時折頭を掻き毟りながら仮想キーボードに指を躍らせる者、光学認識パネルへ一心不乱にペンデバイスを走らせる者……様々な人々が色々な形で、自分が味わった驚きをこの場に居ない誰かに伝えようとしていた。
その中に、奇妙な無表情でHMD（ヘッド・マウント・ディスプレイ）に映るメッセージに見入っている男の姿があったが、それを気に留めた者は、ほとんど居なかった。

◇　◇　◇

「十七号から連絡があった。第二試合のターゲットが予選を通過した」
「……電子金蚕を見抜く相手だ。順当な結果なのだろうが……まずいな」
「それだけではない。ターゲットは飛行魔法を使ったらしい」
「バカな!?」

「これで力を使い果たしてくれたのなら万々歳だが……虫が良すぎるか」
「最早手段を選んでいる場合ではないと思うが、どうだろうか」
「賛成だ。百人ほど死ねば十分だろう。大会自体が中止になる」
「中止になれば払い戻しは当初の賭け金のみだ。損失ゼロとは行かないが、まだ許容範囲内だ」
「客が騒がないか？　同業者はともかく、兵器ブローカーどもは厄介だぞ。アイツらは諸国政府と太いパイプを持っているからな」
「客に対する言い訳は何とでもなる。今、我々が懸念すべきは、死の商人よりも組織の制裁だ」
「そうだな……実行は十七号だけで大丈夫か？」
「多少腕が立つ程度ならば『ジェネレーター』の敵ではない。残念ながら武器は持ち込めなかったが、十七号は高速型だ。リミッターを外して暴れさせれば、百や二百、素手で屠れる」
「異議はないな……？　では、リミッターを解除する」

◇　◇　◇

ようやく興奮の潮が引き、観客が次の試合に備えて三々五々に席を立つ中、男もＨＭＤを外して、のっそりと立ち上がった。
目が露わになると、ますます「無表情」という印象が強まる。

いや、これは無表情という名の表情ではなく、そもそも表情が欠落しているのではないか？
そんな風にさえ感じさせる、無機質な「表情」だった。
不意に、男の身体がびくっと震えた。
一瞬で発動された自己加速魔法。
周りにいた魔法師が魔法の気配に気付く前に、男はちょうどすれ違った男性へ襲い掛かった。
鉤爪の如く曲げられた指を無防備な背中へ振り下ろす。
――そしてこの事件は、誰にも気付かれないままスタンドの外へと舞台を移した。

その男、「ジェネレーター」十七号が現状を把握した時には、既に地面までの高さ三メートルを切っていた。
殺戮の指令を受けて最初に襲い掛かった相手は、背中を向けていたにも関らず、彼の攻撃を躱して見せた。例え正面から向き合っていても、人間の知覚能力では反応できないスピードだったのに、である。
魔法師は自己加速魔法により、筋力で可能な限界を超えたスピードで動くことができる。
だが魔法で加速するのはあくまでも運動速度であり、知覚速度――感覚器の生化学反応速度、知覚神経の伝達速度、大脳の情報処理速度までスピードアップするわけではない。
人体の知覚速度は運動速度よりかなり高く設定されており、それ故肉体的な限界を超えた速

度で動いてもそれをコントロールできるのだが、逆に言えば知覚速度の限界を超えた領域で肉体の運動をコントロールすることはできない。つまり、魔法師といえど生物としての限界があるということだ。魔法による自己加速に魔法面からの限界はないが、知覚能力の面で制御可能な上限があるのだ。

故に、化学的に知覚速度を強化された彼のスピードに、普通の人間――魔法技能があっても肉体的には普通の人間――が対処できるはずはない。

それなのに実際は、振り下ろす腕の上腕を受け止められ、そこを支点として、自らが腕を振り下ろした勢いにより十七号の身体は宙に浮かび上がっていた。

ちょうど鉄棒で前転するように頭から前に回って身体が上下逆さまに向いた瞬間、強烈な衝撃が十七号を襲い、彼はスタンドのフェンスを越えて場外へと吹き飛ばされていた。

加速工程を故意に省略した移動魔法。

その衝撃により半ば意識を失い、気が付いてみれば放物線を描いて二十メートルの高さから地面に叩きつけられる寸前だ。

通常であれば恐怖にすくみ、あるいはパニックに陥り、為す術もなく墜落する状況だが、この男は「ジェネレーター」だった。

脳外科手術と呪術的に精製された薬品の投与により意思と感情を奪い去り、思考活動を特定方向に統制することによって魔法発動を妨げる様々な精神作用――俗に言う「雑念」――が

起こらないように調整された個体。
実戦の中で安定的に魔法を行使できるよう仕上げられた生体兵器。
魔法を発生させる道具に改造された魔法師。
道具には、恐怖もパニックも縁がない。
十七号は冷静に――正確には無感情に、慣性中和の魔法を発動した。
この時点から減速しても急ブレーキによるダメージは避けられない。それより慣性を低減させておく方が、激突のダメージを和らげることができるという計算を瞬時に行った結果だった。
呪薬の効果は意思、感情、知覚能力の調整だけでなく、身体機能の向上にも振り向けられている。脚のバネ、腹筋と背筋に両腕まで使って、落下速度を全て吸収する。
「あの段階から間に合わせるとは大したものだ」
両手両足を地につけたまま声のした方へ顔を上げた十七号は、そこに、自分を投げ飛ばした男の姿を認めた。
「何者だ？　……いや、答える必要はない。どうせ答えられないだろうからな」
唇を歪め人を食った笑みを浮かべて、独立魔装大隊大尉・柳連は獣のように両手両足を地面につけた十七号を観察した。
「その身体能力、魔法だけではあるまい。強化人間か？」

スタンド席のフェンスを飛び越し、中層ビルに匹敵する高さから投げ落とされたにも関わらず戦闘態勢を解こうとしない相手に、嘲りと感嘆をブレンドした口調で柳は問い掛けた。
「答える必要はない、と言ったのは柳君だよ。それに、同じ高さから跳び降りて手もついていない君には、言われたくないんじゃないかな？」
四つ足の肉食獣そのものの動作で十七号が振り返った。
そこにはいつの間にか、退路を塞ぐように、独立魔装大隊大尉・真田繁留が立っていた。
それでも逃げ出すつもりならば、十七号にはそれが可能だったかもしれない。
単純な加速力なら「ジェネレーター」である十七号は、独立魔装大隊の二人に勝っていた。
だが十七号に与えられた指令は「観客の殺戮」。意思も感情も持たない「ジェネレーター」にとって、組織の命令だけが行動を決定するインプットだ。
その命令に従い、十七号は「観客」だった柳へと、再度襲い掛かった。
柳は十七号が飛び掛かってくる前に、右手を前へ差し出していた。
明らかにスピードで勝っていながら、十七号はその手から逃れられない。
低い姿勢で突進する十七号は、吸い寄せられるように、柳の掌へ頭から突っ込んで行く。
柳と十七号が交錯する。
十七号は柳の身体に触れることなくはね返され、スタート地点へ叩きつけられた。
「答えを期待しての問いではない。独り言だ」

柳は何事もなかったように、真田へ言い返した。

「そういうことにしておこうか。しかし、いつ見ても見事なものだね。今のも『転』の応用かい？」

相手の運動ベクトルを先読みして、体術と魔法の連動により、それを誘導、増幅、あるいは反転させる。それが柳の得意とする戦法であり、十七号を投げ飛ばし、はね返した技だった。

「何度も言っているが『転』ではない。『転』だ。『転』は表の武術、『転』は裏の武術。それに応用とも少し違う。俺のは元々真似事に過ぎん。本物の『転』ならば魔法は要らん」

「僕たちの存在意義に関わるセリフだね。隊長に言いつけるよ？」

「……いい加減にくだらんお喋りは止めて、そいつを捕らえるのに手を貸せ」

「ふむ……では、そうしようか。と言っても、既に藤林君が『被雷針』で確保済みだけど」

「……本当にお二方は仲が良いんですね」

真田のセリフと同時に、ヒールの音を小さく響かせて独立魔装大隊少尉・藤林響子が姿を見せた。後方スタッフ用のタイトスカートの軍服は、およそ荒事には不向きだ。本来であれば格好の獲物であり、絶好の突破口になるはず。

だが十七号は、ビクッ、ビクッ、と身体を痙攣させるだけで、とても抵抗できる状態ではなかった。

髪の毛のように細い針を何本も突き刺され、そこから電流を流し込まれた結果だ。

無論、針を飛ばしたのも電撃を放ったのも、藤林の魔法だった。
「藤林、お前、目は良かったはずだが」
「視力よりも感受性に問題があるのかな。良いカウンセラーを紹介しようか？」
「ほら、お二人とも息がピッタリじゃないですか」
十七号を挟んで、柳と真田は顔を見合わせた。
二人は全く同じように、顔を顰めていた。

◇　◇　◇

裏でそんな危険な一幕が行われていたとは知らず、達也は呑気にホテルの自室で少し早めの昼食を取っていた。
試合の後、深雪がシャワーを浴びている間に、大会委員が飛行魔法に使用したCADを検査させろと言ってきたが、彼には何もやましいところはない。一瞬、九島老人の名前を使って困らせてやろうか、という悪戯心が意識を過ぎったが、虎の威を借りて弱いもの虐めに興ずるのはみっともない、と思い直し、素直にCADを渡した。
それ以外、特に変な騒動には巻き込まれていない。
自分と妹を見る、随分と遠巻きな視線を多数感じたが、この手の輩は直接的な害がない限り

放っておくのが一番だ。

委員にCADを預けたまま、達也はプライベートな空間へ引き揚げることにしたのだった。

もっとも、真田や柳が大量殺人を防ぐ為人知れず活躍しているところだと知ったとしても、達也の行動は変わらなかっただろう。身も蓋も無い言い方をすれば、何の面識もない観客が何十人殺されようと、達也にはどうでもいいことだからだ。

もっと言えば、同じ学校の先輩が犠牲になったことについても、達也は「残念だ」以上の感情を持っていない。それだけであれば、積極的に動こうとは思わなかっただろう。

深雪が哀しそうな顔をするから、口や態度には出さないようにしているが。

無論、今現在進行形で。

改めて言うまでもないことかもしれないが、達也の目の前には甲斐甲斐しく彼の世話を焼く深雪が立っているのである。

「身の回りをいつもキチンと整理なさっているのはお兄様の美点だと思いますが、わたしとしてはもう少し散らかしておいていただく方がお世話のし甲斐があるような気もしますね」

今日の深雪は上機嫌だ。今も、鼻歌を歌い出しそうな笑顔で、楽しそうにテーブルの布巾掛けをしている。この一週間ほど、あまり構ってやれなかった反動だろう。

「深雪、何か俺にして欲しいことはないか？」

だから食事を終えた後にそう訊ねたのは、単なる穴埋め程度の意識から出た言葉で、それ程

深い意味は無かった。

「お兄様にして欲しいことですか？」

ところが、目を丸くし、顔をほころばせて嬉しそうに考え込むという予想外に大きなリアクションを深雪が見せたものだから、達也も何だか引っ込みがつかない気分になってしまった。

顎に指を当てたり小首を傾げたりと様々なジェスチャー付きであれこれ考えていた深雪が、何を思いついたか急に頬を染めて、隣の椅子から上目遣いに達也の顔を窺った。

「……言ってごらん」

やや苦笑混じりではあったが、達也に優しく促されて、深雪は怖ず怖ずと切り出した。

「お昼が終わったら決勝まで少し休んでおくように、と先程ご指示をいただきましたが……」

「ああ、今すぐじゃなくても良いが、できれば睡眠を取っておくべきだ。眠れなければ横になるだけでも良い。

ベッドに入りたくない、というのは無しだよ？　身体を休めるのは必要なことだからね」

「いえ、もちろんお兄様のお言いつけのとおりに致しますが……その……」

「んっ？」

「その……よろしければ、隣にいて……いただけないかと……」

さすがに恥ずかしかったのだろう。

深雪は顔を真っ赤にして俯いた。

「……甘えん坊だなぁ、深雪は」
「……いけませんか？　深雪はお兄様に甘えたいのです」
「……いいよ。子守歌は歌えないけどね」
深雪は上目遣いに達也を睨み、その胸を平手で叩いた。
彼女の白い肌は、黒髪の間からのぞく耳までが、真っ赤に染まっていた。

兄妹とは言っても年頃の男女、さすがに同じベッドを使わせることは憚られた。
しかし幸いなことに、今はシングルとして使っているが、元々この部屋はツイン。場所を取っていた機材は、ほとんど会場へ持ち込んでいる。
深雪に使わせる為、壁に収納してあったベッドを出して手早く就寝可能な状態にする。ほぼ全面的に自動化されているので、ルームサービスを呼ぶ必要はなかった。（普通のホテルではないので、来てくれるかどうかも分からなかったが）
椅子を持ってきて深雪が潜り込んだベッドの脇、枕元に座る。
こちら側を見て恥ずかしそうに微笑む深雪に笑みを返し、達也は妹の髪を優しく撫でた。
一分も掛からず、深雪はヒュプノスの園へ旅立った。
深雪が眠りに落ちて既に四時間が経過していたが、達也はベッドサイドを離れぬままだった。

隣にいて欲しいという深雪の願いを忠実に叶えている形だが、一人でこうしていることが達也には苦にならなかった。

深雪はぐっすり眠っている。安心しきった寝顔。それが自分に対する信頼の証だと考えると、くすぐったくも誇らしい気持ちになってくる。

兄妹といっても、達也と深雪が本当の意味で一緒に暮らし始めたのは三年前のことだ。本当の意味で兄妹として過ごした時間は、たったの三年間でしかない。それ以前、あの三年前の夏の日以前は、同じ家の中で寝起きしていてもほとんど言葉を交わすことさえなかった。こうして傍に寄り添ってやることなど、彼らの母親が許さなかった。兄妹らしい交流を持つことは、母親によって禁止されていた。それはおそらく、四葉一族としての決定だった。

そのことについて達也は別に、恨み言を並べるつもりは無い。そもそもそんな機能は、彼の精神に残っていない。ただ、幼い頃に肉親として接した記憶の欠如に不都合を感じることはある。不満があるとすればその点だ。

本当に小さな子供の頃の、気まぐれに怒ったり泣いたり、転んだり粗相をしたり、肉親だからこそ知る恥ずかしい思い出の類を共有していない達也にとって、深雪は最初から「一つ年下のきれいな女の子」だった。なまじ客観的にしか見ることができない所為で、妹がどれ程レベルの高い美少女か、最初から理解できていた。

それでいながら、彼の心の最も深い部分から湧き上がる想いが、深雪を妹と認識している。

ただ一つ残された本物の感情が、妹として愛情を注ぐよう彼の意識に命じている。

記憶が無く、想いだけがある。もしかしたら記憶喪失とはこういう気分になるものかもしれない、と達也は思うことがある。無論、自分が記憶喪失などではないということも達也には解っている。

記憶によって条件付けされていない、無条件の想い。

それ故にこそ、達也の深雪に対する愛情は盲目的で、激しく、苛烈なものだ。他の情動が怒りや憎しみとして表層化しない分、深雪に対する愛情だけは、一切の躊躇がない、たがの外れた行動となって表れる。

そのことを達也は、自覚していない。我を忘れての行動ではなく、冷静に計算した結果であるが故にかえってブレーキが効かない。それが必要だと計算すれば、その後に当然あるべき「そこまでするのか」という判断が働かない。利益不利益は考慮されても、人倫は考慮されない。

達也はサイドテーブルに置いた携帯端末を手に取った。深雪が眠りについた後、藤林から送信された長文の暗号メールをもう一度呼び出す。そこにはミラージ・バットに対する妨害工作に関して判明した事実と、予選第二試合終了後に観客の大量殺戮を目論んだ事件の顛末が記されている。

それは達也にとって、断じて許せないことだった。深雪を地に墜とすことを企てるなど、万死に値した。

携帯端末を懐に戻した達也は、椅子から立ち上がり、ベッドの上に身を乗り出した。
深雪の髪をそっと撫でる。
深雪の手が、達也の手に重なった。
「深雪？」
返事はない。目を覚ましたわけではないようだ。
深雪は横向きに寝返りを打ち、達也の手を、自分の頬に押し当てる。
その幸せそうな寝顔に、達也の唇がほころんだ。
その笑みの裏で、この安らかな寝顔を守る為に必要な措置を講じることを、達也は決めた。
決意ではなく、決定した。

◇　◇　◇

決勝戦は、午前中と打って変わって、晴天の夜空だった。
上弦の月が星の瞬きを圧倒している。
下から光球を見分けるには、あまり良くないコンディションだ。
「体調はどうだ？」
「万全です、お兄様。気力も充実していますし、最初から飛行魔法で行きたいと思うのですが」

「良いよ。思い切り飛んできなさい」
「はい！」
勢いよくフィールドへ飛び出していく深雪を、達也はサムズアップで見送った。

「深雪さん、随分と上機嫌でしたね」
サポート要員としてブース入りしているあずさが、湖上の足場に立つ深雪を見ながら達也に話し掛けてきた。
残念ながら、あずさの担当した選手は予選落ちとなった。
決勝戦進出は一高、二高、三高、五校、六校、九校から各一名ずつ。
複数名を決勝に送り込めた学校はない。
女子最終競技ということもあり、各学校が意地を見せた形となっていた。
今この場には、付き添いで病院に詰めている摩利以外の、主立った女子メンバーが顔を揃えていた。
三高が一名しか決勝に送り込めなかった段階で、深雪が三位以内に入れば第一高校の総合優勝が決まる。応援にも力が入ろうというものだ。
「機嫌良く試合に臨めるのは良いことだわ。達也くんが上手にケアしてくれたみたいね」
反対側から真由美が笑顔で話し掛けてきた。深い意味はないはずだが、何となくその笑みに

含みがあるように見えるのは、達也の方に知られたくないことがある所為だろうか。
「そういえば深雪さんは『カプセル』を使わなかったようですが、十分に休息は取れているのでしょうか？」
何気ない鈴音の問い掛けに、達也は思わず、表情を変えてしまいそうになった。
「五時間、睡眠を取らせましたので、十分だと思います」
「そうですか。随分ぐっすり眠れたようですね。ホテルのベッドで寝ていたんですか？」
達也は言葉に詰まってしまった。あまりにもピンポイントな質問に、分かっていて言っているのか？　と勘繰ってしまったほどだ。
「あっ、始まりますよ」
だが幸い、沈黙が不自然に思われる前に、皆の注意はフィールドへ向いた。
あずさの無邪気な性質が、今は正直、ありがたかった。

淡い色のコスチュームが、照明と、湖面に揺らめく反射光に照らされてくっきりと浮かび上がって見える。
その中で、桜色のコスチュームを着た深雪が一際目を引いていたのは、予選で「飛行魔法」という離れ業を披露した為ばかりではなかった。
ゆらゆらと揺らめく光の中、少し注意を逸らした隙にフッといなくなってしまいそうな儚さ

に、観客は目を離せなくなっていた。
ミラージ・バットの別名はフェアリー・ダンス。
少女を「妖精」に例えるのは使い古された定番のレトリックだが、今の深雪を「妖精のような」と形容しても陳腐と誹る者はいないだろう。
ざわめきが潮を引くように静まった。
競技委員がしつこくメッセージボードを振り回す必要もなかった。
人々が固唾を呑んで見守る中、ミラージ・バット決勝戦が始まった。

始まりの合図と共に、六人の少女が一斉に空へ飛び立った。
跳び上がった、のではない。六人全員が、足場へ降りてこなかった。
「飛行魔法!?　他校も!?」
「さすがは九校戦。僅か六、七時間で飛行魔法の起動式をものにして来ましたか」
あずさが裏返った声で叫び、達也が感嘆を口にした。
とは言うものの、実際には、達也はそれほど驚いていなかった。
おそらく、大会委員会から各校へ術式がリークされたのだろう。
不正疑惑の抗議に対する回答、というような形で。
ＣＡＤを預けっ放しにしていたから、その可能性は考慮に入れてあった。

「各校ともトーラス・シルバーが公開した術式をそのまま使っているようですね」
鈴音が空を見上げて眉を顰め、
「……無茶だわ。あれはぶっつけ本番で使いこなせる術式じゃないのに。選手の安全より勝ちを優先するなんて……」
真由美が苦々しげに呟いた。
「大丈夫でしょう。あの術式をそのまま使っているなら、万一の場合でも『安全装置』が機能するはずです」
しかし、達也の声には「お手並み拝見」と言いたげな余裕があった。

空を舞う六人の少女。
それはまさしく、妖精のダンスだった。
観客は夜空を飛び交うその舞に、心を奪われ見とれていた。
だが徐々に落ち着きを取り戻した観客は、思いがけない試合経過に別の驚きを抱くことになった。
同じように空を飛んでいる。
飛行魔法の、魔法としてのレベルに大差はないように見える。
だが実際にポイントを重ねているのは一高の選手。

他校の選手はその動きに全くついて行けていない。
素早く、なめらかに、優雅に、
身を翻し、宙を滑り、上昇し、下降する、
その自由で可憐な舞に、ある者は付き従い、ある者は道を譲る。
いつの間にか舞い踊る妖精たちは、一人のプリマ・バレリーナと五人のコール・ド・バレエに役割が分かれていた。

他の選手が飛行魔法を使ったことに、深雪は少し驚いた。
否、少ししか驚いていなかった。
兄の作ったあの飛行魔法は、「誰にでも使える」術式であるところに真の価値があるということを、深雪は誰よりも理解していた。
しかし、誰にでも使える、と、誰もが同じように使える、とでは意味が違う。
他校が飛行魔法を使ってくる可能性については、試合前に兄から注意を受けていた。
兄は、注意しながら笑っていた。
それはきっと、自分以上にこの魔法を使いこなせる者はいないと信じているからだ、と深雪はその時、思った。
その信頼に支えられて、深雪は自在に夜空を舞う。

一人、また一人と力尽きて落ちて行く他校の選手を見下ろして。

最初の一人が空中でグラリと体勢を崩した瞬間、客席から悲鳴が上がった。

だがその選手がゆっくりと降下していくのを見て、客席全体がホッと息をついた。予選でも落下事故があったばかりだ。観客よりも大会委員の方が胸を撫で下ろしたかもしれない。

これは飛行魔法に組み込まれた「安全装置」によるものだ。

術者から供給されるサイオンの補充効率が半減すると、起動式に予め組み込まれた「変数」が自動的に十分の一Gの軟着陸モードを指定する。

一高のブースでは、「変なアレンジはしていなかったようだ」と達也が胸を撫で下ろしていた。奇しくも九校戦という注目を集める舞台で、飛行魔法の安全性が実証された形だ。

このツキは宣伝にフル活用しなければな、と人の悪い（あるいは、腹黒い）笑みを心の中で浮かべている視線の先では、また一人、妖精の舞台から脱落者が出ていた。

結局、第一ピリオドの脱落者は二人だった。

その二人はそのまま試合を棄権した。

そして第二ピリオドでも一人脱落。

最終ピリオドは、三人の争いとなった。

この時点で深雪が試合を棄権しない限り、一高の総合優勝が決定している。
一番確実な戦法は、足場の上にとどまって何もしないこと、だ。
だが一高のブースでは誰も、その「確実な」戦法を提案しなかった。
ここまでのポイントは、大差で一位。
無論、深雪が、である。
総合優勝はもちろん大切だが、その為に個人優勝を犠牲にすべきだと考える者は、一高の中に誰一人いなかったのだ。
声援と信頼を背に受けて、深雪は最終ピリオドの空に舞い上がった。
目を向けなくてもハッキリと分かる、自分を見守る兄の眼差し。
これがある限り、自分の翼が折れることは決してないと深雪は知っている。
その折れざる透明な羽を広げて、色とりどりの光と戯れる。
やがて、
湖上の足場に膝をつき、荒く息を吐く二人の選手。
夜空をソロの舞台に変えて、深雪は妖精の舞を舞い踊る。
大きく広げた腕の先で、最後の光球が姿を消す。
一拍の静寂。
一コマのストップモーション。

試合終了を告げるチャイムは、熱狂的な拍手にかき消された。

【12】

最終日を待たず総合優勝を決めた第一高校だったが、祝賀パーティは明日以降に繰り延べられた。（またぁ？　という声もあったが無視された）

明日は九校戦を締め括るモノリス・コードの決勝トーナメントが開催される。

第一高校チームは順当に予選一位でトーナメント進出を果たしており、選手もスタッフもパーティどころではなかったのだ。

とは言っても残り一競技であり、半数以上のメンバーが手空きの状態になっているのも事実。

ミラージ・バットの優勝により一高の総合優勝を決めた形となった深雪を中心に囲んで、プレ祝賀会的な意味合いのお茶会がミーティングルームを借りて開催されていた。

仕切り役は真由美と鈴音、参加者は女性選手・スタッフが中心。もっとも男子生徒の姿が全く見られないわけではなく、部屋の隅で一年生の男子生徒も怪我人を除いて居心地悪そうにカップを持っている（二、三年生の男子は明日の試合の準備に駆り出されている）。

この場に幹比古とレオだけでなくエリカと美月の姿まで見られるのは、真由美の、単なるお祝い以上の意図によるものだろう（エリカは固辞の姿勢だったが、深雪が強引に連れて来た）。

しかし、何故かこの場に、達也の姿が無かった。

「……んで、朝まで起こすなって？」
「ええ」
「無理もない」
「ずっと大活躍でいらしたものね……」
一年生女子が一人の男子生徒の噂話をしていたところへ（順に、エリカ、深雪、雫、ほのか）、二年生のカップルが近づいてきた。
「あれっ？　お兄さんはもう寝ちゃったの？」
花音と五十里の二人である。
「ええ、さすがに疲れた、と申しまして」
「それは……そうだろうね。怪我もしていたんだし」
深雪の答えに、五十里が深く頷いた。そして深雪の隣に目を遣って、軽く目を瞠った。
「んっ？　エリカくんじゃないか」
「啓先輩、明日の調整は終わってるの？」
「いや、チョッと一休み……って言うか、花音に引っ張ってこられたんだけど」
軽くからかうように問われて、五十里が苦笑いを浮かべる。隣で花音が少しムッとした表情になっているのは、単に今の物言いが気に入らなかったから、ではあるまい。ここにも何かしらの因縁があるようだった。

「……あら、エリカは五十里先輩のことを存じ上げているの？」
「家同士の付き合いでね」
しかしエリカは花音のむくれ顔に全く気づかず、と言うか、注意を払わず、深雪の方へ身体ごと顔を向けた。
「千葉家は五十里家に、とてもお世話になってるの」
「そんなことないよ」
「イエイエ、客観的な事実ですよ」
慌てて首を振った五十里の言葉を、エリカはおどけた口調で更に打ち消した。
「あたしのホウキも啓先輩のトコにお願いして作ってもらったものだし。てかコレ、啓先輩が作ってくれたんじゃなかったっけ？」
そう言って伸縮警棒形態のＣＡＤを、エリカはどこからか手品のように取り出した。
「うん、まあ……『刻印』の部分はそうだけど」
「刻印型術式をご自分で組まれたんですか？　凄いんですね……」
「啓は天才だもの」
素直に感心した美月に、花音は不機嫌だったことも忘れて胸を張り、五十里はますます照れくさそうにもう一度「そんなことないよ」と呟いた。

◇　◇　◇

自分の不在が話題に上らなくなった頃、達也はホテルを抜け出して基地の士官が使っている駐車場に足を向けていた。待ち合わせの相手は既に到着していた。

「女性を待たせるなんて、マナーがなってないわよ」

「すみません」

ＴＰＯを無視しているがそれなりに一理ある――女性云々ではなく、約束に遅れたことに関してだ――非難に対して、達也は素直に謝罪した。

一言の言い訳も無かったことに拍子抜けしたのか、遥もそれ以上の文句を言わず、自分が寄りかかっている車に乗るよう、達也に身振りで指示した。

言われたとおり助手席に乗り込んだ達也に続いて、遥が運転席に乗り込む。

自動車は中も外も暗いままだ。

モーターの始動スイッチには目もくれず、遥はドアポケットから携帯端末を取り出した。

それを見て、達也もブルゾンの内ポケットから端末を取り出した。

スタッフ用ユニフォームではなく、黒一色のタップリしたブルゾン。その両脇下がわずかに膨らんでいたが、遥は気づかないフリをした。

「地図データだけで良いわよね？」

「構成員が分かっていれば、そのデータもいただけますか」
ため息をつく遥の端末へ向けて、達也は自分の方から先にデータを送信した。
ディスプレイを見て、遥は目を丸くした。
「足りませんか？」
「いえ、十分よ」
表情を消して、遥は自分の端末を操作した。
送られてきたデータにざっと目を通して、達也は一つ頷いた。
「ありがとうございました」
小さく頭を下げてドアの開閉ボタンに手を掛けた達也に、
「保険、なのよね？」
遥が硬い声で訊ねた。
「ええ、保険です」
短い答えが遥の耳に届いた時にはもう、達也は背中を向けていた。

遥の運転する電動クーペがゲートの向こう側へ消えたのを見届けて、達也は右耳を覆うガーゼをむしり取り、別の車へ歩み寄った。窓を叩くまでも無く、助手席の扉が開く。運転席には遥とほとんど同年代の女性が座っていた。

「今の女性は？」
「公安のオペレーターです」
遥の素性をアッサリばらして、達也は藤林にニヤリと笑った。
「本人はカウンセラーが本職だと言い張っていますが」
クスッ、と藤林が笑いを零した。
「パートタイムオペレーターというわけね」
「能力的には問題ないと思いますよ。すれたプロよりも駆け出しのセミプロの方が、守秘義務をマニュアルの字面どおりに守ってくれますので、内職を頼む時も安心です。まあ……本当は副業を受けることそのものが職業倫理に反しているんですが、そこは地獄の沙汰も――というヤツですね」
黒いセリフを嘯いた達也に、藤林は目を細めた。――瞳は冷たく醒めたままで。
「時々思うんだけど、キミって十歳くらい年齢詐称していない？」
「年齢ではなく経験の問題だと思いますが。何しろ常日頃から、色々な経験を積ませてもらっていますので」
色々な、の部分にアクセントを置いて答えた達也から、藤林はさりげなく目を逸らした。
達也も特に返事を求めたりはしなかった。
彼はグローブボックスからデータケーブルを取り出すと、馴れた手つきで助手席前のパネル

を操作し、有線接続で遥から手に入れた地図データをナビゲーション・システムへ転送した。

「……私もバイト代をもらおうかしら」

「時間外手当を請求すべきだと思います」

「ウチは労働基準法の適用対象外なのよ」

フレックスが勤務形態の主流になった現代でもしぶとく生き残っている法令をネタにした、ステレオタイプのコントを作り笑いも浮かべず達也と交わして、藤林はパームレストタイプの片手操作コントローラーを前に倒した。

現在最も普及している大衆電動車は、カタログに載っていない静粛性を発揮して闇に紛れた。

◇　◇　◇

藤林に時間外勤務（？）を命じた当人は、時間外の来客を迎えていた。

「どうぞお入りください、閣下」

風間が従卒に任せず自ら案内した相手は九島老人だった。

老人の現役時代には、「十師族は表立って高位高官にならない」という原則が確立されていなかった。

この原則は九島自身が様々な軋轢に曝された経験から作られたようなものだからだ。

九島老人の退役時階級は少将。風間の示した儀礼は、十師族の長老に捧げられる私的なものではなく、公的な秩序に則ったものだった。

風間はB級ライセンスを持つ魔法師であり、十師族を頂点とする魔法師コミュニティのメンバーである。だが彼は「忍術使い」に分類される古式魔法の魔法師であり、現代魔法の象徴である十師族に対して、どちらかと言えば冷ややかな感情を持っている（無論一部隊の長として、部下に対する感情は別だ）。

従って――と言うべきかどうか――風間の態度は丁寧ではあるが「形式的」の範疇を超えるものではなかった。

「席を外せ」

「ハッ」

風間は飲み物を持ってきた従卒を部屋の外へ下がらせて、改めて九島老人へ目を向けた。

「本日はどのようなご用件でしょうか。藤林でしたら使いに出してこちらにはおりませんが」

「孫に会うのにわざわざ上官を通す必要は感じんな……なに、君が珍しく土浦から出て来ていると聞いたので、顔を見に来たのだ」

「光栄です」

光栄と言いながら少しも恭しさのない風間に、九島は軽く苦笑した。

「十師族嫌いは相変わらずのようだな」

「以前にもそれは誤解だと申し上げましたが」
「誤魔化す必要はないと以前にも言ったはずだが。元々兵器として開発された我々と違って、君たち古式の魔法師は古の智恵を受け継いだだけのニンゲンだ。我々の在り方に嫌悪感を懐くのも無理はない」
人間、という言葉を一音一音区切るようにわざとらしく発音した言い方に、風間は思わず眉を顰めた。
「……自らを兵器と成す、という意味では古式の術者も同じです。我々とあなた方に、大した違いはない。自分が嫌悪感を懐くとすれば、自らを人間ではない、とする認識を子供や若者に強要する遣り口です」
「ふむ……だから彼を引き取ったのかね？」
聞きようによっては辛辣な風間の発言を、九島は余裕綽々たる口調で切り返した。
「……彼、とは？」
「司波達也君だよ。彼が三年前、君が四葉から引き抜いた、深夜の息子だろう？」
「……」
風間の沈黙は、言葉に詰まったと言うより、「ムッとした」という類のものだった。
「私が知っていても何の不思議も無かろう？　私は三年前の当時、師族会議議長の席にあり、今なお国防軍魔法顧問の地位にあり、一時期とはいえ深夜と真夜は私の教え子だったのだから」

「……ならばご存知でしょう。四葉が達也の保有権を放棄してなどいないことを。アイツは今なお四葉のガーディアンであり、ガーディアンとしての務めに支障なきに限り司波達也は軍務に服すること、ガーディアンとして以外、四葉は司波達也に関して優先権を主張しないこと、それが我々と四葉の間で交わした約定です」

「惜しいとは思わぬか？」

「惜しい、とは？」

意味ありげに身を乗り出して訊ねた九島に、風間は素っとぼけた答えを返した。

九島老人は気を悪くした様子もなく、微かに笑った。

「昨日の試合は見事だった。唯一の成功例とは聞いていたが、あれ程のものとは想像していなかった」

探るような目付きで、九島退役少将が風間少佐の目をのぞき込んだ。

「彼は将来、一条の息子と並んで我が国の魔法戦力の中軸ともなり得るだろう。あれ程の逸材を私的なボディガードとして一箇所に貼り付けておくのはもったいないとは思わないか？」

「……閣下は四葉の弱体化を望んでおられるのですか？」

「君だから正直に言うがね」

風間の反問に、九島は薄く笑ったまま頷いた。

「十師族という枠組みには、互いに牽制しあうことで、魔法師の暴走を予防するという意味合

いもある」

風間の沈黙は、九島の話が彼にとって既知の事柄であることの表明だった。

「だがこのままでは、四葉は強くなり過ぎる。司波達也君とその妹がこのまま成長し、遠くない将来、真夜が健在なまま司波深雪が四葉深雪となり司波達也がその爪牙となったなら、四葉は十師族の一段上に君臨する存在となってしまうかもしれない。いや……」

九島老人は、言葉を切って一つ頭を振った。

「現時点でさえ、他家にない特殊な技術と少数ながら強力な魔法師を揃えた四葉は、十師族の中でも突出した存在なのだ」

九島の言葉に、風間は唇を皮肉げに歪めた。

「あの家は閣下の仰る『兵器として開発された魔法師』の伝統を、最も忠実に守り続けている一族ですから、単純に戦闘力だけで見れば突出した存在になって行くのも当然かと思われます」

「それでは困るのだ。

風間少佐、君の言うとおりだよ。

元来は兵器として開発された存在であっても、今は違う。

ただ兵器として在るだけでは、人の世界からはじき出されてしまう」

「閣下」

風間が発したその言葉は、九島老人の述懐めいたセリフを断ち切った。

「閣下がこちらの事情をご存知であるように、自分も閣下のご事情をある程度存じ上げております。閣下が達也のことを気に掛ける本当の理由についても承知しておるつもりです」

今度は九島が黙り込むことになった。

「その上で、一つの進言と一つの訂正をお許し頂きたい」

「……言ってみたまえ」

「達也を憐れむ必要は無いと存じます。彼は哀れな実験動物などという、大人しい存在ではありません。むしろ憐れまれることこそが、彼にとって不本意ではないかと」

「それが、進言かね」

「ハッ。そして訂正ですが……将来、ではありません。達也は現在において既に、我が軍の貴重な戦力です。こう申しましては身贔屓に聞こえるかもしれませんが、達也と一条将輝では戦力としての格が違います。

一条将輝は拠点防衛において、単身で機甲連隊に匹敵する戦力となりましょう。

しかし達也は、単身で戦略誘導ミサイルに匹敵する戦力です。

彼の魔法は幾重にもセーフティロックが掛けられていて当然の戦略兵器だ。

その管理責任を彼一人に背負わせることの方が余程、酷というものでしょう」

◇　◇　◇

東へ向かう車の中で、達也がくしゃみを連発した、というような事実はなかった。

藤林が運転する電動車――正確に言えば、交通管制システムに誘導された藤林の車は、ハイウェイを東進し、真夜中になる前に横浜市内へ入った。

東に横浜港、北に（度重なる日中直接軍事衝突にも関わらず）二十一世紀末の現在においても尚、繁盛を続けている横浜中華街を臨む高台に、二人を乗せた電動車は止まった。

「……敵国の工作員がウジャウジャいるって分かってるのに閉鎖も検問も行わないなんて、政治家は一体何を考えているのかしら」

中華街を見下ろしながら忌々しげに呟く藤林の隣で、達也は肩をすくめた。

「あの街は本国の圧政から逃れた華僑の、本国に対する主要抵抗拠点の一つ、というのが建前ですから」

「そんなの嘘に決まってるじゃない」

「建前ですから」

「限度というものがあります。こっちが勝ったといっても講和条約が締結されていない以上、我が国と大亜連合は三年前から休戦状態にあるだけで法的には交戦関係が継続中なのに。工作

活動の拠点になってる、って誰もが分かっていながら、誰もメスを入れようとしないだなんて」

「もしかしたら、少尉と同じように考えている人間は結構な数に上るかもしれませんよ」

今にも舌打ちしそうな勢いの藤林に、達也は飄々とした口調で答えた。

その含みある――ように聞こえる――回答に、藤林は目を丸くして達也を凝視した。

「……何か知ってるの？」

「いえ、単なる願望です」

この話題はこれで終わり、とばかり、達也は背中を向けてそう答えた。

彼が踵を返した先には、この都市で最も高い建物がある。

値段的にも高いが、物理的にも、最も高い建造物。

今世紀半ばまで「港の見える丘公園」と呼ばれていたこの場所には、現在では横浜港とその沖合を一望できる三棟一体の超高層ビルが建てられている。

名前は「横浜ベイヒルズタワー」。市民からは「ベイヒルズ」の略称で親しまれている、ホテル、ショッピングモール、民間オフィス、テレビ局の複合施設だ。魔法師の親睦団体、「日本魔法協会」の関東支部も東京ではなくこのビルに置かれている。（本部は京都にある）

もっともこのビル、純粋に民間施設というのがこれまた建前に過ぎないことは、市民ならずとも周知の事実。ここには東京湾を出入りする船舶を監視する目的で、国防海軍と海上警察が民間会社に偽装したオフィスを置いている。

魔法協会の支部がこのビルに置かれているのも、有事の際の防衛手段というのがもっぱらの噂だ。そして達也も藤林も、それが「噂」ではなく完全な「事実」であることを知っていた。

「少尉、お願いします」

「本当に時間外手当を請求しようかしら」

既に時刻は真夜中近く。

警備員のいる通用口ではなく、内側からしか開かない非常口の脇に、藤林は小型の情報端末を押しつけた。もう片方の手でCADを操作する。

外部からの入力端子もなく、無線入力の機能もないはずの開閉装置が、導電率の分布を改変された壁面を通して送り込まれたハッキングプログラムによって、二人を迎え入れるべく扉を開いた。内部の監視装置も藤林のハッキングにより、二人に対してのみ無力化されていた。

◇　◇　◇

横浜グランドホテル——今世紀前半、香港資本によって中華街に建てられた高層ホテルで、ニューグランドホテルの前身である同じ名前のホテルとは何の関係もない——の最上階、の一つ上の階、客には知らされていない、存在しないはずの本当の最上階の一室では、慌しく引越しの準備が進められていた。

この部屋は、香港系国際犯罪シンジケート「無頭竜」の東日本総支部。いわば東日本における活動の指令室として使われている部屋だった。

このホテルを経営している香港資本自体が、随分前に無頭竜によって乗っ取られていたから、犯罪活動の指令室、と表現する方が正確かもしれない。

引越しと言っても家具の運び出しがあるわけではなく、主な荷物はコンピュータシステムに記録されていない極秘帳簿の類だ。厳重なセキュリティが施されたシステムにも登載できないほど秘密性が高い帳簿だから、部下に荷造りを任せるわけにも行かない。高級ブランドスーツを身に纏った壮年（と言うよりも初老）の男たちが、シルクのハンカチで汗を拭きつつ、金銀宝石で煌びやかな指輪をはめた手で不器用に荷造りする姿は、第三者の目から見れば中々に滑稽なものだった。

無論、当人たちにとっては、笑い事ではない。

「おのれ……このままでは済まさんぞ」

一人が手を止め、歯軋りが聞こえてきそうな声で呪詛を漏らした。

「それにしても、ジェネレーターが戦果ゼロで取り押さえられるとはな……」

「想定外だ。まさか日帝軍の特殊部隊がしゃしゃり出て来るとは」

「お陰で我々は夜逃げの真似事だ」

「一度勝利したくらいで増長しおって……」

この場の誰もが心に秘めていた本音が表に出たことで、焦燥感に堰き止められていた愚痴の歯止めが利かなくなっていた。

「日帝軍に対する報復はいずれ必ず果たすとして、それ以上に優先すべきはあの餓鬼の始末だろう」

「我々の計画をことごとく覆した生意気な子供か」

「司波達也と言ったか？　どんな素性の餓鬼だ？」

「それが……詳しい素性が分からんのだ。調べがついたことといえば、氏名、住所、学校における所属と外見のみ。係累はおろか家族構成も不明、親の職業も会社員という以外の詳細は不明。日常的に必要となるデータ以外のパーソナルデータは一切判明しなかった」

「何だそれは？　この国は世界的に見てもパーソナルデータのデータベース化が進んだ国だ。民間のデータベースをのぞいてみるだけでも、それだけの情報しか取れないというのはおかしいだろう」

「データがロックされているのではなく『司波達也』に関するデータが組織的に消去されていると見るべきだろう。それ以外に考えられない」

無頭竜東日本総支部の幹部たちは、発言者（である同僚）の顔をまじまじと見詰め、次いで、互いに無言で顔を見合わせた。

「……ただの高校生ではないのか？」

「あらゆる民間のデータベースを組織的に書き換えるとなれば、国家権力でも、相当高いレベルの権力が必要だ。あるいは、国家の最高権力へ自由に介入できるだけの影響力が」

「一体、何者だ……？」

荷造りの手がすっかり止まっていた彼らの耳に、突如、くぐもった苦鳴が届いた。

部屋の隅にぼんやりと立ち尽くす四つの人影。

彼ら東日本総支部幹部の護身道具として貸し与えられたジェネレーター。

外部からの攻撃を遮断するため、四種類の術式を担当する魔法発生装置の内の一つ、外壁の情報強化を発動していたジェネレーターが、苦鳴の発生源だった。

その原因はすぐに分かった。

望まず、理解させられた。

南側の壁に大きな穴が開いていた。

突き破られたのではなく、切り裂かれたのでもなく、砕けたのでもなく、鉄骨と鉄筋と鋼管を残してコンクリートが砂とセメント粉末になって崩れたのだ。

苦鳴は、情報強化の魔法を破られた反動のもたらした苦痛によるもの。

だが苦しげな声が発せられたのは、ほんの一瞬だった。

幹部たちが苦鳴の原因に思い当たったのは、後追いの思考によるものだった。

無頭竜は単なる犯罪シンジケートではなく、魔法を悪用する犯罪組織。

幹部として取り立てられる為には、魔法師であることが条件になっている。
当然のこととして、東日本総支部の幹部たちも皆、魔法師だ。
魔法を使い、魔法を認識できる。
だから今、何が起こっているのかも認識できる。
苦鳴を漏らしたジェネレーターの身体から、身体情報のエイドス・スキン――魔法師が無意識に展開している、他者の魔法から自分の身体を守る情報強化の防壁――が剝ぎ取られた。
否、イメージとしては、鎧が融け落ち蒸発した、と表現する方が近い。
そして次の瞬間、ジェネレーターの全身に、実体でありながらまるで立体映像のようなノイズが走り、着ている服ごと輪郭が消えた。
それまでジェネレーターの身体が在った空中に、ポッと、薄い炎が生じた。
青と紫と橙が混じり合った炎は、スプリンクラーが作動する間も無く、フラッシュのように一瞬で消えた。
絨毯に落ちた、僅かな灰。
それだけを残して、ジェネレーターの身体は消え失せていた。
幹部たちは度肝を抜かれて叫ぶことも喚くこともできずにいた。
慄然とした表情で、互いに、交互に、顔を見合わせる。
と、そこへ不意に、電話が鳴った。

それは組織の中でしか使われていない、秘匿回線からの呼び出し音だった。
幹部の一人が恐る恐る受話器を取った。
映像は無く、音声のみの通話であることがパネルに表示される。
『Hello, No Head Dragon 東日本総支部の諸君』
スピーカーから聞こえて来たのは、若い男の――少年の声だった。

◇　◇　◇

達也と藤林は、横浜ベイヒルズ北翼タワーの屋上に来ていた。
ここにはテレビ局の放映アンテナと共に、無線通信の中継装置が設置されている。
その中継装置に、藤林は例の端末を押し当て、タッチパネルをあれこれ操作していた。
「……よし、ハッキング完了。無線通信は全てこちらにつながるように書き換えたわよ」
「さすがは『電子の魔女』。こればかりは、術式をどうこね回しても真似できませんね」
「ありがとう。そう簡単に真似されてはたまらないけどね」
冗談めかした笑顔ながらも、藤林も本音のところ、満更でも無さそうだった。
「有線は切断済みでしたね？」
「そちらは真田大尉の方で措置済みよ」

達也は情報端末付属の音声通信ユニットを左手に持った。藤林から指示されたコードを打ち込んで、残りワンプッシュで音声通信が可能な状態にしてホールドする。

風除けのバイカーズシェードを、胸ポケットから取り出して目を覆う。

そして、左のショルダー・ホルスターからロングタイプのCADを抜き出した。

銀色の、長い銃身を持つ自動拳銃のフォルムを模した、特化型CAD。

落下防止柵の手前に立ち、右手を斜めに伸ばす。

CADの「銃口」が向く先は、遥か丘の下、横浜グランドホテル。

「……これが『ジェネレーター』ですか」

「ええ、間違いないわ。捕獲したのは初めてだけど、特徴が情報部のレポートと完全に一致していたから」

ベイヒルズの屋上からグランドホテルの最上階まで、直線距離で優に1キロ超。

達也が構えているのは拳銃形態のCADで、照準スコープなど当然ついていない。

にも関らず、藤林は「見えるのか？」とは訊かなかった。

達也に視えているのは分かり切ったことだからだ。

藤林自身、達也とは視え方が違うが、室内に何人の魔法師がいてその内の何人がジェネレーターであるか、視えているのだから。

「自我を奪われた魔法発生装置。兵器として開発された魔法師の成れの果て、か……」

「……」

「……言い過ぎですね、すみません」

藤林から無言で白い目を向けられて、達也は気まずげな声で謝った。

魔法師の皆が皆、兵器に甘んじているわけではないので、確かに不適当な発言だろう。

しかし謝ったからといって、自分が共感を覚えたことまで否定するつもりは、達也には無かった。

ジェネレーターの在り方と、自分の在り方は似ていると、達也は思った。

故に、残された感情の範囲内で、最大限の嫌悪を覚えた。

有害であり、不快な存在。

この「装置」を破壊することに対して、達也の心には何の躊躇いも生じなかった。

シルバー・ホーン・カスタム、『トライデント』。

達也は、彼の魔法に最適化された愛機の、引き金を引いた。

軍事機密に指定された彼本来の魔法「分解」が発動する。

コンクリートの外壁を原料の粉末に分解する術式。

媒体となっていた壁に物理的な穴が開いたことで、外部からの魔法干渉を妨害する「閉鎖」の概念にも穴が開く。

達也の「視界」に、今までより鮮明に、室内の様子が映った。

発動中の魔法を強制的に破られてショックを受けているジェネレーター。
普通なら、魔法が破られたからといって、魔法師にここまでダメージが返ることは無い。
自分の意思で魔法を中断・中止できない為の弊害だろうか。
観測した事象を冷静に分析しながら、彼の攻撃意志――殺意は、止まらなかった。
一人のジェネレーターが生み出した五人の幹部を覆い守る領域干渉と、それとは別に三人のジェネレーターが自分を守る領域干渉のフィールドを識別。
トライデントの引き金を引く。
外壁の分解によってダメージを受けているジェネレーターの「領域干渉フィールド」、「エイドス・スキン」、「肉体」の情報を、変数として魔法式にインプットする。
三つの魔法工程が、刹那のタイムラグも無く、次々に発動した。
第一の工程が、標的を守っていた領域干渉を分解する。
第二の工程が、標的の肉体を守っていた情報強化を分解する。
そして第三の工程が、標的の肉体を元素レベルに分解した。
有機物としての存在すら認められず、生物としての痕跡すら残せず、蛋白質は水素と酸素と炭素と窒素と硫黄に、骨はリンと酸素とカルシウムとその他の微量元素に、血液も神経も蓄えられた栄養素も排泄物でさえも全て、単一元素によって構成される分子あるいはイオンに分解された。

水素に代表される軽い元素は、天井を伝い外壁に空いた穴から部屋の外へ排出された。
可燃性の高い元素のガスが解放された酸素と結びついて自然発火した。

その様は、あるいは、人体発火現象に見えたかもしれない。
だがその真相は、焼失ではなく、消失。
一つの魔法式に工程として組み込まれた分解の三連魔法が、魔法力で守られているはずの魔法師の肉体を、一切の抵抗を許さず消し去ったのだ。
「トライデント……本当に、身の毛もよだつとはこの事だわね……」
三連魔法の発動用にチューンナップされた特化型ＣＡＤ。
魔法大全において『トライデント』の名称は、別種の魔法に割り当てられている。
だが独立魔装大隊において『トライデント』とは、この無慈悲な三連分解魔法のことであり、その魔法に最適化されたＣＡＤのことでもあった。
藤林が隠し切れない戦慄と共に漏らした呟きには頓着せず、達也は待機状態にしていた情報端末の、音声通信を立ち上げた。
中継器のハッキングにより、専用回線の認証システムは意味を失っていた。
「Hello, No Head Dragon 東日本総支部の諸君」
達也は不自然に陽気な口調で、そう話し掛けた。

◇◇◇

電話を取った幹部は、戸惑いを隠せぬ顔で同僚へと振り返った。

この回線は幹部同士の通信用であり、本部との通信用の専用回線だ。支部長、あるいは総支部評議員クラスの幹部でなければ、組織の構成員であっても使用できない、存在も知らない通話回線。無頭竜には十代の幹部どころか二十代の幹部もいない。

「……何者だ？」

問い掛ける声が詰問調の居丈高なものにならなかったのは、たった今、日の当たりにした人体消失によって、心に恐怖を撃ち込まれた故か。

『富士では、世話になったな』

声は十代の少年のものだったが、口調は一人前の大人のものだった。

『ついては、その返礼に来た』

そのセリフと共に、彼ら幹部を守っていた領域干渉のフィールドが、いきなり消失した。

電話に出ている男だけでなく、意思を持たぬ魔法装置以外の全員が、反射的に部屋の片隅を見た。

その視線の先で、薄い炎が燃え上がって、消えた。

続けざまに生じた熱源にスプリンクラーが反応し、高圧の霧が天井から吹き付けられた。
そこに立っていたはずのジェネレーターは、跡形も無く消えていた。
「どこだっ？　十四号、どこからだっ？」
幹部の一人が、ひっくり返った声で叫んだ。
魔法師であれば、事象改変の反動から、何に対して、どこから魔法が使われたのかを知覚することができる。人体を分子レベルに分解してしまうような強い魔法がこれ程の至近距離で作用したなら、それがどこから放たれた魔法なのか、本来ならば分からないはずはない。
正確な距離はつかめなくても、少なくともどちらの方向に術者がいるのか程度のことは分かるはずなのに――この幹部は、喚くことしかできなくなっていた。
対して、動揺を知らない――動揺する心の機能を壊されているジェネレーターは、同類が壊されても怯えてパニックに陥るようなことはない。
十四号はのっそりとした動作で、壁に開いた穴を指差した。
その穴の向こう、この街で最も高い場所を。
別の幹部が慌てて狙撃銃を手に取った。
光学・デジタル複合スコープに目を当て、倍率を上げて行く。
横浜ベイヒルズ屋上、西に傾いた上弦の月の光に半身を浮かび上がらせて、一人の少年が立っていた。

倍率を最大に上げる。
バイカーズ・シェードに隠されて人相は分からなかったが、隠されていない唇が嘲る様に歪められたのは見えた。
その歪んだ笑みを見た直後、男が悲鳴を上げて蹲った。
突然分解し弾け散ったスコープの部品で眼球を傷つけられたのだ。
しかし、片目を押さえ呻き声を漏らす同僚を気にかける余裕は、男たちには無かった。
「十四号、十六号、やれ！」
ジェネレーターに反撃を命じる声は、一人のものではなかった。
だが――
「不可能デス」
「届キマセン」
機械は、できることしかやらない。
どんな状況でも安定的に魔法を行使することを目的に改造されたジェネレーターには、死に物狂いで限界以上の力を振り絞るという機能が無い。
「口答えするな！　やれ！」
抑揚が全く無い声で口々に応えた十四号と十六号に対して、目を押さえ膝をついたまま癇癪を破裂させる幹部。

応えは、電話口からもたらされた。
『やらせると思うか？』
十四号と十六号の身体にノイズが走る。
二人は仲間と、全く同じ運命をたどった。
『道具に命令するのではなく、自分でやってみたらどうだ？』
揶揄する声に先立ち、嘲笑が聞こえた。
だがそれに怒る気力は、男たちから奪い去られていた。
肉眼では人がいると見分けることもできない距離。
視認できない、認識できない相手に魔法を届かせる程の技量を、この場の誰も持ち合わせていない。
一人が有線電話に飛びついた。
別の男は携帯端末で必死に無線通話をつなごうとしている。
だが、有線電話は断線のシグナルを返すのみであり、
情報端末の音声通信ユニットは、
『無駄だ。今その部屋から通信できる相手は、俺だけだ』
最初の受話器と、同じ声を返すのみだった。
「バカな、無線通話まで……一体どうやって……」

『電波を収束した。どうやって、かは、お前たちが知る必要の無いことだ』

彼らには、その意味を理解する知識があった。

その知識は、絶望感を高める役割しか果たさなかったが。

『では、本番だ』

悪魔の宣告と共に、片目を押さえたままの男に、ノイズが走った。

男の顔が、真の絶望に歪んだ。

その表情は歪み続け——塵となって消えた。

三度の散水によって湿度が上がった室内では、最早発火現象は起こらない。

弔いの送り火すらなく消え失せた同僚に、男たちの顔は凍りついた。

一人が、出入り口へ突進した。

その背中にノイズが走り、輪郭が崩れ、散り失せた。

男たちは、無頭竜東日本総支部の幹部である残された三人は、自分たちの命が魔神の手に握られていることを悟った。

悟らずには、いられなかった。

「待て……待ってくれ！」

東日本総支部の支部長の地位にある男が、受話器を奪い取って叫んだ。

『何を待てというんだ？』



思わず叫んだ言葉だった。

見逃してくれる相手とは思っていなかった。

人をデータのように消し去る遣り口は、そんな情けのある人間のものではなかった。

だが予想に反して、応えが返って来た。

「わ、我々はこれ以上、九校戦に手出しをするつもりは無い」

『九校戦は明日で終わりだ』

「九校戦だけではない！　我々は明朝にもこの国を出て行く！　二度とこの国に戻って来ない！」

『お前たちが戻って来なくとも、別の人間が戻って来るのだろう？』

「我々無頭竜は日本から手を引く！　東日本だけでなく、西日本総支部も引き揚げさせる！」

『お前にそんな約束をする権限があるのか、ダグラス＝黄？』

名前を知られていたことに心臓が止まってしまいそうなショックを受けながら、黄は必死で言い募った。

「私はボスの側近だ！　ボスも私の言葉は無視できない！」

『何故そんなことが言える？』

「私はボスの命を救ったことがある！　命の借りは、救われた数だけ、望みを叶えることで返すのが我々の掟だ！」

『その「貸し」で命乞いするつもりだったのか』

二人分の視線が黄に突き刺さった。

裏切りに対する憎悪と殺意がそこには込められていた。

だが、黄にそれを気に掛ける余裕は無かった。

『その貸しは、自分の命を買い戻す為に必要なんじゃないのか？』

「違う！　そんなことをしなくても、ボスは私を切り捨てたりはしない！」

『お前にそれだけの影響力があると？』

「そうだ！」

『それを証明できるか？』

「それは……」

『No Head Dragon――頭の無い竜。その名はお前たち自身が名乗り始めたものではなく、リーダーが部下の前にすら姿を見せぬことから敵対組織によって付けられたものらしいな。部下を直々に粛正する時も、意識を奪って自分の部屋へ連れて来させる徹底ぶりだと聞く』

死の恐怖、消滅の恐怖とは別種類の戦慄が黄を襲った。

あまりにも詳しく、自分たちのことが知られている。

自分たちは一体何に、手を出したというのだろうか。

『お前がそれだけの影響力を持つというなら、当然、首領の顔を見たことがあるはずだな？』

だが、考えている暇は無かった。
生き延びる為には、この悪魔の示した気まぐれに付け入るしかないのだ。
「私は拝謁を許されている」
『首領の名は何という？』
黄は口を閉ざした。
それは組織の最高機密。
長年にわたりすり込まれた恐怖と忠誠が、目の前の恐怖を凌駕した。
しかしそれは、わずかな時間のことだった。
「ジェームス!?」
また一人、仲間がこの世界から消し去られた。
人としての死をも許さぬ、消滅。
それは、彼らの首領の手により下される、死者に対する冒瀆と同じくらいおぞましいものに思えた。
『今のがジェームス＝朱だったのか。手配中の国際警察には気の毒なことをした』
「待て……」
『次はお前にしようか、ダグラス＝黄？』
「待ってくれ！　……ボスの名はリチャード＝孫だ」

『表の名は？』
「……孫公明」
『住まいは？』
香港の高級住宅街の住所、オフィスビルの名称、行きつけのクラブなど、訊かれるがままに黄は喋った。
「……私が知っていることはこれで全てだ」
『こちらの質問もちょうど終わりだ。ご苦労だったな』
「では、信じてもらえるのか？」
『ああ、お前は紛れもなく、無頭竜首領、リチャード＝孫の側近のようだ』
打ちのめされ虚無感を漂わせていた黄の顔に、わずかな喜色が浮かんだ。
その、ほんの少し、取り戻した希望は、
「グレゴリー！」
最後の同僚と共に、完全に消え失せた。
「……何故だ!?　我々は、命までは奪わなかった。我々は誰も殺さなかったではないか！」

◇　◇　◇

『……我々は誰も殺さなかったではないか！』

音声通信ユニットから、都合の良い理屈が聞こえてきた。

それは結果論に過ぎない。

彼らは大量殺人を目論み、それを柳、真田、藤林に阻止されただけだ。

だがそれを、達也は指摘しなかった。

「そんなことは関係ない」

『なに……？』

「お前たちが何人殺そうが何人生かそうが、俺にはどうでもいいことだ」

気の乗らぬ腹芸にいい加減ウンザリしていた達也は、言葉を飾る気を失っていた。

必要な情報を全て聞き出した今となっては、その必要も無くなっていた。

「お前たちは、触れてはならないものに手を出した。

お前たちは俺の逆鱗に触れた。

ただそれだけが、お前たちの消え去る理由だ」

『……悪魔め！』

「その悪魔とやらの力を振るえるのはお前たちのお陰だよ、ダグラス＝黄。力は意思によって引き出されるものだが、その力を更に高めるのは感情だからな」

電話口で、達也は薄く、自嘲気味に笑った。

笑い声は夜風に紛れ、それに替わる冷酷な声が、絶望を与えるセリフを紡いだ。
「お前たちが俺の持つ唯一つの感情を引き出してくれたお陰で、俺は久々にこの『悪魔の力』を解き放つことができた」
『悪魔の力だと……？　この魔法、これはまさか、Demon Right［デーモン・ライト］!?』
それが黄の断末魔だった。
それきり、黄の声は途絶えた。
ダグラス＝黄という存在自体が、この世界から消え失せていた。

［13］

九校戦も最終日を迎えた。

今日行われる競技はモノリス・コードの一種類。九時から決勝トーナメント第一試合、十時から第二試合。午後一時より三位決定戦。そして二時から決勝戦が行われる。

その後は三時半から表彰式と閉会式で、五時には競技場における九校戦が全て終了する。

競技場における、と但し書きが付くのは、七時からパーティが開かれるからだ。

開会前の懇親会と違って、閉会後のパーティは本当の意味で各学校の親睦の場となる。

このパーティで毎年少なからぬ遠距離恋愛カップルが誕生するくらいだ。

高校生同士の交流だけでなく、魔法師社会の有力者と面識を得られる機会でもあり、特に三年生はその両面でこのパーティを楽しみにしている者が多い。

だがトーナメントに勝ち上がった四校にとっては、それも全て、試合が終わってからのこと。

各校とも既に、慌しい動きは無い。

為すべきことを全て為し、選手もスタッフも、静かに決戦の時を待っていた。

第一高校の天幕も例外ではなく、目を閉じて泰然と座す克人を中心に、ある者は緊張した面持ちで、ある者は逸る心を懸命に抑えながら、選手もスタッフも一試合目の呼び出しに備えていた。

十文字克人、辰巳鋼太郎、服部刑部の三選手、そして最終競技を担当する三人の技術スタッフ。その中には五十里の顔も見える。

少し離れて真由美、摩利、鈴音、あずさといった、生徒会を中心とする幹部の面々。

花音を始めとする二、三年生の選手。

テントに入り切らなかった者は、応援席で選手の登場を今か今かと待っている。

しかしそのどちらにも、達也の姿は無かった。

◇　◇　◇

「応援に行かなくてもいいの？」

「……始まるまでまだ少し時間がありますから」

藤林に問われ、達也は口の中の物を飲み込んでから、そう答えた。

昨晩の指示に従い、達也は朝食後、風間の部屋を訪れていた。

ところが部屋の主は早朝からどこかの誰か相手の密談に出かけており、戻りを待つ間、二度目の朝食を藤林からご馳走になっているところだった。——彼も食べ盛りなので、サンドイッチがデザートに追加された程度では全く苦に感じないのである。

マナーに違反しない範囲で会話を挟みながら出された皿をちょうど片付け終えたところで、

風間が真田と柳を連れて戻って来た。立ち上がって敬礼する達也と藤林へぞんざいに答礼し、手振りで腰を下すように指示する。風間は達也の正面に、柳は藤林の隣に、真田は達也の隣に座った。（山中が霞ヶ浦基地――駐屯地から格上げ済み――へ戻っていることは、藤林から既に聞いていた）

「昨夜はご苦労だったな」

あいさつもそこそこに、風間はそう切り出した。

「いえ、自分の方こそ、私事に皆さんの手を煩わせてしまい、申し訳ありませんでした」

「私事ではないさ。俺も襲われたのだから」

「それに昨夜は貴重な実戦データが取れたからね。直線で約千二百メートル。この距離で対人狙撃を成功させた長距離魔法のデータは中々手に入らない。超長距離精密攻撃が本来のスタイルで、ＯＴＨ（over the horizon）狙撃もこなす君にとっては物足りない距離かもしれないが、僕にとっては満足の行く観測結果だった」

立ち上がり頭を下げた達也に、柳と真田が慰めと労いの言葉を掛ける。

「そういう事だ。また、昨夜の土産には、内情も公安も予想以上に満足していた。お前は任務を果たしたのだから、多少自分の都合を交えたからといって、気にする必要はない」

それを受けて、風間がこう締め括った。

「……たかが犯罪シンジケートのトップの情報に、それ程の価値があったのですか？」

昨夜、わざわざ相手に電話を掛けて長々と嬲るような真似をしたのは、達也自身の意趣返しという側面もあったが、一義的には風間に指示されてのことだった。

「あれは、ただの犯罪集団ではないからな」

「……」

「達也君、君は『ソーサリー・ブースター』についてどの程度知っているかい？」

達也の無言の問い掛けに、真田が口を開いた。

「名前は聞いたことがあります。ここ数年で犯罪集団に広まっている画期的な魔法増幅装置とか。正直、眉唾物だと思っていましたが……」

「ソーサリー・ブースターは実在するよ。ある意味では『画期的な魔法増幅装置』というのも間違いじゃない」

「そもそも、魔法の増幅などということが可能なのですか？」

こんな場面で真田が嘘をついたり信憑性の薄い噂話を持ち出したりするとは思わないが、それでも達也は「胡散臭い」という印象を拭うことができなかった。

魔法も魔法式という「信号」を魔法師から対象物のエイドスへ出力するプロセスを含むから、増幅という概念と全く無縁なものとは言い切れない。

だが魔法式の出力プロセスは、イデアという単一情報プラットフォームの中における情報の移動であり、魔法式という信号が魔法師と対象物の間を物理的に移動するわけではないのだ。

魔法師が構築した魔法式を、一体どこで増幅するというのか……まずそこが疑問だった。

「普通の意味での増幅じゃないよ。そうだね……魔法式の設計図を提供するだけでなく、設計図を元にした魔法式の構築過程を補助する機能も持つCAD、と表現すればいいのかな？　魔法師が本来持っているキャパシティを超える規模の魔法式形成を可能にするんだ」

「それは……『ブースター』というより『増設メモリー』ですね」

「まあね」

達也の言い草がツボにはまったのか、真田はひとしきり声を上げて笑った。

「……俗称が本質を表現していないなんて珍しいことじゃないよ。で、無頭竜はソーサリー・ブースターの供給源なんだ。この道具は製造原料に問題があってね。真っ当な企業では、同じ物は製造できない。国家でも、バレた時のリスクが高すぎる。ソーサリー・ブースターは事実上、無頭竜の独占供給状態なんだよ」

「ではそのソーサリー・ブースターを買い付ける為に、リーダーの情報が必要だったのですか？」

「いいや。ブースターの製造と供給を止める為に、ターゲットの情報が必要だったんだ。アレはこの世界に存在していい物じゃない。僕なら絶対に使いたくないし、同じ隊の中で使わせたくもない。――達也君なら、CADの中枢部品である感応石の製造方法を知っているだろう？」

感応石とは想子波動を電気信号に変換し、電気信号を想子波動に変換する合成物のこと。突然の話題転換に軽い戸惑いを覚えつつ、達也は頷きながら口を開いた。

「感応石は分子レベルから化学的に合成しネットワーク構造に発達させた神経細胞を結晶化して製造します。ネットワーク構造の違いによって変換効率が決定される為、重要なのはニューロンの持つ物質的な特性ではなくネットワーク構造のパターンであるとも言われていますが、現在のところ人造ニューロン以外の素材から感応石の製造に成功した例は報告されていません」

達也の答えに、真田は満足げに頷いた。

「そのとおりだ。ところがブースターの中枢部品は、人造ニューロン以外の素材から製造された感応石なんだ」

「それは一体……？」

「人間の脳だ」

真田の回答に、達也は絶句した。

「より正確には、魔法師の大脳だ」

「……しかし、動物の脳細胞を使用した場合、脳内に残留する想子の所為で使用者との感応が成立しないはずですが。それは人間の脳細胞を使用した場合も同じだったはずです」

達也が絶句したのは、その非人道性が主な理由ではなかった。

彼はＣＡＤ開発の黎明期における動物実験の例も人体実験の例も知っていた。そうした倫理も良心も信仰も何もかも無視した形振り構わぬ試行錯誤の結果、ニューロンを化学的に合成するという感応石の製造ノウハウが確立したのだ。

だが無頭竜はこの、魔法工学の常識を覆したという。

そのことに達也は驚いたのだった。

「通常の感応石と機能的に全く同じというわけではないよ。一つのブースターは、一つの特定魔法にしか使用できない。そして使用できる魔法は個々のブースターによって異なっている。と言っても、パターン化はある程度可能らしい。製造時の残留思念によって、使用可能となる魔法の種類が変わるのだろう、と推測されている。製造過程で同じ種類の強い感情を与えれば、同じ種類のブースターが出来上がるということだね」

「……例えば、脳を摘出する直前に大きな苦痛を与えるとか、大きな恐怖を与えるとか、ですか？」

「おそらくは」

「……蠱毒の原理ですね」

「同感だ。ブースターは蠱毒の技術基盤から発展したものだろう。僕たちは魔法を武器とし魔法師を軍事システムに組み込むことを目的とする実験部隊だけど、魔法師を文字どおりの部品にするつもりはない。僕だって魔法師だし、少佐も、柳大尉も、藤林少尉も、下士官・兵

卒を含めて部隊の構成員のほとんどが魔法師だ。ジェネレーターまでならまだ許せる気もするけど、ブースターは製造も使用も絶対に認められない」

「そういう感情面を抜きにしても、魔法師のキャパシティを拡張するブースターは軍事的にも脅威だ。NAIA北米情報局も同じ見解で、内情に協力を求めていたらしい。壬生が随分感謝していたぞ、達也」

風間がそう付け加えて、この場での説明はお終いとなった。

◇　◇　◇

達也が応援席でキョロキョロと空席を探していると、前の方から氷の礫が飛んで来た。慌てて受け止めた手を下ろした拍子に、深雪と目が合ってしまう。

気がつかなかったフリを諦めて、達也は大人しく最前列に近い席へ向かった。

「……随分と荒っぽい出迎えだったね」

「お兄様が気づかないフリなどなさるからですよ」

……達也に反論の言葉はなかった。

いや、気づかないフリをした理由なら、試合開始前ギリギリになって応援席で目立つような真似をしたくなかったという（達也にとっては）正当な理由があったのだが、妹を納得させる

ものでは到底ないということも明らかだったからだ。

ただ深雪の方に道理があるかというと、近くの席に座っている同級生、上級生の表情を見る限り、決してそんな事は無さそうだった。――生温～い同情の眼差しは、少しもありがたくなかったが。

「おっ、選手入場か」

「ちょうどのタイミングでしたね、達也さん」

達也の呟きに応えたのは、深雪ではなく反対側の隣に座ったほのかだった。澄ました笑顔で生温い視線を撃退するのに忙しかった深雪は、応え損なった代わりに少し達也の方へ詰めて座り直した。

決勝トーナメント第一試合は、第一高校対第九高校。奇しくも新人戦と同じ組合せとなった。九高には雪辱戦の意識もあるのだろう。選手三人揃って、随分気合の入った顔をしている。

それに対して一高の三人は、いつもどおりに三者三様だった。

泰然と構える克人、どこかとぼけた雰囲気を漂わせる辰巳、生真面目な表情で相手チームの挑発的な視線に応戦している服部。

全くいつもと変わらぬ姿は、頼もしさを覚えるものだった。

「俺たちとは安心感と言うか……格が違うよな」

「そんなことはありません！　わたしはお兄様の勝利に不安を覚えたりしませんでした」

「達也さんたちも立派でした！　とても堂々としていたと思います」

達也にしてみれば何気ない呟きだったのだが、すかさず返ってきた慰めだが激励だか判別しにくい返事に、彼はいささか面食らってしまった。

さすがに試合開始前の空気を察して声をひそめてくれたので注目を集めることはなかったが、毎回そうだという保証はない。口は災いの元（？）と気を引き締め、頭の中から雑念を追い出して、達也は応援に集中することにした。

――雫から向けられている白けた眼差しが痛かった所為もある。

――そして、そんな寸劇には関係なく、試合は始まった。

フィールドはカルスト地形を模した「岩場ステージ」。

始まりのブザーと共に、一高陣地から服部が飛び出した。

跳躍の魔法を所々交えて、脚力だけでは出せない速さで敵陣へ突き進む。

九高の動きは鈍かった。

むき出しにされた闘志では彼らの方が勝っていたが、実際に先手を取ったのは一高の方だ。

あの気合の入りようならばおそらく、九高の方が先制攻撃を目論んでいたはず。

だが予想を越えた思い切りの良い突進に機先を制せられて、対応に迷いが生じているようだ。

突出したオフェンスに集中攻撃を加え、数の優位を確立するか。

迎撃はディフェンスに任せて、予定どおり敵陣へ斬り込むか。
あるいはその停滞こそが狙いだったのか。
服部は道半ばを過ぎた所で足を止めると、自陣でもたついている九高の三人目掛けて魔法を放った。
上昇気流と共に、白い霧が九高チームの頭上に生じた。霧はたちどころに濃度を増し、自らの重さに耐えかねたかの如く、地上へ向かって崩れ落ちた。
ドライアイスの雹が降り注ぐ。
収束・発散・移動系複合魔法『ドライ・ブリザード』。
真由美がスピード・シューティングで使用した魔法の原型だ。
二酸化炭素を凝結温度まで引き下げる為に放出する熱量（顕熱）と二酸化炭素の凝結時に放出される熱量（潜熱）をドライアイスの弾丸の運動エネルギーにすり替えるこの魔法は、気温が高くなるほど弾速が増す。魔法防御の外側、真上から降り注ぐドライアイスの弾丸は、岩陰に隠れて遣り過ごすこともできない。ヘルメットを着けているので指先で摘まめる程度の礫で大怪我をすることはないが、何発も続けて命中すれば軽い脳震盪くらいは起こす。
それはそのまま、戦闘不能による敗退に直結するので、九高選手の一人が頭上に三人をカバーする魔力のシールド――落下速度をゼロにする仮想障壁――を展開した。
その選手が張ったシールドは、速度を一旦ゼロにするだけのもの。空中に一瞬静止した後

は、重力に従って地上に落下する。服部が作り出したドライアイスは、周りの空気を冷却することにより水蒸気を凝結させ、細かな霧雨とともに地上へ、九高選手の上へ、石灰岩の上へと降り注ぎ、霧雨は融け出した二酸化炭素を吸収し、炭酸ガスを溶かし込んだ霧となって漂った。

その霧は岩に囲まれた地形により、九高陣地一帯から中々拡散しようとしない。

視界を妨げる程の濃さでは無いが、冷たくまとわりつく湿気は気になり出すとかなり不快なものだ。シールドを張った選手とは別の選手が、気流を起こしてドライ・ブリザードの副産物を吹き払おうとした。

だがそれより速く、服部の次なる魔法が発動した。

土砂の粒子を細かく振動させることで生じた微弱な摩擦電流を、土砂の電気的性質を同時に改変することにより増量し地表に放出する術式。

八高の新人が同じ岩場ステージで使用した電子強制放出と同種の魔法だが、種類は同じでも威力と洗練度が桁違いだった。

九高の魔法防御の境界線をなぞるような三日月型に、幅五メートルにわたる地面が発光した。細かな電光が無数に絡み合って明滅する様は、さながら、のたうち回り押し寄せる小蛇の大群だった。

砂混じりの地面も疎らに生えた草も無造作に転がる岩も、二酸化炭素が溶けて導電性が高ま

った霧にしっとりと濡れている。

防衛線の外側にのたうつ電気の蛇は、魔法に関係なく地面を伝わり九高選手に襲い掛かった。

コンビネーション魔法、『這い寄る雷蛇（スリザリン・サンダース）』。

コンビネーション魔法とは、複数の魔法工程を一つの術式にまとめ上げた魔法ではなく、複数の魔法がそれぞれに生み出す現象を組み合わせて、個々の魔法の総和よりも大きな効果を生み出す魔法技術のことだ。

飛び抜けて強力な得意魔法も他の追随を許さぬ処理速度も他人に真似のできないマルチキャストも持たない代わりに、多種多様な魔法をどんな場合でも確実に繰り出す安定性が服部の持ち味であり強みでもある。

状況に応じて多彩な魔法を組み合わせ、相乗的に威力を高めるコンビネーション魔法は、服部の真骨頂が発揮される技術と言えた。

九高の三人の内、一人は空中へ跳び上がって電流から逃れた。

だがシールドを張った選手と霧を吹き飛ばす為の魔法を編纂していた選手は、跳躍の術式に切り替えるタイミングが一拍、遅れた。

電光が九高選手の足に絡み付く。

防護服（プロテクション・スーツ）とセットになったブーツ自体は絶縁加工が施されているが、スーツ本体の絶縁は簡易なものだ（絶縁性能を高めると通気性が損なわれる）。

炭酸ガスを取り込んだ霧は、選手の身体にも付着し滴っている。
突風の魔法を準備していた選手は、咄嗟に変数を入れ換えて下向きの風を起こすことにより霧の滴を吹き払い電撃を弱めたが、シールドを張っていた選手は『スリザリン・サンダース』をまともに喰らった。
前のめりに倒れたチームメイトの隣で、もう一人の方も片膝をついた。
言うことをきかない足に見切りをつけ、そのままの体勢でＣＡＤに指を走らせる。
空中から苦鳴が聞こえた。
跳び上がって電撃を逃れた選手が、空中で見えないハンマーに殴られて、姿勢を乱したまま落下する。
単一系統の術式において卓越した出力（干渉強度）を誇る辰巳鋼太郎が繰り出した加速魔法。瞬間的に下方向へのＧを掛けて、敵選手を地上に叩き落としたのである。
しかし、構わず、九高選手の収束魔法が発動した。
仲間の撃墜に気を取られなかったのは、さすが、決勝トーナメントに勝ち上がって来ただけのことはある、と言うべきか。
圧縮空気弾が服部目掛けて撃ち出される。水中や宇宙空間などの特殊な環境を除き、どこにでも存在する空気は元々、戦闘用魔法の媒体としてポピュラーなものだ。
加えて、攻撃手段と殺傷性を制限するルールから、モノリス・コードでは圧縮空気弾や鎌

鼬が多用される傾向にある。

服部の魔法防御領域の外側に生じた高圧の空気塊は――服部に届く前に、見えない壁に打ち当たって四散した。

服部が張り巡らせたものではない。

圧縮空気弾を防いだ魔法は、四百メートル後方から克人が展開した『反射障壁』だった。

固体、液体、気体を問わず、運動ベクトルを反転させる力場を作り出す、領域魔法。

一般に対物魔法に比べて領域魔法は難度が高いとされている。

それは、魔法の対象を特定する難しさの違いに由来する。

事象を改変する難度は、物体の属性を改変するのも空間の性質を改変するのも、それほど変わらない。問題は、性質を書き換える領域と書き換えない領域の区別をどうやってつけるかにある。

壁や天井や柵などの目に見える仕切りで区切られている場合は簡単だ。しかし例えば、野外の、何の仕切りもない解放空間で、特定の空間を切り出して定義するのはかなり難しい。

ただそれが攻撃魔法であれば、起動式に対象とする領域の広さを記述しておくことで、難度を引き下げることができる。

だがどの程度の距離・範囲で飛んでくるか分からない相手の攻撃に合わせて対象領域を決定しなければならない防御魔法では、予め起動式に面積・容積・形状を書き込んでおくという手

が使える場面は限られてくる。

例えば、自分一人の身を守る盾。

あるいは、チーム全体をカバーする壁。

それを、自分を中心とした至近距離に相対座標で設定する。

普通はその程度がせいぜいだ。

だが克人は今、服部の身体という保護対象を目標にするだけで、何も目安となるものがない野外に、イメージ補整の為の補助器具を何も使わず、しかも四百メートルの距離から完全な「反射障壁」を作り出した。

卓越した空間掌握能力。

十文字家の魔法師は、空間に対する天性の認識力を更に磨き上げることによって数々の領域防御魔法を駆使し、「鉄壁」の異名を取っているのだった。

服部が次の魔法を発動した。

彼は九高からの攻撃に対して、防御を一切取っていない。

敵の攻撃を克人が間違いなく防いでくれるという前提に立った魔法式の構築だった。

地面から砂が舞い上がる。

風が砂を巻き上げる。

服部の前方約十メートルから生じた砂埃は突き進むにつれて量と速度を増し、砂嵐の濁流と

化して敵選手に襲い掛かる。
加速・収束系複合魔法『砂塵流』。
最初に巻き上げた砂を核にして、移動の過程で密度を増して行くように構築された広域攻撃魔法。
収束性を高められた砂嵐が、九高選手を打ち倒した。

◇　◇　◇

「レベルの高い試合だったな……」
試合終了の合図をBGMに、達也は感慨深げに唸っていた。
試合自体はほぼ一方的な展開だった。
レベルが高い、というのは、そこで使用された魔法と、その使用方法だ。
特に服部の見せた魔法の使い方は「深雪にも見習わせたい」と思わせる程、高度なものだった。（「見習いたい」でないのは、自分では真似できないと判断したからである）
達也は服部のことを低く評価していたわけではない。試合で一度、勝っているとはいえ、あれは不意打ちによるもので出会い頭のようなものだ、と達也は客観的に認識していた。
魔法力そのものよりも魔法使用の技術力が高いということも、色々な拍子に魔法を使って

いるところを見て、予想していた。
だが今見せられた実力は、正直に言って、予想を超えていた。
（俺もまだまだ見る眼が無い……）
「次はいよいよ決勝戦ですね」
そんな、ある意味でショックを受けていた達也の内心にお構いなく、ほのかが無邪気に話し掛けてきた。
彼女にとっては、生徒会副会長を務める先輩の魔法技能が高いのは当たり前なのだろう。
その「当たり前」の無邪気さが、達也の頭をスッと冷やした。
見る眼が無いのは当たり前ではないか。自分はまだ高校生だ。
昨夜の、独立魔装大隊特尉としての自分を引き摺っていた達也の精神は、この時ようやく、高校生としての司波達也に切り替わった。
「決勝戦は一時からだが、まだお昼には早いな……」
「少し冷たい物でもいただきませんか、お兄様？」
「賛成。アイスがいいな」
深雪の提案に、雫がすぐさま応えた。
今日はスタッフとしての仕事もない。
今は犯罪シンジケートのことを気に掛ける必要もない。

たまにはただの高校生らしく、呑気に過ごしても良いだろう――達也はそう思うことにした。

「さっきワゴンの屋台が出ていたから、そっちで食べようか？」

「ええ、是非！」

少年一人に美少女三人、それが他人の目にどう映るかということをすっかり失念して、達也は深雪たちをアイスクリームワゴンへ連れて行った。

◇　◇　◇

モノリス・コード決勝戦は「渓谷ステージ」に決まった。

運営委員から告げられた決定を伝える為に、真由美は選手控え室を訪れていた。

単なる伝言役、わざわざ生徒会長が務めることではない気もする。

事実、この決定を伝える為だけなら、真由美は自分で足を運んだりはしなかっただろう。

「十文字くん、いる？」

出入り口のインターホンに話し掛けるとすぐに「今行く」という返事があった。

少し間をおいて、克人が上半身タンクトップ、下半身プロテクション・スーツの姿で、扉代わりのキャンバスをかき分けて出て来た。

「こんな格好で済まんな」

「気にしないで。別に裸ってわけじゃないんだし」

克人の身体から、微かにアルコール臭が漂って来た。

飲酒していた、わけではない。

消臭剤に含まれているわずかなアルコール分の臭いだ。出て来るまでの少しの間は、真由美と顔を合わせるのに、汗の臭いを気にした結果だろう。彼は特段フェミニストではないが、紛れもないジェントルマンだ。しかもそうした気遣いを全くアピールしようとしないところが、克人らしい作法だと真由美は思った。

「それで？」

急ぎの用を棚に上げて埒もないことを考えていた真由美は、改めて問われハッと我に返った。

「決勝戦のステージが決まったわ。チョッといいかしら？」

決勝のことを伝えるだけなら、今この場で一言を口に乗せれば良いだけだ。

しかし克人は「何故」とも「何を」とも問わず、黙って真由美の背中に続いた。

真由美が克人を連れて来たのは、三日前に真由美が達也に相談を持ちかけた部屋だった。

三日前と同じように遮音障壁を形成して、真由美はテーブルの前に腰を下ろした克人の耳に唇を寄せた。

「父から暗号メールが来てたわ。師族会議からの通達だって」

「ほう？」
「十文字くんには来ていないのね、その様子だと」
「ああ」
克人の答えは意外なものだったが、師族会議用の暗号解読には手間が掛かるので、短くない時間、一人になる必要がある。試合の合間とはいえ、リーダーが長時間席を外して周囲の不審を招くのはまずいと十文字家は考えたのだろう、と真由美は解釈した。
真由美と克人は、他のチームメンバーとは立場が違う。
生徒会長だとかチームリーダーだとか、そんな立場の違いではなく、社会的に立場が違う。
真由美は、現十師族の直系だ。
そして克人は、更に立場が違う。
彼は真由美と同じ現十師族の直系で、真由美と違って十文字家の次期当主と定められている。
今回この九校戦に参加している高校生の中で言えば、将輝だけが克人と同じ立ち位置にいる。
「一昨日、一条くんが達也くんに倒されたでしょう」
「……それで？」
克人の問い掛けは「それが？」ではなく「それで？」だった。
いや、実はこの問い掛け自体、形式的なものだった。
「十師族はこの国の魔法師の頂点に立つ存在。

十師族の名前を背負う魔法師は、この国の魔法師の中で、最強の存在でなければならない」

真由美の声は、少し皮肉っぽかった。彼女が語っているのは彼女自身の考えではなく、彼女の父親の、師族会議の「教義」だからだ。彼女の思いは、また別なのだろう。だが今必要なのは、彼女自身の哲学ではなく、師族会議の「教義」の方だった。

「例え高校生のお遊びであっても、十師族の力に疑いを残すような結果を放置しておくことは許されない、だそうよ」

「あの試合はお遊び、で片付けられるレベルではなかったがな」

セリフだけなら反論だが、口調は淡々としたものだった。

「つまり、十師族の強さを誇示するような試合を師族会議は求めている、ということだな？」

「ええ……こんな馬鹿馬鹿しいことを、十文字くんに押し付けたくはないんだけど」

「いや……これはむしろ、十文字家次期当主の俺が一人で処理すべきことだ。気を遣わせて済まなかったな」

「その程度のことは別にいいんだけど……」

気持ちの持って行き場が無いのか、真由美は珍しく本気で、何の意味もない愚痴をこぼした。

「ホント、馬鹿馬鹿しいったら……達也くんが傍流であっても十師族の血を引いているなら、こんな三流喜劇に巻き込まれることも無かったのに……」

克人は真由美の愚痴に対して、何もコメントしなかった。

「任せておけ」
感情を面に出さず、そう応えたのみだった。

◇　◇　◇

モノリス・コード決勝戦は第一高校対第三高校。
色々な意味で因縁のある対決、言い換えれば「宿命の対決」だが、試合自体は準決勝以上に一方的な展開となっていた。
因果は巡る、と言えばいいのだろうか。
新人戦で、将輝が八高に対してやったことを、三高はそっくりやり返される形となった。
選ばれたフィールドは「渓谷ステージ」。
先ほどから氷の礫を飛ばしたり、崖を砕いて岩を落としたり、沸騰させた水をぶつけたりと、地形を利用した攻撃が次々と克人へ向けて繰り出されている。
だがその全ては、克人が展開した魔法の障壁にはね返されていた。
質量体の運動ベクトルを逆転させる。
電磁波（光を含む）や音波を屈折させる。
分子の振動数を設定値に合わせる。

想子の侵入を阻止する。
あらゆる種類の攻撃が、その為に展開された幾重もの防壁に阻まれる。
克人の歩みを阻むものはない。
多重移動防壁魔法『ファランクス』。
この魔法の、十文字の術者の真価は、単に魔法防壁を維持し続けるのではなく、何種類もの防壁を途切れることなく更新し続ける持続力にある。
何列もの兵士が一塊になって整然と行進することにより、集団としての防御力を高めそれをそのまま攻撃力に転化する重装歩兵密集陣形。
最前列の兵士が倒れれば後列の兵士が入れ替わり、常に堅い防御を維持するこの古代の用兵を冠した魔法は、その名に恥じぬ防御力とプレッシャーを発揮する。
左右に狭いフィールドを、一歩一歩着実に敵陣へ進む克人。
三高選手はそれを無視することも回避することもできない。
少しでも攻撃を緩めたら、その直後、決定的な攻撃を返されてしまうのではないか……。
一歩ごとに強まるプレッシャーが彼らにそんな強迫観念をもたらし、攻撃し続けることを彼らに強いる。徹らない攻撃は攻撃側を消耗させると同時に、防御側も消耗させるはずだが、すっかり息が上がっている三高の三人に対して、克人は一向に疲れを見せない。
そして互いの距離が十メートルを切ったところで、遂に、克人の歩みが止まった。

彼の足は一歩一歩踏み出すことを止め、勢いよく、地を蹴った。
巌のような身体が、水平に宙を飛ぶ。
自らに加速・移動魔法を掛け、敵選手目掛けてショルダー・タックルの体勢で突っ込んで行く。内部への侵入を許さぬ、対物障壁を張ったまま。
突進の勢いで対物障壁に弾かれて、三高の選手が吹き飛んだ。
克人の巨体は一瞬の停滞もなく進路を変え、次の敵へと飛翔する。
魔法防御も運動量改変も、相手がそれ以上に強力な干渉力を発揮しているフィールドでは効力を持たない。
三人目の選手が為す術もなくはね飛ばされて、モノリス・コードの決勝戦は幕を閉じた。
一高の総合優勝に花を添える、完全な勝利だった。

手を挙げて拍手に応える克人へ、周りの観客と同じように応援席から拍手を送りながら、達也は言葉を無くしていた。
圧倒的という言葉では不十分だ。
凄まじい、としか言いようがない。
戦法自体は単純なものだ。

単なる力任せ、と言って良い。
だがあの魔法は――「単なる」力任せではない。
四系統八種、全ての系統種類の障壁を不規則な順番で切り替えながら絶え間なく作り出し続ける――恐ろしく「高度な」力任せだった。
「凄いですね……あれが十文字家の『ファランクス』ですか……」
深雪の口からも平凡な感想しか出てこない。
それだけ、今の試合に度肝を抜かれているということだった。
その気持ちは分かる。
だがその言葉には同調できなかった。
「違うな……あれは多分、本来の『ファランクス』じゃない」
十文字家の代名詞とも言える多重防壁魔法『ファランクス』。
だがこの魔法が人の目に触れる機会は意外に少ない。
普通は、同時に全系統全種類の防壁を展開する必要がないからだ。
別々の魔法師が同じ相手に同時に攻撃を仕掛けようとする場合、攻め手が多い程、攻撃魔法の種類が増える程、魔法の干渉が生じ易くなるのだからそれも当然のことだ。
達也もこの魔法を以前に目にしたことがあるわけではない。
今の試合で克人が展開した多重防壁は、確かに全系統全種類の魔法が含まれていた。

あれは確かに『ファランクス』だろう。

しかし達也は、その推測に頷くことができなかった。

「最後の攻撃……あれは、『ファランクス』本来の使い方ではないように思える」

それは論理的な推理というより、直感に近かった。

だが本物のファランクスは、もっと恐るべき魔法のように思えて仕方がなかった。

「お兄様が仰るのであれば、そうなのでしょう。ならばますます……凄い力量ですね、十文字先輩は」

達也も全くの同感だった。

ただただ感心して拍手を続けていると、ふと、克人が自分の方を見た、ように達也は感じた。

拳を天に突き上げ、勝利を誇示する克人。

その眼が一瞬、達也の目線を捉え、そしてその一刹那、フッと笑った——ように、達也には見えた。

俺はお前より強い——克人の眼がそう告げたように、達也は感じた。

腕力に頼らず相手を従えることが王者の徳という。

だがそれは、突き詰めてしまえば政治的な詭弁でしかない。

戦う前から、力では敵わないと相手に知らしめ、刃向かうことを断念させる、その絶対的な抑止力こそが、真に必要とされる王者の資質。

歓声に応える克人の姿には、力の価値を知り力の価値を実践する、王者の風格があった。

［14］

二週間前（正確には十二日前）とは打って変わって、ホールは和やかな空気に包まれていた。ノーサイドの精神は口で言うほど簡単に実践できるものでなく、若い彼らの心に勝ち負けの拘りが無いと言えば嘘になる。

だが今は、十日間にわたる激闘から解放されたばかりだ。短くない期間緊張に曝され続けた反動から、生徒たちの多くは過度にフレンドリーな精神状態になっていた。

後夜祭合同パーティのドレスコードは相変わらず各学校の制服。

再びサイズの合っていないブレザーを着込む羽目になった達也は、ダンスがあるならそれなりの格好をした方が良いんじゃないか？　と、口に出したら自らの墓穴を掘ることになりそうなことを壁際で考えていた。

「人気者だね」

人の悪い笑顔で話し掛けてきたのは、予定より一日早く完治のお墨付きをもらった摩利だった。

「お陰さまで。本当はのんびりさせてやりたいんですが」

仕方がありません、というセリフは口に出さず、達也は二重・三重の人垣に囲まれている妹へ目を遣った。

他校の生徒、大会主催者、会場を提供した基地の高官、大会を後援している企業の幹部。ここまでは仕方が無いとしても、メディアプロ（番組制作会社、CM製作会社、芸能プロダクション）の関係者と思しき人間までまとわり付いているのは、「一体どういうことだ」とパーティの主催者を問い詰めたい気分にさせられる。

本当は煩くまとわり付く礼儀知らずを力ずくで蹴散らしてしまいたいところなのだが、鈴音があの怜悧な（冷ややかな？）眼差しで不躾なアプローチからガードしてくれているので、達也は出しゃばるのを控えていた。

「妹さんのことではないよ」

素で返した達也の答えに、摩利は「たえ切れない」という表情で含み笑いを漏らした。

「人気者、というのはキミのことだ、達也くん」

摩利の指摘に、達也は「うんざりしている」とばかり顔を顰めた。

人垣が絶えることの無い深雪に比べれば大したこともないと言えるが、達也も先程から引っ切り無しに話し掛けられていた。

そのほとんどが、面識の無い大人だった。

見ず知らず、ではない。

父親の会社に出入りしている関係で、達也は高校生にしてはビジネスマンの顔を良く知っている方だ。

だがそれはあくまでも「高校生としては」のレベル。

彼は研究室の住人であり、経営や営業にタッチしているわけではないから、同じ業界の一般的な会社員と比較して「少し詳しい」程度に過ぎない。

そしてさっきから話し掛けてきているのは、その達也でも顔を知っている、という相手が半分以上だった。

「今さっきのはローゼンの日本支社長だろう？　一年生が声を掛けられるのは初めてじゃないのか？」

「過去の例は、俺には分かりません。九校戦の会場に来たこと自体、今年が初めてですから」

「そうだったな」

ニヤニヤと人の悪い笑みを消そうとしない摩利に、達也はチョッとイラついた。

――ほとんど八つ当たりだが。

「……まっ、仕方が無いさ。何故キミが名前を売ることに消極的なのかは知らないが、石ころを宝石と偽っても見る者が見れば騙し遂せないのと同じで、宝石を石ころに見せようとしても必ず分かってしまうものだ」

「……」

「そう渋い顔をするな。もうすぐダンスが始まる。そうなればあとは、学生だけの時間だ。あとチョッとの辛抱だよ」

ポンポン、と彼の肩を叩いて、摩利は飲み物の置いてあるテーブルへ歩み去った。
彼女は何故か上機嫌なようだ。
怪我をした後はずっと、無理をしていつもどおりに振舞っている、という印象があったのだが、精神的にもすっかり回復しているように見える。
（恋人というのは効き目絶大なんだな……）
自分には理解できないと知りつつ、達也は心の中で独白せずにいられない。
あの分だとおそらくこの後、パーティを抜け出して修次氏と会うのだろうな、と達也は柄にも無くゴシップな想像を巡らせたりもした。
そうすることで、ため息をつきたくなる気分を逸らした。
確かにもうすぐ、大人たち相手の白々しい化かし合いは打ち切りの時間になる。
だがそれと同じくらい、気が重いのだ。彼にとって、ダンスというのは。

しかし、達也のような生徒は、本当に例外的な存在だ。
お偉方が退出して、会場はますます和やかで、浮ついた空気に包まれた。
管弦の音がソフトに流れ始めた。
わざわざ生演奏を用意した主催者の熱意に、少年たちはすぐ応えた。
ここまで懸命に話術を駆使して親交を深めることに成功した少女の手を取って、ホールの中

央に進む。

ドレスでないのが残念だが、踊っている当人たちにはあまり関係の無いことのようだった。

それに九校共通の女子生徒用正装である、シルクテイスト・オーガンジーのインナーガウン（上着の下に着る袖無しガウン）がターンのたびに翻り、ドレスに然程見劣りしない華やかさを醸し出している。

深雪の許には予想どおり、学校、学年関係なく、少年たちが群がっていた。

だがまだ誰も、その手を取ることに成功していない。

時間ギリギリまで来賓に囲まれていたので、そこまで話を進められていないのだろう。

深雪は達也と違って舞踏会（「ダンスパーティ」ではない！）のマナーもしっかり教え込まれているので、相手が礼儀を守っていればダンスを頑なに断ったりはしないはずだが（無論、誰とでも踊るというわけでもないが）、少年たちは勝手に気後れしているようだった。

人垣の奥から、達也の見知った顔が深雪の前に出た。

顔を知っている、というだけでなく、面識があると言って良い相手だ。

達也は壁際を離れ、人垣へ足を進めた。

彼は決して細身ではないが、群がる少年たちを巧みにすり抜けて深雪の隣に立った。

「二日ぶりだな、一条将輝」

「むっ、司波達也か」

気安いあいさつ（？）を互いに交わす。

二人とも相手のことを友人とは考えていなかったが、また同時に、堅苦しい礼儀が必要な相手とも考えていなかった。

「耳は大丈夫か？」

「心配は要らんし、お前に心配される筋合いも無い」

「そりゃそうか」

一応、社交辞令（のつもり）を提示した達也に対して、将輝はおよそ友好的とは言えない応えを返した。まあ、九分九厘手中にしていた勝利を覆されて苦杯を嘗めた敗者にとっては、勝者からの気遣いなど愉快なものであるはずも無い。将輝の対応も、ある意味当然の素っ気無さだったのだが。

深雪が不快げな目を向けて来ているのに気づいて、将輝の心は狼狽に覆われた。

「えっ、あ、……あっ？　司波!?」

突然、素っ頓狂な声で達也の苗字を小さく叫んだ将輝を、達也は「大丈夫か、コイツ？」という目で眺めた。

「もしかしてお前、彼女と兄妹か!?」

将輝のセリフは達也に言いようの無い脱力感を与えた。

「……今まで気づかなかったのか？　本当に？」

分かりそうなものだぞ？、と呆れ顔で問い掛けられて、将輝は絶句したまま立ち尽くした。
短く控え目な笑い声が聞こえた。
深雪が顔を背けて口元を押さえていた。
「……一条さんには、わたしとお兄様が兄妹に見えなかったのですね」
笑いを噛み殺し、将輝に話し掛けた深雪の声は、何故か嬉しそうだった。
「えっ、いえ、その……ハイ」
言い訳を断念して項垂れた将輝を、深雪はニコニコと笑みを浮かべて見ている。
何が気に入ったのか分からないが、一条は妹の目に適ったらしい、と達也は思った。
――目に適ったといっても、ダンスの相手として、というレベルでしかないが。
「いつまでもここに固まっているのも邪魔だし、深雪、一条と踊ってきたらどうだ？」
達也のセリフに（正確には「一条と踊っ」の辺りで）、将輝はガバッと顔を上げた。
彼の目は期待に輝いていた。
深雪はひとしきりクスクスと笑った後、将輝へ向けて「どうしますか？」という感じに小首を傾げて見せた。
「是非……一曲お相手願えませんか」
上ずりかけた声を精一杯抑えて、将輝は恭しく、深雪に向かって作法どおりに一礼した。
「こちらこそ、よろしくお願い致します」



深雪も作法どおりの一礼を返して、差し出された将輝の手を取った。
ポジションにつく直前、将輝は感謝と感激のこもった眼差しで達也に目礼した。
達也はそれを見て、「現金なヤツだ」と思った。

将輝の見せた微笑ましいラブコメ（？）は達也にとって他人事だ。（深雪が「その気」にならない限り、だが）
だから気楽に対応できた。
だが自分が当事者となれば、最適、どころか、無難に対処するだけでも手に余る。
今、もじもじと上目遣いに自分を窺い見るほのかを前に、達也は己の未熟を痛感していた。
「お客様、こういう時は、男性の方からリード致しませんと」
ほのかだけでも手に余るのに、隣から茶々を入れられては逃げ出したくなっても仕方が無いだろう？　と、達也は誰とも知れぬ相手に愚痴をこぼしていた。——無論、口には出せないが。
「エリカ……何でウエイトレスなんだ？」
「最初からそういう条件で泊めてもらってるんだし」
達也の苦情はサラリと流された。
レオと幹比古は、選手としてこのパーティにも参加の声を掛けられていた。エリカと美月もスタッフ扱いで一緒にどうか、と誘われていた。だが四人ともパーティの参加を断って、厨

房係とホール係としてアルバイトに精を出している。
幹比古は今回、本人の希望どおり（？）厨房にまわっているが、エリカは前回同様ヒラヒラのコスチュームでウエイトレスとしてホールを行ったり来たりしていた。
「……だったらこんな所で油を売っているべきじゃないと思うんだが」
「お客様に適切なアドバイスを致しますのもホール係の仕事でございますので」
またしても澄ました顔で返されて、達也は頭を抱えたくなった。「ホール係の仕事」云々は別にして、エリカの主張に道理があることは達也にも分かっているのだ。
ほのかは達也に誘われるのを待っている。
それ位のことは、それこそ、言われなくても分かっている。
だがそこから先のノウハウが無い。
彼には「女性を誘う」という経験値が絶対的に不足していた。
「お客様？　そんなに難しくお考えになる必要はございませんが」
エリカも最初は面白がっているだけだったが、段々セリフに呆れ声が混じって来ていた。
このまま行けば、呆れ声は遠からず、苛立ちに変わるだろう。
それもチョッと、いや、かなり情けないことのように達也には思われた。
「……ほのか」
「はいっ！」

達也は、覚悟を決めた。

「……踊らないか？」

その割には、言葉になるまで随分と時間が掛かった上に、自信無さげな疑問形だったが。

「喜んで！」

それでもほのかにとっては、十分嬉しいことのようだった。

その後、達也は雫、英美、真由美の相手までさせられるという重労働を経て、壁にぐったりもたれかかっていた。

特に真由美の相手はきつかった。

リズム感が独特なのである。

達也のダンスはお世辞にも上手いとは言えない。ろくに練習していないのだから、当たり前なのだが。しかし、女性の足を踏んだり他人にぶつかったりというミスはしない。それどころか、ステップを間違えることも無い。

ダンス中に雫が「ダンスマシーンと踊ってるみたい」という、褒めてるとも貶しているとも取れるセリフを呟いたくらいだ。

記憶した動作を演奏に合わせて変速し、細かい部分を捨象して再現しているだけなので、達也のダンスは美しさとか優雅さとか気品とかは別にして、正確さだけは満点だ。

ところが真由美は、ある意味で達也と全く正反対。

演奏とステップが合っていないのだ。

音感が無い、というよりも「ため」に何か独創的なセンスを持っているらしく、一音一音は微妙に外しているのに、曲の流れとしてみると実に優雅なダンスを踊るのである。

お陰で達也は、演奏と真由美の動きと、二つのリズムをすり合わせながらステップを踏むという離れ業を余儀なくされた。

これが普通の人なら、何となくパートナーに合わせる、で何とかなるのだが、踊りを身体で覚えているのではなく動作を頭で再現しているだけに過ぎない達也には、そんな応用は荷が重すぎるのだった。

疲労困憊の達也を置いて真由美が上機嫌で次のパートナーを探しに行った後も、実は、達也の前を意味ありげにウロウロしている女子生徒が結構いた。

深雪とのダンスが終わった後、上級生のお姉さまの引っ張りダコになった将輝とは比べものにならないが、モノリス・コードの活躍を見て達也に興味を持っていた少女は少なくなかったのである。

だが彼の精根尽き果てた、というたたずまいを見て、一様に同情の眼差しを投げて通り過ぎて行った。

そんな彼にとって残念、かもしれない事実に気づく余裕も無く、そろそろ部屋に戻ろうか、

と達也が考えたちょうどその時、タイミングを見計らっていたように、達也の目の前にグラスが差し出された。

「あ……ありがとうございます」

セリフが途中で途切れたのは、その相手が完全に予想外だったからだ。

「疲れているようだな」

「……はあ」

「試合のようなわけには行かんか」

「それはまあ……仰るとおりです。僭越ながら、会頭はどちらも苦になさらないように見受けられますが」

「慣れているからな」

話し掛けてきた相手は克人だった。

克人はノンアルコールビールのグラスをグッと呷った。

何だか付き合わなければならないような気がして、達也は渡されたグラスを同じように飲み干した。

しかし、本番はこの後だった。

「司波、少し付き合え」

通りかかったウエイトレス（エリカではなかった）に空のグラスを渡して、克人はそう告げ

るなり背を向けた。
拒否権は無いというわけだ。
同じように空のグラスを渡して、達也は無言で克人の後に続いた。

大会開幕直前の夜、武装した侵入者を捕らえた庭は、今夜、忍び寄る人影も気配もなく静まり返っていた。
完全な静寂ではない。
誰かが窓を開けたのだろう。
微かに、楽の音が聞こえている。
そのわずかな音色が、静けさを一層深いものにしていた。
「よろしいのですか？　そろそろ祝賀会が始まる頃だと思いますが」
足を止めた克人の背中に、達也は控えめな問い掛けを投げた。
パーティーのあと、会場では第一高校貸切の優勝祝賀会が開かれる予定になっている。
これは総合優勝を勝ち取った学校に与えられる些細な特権だ。
一高チームの幹部であり主力選手である克人は、当然出席しなければならないはずだ。
「心配するな。すぐに済む」
おもむろに振り返って、克人が答える。

大した用事ではない、ということだろうか？
ならばわざわざ、パーティーの途中で彼を連れ出す必要は無いように思える。
それとも――短時間で決着する、という意味なのだろうか。
……どうやら後者、少なくとも克人はそのつもりのようだ。
「司波、お前は十師族の一員だな？」
唐突に斬り込まれて、達也は危うく、身構えてしまいそうになった。
比喩ではなく、戦闘態勢という意味で。
自分の素性を知られることは、今の段階ではタブーだった。
「いいえ。俺は十師族ではありません」
克人の眼差しには、偽りや韜晦を許さない眼力が込められていた。
達也が克人の断定にも等しい問いを否定できたのは、それが事実だったからだった。
彼は、十師族の一員ではない。十師族の血を引いてはいても、その一員と認められていない。
それは紛れもない事実だった。
「――そうか」
しばらく、達也をじっと見据えて、克人は無表情に頷いた。
克人が彼の答えに納得したかどうか、達也には分からなかった。
「ならば、師族会議において、十文字家代表補佐を務める魔法師として助言する。

司波、お前は十師族になるべきだ」

「……」

「そうだな……七草なんか、どうだ？」

「……どうだ、というのはもしかして、結婚相手にどうだ？　という意味ですか？」

「そうだ」

克人の魔法『ファランクス』は、達也の持つ本来の魔法『分解』にとって、天敵のような魔法だ。

一枚の薄い防壁を分解したと思ったら、その下に次の防壁が出て来る。

その果てしない繰り返し。

決勝戦の観戦中、徹底的な消耗戦の予想図に達也は戦慄を覚えたのだが……今の、この予想が全くつかなかったセリフに、達也は新たな戦慄と一つの確信を懐いた。

――この先輩は間違いなく、自分にとって天敵だ。

――色々な、本当にイロイロな意味で。

「……七草会長のお相手にはむしろ、十文字会頭のお名前が挙がっているのではありません

か？」

「確かにそういう話もあるな」

「……七草会長はタイプでは無いんですか？」

「いや？　七草はあれで中々、可愛いところがある」

「……」

達也は最早、返す言葉を持たなかった。

「……ああ、もしかして司波は、歳を気にする方か？　フム……ならば七草の妹はどうだ？　最後に会ったのは二年前だが、二人とも将来が楽しみな美形だった」

「……自分は会頭や会長とは違って一介の高校生なので、結婚とか婚約とかそういう話はまだ」

「そういうものか？」

克人は軽く、首を捻った。

「……だが、あまりのんびり構えてはいられないぞ。十師族の次期当主に正面からの一対一で勝利するということの意味は、お前が考えているよりずっと重い」

貴方に言われたくありません！　と達也はツッコミを入れたかった。

達也が将輝と対戦する羽目になったのは、克人に事実上強制されたからだというのに。

「……そろそろ戻るか。司波、あまり遅くなるなよ」

信じられない、というより、信じたくなかったが――

（あの人……もしかして、「天然」だったのか……？）

威風堂々と歩み行く背中を見送りながら、恐ろしい人だ、と達也はしみじみ思った。

「お兄様？」

夜の闇の中に呆然と立ちつくしていた達也は、妹の声にハッと我を取り戻した。

「どうされたのですか？　珍しいですね、わたしが近づいてくるのも分からないくらいボンヤリなさるなんて」

「いや……チョッと意外なものを見てな……」

「意外なもの？」

「ああ、いや、大したことじゃない」

「？」

達也のセリフは辻褄が合っていなかったが、深雪は少し首を傾げただけで追求しては来なかった。

「……そろそろパーティが終わりますよ」

「次は祝賀会か……」

遠回しに促されて、達也は反射的に顔を顰めた。

「パス、ってわけには行かないんだろうな……」

深雪は口元に手を当ててクスクスと笑った。
「諦めるしかないと思いますよ？　お部屋に戻られても、ほのかやエリカの襲撃を受けるだけだと思いますので」
「ほのかは分かるが……？」
「エリカは会長に捕獲されました」
おかしそうに笑いながら、会長の方が一枚上手ですね、と深雪は付け加えた。
「それに……」
なおも笑顔で、だが笑い声は収めて、少し真剣な目をして、深雪が達也の瞳をのぞき込んだ。
「わたしがお兄様を逃がしませんから」
達也は深々とため息をついた。
ふと、深雪が耳を傾ける仕草をした。
「……ラストの曲が始まりましたね」
「そうなのか？」
曲が変わったのは達也にも分かった。だがこれがラストの曲なのかどうかは、知識がない。
「お兄様、ラストのダンスは、わたしと踊っていただけませんか？」
月と星の光の下、達也でも滅多に見たことのない様な、透き通った笑みを浮かべて、深雪は優雅に一礼した。

深雪の笑顔は、達也に抗うことを許さなかった。
「……じゃあ、曲が終わらない内に戻ろうか」
「いいえ、それでは時間がもったいないです」
深雪は自分から達也の手を取った。
「演奏でしたら、ここでも聞こえます」
自分から、息の掛かる距離まで身を寄せた。
「この靴なら、芝生の上でも大丈夫です」
達也は何も言わず、深雪の背中に手を回した。
深雪は身体を預けるようにして達也の肩に手を置いた。
二人の身体が触れ合った。
手を優しく包み込み、背中を深く抱き寄せ、達也はステップを踏み出した。
星空の下で、二人の身体がクルクル回る。
クルクル回る視界の中で、達也の顔だけが常に、深雪の正面にあった。
深雪の顔だけが常に、達也の正面にあった。
景色も、星も、月も、闇も、
全てが回る世界の中で、達也と深雪は、二人だけで向き合っていた。

第二話　完





あとがき

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

――という、言わずもがなのただし書きをついつい付けたくなってしまう第四巻でしたが、皆様、お楽しみ頂けましたでしょうか？　実在する固有名詞とたまたま一致する名称を使用する時はいつも、意識の何処かに躊躇を覚えます。それが敵役の場合は一抹の不安を禁じ得ません。……白々しいことは百も承知ですのでツッコミは禁止です。

固有名詞といえば、私は異邦人キャラの名前を考えるのが正直なところ苦手です。この物語は現実世界に近い世界設定にしてありますから余計に悩みます。西欧系の名前はサンプルが多いのでまだマシですが、東南アジア系とかインド系とかペルシア系とかアフリカ系とか南米ネイティブ系とか……どうしましょう。今はまだいいのですが、いずれ大きな壁になりそうです。何か良い方法はないものでしょうか？

……さて、愚痴めいた戯言はこの位に致しまして、この本に関わって下さった皆様に謝辞を。

M様、毎回的確なアドバイスをありがとうございました。M様のご助言により兄妹が一層、濃いキャラに仕上がったように思います。石田様、ストーン様、連続刊行のタイトなスケジュールでご無理をお掛けしました。今回も注文が多くて……本当に、すみません。末永様にもスケジュール面ではご苦労をお掛けしていることと思います。この本に携わっている全てのスタッフの皆様、誠にありがとうございます。

そして、先月に引き続き今、こうしてあとがきでお目にかかれましたことに深い感謝を。皆様が応援して下さるお陰で、第五巻が無事刊行されることになりました。次の第五巻は短編集になります。エピソードは六本。その内、二本は「書き下ろし」です。他の作品も商業誌に掲載していたわけではないので「書き下ろし」ではなく「新作」と表現すべきなのかもしれませんが。新作の二編は日常系のエピソードです。より過酷な戦いの前の平和な（？）一時をお楽しみ頂ければと存じます。

それでは、またこうしてお目にかかれますことを心より祈念して。

今回も、ありがとうございました。

（佐島勤）